

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

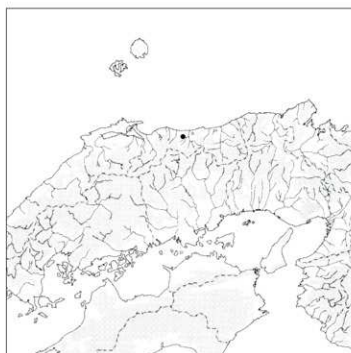
大谷工業団地再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

令和5年度

倉吉市教育委員会

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

大谷工業団地再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



遺跡略号 OSON・3

令和5年度

倉吉市教育委員会



1号竪穴建物出土鉄矛・板状鉄斧・鋳造鉄斧

※左端の鉄矛の全長が 54.6cm.

序

この報告書は、大谷工業団地再整備事業に伴い、令和元年～3年度に鳥取県倉吉市大谷字中尾において行った埋蔵文化財の発掘調査の記録です。

鳥取県の中部に位置する倉吉市には、豊かな自然とともに数多くの優れた文化財が伝えられています。そのなかでも本遺跡が所在する社地区では、伯耆国府跡や伯耆国分寺跡（いずれも国指定史跡）をはじめ、旧石器時代から中世に至るまでの幅広い時代の遺跡が確認されています。

今回の調査では、旧石器時代の石器や縄文時代の落とし穴、弥生時代中期～古墳時代前期の集落跡、古墳時代中期～後期の古墳群などが確認され、この地域に暮らしていた人々の時代ごとに異なる活動の一端が明らかとなりました。また、弥生時代の竪穴建物での舶載鉄器の出土状況は国内で他に例がなく、鉄器の流通や祭祀を考える上での重要な発見となりました。

この報告書が地域の歴史の解明、あるいは教育・研究の一資料として、また文化財の理解・活用のためお役に立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査に際し多大なご協力をいただきました株式会社明治製作所、地元関係者ならびに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和6年3月

倉吉市教育委員会

教育長 小 椋 博 幸

例 言

- 1 本報告書は、大谷工業団地再整備事業に伴う事前調査として、令和元年～3年度に倉吉市教育委員会が鳥取県倉吉市大谷字中尾において実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 調査体制は次のような組織・編成である。

令和元年～3年度 調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会事務局文化財課

小椋 博幸（教育長）

山中 敏幸（事務局長 2年度まで）

種子 真一（事務局長 3年度）

根鈴智津子（文化財課課長 元年度／専門員 2年度）

藤井 貴男（文化財課課長 2年度から）

岡本 智則（文化財係係長 元年度／文化財課課長補佐兼文化財係係長 2年度から）

加藤 誠司（文化財係主任 元年度／文化財係主幹 2年度から）

箕田 拓郎（文化財係主任）

山増諭美子（文化財係主任）

田中 貴志（文化財係主任 2年11月から3年3月まで）

西村 和恵（文化財係主任 3年度）

小田 芳弘（文化財係主任学芸員 元年7月まで／文化財係博物館主任学芸員 元年8月から）

片岡 啓介（文化財係学芸員）

出口 亜美（文化財係主事 2年度まで）

田邊 歩（文化財係主事 元年度）

西浦 千賀（文化財係主事 2年度から）

橋本 有正（文化財係主事 3年度）

進木 和美（発掘調査補助員 元年9月から）

猪口亜也子（事務員）

松原 雄二（建築技師）

内務整理 秋元葉子・足羽由里香・進木和美（元年8月まで）・谷口公也（2年度から）・徳田郁美・中尾あゆみ（元年度）・山松紀文（2年度から）・堀田ことり（奈良大学学生、元年度）

令和4年～5年度 調査主体 倉吉市教育委員会

事務局 倉吉市教育委員会事務局文化財課

小椋 博幸（教育長）

種子 真一（事務局長 4年度）

石賀 大生（事務局長 5年度）

藤井 貴男（文化財課課長）

岡本 智則（文化財課課長補佐兼文化財係係長）

箕田 拓郎（文化財係係長主任学芸員）

田中 貴志（文化財係係長主任 4年2月から）

西村 和恵（文化財係係長主任 4年度）

西本 愛（文化財係係長主任 5年度）

谷口 礼（埋蔵文化財係主任）

加藤 誠司（埋蔵文化財係係長）

小田 芳弘（埋蔵文化財係主任学芸員）

片岡 啓介（埋蔵文化財係主任学芸員）

西浦 千賀（埋蔵文化財係学芸員）

橋本 有正（埋蔵文化財係学芸員）

進木 和美（発掘調査補助員）

川本 晶子（事務員）

松原 雄二（建築技師）

内務整理 秋元葉子・足羽由里香・谷口公也・徳田郁美（4年度）・山根孝（4年度）・山松紀文（4年度）

- 3 現地調査は、元年度に加藤・田邊、2年度に片岡・西浦、3年度に小田・西浦・橋本が担当し、進木の補助を受けた。遺構写真撮影は、各年度の担当調査員が行った。
- 4 出土遺物の実測及び観察は片岡・西浦・橋本・谷口・秋元・山松が行い、遺物写真撮影は小田・片岡・西浦・橋本が行った。
- 5 本書の執筆は、調査員が討議し、小田・片岡・西浦・橋本が行い、文末に文責を記した。本書の編集は、小田が行った。
- 6 IV章・V章は出土遺物の鑑定結果や論考を寄稿していただいたものである。
 - ・灰化材の樹種同定や¹¹C年代測定などの自然科学分析は、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
 - ・人骨の鑑定は、鳥取大学 岡崎健治氏に依頼した。
 - ・石社の¹⁴C分析は、鳥根大学エスチュアリー研究センター 渡辺正巳氏に依頼した。
 - ・1号壁穴建物出土土器の論考は、愛媛大学アジア古代産業考古学研究所 村上恭通氏、公益財団法人元興寺文化財研究所 塚本敏夫氏にお願いした。
- 7 第1図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「倉吉」の一部に加筆したものである。第2図は平成元年修正測量の1:2,500国土基本図をもとに加筆したものである。
- 8 挿入図の方位及び座標値は、第2図を除き、国土座標第Ⅴ座標系（世界測地系）の北を指す。
- 9 遺物に付した記号・番号は、本文・挿入図・図版で統一した。
- 10 調査によって得られた資料は、倉吉市教育委員会が保管している。
- 11 現地調査及び遺物整理において以下の諸氏にご指導をいただいた。記して謝意を表します。（順不同・敬称略）

眞田廣幸、森下哲哉、下條信行、村上恭通、塚本敏夫、初村武寛、森岡秀人、高尾浩司、高橋章司、水村直人、橋本勝雄、長友朋子、中村大介、米田克彦、大賀克彦

本文目次

I	発掘調査に至る経過	1
II	位置と歴史的環境	1
III	調査の概要	5
1	遺構	5
(1)	落し穴	5
(2)	竪穴建物	9
(3)	掘立柱建物	22
(4)	櫓列	25
(5)	貯蔵穴	25
(6)	土壇	25
(7)	古墳	30
(8)	木棺墓	90
(9)	土壇墓	90
(10)	溝	97
(11)	段状遺構	101
(12)	土器埋設遺構	101
2	遺物	102
IV	鑑定	134
1	中尾遺跡第3次調査に伴う自然科学分析	134
2	中尾遺跡第3次調査出土の古墳人骨	143
3	中尾遺跡第3次調査25号墳2号・3号主体部石枕を対象としたPCN分析	145
V	特論	149
1	中尾遺跡1号竪穴建物の鉄器とその出土状況	149
2	中尾遺跡1号竪穴建物出土鉄鉾・板状鉄斧・鋳造鉄斧に残る有機質痕跡とその意義	153
VI	まとめ	157
	報告書抄録	

挿図目次

第1図	周辺の地形と遺跡分布図	2	第10図	3号・4号竪穴建物遺構図	13
第2図	調査区位置図	3	第11図	5号竪穴建物遺構図	14
第3図	第3次発掘調査遺構全体図	4	第12図	6号竪穴建物遺構図	15
第4図	1号～5号落し穴遺構図	6	第13図	7号・8号竪穴建物遺構図	16
第5図	6号～10号落し穴遺構図	7	第14図	9号竪穴建物遺構図	17
第6図	11号～14号落し穴遺構図	8	第15図	10号竪穴建物遺構図	18
第7図	1号竪穴建物遺構図	10	第16図	11号竪穴建物遺構図	19
第8図	1号竪穴建物鉄器出土状況図	11	第17図	1号～3号掘立柱建物遺構図	21
第9図	2号竪穴建物遺構図	12	第18図	4号・5号掘立柱建物遺構図	23

第19図	6号～8号掘立柱建物遺構図	24	第57図	17号墳2号埋葬施設遺構図	67
第20図	1号櫓列及び1号貯蔵穴遺構図	25	第58図	18号～20号墳遺構図	69
第21図	1号・2号土壇遺構図	26	第59図	21号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図	70
第22図	3号～5号土壇遺構図	27	第60図	22号墳遺構図	71
第23図	6号～8号土壇遺構図	28	第61図	22号墳1号埋葬施設遺構図及び23号墳遺構図	72
第24図	9号・10号土壇遺構図	29	第62図	22号墳2号埋葬施設遺構図	73
第25図	1号墳遺構図	31	第63図	24号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図	75
第26図	1号墳1号～3号・6号埋葬施設遺構図	33	第64図	25号墳遺構図	76
第27図	1号墳4号・7号埋葬施設遺構図	34	第65図	25号墳主体部掘方遺構図	77
第28図	1号墳5号埋葬施設遺構図	35	第66図	25号墳1号主体部遺構図	78
第29図	1号墳8号・9号埋葬施設遺構図	36	第67図	25号墳2号主体部遺構図	79
第30図	1号墳10号埋葬施設遺構図	37	第68図	25号墳3号主体部遺構図	81
第31図	1号墳11号・12号埋葬施設遺構図	38	第69図	25号墳1号埋葬施設遺構図	83
第32図	1号墳13号・14号埋葬施設遺構図	39	第70図	25号墳2号埋葬施設遺構図	85
第33図	2号・5号墳遺構図	40	第71図	1号・2号木棺墓遺構図	91
第34図	3号墳遺構図及び遺物出土状況図	41	第72図	3号木棺墓遺構図	92
第35図	4号墳遺構図及び遺物出土状況図	43	第73図	4号木棺墓遺構図	93
第36図	4号墳1号埋葬施設遺構図	44	第74図	5号木棺墓遺構図	94
第37図	4号墳2号埋葬施設遺構図	45	第75図	1号・2号土壇墓遺構図	95
第38図	6号墳遺構図	46	第76図	3号土壇墓遺構図	96
第39図	6号墳1号主体部遺構図	47	第77図	1号～5号溝遺構図	98
第40図	7号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図	49	第78図	6号～8号・11号溝遺構図	99
第41図	8号墳遺構図	49	第79図	9号～10号溝遺構図及び1号段状遺構遺構図	100
第42図	8号墳1号主体部遺構図	50	第80図	1号・2号土器埋設遺構遺構図	101
第43図	8号墳2号主体部遺構図	51	第81図	1号竪穴建物出土土器(1)	103
第44図	8号墳1号埋葬施設遺構図	52	第82図	1号竪穴建物出土土器(2)	104
第45図	10号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図	53	第83図	2号～6号竪穴建物出土土器	105
第46図	9号墳遺構図及び11号墳遺構図	54	第84図	7号・9号～11号竪穴建物、1号掘立柱建物、1号貯蔵穴出土土器	107
第47図	11号墳1号埋葬施設遺構図	55	第85図	1号・2号土壇出土土器	109
第48図	12号墳遺構図、13号墳遺構図及び遺物出土状況図	57	第86図	1号～3号墳出土土器	111
第49図	13号墳1号・2号埋葬施設遺構図	58	第87図	4号・5号・8号・10号墳出土土器	113
第50図	13号墳3号埋葬施設遺構図	59	第88図	11号・13号墳出土土器	115
第51図	14号墳遺構図及び1号・2号埋葬施設遺構図	60	第89図	14号～17号墳出土土器	117
第52図	15号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図	61	第90図	19号～21号墳出土土器	119
第53図	16号墳遺構図	62	第91図	22号～25号墳出土土器	121
第54図	16号墳1号埋葬施設遺構図	63	第92図	1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品	123
第55図	16号墳2号埋葬施設遺構図	64	第93図	1号竪穴建物出土鉄器	125
第56図	17号墳遺構図、遺物出土状況図及び1号埋葬施設遺構図	65			

第94図	1号・4号・11号墳出土鉄器	126	(B1)	144
第95図	25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器	127	第111図	25号墳3号主体部から出土した頭蓋冠の破片(B1)
第96図	1号竪穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号竪穴建物、1号墳出土玉作関係遺物	128	第112図	25号墳3号主体部から出土した大白歯の歯冠(B2)
第97図	ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片	129	第113図	25号墳3号主体部から出土した上顎左大白歯の歯冠(B3)
第98図	石鐮、石匙、石錐	130	第114図	25号墳3号主体部から出土した大歯の歯冠(B4)
第99図	1号貯蔵穴出土石鐮、5号竪穴建物等出土磨製石斧、1号竪穴建物等出土砥石	131	第115図	TP、TOC/TNの分布
第100図	5号・9号竪穴建物出土蔵石	132	第116図	中尾遺跡と茶戸里遺跡の鉄器
第101図	1号竪穴建物出土台石	133	第117図	中国・日本の二条突帯鍔造鉄斧各種
第102図	遺構配置図	134	第118図	尾高浅山遺跡1号墓の墳頂面に突き刺さった鉄刀
第103図	1号竪穴建物平面図(試料採取地点)	134	第119図	1号竪穴建物遺物出土状況図
第104図	樹種写真図版1	137	第120図	1号竪穴建物鉄器出土状況
第105図	樹種写真図版2	138	第121図	鉄銚の有機質痕跡
第106図	種実写真図版	139	第122図	板状鉄斧の有機質痕跡
第107図	暦年校正結果	139	第123図	鍔造鉄斧の有機質痕跡
第108図	微小部蛍光X線による定性分析(スペクトル): R2956	141	第124図	鍔造鉄斧袋部内部のCT画像
第109図	微小部蛍光X線による定性分析(スペクトル): R1861	141	第125図	第1～3次調査遺構全体図
第110図	25号墳2号主体部から出土した頭蓋冠の破片			

表 目 次

第1表	落し穴一覧	5	第9表	溝一覧	97
第2表	竪穴建物一覧	20	第10表	出土遺物一覧	102
第3表	掘立柱建物一覧	22	第11表	樹種同定結果	135
第4表	土壌一覧	29	第12表	種実同定結果	139
第5表	古墳一覧	87	第13表	AMS年代測定結果	139
第6表	古墳主体部・埋葬施設一覧	88	第14表	顔料分析結果	140
第7表	木棺墓一覧	92	第15表	分析結果一覧	146
第8表	土壌墓一覧	96			

図 版 目 次

巻頭図版	1号竪穴建物出土鉄矛・板状鉄斧・鋤造鉄斧	図版 26	23号・24号墳
図版 1	調査前全景、調査後全景	図版 27	25号墳
図版 2	調査後全景	図版 28	25号墳
図版 3	1号～14号落とし穴	図版 29	25号墳
図版 4	1号竪穴建物	図版 30	25号墳、1号～5号木棺墓、1号～3号土壙墓
図版 5	1号竪穴建物	図版 31	1号～11号溝、1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構
図版 6	2号～4号・8号竪穴建物	図版 32	1号・2号竪穴建物出土土器
図版 7	5号～7号竪穴建物	図版 33	3号～7号・9号～11号竪穴建物、1号掘立柱建物出土土器
図版 8	9号～11号竪穴建物	図版 34	1号貯蔵穴、1号・2号土壙出土土器
図版 9	1号～5号掘立柱建物、1号櫓列	図版 35	1号～3号墳出土土器
図版 10	6号～8号掘立柱建物、1号貯蔵穴、1号・2号土壙	図版 36	4号・5号・8号・10号墳出土土器
図版 11	3号～9号土壙	図版 37	11号・13号・14号墳出土土器
図版 12	古墳群、1号墳	図版 38	15～17号・19号墳出土土器
図版 13	1号墳	図版 39	20号～24号墳出土土器
図版 14	1号墳	図版 40	25号墳、1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品
図版 15	2号・3号墳	図版 41	1号竪穴建物出土鉄器
図版 16	4号・5号墳	図版 42	1号・4号・11号・25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器
図版 17	6号・7号墳	図版 43	1号竪穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号竪穴建物、1号墳出土玉作関係遺物、ナイフ形石器、尖頭器、石刀、剥片、石鏃、石匙、石鏃
図版 18	8号墳	図版 44	1号貯蔵穴出土石鏃、5号竪穴建物等出土磨製石斧、1号竪穴建物等出土砥石、蔽石、台石
図版 19	9号・10号墳		
図版 20	11号・12号墳		
図版 21	13号・14号墳		
図版 22	15号・16号墳		
図版 23	17号・18号墳		
図版 24	19号～21号墳		
図版 25	21号・22号墳		

I 発掘調査に至る経過

平成 29 年 11 月、倉吉市企画産業部商工観光課から倉吉市教育委員会に、大谷工業団地再整備事業に先立ち、倉吉市大字中尾の低丘陵上における埋蔵文化財の取扱いについての協議があった。丘陵上には中尾遺跡が所在し、先端部側では倉吉市教育委員会が平成 3 年度¹⁾及び平成 26～28 年度²⁾に本発掘調査を行い、縄文時代の落し穴 159 基、弥生時代前期～後期の堅穴建物 25 棟、掘立柱建物 21 棟、貯蔵穴 13 基、古墳時代後期の円墳 2 基などを確認した。さらに、基部側にあたる当該地でも平成 7 年 4～5 月³⁾及び平成 30 年 6 月⁴⁾に倉吉市教育委員会が国・県の補助を受けて試掘・確認調査を行い、丘陵上で遺構・遺物を確認した。これらを受け、倉吉市教育委員会が事業範囲全域の本発掘調査を行うこととなった。調査期間は令和元年 8 月 1 日から令和 4 年 3 月 31 日まで、調査面積は 14,000 m²である。

(小田)

註

- 1) 根鈴智津子ほか『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 69 集、倉吉市教育委員会、1992 年
- 2) 勢村茉莉子ほか『中尾遺跡第 2 次発掘調査報告書』倉吉市文化財報告書第 150 集、倉吉市教育委員会、2017 年
- 3) 下谷森哉「2. 大谷中尾地区（中尾遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書 IX』倉吉市文化財報告書第 87 集、倉吉市教育委員会、1997 年
- 4) 加藤誠司「11. 大谷地区（中尾遺跡）」『倉吉市内遺跡分布調査報告書 20』倉吉市文化財報告書第 154 集、倉吉市教育委員会、2019 年

II 位置と歴史的環境

中尾遺跡は、倉吉市街地から北西へ約 3 km 離れた倉吉市大字中尾に所在する。四王寺山南麓の低丘陵上に位置し、西に大山や久米ヶ原丘陵、南東に打吹山、東に向山を望む。南には国府川が造りだした沖積平野が広がり、肥沃な水田地帯となっている。調査地の標高は約 22.5～31 m、水田面との比高差は 3 m 以上である。

当遺跡の周辺には多くの遺跡が分布する。以下、第 1 図の範囲を中心に、旧石器時代から古墳時代にかけての周辺の歴史的環境について概要を述べる。

旧石器時代の遺物として、中尾遺跡第 1 次 (64) 出土の国府型ナイフ形石器 (黒曜石製)、長谷遺跡 (46) 出土のナイフ形石器 (安山岩製)、上神 51 号墳 (6) 下層出土の船底形細石刃石核 (黒曜石製) などが知られる。

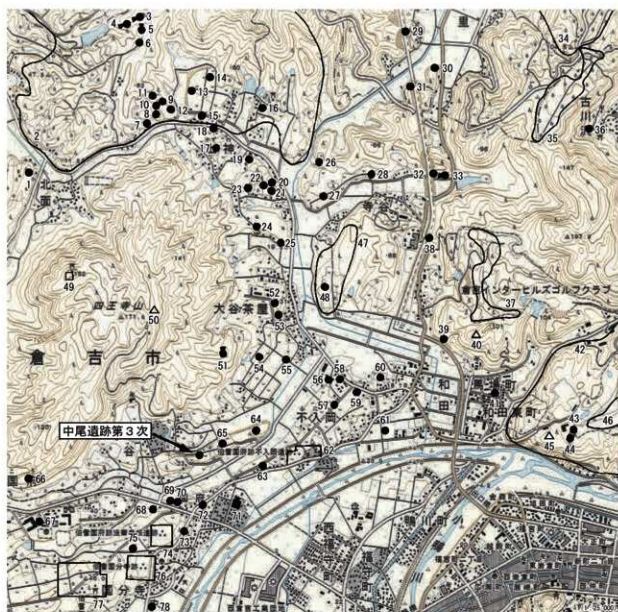
縄文時代には、四王寺山西側の取木遺跡で早期の堅穴建物 1 棟と礎群 2 基が確認されている。また、中尾遺跡第 1・2 次 (65) や長谷遺跡などで多くの落し穴が調査され、丘陵上を狩猟場として利用していた様子が窺える。

弥生時代には、四王寺山周辺や久米ヶ原丘陵などの丘陵上に集落が多く分布し、堅穴建物と掘立柱建物、貯蔵穴で構成されることが多い。前期～後期中尾遺跡第 1・2 次、中期～後期の後中尾遺跡、中峯遺跡、後期の夏谷遺跡、コザンコウ遺跡、両長谷遺跡などが調査されている。また、東前遺跡 (61) では中期の玉作工房が確認されている。墳墓としては、イキス遺跡 (1) で前期の木棺墓・土坑墓群が調査されている。後期の墳墓は四王寺山裾部に分布し、柴塚墳墓 (25) や大谷後口谷墳墓群 (66)、三度舞墳墓 (52) などが確認されている。

古墳時代前期になると、四王寺山周辺では、三角縁巾着鏡を含む 3 面の船載鏡や多量の鉄製武器・農具が出土した国分寺古墳 (前方後方墳ないし前方後円墳・全長約 60 m) (71) をはじめ、上神大將塚古墳 (円墳・直径約 25 m) (24) や大谷大將塚古墳 (前方後円墳・全長約 50 m) (51) といった首長墳が相次いで築造された。中期から後期には古墳の数が増加し、円墳 22 基からなるイザ原古墳群 (55) や円墳 5 基からなる小林古墳群 (54)、円墳や帆立貝式古墳など 28 基からなる沢ノ原遺跡 (56～59) などが調査されている。

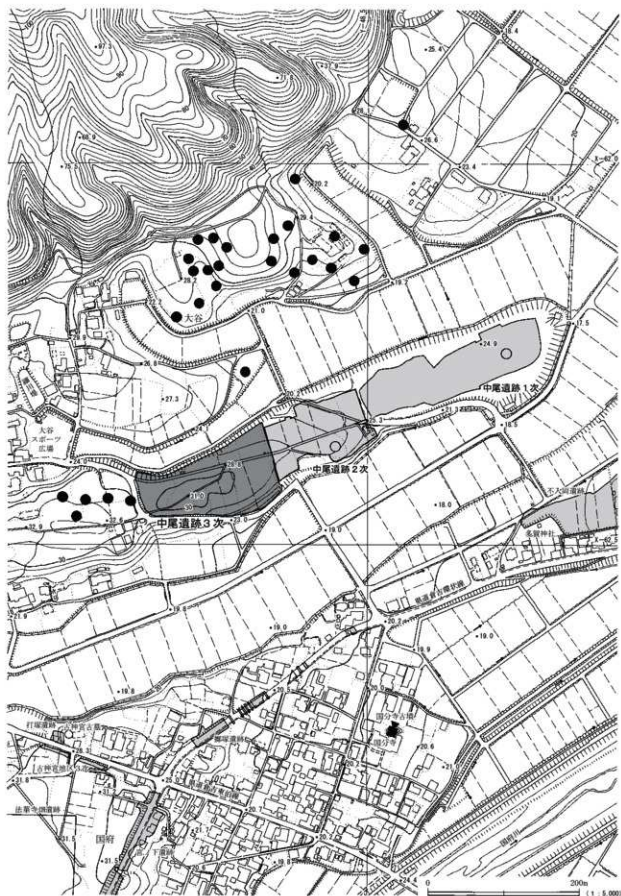
古墳時代の集落は、弥生時代と同様に堅穴建物と掘立柱建物で構成される。弥生時代後期から継続する夏谷遺跡、前期の宮ノ下遺跡 (73)、柳塚遺跡 (72)、前期と後期の桜木遺跡 (15)、中期の不入岡遺跡 (62)、後期の西山遺跡 (13)、西前遺跡 (27) などが調査されている。また、祭祀に関する遺跡は、人形や動物形をはじめとする小型の土製品が多数出土した谷畑遺跡 (14) のほか、クズマ遺跡 (8～11)、イガミ松遺跡 (12)、上神宮ノ前遺跡 (16) などが知られ、四王寺山北側の上神地域に集中している。

(小田)

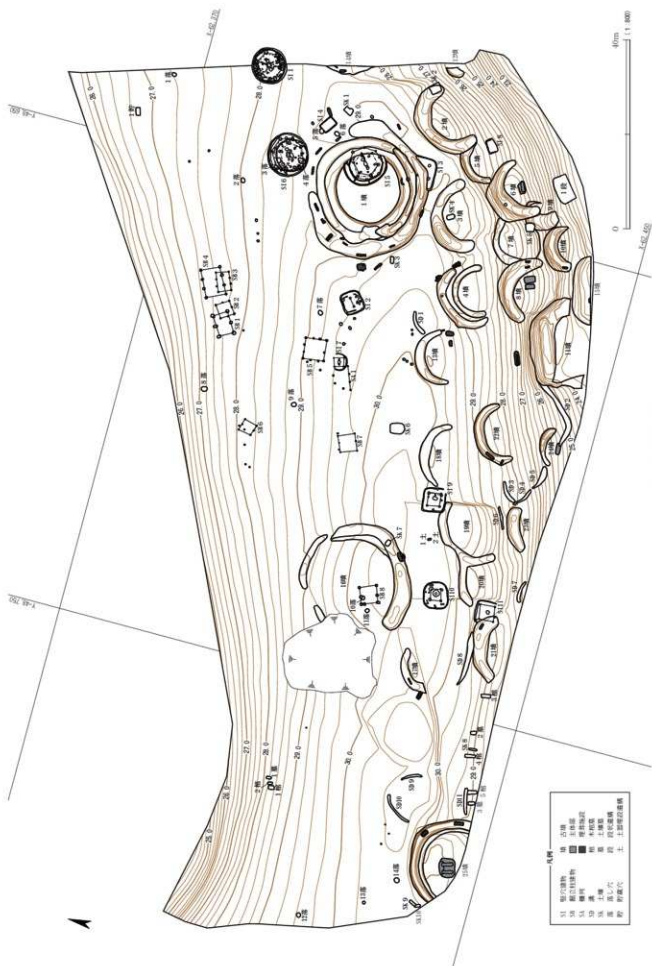


- | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------------|--------------------|
| 1 イキス遺跡 | 17 平畑ヶ遺跡第1次 | 33 若林2号墳 | 49 四王寺跡 | 65 中尾遺跡第2次 |
| 2 上神古墳群 | 18 平畑ヶ遺跡第2次 | 34 土下古墳群 | 50 大谷城跡 | 66 大谷後口谷墳丘墓群 |
| 3 上神44号墳 | 19 東狭間古墳 | 35 下張坪遺跡 | 51 大谷大得塚古墳 | 67 向野遺跡 |
| 4 上神45号墳 | 20 熊山遺跡第1次 | 36 西平遺跡 | 52 三度舞墳丘墓 | 68 新妻民間伝説遺跡(古神宮地区) |
| 5 上神48号墳 | 21 熊山遺跡第2次 | 37 夏谷遺跡 | 53 イザ原遺跡 | 69 古神宮古墓 |
| 6 上神51号墳 | 22 熊山遺跡第3次 | 38 大平ラ遺跡 | 54 小林古墳群 | 70 打塚遺跡 |
| 7 上神119号墳 | 23 熊山遺跡第4次 | 39 中峰古墳群 | 55 イザ原古墳群 | 71 国分寺古墳 |
| 8 クズマ遺跡第1次 | 24 上神大得塚古墳 | 40 和田城跡 | 56 沢べり遺跡第1次 | 72 郷塚遺跡 |
| 9 クズマ遺跡第2次 | 25 柴栗墳丘墓 | 41 平林遺跡 | 57 沢べり遺跡第2次 | 73 宮ノ下遺跡 |
| 10 クズマ遺跡第3次 | 26 トドロク遺跡 | 42 向山古墳群 | 58 沢べり遺跡第3次 | 74 伯耆国府跡 忠華寺遺跡 |
| 11 クズマ遺跡第4次 | 27 西前遺跡 | 43 向山309号墳 | 59 沢べり遺跡第4次 | 75 国分寺北遺跡 |
| 12 イガミ松遺跡 | 28 西前1号墳 | 44 向山310号墳 | 60 茅林遺跡 | 76 伯耆国分寺跡 |
| 13 西山遺跡 | 29 米里三ノ岩遺跡 | 45 和田東城跡 | 61 東前遺跡 | 77 伯耆国府跡 国庁跡 |
| 14 谷畑遺跡 | 30 米里銅鐸出土地 | 46 長谷遺跡 | 62 伯耆国府跡 不入岡遺跡 | 78 河原毛田遺跡 |
| 15 板木遺跡 | 31 八幡山遺跡 | 47 屋喜山古墳群 | 63 不入岡遺跡群(巻木堀地区) | |
| 16 上神宮ノ前遺跡 | 32 若林遺跡 | 48 屋喜山9号墳 | 64 中尾遺跡第1次 | |

第1図 周辺の地形と遺跡分布図



第2図 調査区位置図



第3图 第3次发掘调查遗址全图

III 調査の概要

調査地は、丘陵尾根上とその尾根から下る斜面に所在し、かつて畑地や果樹園として利用されていた。調査面積は14,000 m²である。

調査地の基本層序は、上層から黒褐色土（表土）、黒色土（クロボク）、暗褐色土、褐色土（ソフトローム）、黄灰色砂質土（ホーキ火山灰砂層）、黄褐色砂質土（A T：始良丹沢火山灰層）、橙褐色粘質土（礫混じり粘質土層）、黄褐色土（D, K, P：大山・吉倉軽石層）である。調査では褐色土～黄褐色土上面で遺構検出を行った。

調査の結果、落し穴14基、堅穴建物11棟、掘立柱建物8棟、柵列1基、貯蔵穴1基、土壇10基、古墳25基、木棺墓5基、土壇墓3基、溝11条、段状遺構1基、土器埋設遺構2基、ピット多数を確認した。

以下、遺構・遺物に分けて調査の概要を述べる。

1 遺構

(1) 落し穴

丘陵尾根上とその尾根から下る北斜面で14基を確認した。その詳細は第1表に一括する。ここでは特徴的な落し穴4基について述べる。

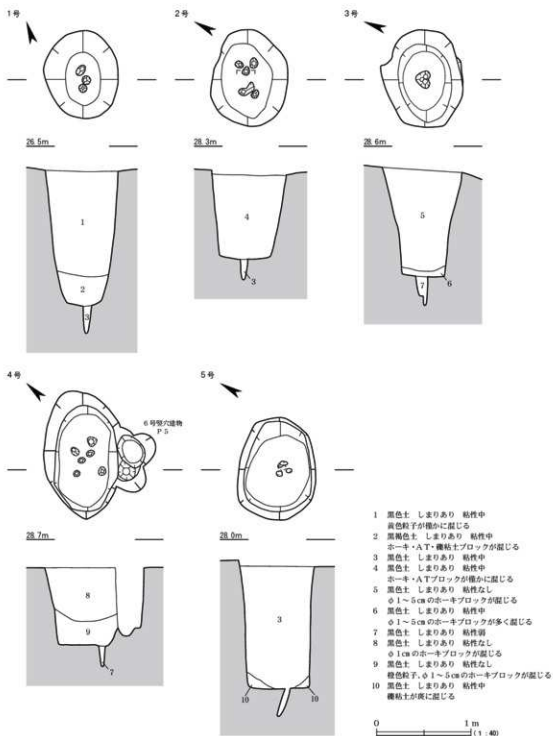
なお、落し穴の分類基準は第1・2次調査の報告¹⁾に準ずる。すなわち、底面の平面形をA：円形、B：楕円形、C：長方形、D：正方形の4つに、断面形をa：開口部（検出面）から底部にかけて漸次狭くなる「スリパチ型」、b：開口部から底部までほぼ垂直である「垂直型」、c：開口部が底部に比べて狭く、オーバーハングの認められる「フラスコ型」の3つに大別し、平面形の大字（A～D）と断面形の小文字（a～c）を組み合わせで分類する。

6号落し穴 調査区の東部、丘陵尾根上の標高29 m付近に位置する。平面形は検出面・底面とも楕円形を呈し、断面形は垂直型で、B-bに分類される。規模は検出面では長径1.16 m・短径0.88 m、底面では長径0.85 m・短径0.74 m、検出面から底面までの深さは0.78 mを測る。底面では、短径3～8 cm・深さ18～38 cmの杭状を

第1表 落し穴一覧

法量：[] 現存値

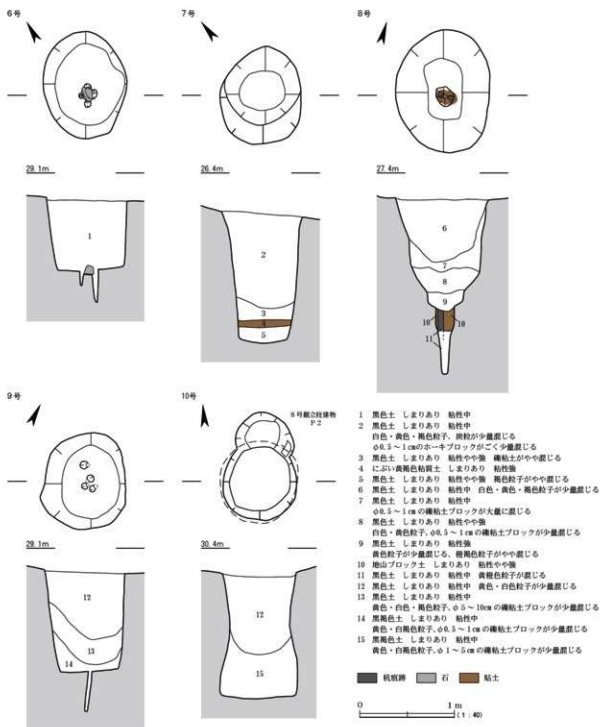
遺構名	位置・立地	平面形		断面形態	分類	検出面規模 (cm)	底面規模 (cm)	底面ピット		備考
		検出面	底面			長軸×短軸×深さ	長軸×短軸	数	短径×深さ (cm)	
1号落し穴	調査区の東端、丘陵北斜面の標高27 m付近	楕円形	楕円形	スリパチ型	B-a	93×77-141	56×37	3	8-30	
2号落し穴	調査区の東部、丘陵北斜面の標高28 m付近	楕円形	楕円形	スリパチ型	B-a	102×82-94	78×54	5	5-8-22-37	
3号落し穴	調査区の東部、丘陵北斜面の標高28.5 m付近	楕円形	楕円形	スリパチ型	B-a	103×87-114	61×44	中央1 (杭状)	12-23-33	6号堅穴建物に併せられる。
4号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高28.5 m付近	楕円形	楕円形	スリパチ型	B-a	127×[26]-81	97×52	6	6-10-19-29	6号堅穴建物に併せられる。
5号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29 m付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	108×82-136	76×62	3	4-6-29	4号堅穴建物に併せられる。
6号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29 m付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	116×88-78	85×74	4	3-8-18-38	杭状と杭状の間から竈1点出土。
7号落し穴	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29 m付近	楕円形	円形	スリパチ型	A-a	103×85-138	48×41	0	—	埋土下層で陥土確認。
8号落し穴	調査区の中央部、丘陵北斜面の標高27 m付近	楕円形	長方形	スリパチ型	C-a	133×99-116	68×36	中央1	16-56	短径5-6 cmの杭状遺構2本を確認。
9号落し穴	調査区の中央部、丘陵北斜面の標高29 m付近	楕円形	楕円形	垂直型	B-b	101×90-108	77×61	4	6-8-23-42	
10号落し穴	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30 m付近	円形	円形	フラスコ型	A-c	[77]×78-132	67×64	0	—	8号掘立柱建物に併せられる。
11号落し穴	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30 m付近	円形	円形	垂直型	A-b	86×74-20	68×61	中央1	8-38	
12号落し穴	調査区の西端、丘陵北斜面の標高29.5 m付近	円形	円形	スリパチ型	A-a	94×84-156	56×54	0	—	
13号落し穴	調査区の西部、丘陵尾根上の標高30 m付近	円形	円形	垂直型	A-b	60×57-114	50×44	0	—	
14号落し穴	調査区の西部、丘陵尾根上の標高30 m付近	円形	円形	スリパチ型	A-a	114×100-168	61×60	0	—	



第4図 1号～5号落し穴遺構図

4つ確認した。4つの杭穴に囲まれた位置で礫が1点出土しており、この礫は4本の杭を固定するために用いたものと考えられる。遺物は埋土から弥生土器片が出土した。

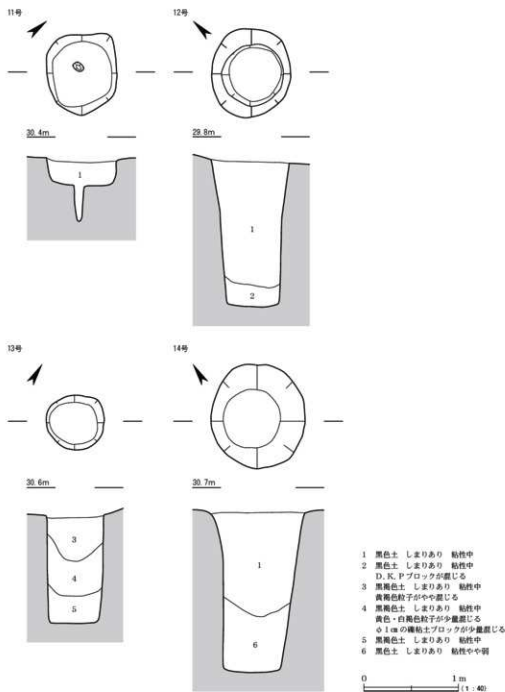
7号落し穴 調査区の東部、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。平面形は検出面では楕円形、底面では円形を呈し、断面形はスリパチ型で、A-aに分類される。規模は検出面では長径1.03m・短径0.85m、底面では長径0.48m・短径0.41m、検出面から底面までの深さは1.38mを測る。埋土の下層では、人為的に埋めた粘土を1層確認した（断面図4層）。底面では杭穴を確認しなかった。遺物は出土しなかった。



第5図 6号～10号落し穴遺構図

8号落し穴 調査区の中央部、丘陵北斜面の標高27m付近に位置する。平面形は検出面では楕円形、底面では長方形を呈し、断面形はスリパチ型であり、C-aに分類される。規模は検出面では長軸1.33m・短軸0.99m、底面では長軸0.68m・短軸0.36m、検出面から底面までの深さ1.16mを測る。埋土の下層では短径5～6cmの杭痕跡を2本確認し、底面の中央では短径16cm・深さ56cmの杭穴を1つ確認した。遺物は出土しなかった。

10号落し穴 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30～30.25m付近に位置し、8号掘立柱建物に切られる。



第6図 11号～14号落し穴遺構図

平面形は検出面・底面とも円形を呈し、断面形はフラスコ型であり、A～cに分類される。規模は検出面では確認できた長径0.77m・短径0.78m、底面では長径0.67m・短径0.64m、検出面から底面までの深さ1.32mを測る。底面では杭穴を確認しなかった。遺物は出土しなかった。(小田)

註

- 1) 根鈴智津子は『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第69集、倉吉市教育委員会、1992年
 勢村茉莉子は『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第150集、倉吉市教育委員会、2017年

(2) 堅穴建物

丘陵尾根上とその尾根から下る南斜面で11棟を確認した。その詳細は第2表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号堅穴建物 調査区の北部、丘陵尾根上の標高28m付近に位置する。建物の西側1/2を確認した。東側1/2は2次調査で調査済みである。検出した主柱穴・周壁溝から、A期→B期の建て替え(拡張)を確認した。

A期の平面形は円形を呈し、床面の規模は東西6.5m、南北6.0mを測る。床面積は約32㎡と推定される。周壁溝は全周し、幅13cm、床面からの深さ5cmを測る。主柱穴はP1～P3、P5～P7の6基である。主柱穴は長軸66～88cmの楕円形を呈す。柱穴間距離に特徴が見られ、6辺のうちP1～P7間が3.33m、P3～P5間が3.40mと、他4辺の2.5m前後に比して約0.9m長い。建物中央に中央ビットP8が設けられている。P8は隅丸長方形を呈し、掘方は2段で、上段が長軸118cm、短軸96cm、下段が長軸74cm、短軸60cmを測る。P8の両脇にはP4・P9が伴う。P4は直径68cm、P9は直径64cmの円形を呈す。P4・8・9は一直線に並び、軸は丘陵尾根筋の方向に沿う。

B期の平面形は円形を呈し、床面の規模は東西6.9m、南北6.7mを測る。床面積は約37㎡と推定され、検出面からの深さは65cmを測る。周壁溝は全周し、幅13cm、床面からの深さ6cmを測る。主柱穴はA期の主柱穴を利用し、柱穴掘方内でわずかに柱位置を外側にずらしている。すべての主柱穴で直径20～34cmの柱痕跡を確認した。中央ビットP8とその両脇のP4・9はA期から存続する。貼床は建物北東隅で確認した。またP8の周辺で10箇所の焼土面を確認した。

柱穴のほかに90基近くの浅いビットを検出した。ビットの規模は直径10～50cm、深さは10～50cmを測る。周壁溝との切り合いや貼床との先後関係からAB両期のビットが存在することがわかるが、個別に時期を判別するまでには至っていない。ビットの分布には偏りがあり、P1～P7間の周壁溝寄り、P3～P5間の周壁溝寄りに多い。また建物中央付近のビットは規模が小さく、壁際のビットほど規模が大きいことも特徴的である。

本遺構は焼失建物で、炭化した建築部材が床面と壁面に貼り付くような形で出土した。主な炭化材は、垂木、小舞、梁、茅材で、建物西側が比較的遺りが良い。垂木は板状材や棒状材であり、建物中央から放射状に配置される。

炭化材下では鉄矛(F1)、板状鉄斧(F2)、鋳造鉄斧(F3)が出土した。F1の出土位置はP7掘方埋土の直上にあたり、鋒部を建物の外側、袋端部を建物中央に向け横倒しの状態で出土した。鋒部直下に幅5cm、深さ6cmの窪みが見られ、当初鋒部を床面に突き立てた状態であったF1が建物中央に向かって倒れた際に床面の土が掘り起こされたものと考えられる。垂木C84及び梁C79が覆い被さる。F2は基部を下に、刃部を上にしてP7の掘方埋土と柱痕跡の境に斜めに突き立った状態で出土した。F3はF1の北東約0.5mの床面で出土した。梁C79が覆い被さる。また、F3と床面の間で炭化材片C114が出土し、材の方向から垂木C100の一部と思われる。

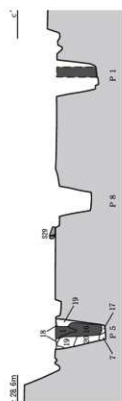
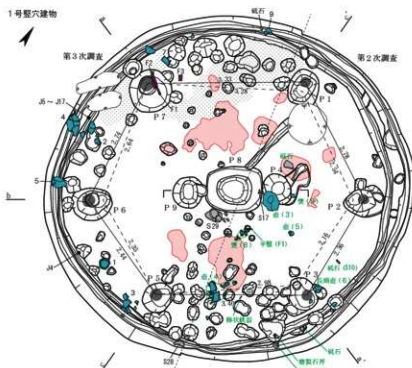
遺物は、前述の鉄器のほかに、P4・5・9埋土から弥生土器高坏(10)、床面で弥生土器広口壺(1)、長頸壺(2)、脚付壺(3)、甕(5～9)、器台(11)、ガラス管玉(J19)、ガラス小玉(J20)、石鉄(S8)、砥石(S17)、鉄床石と思われる台石(S29)、埋土及び床面で18点の管玉(J1～J18)などが出土した。18点の管玉のうち14点(J5～J18)はF1の南西約1mの床面でまとまって出土した。また検出面近くの埋土から墨書土器の皿(12・13)が出土した。

(片岡)

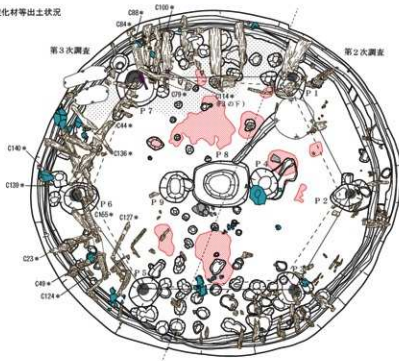
2号堅穴建物 1号堅穴建物から南西へ約47m離れた丘陵尾根上の標高29.5m付近に位置する。検出した周壁溝から、A期→B期の建て替え(拡張)を確認した。

A期の平面形は隅丸方形で、床面の規模は一辺3.2m、床面積は9.8㎡と推定される。周壁溝は幅14cm、検出面からの深さ5cmを測り、西・北・東側の一部が遺存する。A期の柱穴や中央ビットは認められない。

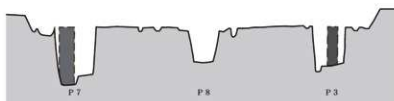
B期の平面形も隅丸方形で、床面はA期より北東・南東・北西側に一回り大きく拡張され、その規模は長辺4.4m・短辺4.0m、床面積は15.6㎡、検出面から床面までの深さは最大36cmを測る。周壁溝は幅21cm、検出面



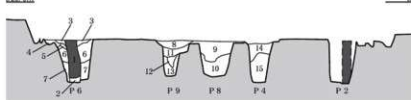
炭化材等出土状況



±28.6m



±28.6m



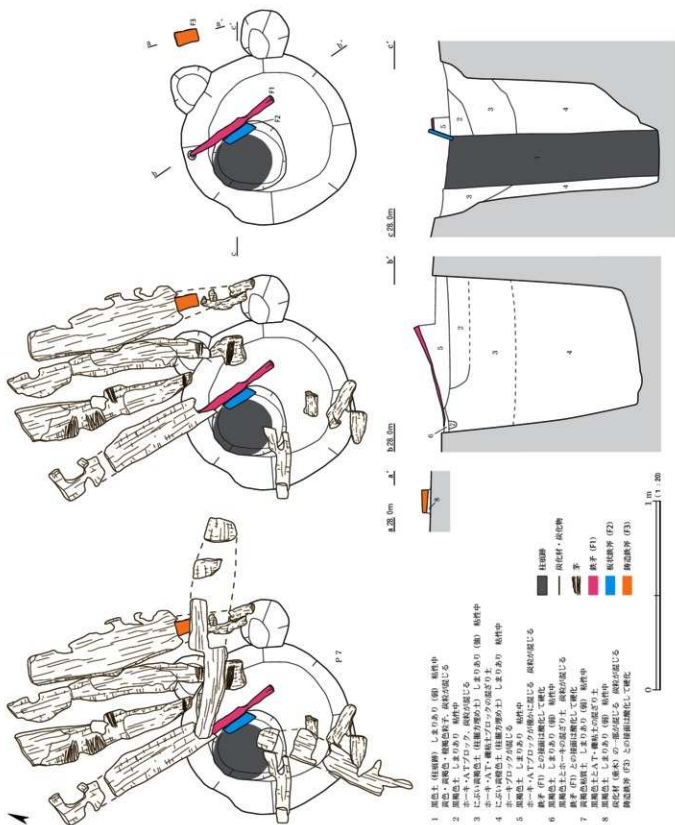
- 1 黒色土 しりあり 粘性中
黄色粘土。炭化材が散らる
- 2 灰白色土 しりあり (強) 粘性中
- 3 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性中
黄色粘土。黒褐色土が底に散らる
- 4 黒褐色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが多く散らる
- 5 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが散らる
- 6 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが多く散らる
- 7 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが散らる
- 8 黒色土 しりあり 粘性中
炭化材、炭化材、ホーキ・A.Tブロックが散らる
- 9 8層よりホーキ・A.Tブロックの散らりが少ない
- 10 黒色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが多く散らる
- 11 10層よりホーキブロックが多く散らる
- 12 にぶい黄褐色土 しりあり (弱) 粘性中
ホーキ・A.Tブロック、黒褐色土が散らる
- 13 12層より黒褐色土の散らりが少ない
- 14 黒褐色土 しりあり 粘性なし
φ1.0～2.0cmの地山ブロックが散らる
- 15 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性なし
φ2.0cm以下の黒色土ブロックが散らる
- 16 黒色土 しりあり (弱) 粘性中
ホーキ・凝結土ブロックが散らる
- 17 灰白色土 しりあり (強) 粘性中
- 18 黒褐色土 しりあり 粘性中
炭化材、ホーキ・A.Tブロックが散らる
- 19 にぶい黄褐色土 しりあり (強) 粘性中
- 20 にぶい黄褐色土 しりあり 粘性中
ホーキブロックが多く散らる

主柱 長径×短径×深さ		(cm)	
P 1	77 × 68 × 84	P 8 上段	130×106-4
P 2	88 × [61] × 92	P 8 下段	72×65-72
P 3	72 × [58] × 82	補助柱	
P 5	70 × 60 × 106	P 4	69 × 59 × 84
P 6	82 × 68 × 88	P 9	68 × 67 × 76
P 7	93 × [89] × 120	[] 保存痕	

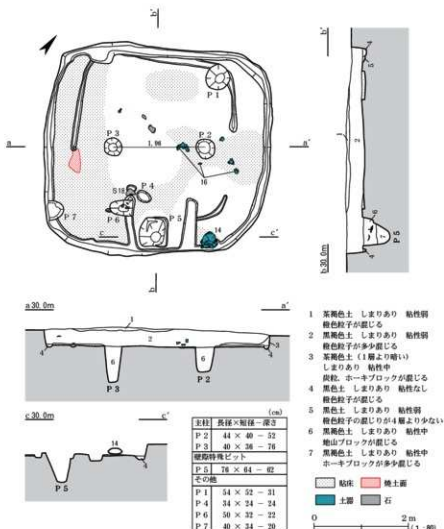
- 柱礎跡 粘床 焼土面
 炭化材・炭化物 * 分析試料
 土器 石 鉄器
 緑字 第2次調査の出土遺物及び遺物番号

0 2m (1:800)

第7図 1号堅穴建物遺構図



第8図 1号竈穴建物鉄器出土状況図



第9図 2号竪穴建物遺構図

からの深さ4cmを測り、全周する。B期の主柱穴はP2・P3の2基である。建物南東壁の中央には方形の壁際特殊ビットP5があり、その両脇に2条の間仕切り溝が伴う。間仕切り溝は周壁溝に直交して接続し、長さ1.0～1.1m、幅17～33cm、検出面からの深さ6～14cmを測る。P1・P3より南西側とP2・P4～P6の周りに貼床が施され、P3～P7間に1箇所の焼土面がみられる。

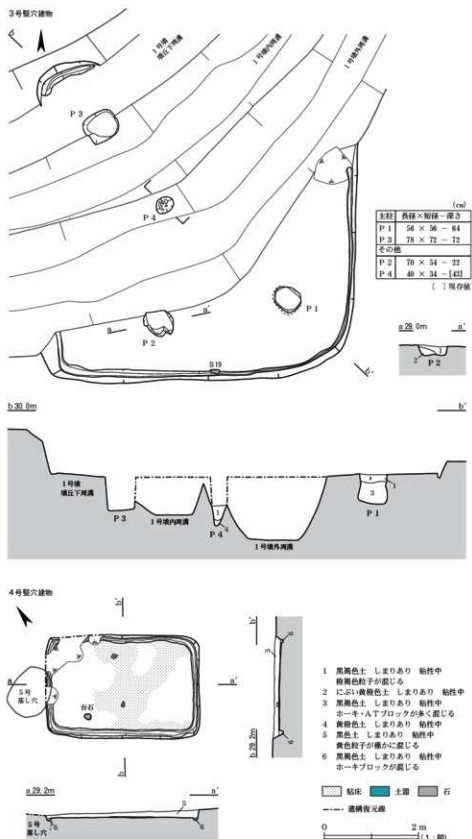
遺物は、床面で土師器甕(14)、高坏(15・16)、砥石(S18)、P5埋土から土師器甕、高坏、低脚坏(17)が出土した。このうち、14は完形に近い甕で、建物南東壁沿いで横倒しの状態だった。(小田)

3号竪穴建物 1号竪穴建物から南西へ約33m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。1号墳周溝・墳丘下周溝に床面の1/2以上を切られるが、平面形は隅丸方形と推定され、床面の規模は南北6.3m・東西6.1m、床面積は38.9㎡に復元される。検出面から床面までの深さは最大30cmを測る。周壁溝は幅8cm、検出面からの深さ8cmを測り、1号墳に切られた範囲を除いて全周する。確認できた主柱穴はP1・P3の2基に留まるが、2基を床面の四隅を結ぶ対角線上で検出したことから、本来の主柱穴は4基と推定される。なお、中央ビットや貼床、焼土面は確認できなかった。

遺物は、床面で砥石(S19)、埋土から土師器小型丸底甕(18)、甕(19)が出土した。(小田)

4号竪穴建物 1号竪穴建物から南西へ約13m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置し、5号落し穴を切る。平面形は長方形で、床面の規模は長辺3.0m・短辺1.7m、床面積は5.3㎡、検出面から床面までの深さは最大10cmを測る。周壁溝は幅13cm、検出面からの深さ7cmを測り、耕作機械による擾乱を受けた北側を除いて全周する。この建物に伴う柱穴や中央ビットは認められない。建物中央辺りと長辺側の壁際を中心に、床面に貼床が施される。

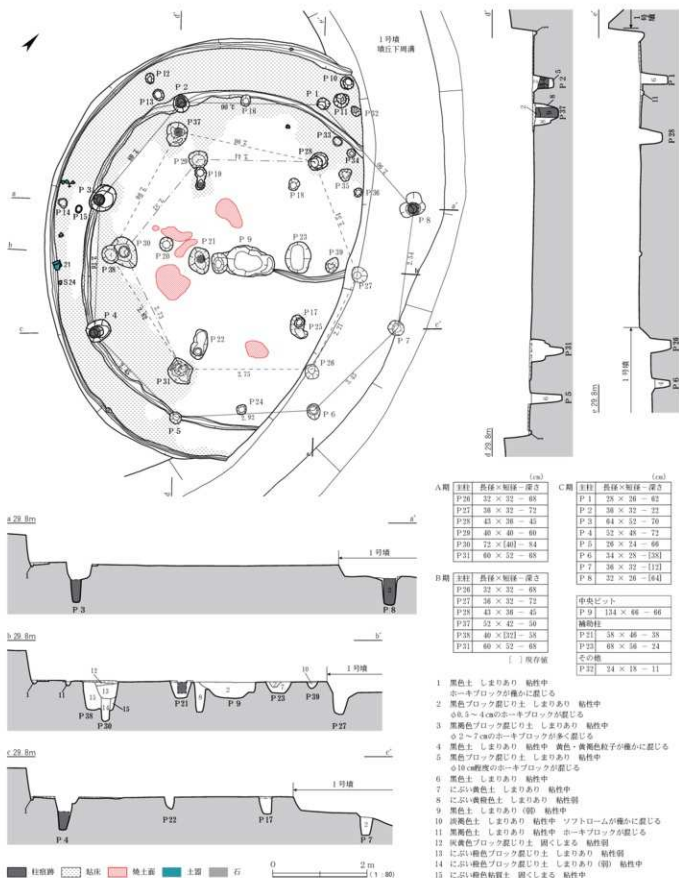
遺物は、床面で弥生土器片、台石、検出面で弥生土器甕(20)が出土した。(小田)



第10図 3号・4号竪穴建物遺構図

5号竪穴建物 4号竪穴建物から南西へ約7m離れた丘陵尾根上の標高29m付近に位置し、1号墳墳丘下周溝に東側約1/4を切られる。検出した主柱穴・周壁溝から、A期→B期→C期の建て替え(拡張)を確認した。

A期の平面形は円形と推定され、床面の規模は南北6.8m・東西約5.8m、床面積は約36.6㎡と復元される。周壁溝は幅15cm、検出面からの深さ4cmを測り、1号墳に切られた東側を除いて全周する。A期の主柱穴はP

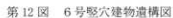


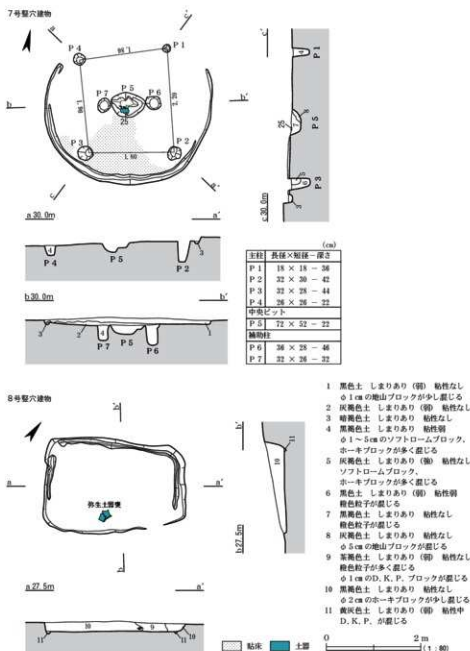
第11図 5号竪穴建物遺構図

(cm)		(cm)	
A組	主柱 直径×短径-深さ	C組	主柱 直径×短径-深さ
P.26	32 × 32 - 68	P.1	28 × 26 - 62
P.27	36 × 32 - 72	P.2	36 × 32 - 22
P.28	43 × 36 - 43	P.3	64 × 32 - 70
P.29	40 × 40 - 60	P.4	32 × 45 - 72
P.30	72 × [40] - 84	P.5	36 × 24 - 66
P.31	60 × 52 - 68	P.6	34 × 25 - [38]
		P.7	36 × 32 - [12]
		P.8	32 × 36 - [64]
B組		中央ピット	
P.26	32 × 32 - 68	P.9	134 × 66 - 66
P.27	36 × 32 - 72	補助柱	
P.28	43 × 36 - 43	P.21	38 × 46 - 38
P.29	52 × 42 - 50	P.23	68 × 36 - 24
P.30	40 × [32] - 38	その他	
P.31	60 × 52 - 68	P.22	24 × 18 - 11

[] 推定値

- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが横かに散じる
- 2 黒色ブロック盛じり土 しまりあり 粘性中
φ8.3〜4.0cmのホーキブロックが散じる
- 3 黒褐色ブロック盛じり土 しまりあり 粘性中
φ2〜7cmのホーキブロックが多く散じる
- 4 黒色土 しまりあり 粘性中 黄色・黄褐色粒子が横かに散じる
- 5 黒色ブロック盛じり土 しまりあり 粘性中
φ10 cm程度のホーキブロックが散じる
- 6 黒色土 しまりあり 粘性中
- 7 におい・黄色土 しまりあり 粘性中
- 8 におい・黄褐色土 しまりあり 粘性弱
- 9 黒色土 しまりあり (弱) 粘性中
- 10 黄褐色土 しまりあり 粘性中 ソフトロームが横かに散じる
- 11 黒褐色土 しまりあり 粘性中 ホーキブロックが散じる
- 12 灰黄色ブロック盛じり土 固くしまる 粘性弱
- 13 におい・褐色ブロック盛じり土 しまりあり 粘性弱
- 14 におい・褐色ブロック盛じり土 しまりあり (弱) 粘性中
- 15 におい・褐色粘質土 固くしまる 粘性中



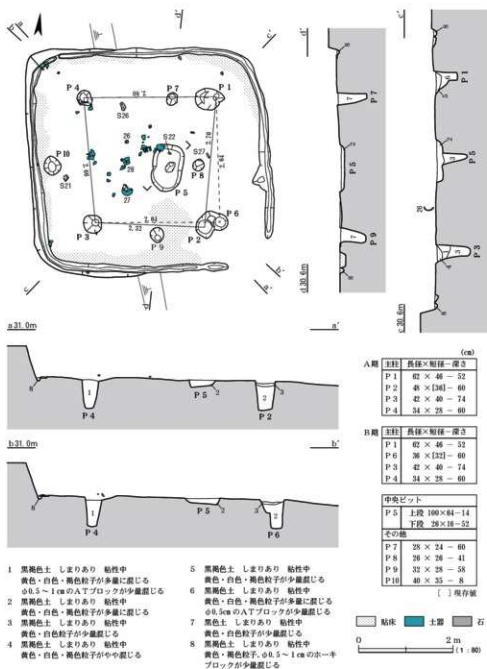


第 13 図 7 号・8 号型穴建物遺構図

26～P 31 の 6 基で、これらの中心に中央ビット P 9 が設けられている。

B 期には、A 期の主柱穴 P 29・P 30 の建て替えが行われたのみであり、建物の平面形及び床面の規模、周壁溝、中央ビットは A 期と同じである。B 期の主柱穴は A 期と共有する P 26～P 28・P 31 と新たに作られた P 37・P 38 の 6 基で、P 37 では直径 18cm の柱痕跡を確認した。

C 期の平面形も円形と推定され、床面は A・B 期よりも一回り大きく拡張され、その規模は南北 8.6 m・東西 約 6.7 m、床面積は 58.4 m² に復元される。検出面から床面までの深さは最大 62cm を測る。周壁溝は幅 18cm、検出面からの深さ 7cm を測り、1 号墳に切られた東側を除いて全周する。C 期の主柱穴は P 1～P 8 の 8 基で、P 2～P 4・P 8 では直径 14～18cm の柱痕跡を確認した。中央ビット P 9 の両隣にある P 21・P 23 は補助柱穴と考えられ、P 21 では直径 20cm の柱痕跡を確認した。そして、P 1～P 6 間の P 17・P 18・P 39 や P 2～P 5 間の P 19・P 20・P 22 のほか、P 1～P 2 間の P 16、P 5～P 6 間の P 24、P 1～P 8 間の P 34 は間柱穴と考えられ、P 19 では直径 14cm の柱痕跡を確認した。また、P 9 から東へ向かって、幅 14cm・検出面から



第14図 9号竪穴建物遺構図

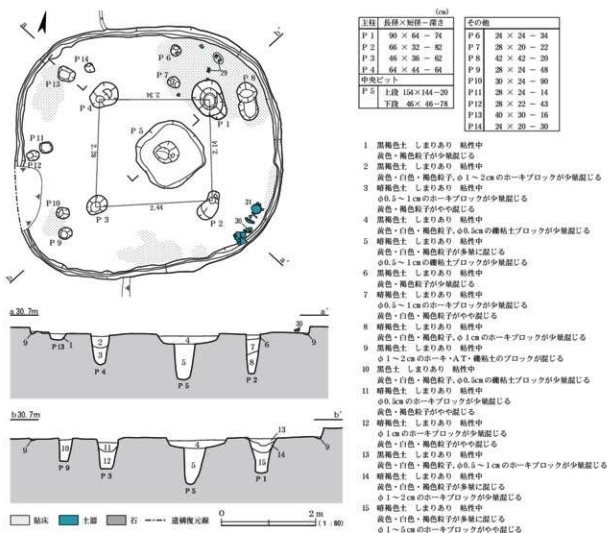
の深さ4cmの間仕切り溝がやや湾曲しながら延びる。A期の主柱穴より外側の床面に貼床が施され、A期の主柱穴より内側の床面に大小6箇所の焼土面がみられる。

遺物は、建物床面で弥生土器甕(21)、敲石(S24)、P19底面で敲石(S25)、P32埋土から水晶剥片(J24)、緑色凝灰岩剥片(J25)、建物埋土から弥生土器高坏(22)、土製紡錘車(D1)、磨製石斧(S15)、敲石(S23)が出土した。

(小田)

6号竪穴建物 5号竪穴建物から北へ約8m離れた丘陵尾根上の標高28.5m付近に位置し、3号・4号落し穴を切る。検出した主柱穴・周壁溝から、A期→B期→C期の建て替え(拡張)を確認した。

A期の平面形は円形と推定され、床面の規模は南北6.4m・東西6.2m、床面積は32.4㎡と復元される。周壁溝は幅20cm、検出面からの深さ7cmを測り、所々途切れながらもほぼ全周する。A期の主柱穴はP13～P18の6基で、中央ビットP19の両隣にあるP20・P21は補助柱穴と考えられる。



第15図 10号竪穴建物遺構図

B期の平面形も円形と推定され、床面はA期より東・北・西側に一回り大きく拡張され、その規模は東西8.4m・南北7.6m、床面積は52.0㎡と復元される。周壁溝は幅24cm、検出面からの深さ8cmを測り、ほぼ全周する。B期の主柱穴はP2~P8・P12の6基で、中央ピットP9の両隣にあるP10・P11は補助柱穴と考えられる。

C期の平面形は円形で、床面はB期より北・西側に拡張され、その規模は東西8.6m・南北8.2m、床面積は54.9㎡、検出面から床面までの深さは最大12cmを測る。周壁溝は幅24cm、検出面からの深さ8cmを測り、全周する。C期の主柱穴はB期と共有するP2~P8と新たに作られたP1の6基で、中央ピットP9と補助柱穴と考えられるP10・P11はB期と同じである。主に建物の西半部に小ピットが多く認められる。建物の南半部を中心として床面に貼床が施され、A期の周壁溝より内側には4箇所の焼土面がみられる。

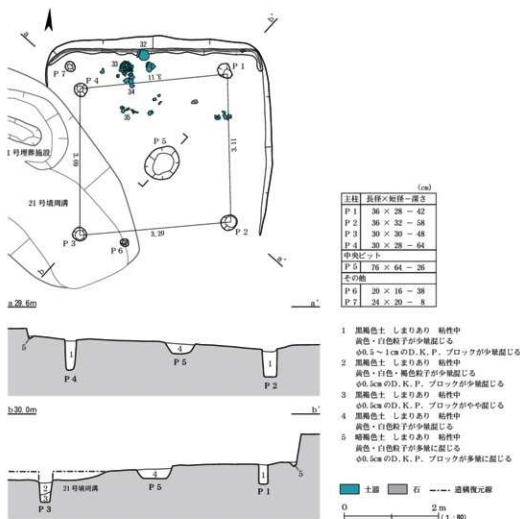
遺物は、床面で弥生土器甕(23)、P9埋土から弥生土器甕(24)、建物埋土から砥石(S20)が出土した。

(小田)

7号竪穴建物 2号竪穴建物から西へ約9m離れた丘陵尾根上の標高29.5m付近に位置する。建物の北端は削平されているが、平面形は円形と推定され、床面の規模は直径3.4m、床面積は8.1㎡と復元される。検出面から床面までの深さは最大10cmを測る。周壁溝は幅15cm、検出面からの深さ4cmを測り、削平された北端を除いてほぼ全周する。主柱穴はP1~P4の4基で、中央ピットP5の両隣にあるP6・P7は補助柱穴と考えられる。P2・P3・P5に囲まれる建物南側を中心に、床面には貼床が施される。

遺物は、P5埋土から土師器高坏(25)、建物埋土から土製紡錘車(D2)が出土した。

(小田)



第16図 11号竪穴建物遺構図

8号竪穴建物 5号竪穴建物から南へ約22m離れた丘陵南斜面の標高26.5~27m付近に位置する。平面形は長方形で、床面の規模は長辺2.6m・短辺1.8m、床面積は4.2㎡、検出面から床面までの深さは最大30cmを測る。周壁溝は幅8cm、検出面からの深さ3cmを測り、南東側（長辺側）を除いて全周する。この建物に伴う柱穴や中央ピットは認められない。

遺物は、床面で弥生土器片が出土した。

(小田)

9号竪穴建物 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30m付近に位置し、南西隅を19号墳に切られる。東側約2/3は後世に削平されている。検出した主柱穴から、A期→B期の建て替えを確認した。A期・B期とも平面形は方形で、床面の規模は東西4.6m・南北4.4m、床面積は19.9㎡、検出面から床面までの深さは最大53cmを測る。周壁溝は幅15cm、検出面からの深さ6cmを測り、ほぼ全周する。A期の主柱穴がP1~P4の4基、B期の主柱穴がP1・3・4・6の4基で、柱痕跡は確認されなかった。中央ピットP5は二段掘りである。P7・P9は、主柱穴と主柱穴の間に並ぶことから間柱穴と考えられる。P2~P9間や周壁溝周辺の床面に貼床が施される。

遺物は、床面で土師器壺(26)、甕(27)、高坏(28)、脚部、砥石(S21・S22)、敲石(S26・S27)が出土した。また、後世の削平の影響が少ない西側の埋土中層から土師器小片が多量に出土した。

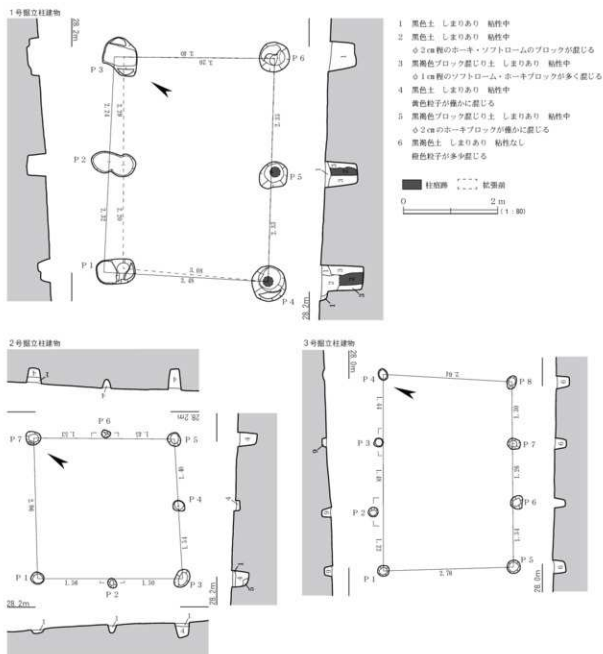
(橋本)

10号竪穴建物 9号竪穴建物から西に15m離れた丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する。西側約1/3は後世に削平されている。平面形は隅丸方形で、床面の規模は東西4.7m・南北5.2m、床面積は22.6㎡、検出面から床面までの深さは最大25cmを測る。周壁溝は幅14cm、検出面からの深さ9cmを測り、全周する。主柱穴

第2表 堅穴建物一覧

出處：() 報告書 [] 関係書

遺構名	位置・立地	建て 替え	平面形	坪面積		地盤面 の深さ (cm)	埋土層 (cm)	埋土層 の深さ (cm)	主柱穴 (長さ)	補助柱 穴(長さ)	中央 シフト (長さ)	出土遺物 (簡略)	出土遺物		備考	
				規模	坪面積 (㎡)								床面	埋土中		
1号穴建物 (A層)			円形	東西6.0× 南北6.4	38.5	—	—	—	13	6	2	1	不明			
1号穴建物 (B層)	調査区の北端、石段境 掘上の標高29 m付近	1回	円形	東西6.9× 南北6.7	45.9	45	37.9	—	13	6	2	1	10			遺構の東半分を第2号遺構で 埋め、西半分を第3号遺構で 埋め、中央に石段境がある。 A層の柱穴内では石段境を外 側に配置して建て替える。
2号穴建物 (A層)	調査区の中央部、中央 部、石段境掘上の標 高29.5 m付近	1回	隅欠方形	北東・南西3.2× 北西・南東3.2	(9.8)	—	—	—	14	0	0	0	0			
2号穴建物 (B層)	調査区の中央部、中央 部、石段境掘上の標 高29.5 m付近	1回	隅欠方形	北東・南西3.4× 北西・南東3.4	11.6	36	21	2	0	0	0	1	1			第2号遺構は、石段境境 に2本の柱穴内では石段境を外 側に配置して建て替える。
3号穴建物 (A層)	調査区の北部、石段境 掘上の標高29 m付近	なし	隅欠方形	南北3.1× 東西3.1	(9.8)	30	8	(12) (4)	[0]	[0]	[0]	[0]	[0]			第3号遺構は、石段境境 に2本の柱穴内では石段境を外 側に配置して建て替える。
4号穴建物 (A層)	調査区の北端、石段境 掘上の標高29 m付近	なし	長方形	北東・南西3.9× 北西・南東3.9	5.3	10	13	0	0	0	0	0	0			第4号遺構は、石段境境 に2本の柱穴内では石段境を外 側に配置して建て替える。
5号穴建物 (A層)	調査区の中央部、石段境 掘上の標高29 m付近	2回	円形	南北3.9× 東西3.5	(9.6)	—	—	—	15	6	2	1	0			第5号遺構は、石段境境 に2本の柱穴内では石段境を外 側に配置して建て替える。
5号穴建物 (C層)	調査区の北端、石段境 掘上の標高29 m付近	なし	円形	南北3.6× 東西3.7	(9.6)	42	18	8	2	1	6	6	6			1号焼燐店下埋土に埋られ る。
6号穴建物 (A層)	調査区の中央部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	2回	円形	東西3.2× 南北3.2	32.4	—	—	—	20	6	2	1	0			
6号穴建物 (B層)	調査区の北部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	円形	東西3.4× 南北3.4	36.4	—	—	—	24	6	2	1	4			
6号穴建物 (C層)	調査区の中央部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	円形	東西3.5× 南北3.5	54.9	12	24	6	2	1	4	4	4			3号・4号壁穴を切る。
7号穴建物 (A層)	調査区の中央部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	円形	東西3.4× 南北3.4	(9.6)	10	15	4	2	1	0					
8号穴建物 (A層)	調査区の東端、石段境 掘上の標高29.5～27 m付近	なし	長方形	北東・南西3.4× 北西・南東3.8	4.2	30	8	0	0	0	0	0	0			
8号穴建物 (B層)	調査区の中央部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	方形	東西3.6× 南北3.4	19.9	—	—	—	15	4	0	1	0			
9号穴建物 (A層)	調査区の西部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	1回	方形	東西3.6× 南北3.4	18.9	53	15	4	0	1	0					19号焼燐店：切られる。
10号穴建物 (B層)	調査区の西部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	隅欠方形	北東・南西3.7× 北西・南東3.7	22.6	35	14	5	0	1	0					
11号穴建物 (A層)	調査区の西部、石段境 掘上の標高29.5 m付近	なし	方形	東西3.4× 南北3.4	(17.7)	60	10	4	0	1	0					21号焼燐店：切られる。



第17図 1号～3号竪立柱建物遺構図

はP1～P4の4基で、柱痕跡は確認されなかった。中央ビットP5は二段掘りである。P1周辺など一部の床面に貼床が施される。

遺物は、北東隅の床面で土師器甕(29)、南東隅の床面で土師器甕、高坏(30)、鼓形器台(31)がまとめて出土した。

(橋本)

11号竪穴建物 10号竪穴建物から南に6m離れた丘陵南斜面の標高29～29.5m付近に位置する。建物西壁は21号墳に切られ、斜面の低い側にあたる南壁は削平されている。平面形は方形で、推定した床面の規模は東西4.4m・南北4.5m、床面積は17.7㎡に復元され、検出面から床面までの深さは最大60cmを測る。周壁溝は幅10cm、検出面からの深さ5cmを測り、北壁付近のみで確認した。主柱穴はP1～P4の4基で、柱痕跡は確認されなかった。P5は最大径36cmの中央ビットである。

遺物は、北側の床面で土師器甕(32・33)、高坏(34)、低脚坏(35)が出土した。

(橋本)

(3) 掘立柱建物

丘陵尾根上と北肩部で8棟を確認した。その詳細は第3表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 mに位置する。一回建て替えが行われており、建物北側を北に拡張している。拡張前は桁行2間(約4.7 m)×梁行1間(約3.2 m)、建物面積は15.0 m²、長方形度は1.47。拡張後は桁行2間(約4.7 m)×梁行1間(約3.5 m)、建物面積は16.45 m²、長方形度は1.34。桁行の方向はN-55°-Eである。柱穴の形状は円形及び楕円形を呈し、直径64～92 cmである。遺物はP4埋土上層から土師器甕(36)が出土。その他、須恵器片が出土した。なお、2号掘立柱建物と重なり合っているが、先後関係は不明。

2号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 mに位置する。桁行2間(約3.0 m)×梁行2間(約3.1 m)、建物面積は8.7 m²、長方形度は1.03。桁行の方向はN-55°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径16～40 cmである。遺物は土師器片が出土した。

3号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 mに位置する。桁行3間(約4.2 m)×梁行1間(約2.8 m)、建物面積は11.3 m²、長方形度は1.50。桁行の方向はN-66°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径12～28 cmである。遺物は出土しなかった。4号掘立柱建物と重なり合っているが、先後関係は不明。

4号掘立柱建物 調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27～27.5 mに位置する。桁行3間(約5.9 m)×梁行1間(約4.3 m)、建物面積は25.3 m²、長方形度は1.37。桁行の方向はN-63°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径32～64 cmである。遺物は土師器甕の小片と須恵器片が出土した。

5号掘立柱建物 調査区の北部、7号竪穴建物から北東へ約2 m離れた丘陵尾根上の標高29～29.5 mに位置する。桁行3間(約4.5 m)×梁行3間(約5.0 m)、建物面積は20.3 m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-3°-Wである。柱穴の形状は円形を呈し、直径24～50 cmである。遺物は土師器甕の小片が出土した。

6号掘立柱建物 調査区の北部、丘陵北肩部の標高28 mに位置する。桁行2間(約2.7 m)×梁行1間(約2.9 m)、建物面積は7.8 m²、長方形度は1.07。桁行の方向はN-110°-Wである。柱穴の形状は円形を呈し、直径12～16 cmである。P2において直径8 cmの円形の柱痕跡を確認した。遺物は弥生土器片が出土した。

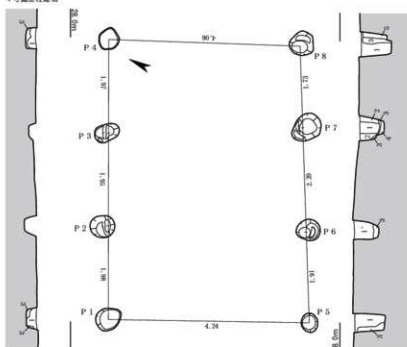
7号掘立柱建物 調査区中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30 mに位置する。桁行2間(約3.7 m)×梁行1間(約3.7 m)、建物面積は13.7 m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-70°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径10～20 cmである。遺物は出土しなかった。

8号掘立柱建物 調査区中央部、丘陵尾根上の標高30～30.5 mに位置する。桁行2間(約3.7 m)×梁行1間(約3.7 m)、建物面積は13.7 m²、長方形度は1.00。桁行の方向はN-69°-Eである。柱穴の形状は円形を呈し、直径24～36 cmである。P2が10号落し穴を切る。遺物は土師器片が出土した。(西浦)

第3表 掘立柱建物一覧

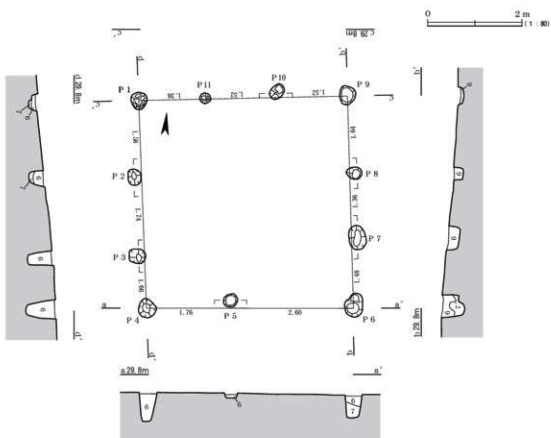
遺構名	位置・立地	主軸	規模		建物面積 (m ²)	長方形度	柱穴		柱痕跡 直径(cm)	出土遺物	備考
			桁行	梁行			平面形	直径(cm)			
1号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 m	N-55°-E	2間 (4.7 m)	1間 (3.2 m)	15.0	1.47	円形、 楕円形	64～92	なし	P4埋土： 土師器甕 (36)	北側へ拡張して建て替え、2号掘立柱建物と重なり合う。
2号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 m	N-55°-E	2間 (3.0 m)	2間 (3.1 m)	8.7	1.03	円形	16～40	なし	埋土：土師器片	1号掘立柱建物と重なり合う。
3号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27.5～28 m	N-66°-E	3間 (4.2 m)	1間 (2.8 m)	11.3	1.50	円形	12～28	なし	なし	4号掘立柱建物と重なり合う。
4号掘立柱建物	調査区の北東部、丘陵北肩部の標高27～27.5 m	N-63°-E	3間 (5.9 m)	1間 (4.3 m)	25.3	1.37	円形	32～64	なし	埋土：土師器片、須恵器片	3号掘立柱建物と重なり合う。
5号掘立柱建物	調査区の北部、丘陵尾根上の標高29～29.5 m	N-3°-W	3間 (4.5 m)	3間 (5.0 m)	20.3	1.00	円形	24～50	なし	埋土：土師器片	
6号掘立柱建物	調査区の北部、丘陵北肩部の標高28 m	N-110°-W	2間 (2.7 m)	1間 (2.9 m)	7.8	1.07	円形	12～16	8	埋土：弥生土器片	
7号掘立柱建物	調査区中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30 m	N-70°-E	2間 (3.7 m)	1間 (3.7 m)	13.7	1.00	円形	10～20	なし	なし	
8号掘立柱建物	調査区中央部、丘陵尾根上の標高30～30.5 m	N-69°-E	2間 (3.7 m)	1間 (3.7 m)	13.7	1.00	円形	24～36	なし	土師器片	P2が10号落し穴を切る。

4号掘立柱建物



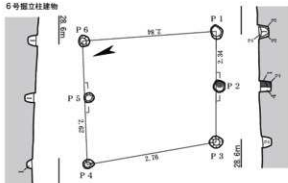
- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色砂子、φ 1cm 以下のホーキブロックが混じる
- 1' 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色砂子、φ 1～3cm のホーキブロックが混じる
- 2 茶褐色土 しまりあり 粘性なし
φ 1～5cm のホーキブロックが混じる
- 3 暗褐色土 しまりあり 粘性なし
φ 1cm のホーキブロックが多く混じる
- 4 黒色土 しまり弱 粘性なし
- 5 茶褐色土 しまり弱 粘性なし
- 6 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色砂子が混じる
- 7 黒褐色土 しまりあり 粘性なし
褐色砂子が多く混じる
- 7' 灰褐色土 しまりあり 粘性弱

5号掘立柱建物

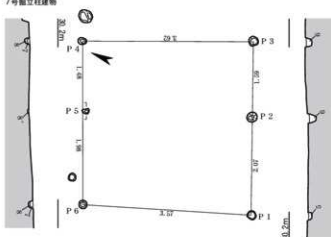


第 18 図 4号・5号掘立柱建物遺構図

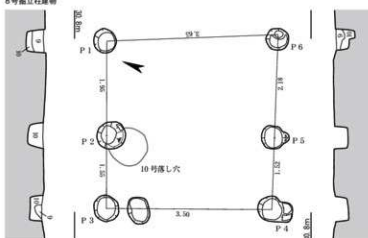
6号掘立柱建物



7号掘立柱建物



8号掘立柱建物



- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
炭粒、黄色・白色粒子が少量混じる
- 2 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子、φ1~3cmのホーキブロックが混じる
- 3 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色粒子が混じる
- 4 暗褐色土と黒色土の混じり土 しまりあり 粘性中
黄色粒子が多く混じる
白色粒、φ0.5cmのホーキブロックが混じる
- 5 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子、φ1cmのホーキブロックが少量混じる
- 6 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子が少量混じる
- 7 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色粒子が少量混じる
- 8 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子、φ1cmの糲粘土ブロックが少量混じる
- 8' 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・褐色粒子が少量混じる
- 9 黒褐色土 しまりあり 粘性中
φ1cmのホーキブロックが混じる
- 10 暗褐色土 しまりあり 粘性中
φ3~5cmのホーキ・A・T・糲粘土ブロックが混じる

■ 柱痕跡

0 2m (1:800)

第19図 6号～8号掘立柱建物遺構図

(4) 柵列

1号柵列 調査区の中央部、7号竪穴建物の南西側、丘陵尾根上の標高29.5m付近に位置する東西に延びる柵列。主軸はN-69°-Eで、3間(5.06m)確認した。柱穴の形状は円形を呈し、直径は0.24~0.28mである。

遺物は出土しなかった。

(西浦)

(5) 貯蔵穴

1号貯蔵穴 調査区の北東部、標高26.5~27m付近に位置する。平面形は検出面・床面とも隅丸長方形を呈する。断面形は開口部が狭く、底部が広い袋状である。規模は検出面では長軸1.68m・短軸0.89m、底面では長軸1.84m・短軸1.16mを測る。検出面から底面までの深さは1.2mを測り、床面積は2.13㎡である。

遺物は比較的多く、床面で弥生土器甕、埋土下層からは弥生土器壺(37・38)、台付壺(39・40)、石鐘(S14)が出土した。

(西浦)

(6) 土壌

丘陵尾根上へ南斜面で10基を確認した。その詳細は第4表に一括する。ここでは特徴的な土壌2基について述べる。

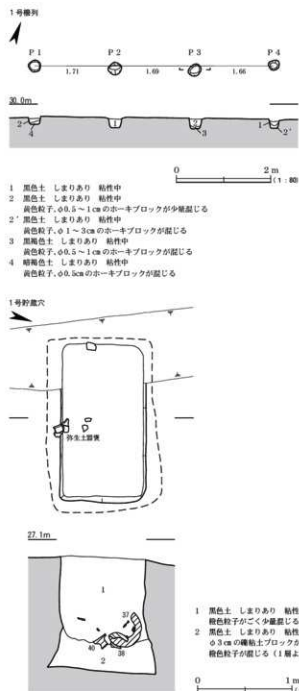
1号土壌 調査区の東部、1号墳の東側、丘陵尾根上の標高29m付近に位置する。南東隅がビットと切り合う。主軸はN-16°-E。平面形は隅丸長方形。規模は長軸1.84m・短軸0.84m、検出面からの深さ0.68mを測る。

遺物は、埋土中から弥生土器壺(41・44)、甕(45)、無頸壺(42)、脚付壺(43)、小型甕(46・47)、高坏(48)が出土した。

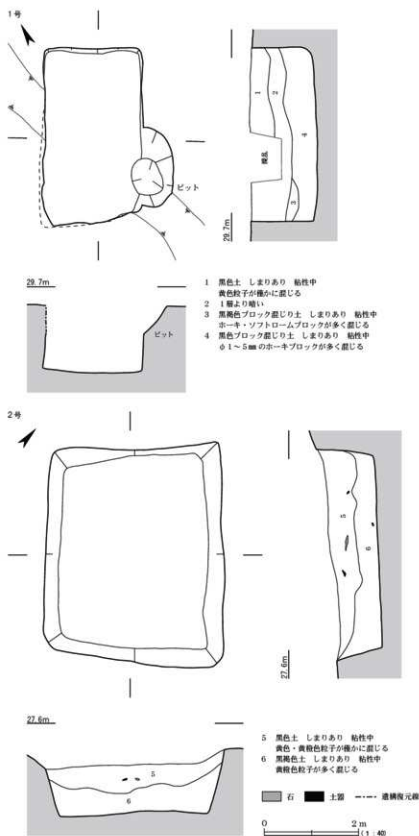
2号土壌 調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27~27.5mに位置し、2号墳周溝に切られる。主軸はN-43°-W。平面形は長方形。断面形は逆台形で、規模は長軸2.2m・短軸1.88m、検出面からの深さ0.52mを測る。

遺物は、埋土中から弥生土器高坏(49)が出土した。

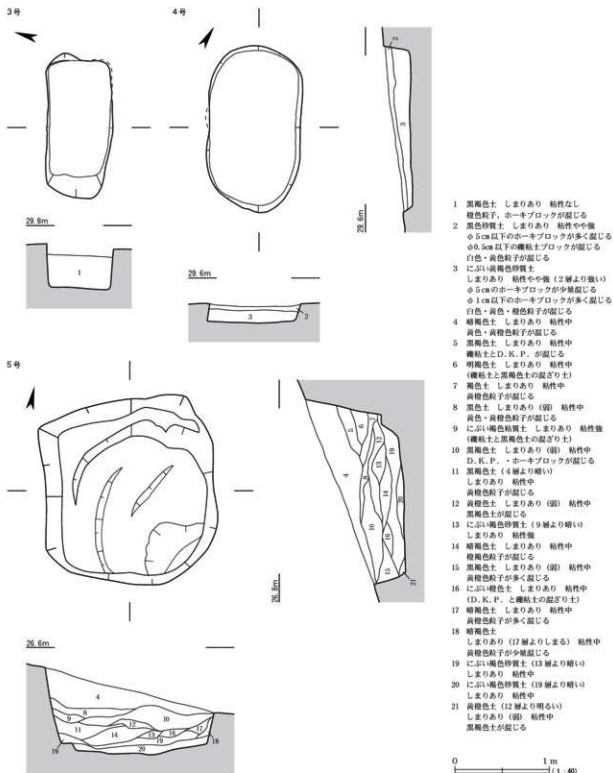
(西浦)



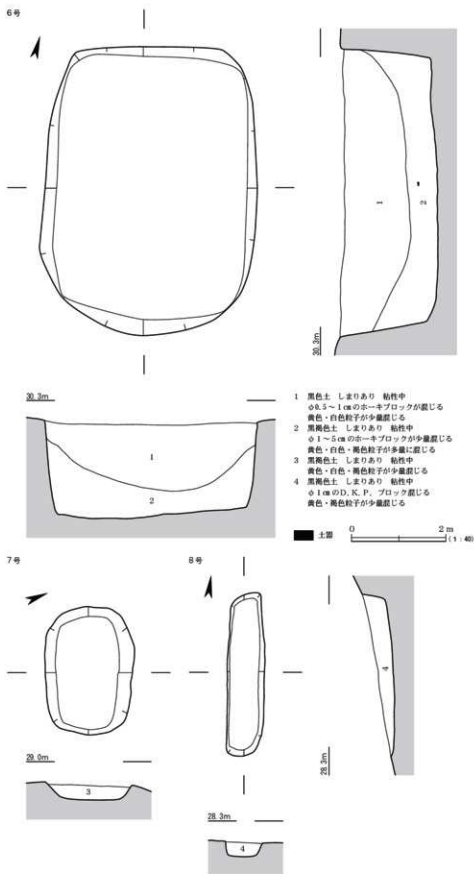
第20図 1号柵列及び1号貯蔵穴遺構図



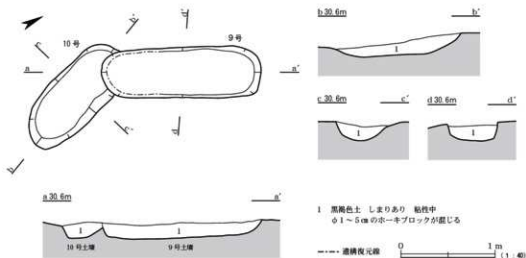
第21図 1号・2号土坑遺構図



第22図 3号～5号土壇遺構図



第23図 6号~8号土坑遺構図



第24図 9号・10号土壇遺構図

第4表 土壇一覧

遺構名	位置・立地	平面形		断面形状	検出面規模 (cm)		床面規模 (cm)	出土遺物	備考
		検出面	底面		長軸×短軸-深さ	長軸×短軸			
1号土壇	調査区の東端、丘陵尾根上の標高29m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	垂直	184×84-68	180×100	埋土：弥生土跡遺 (41・44)、甕 (45)、灰皿遺 (42)、御付遺 (43)、小甕 (46・47)、高坪 (48)	ビットと切り合う。	
2号土壇	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27~27.5m付近	長方形	長方形	逆台形	220×188-52	204×160	埋土：弥生土跡高坪 (49)	2号墳周溝に切られる。	
3号土壇	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29.5m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	垂直	144×68-44	120×60	なし		
4号土壇	調査区の東部、丘陵南斜面の標高29m付近	隅丸形	隅丸形	逆台形	176×96-16	160×92	弥生土跡片		
5号土壇	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26~26.5m付近	隅丸形	隅丸形	逆台形	196×180-68	168×152	なし	9号墳周溝を切る。	
6号土壇	調査区中央部、丘陵尾根上の標高30m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	逆台形	304×224-96	276×200	弥生土跡甕		
7号土壇	調査区中央部、丘陵尾根上の標高30m付近	隅丸形	隅丸形	逆台形	136×92-16	120×84	土師器片	16号墳周溝と切り合う。	
8号土壇	調査区中央部、丘陵南斜面の標高29m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	逆台形	172×80-16	160×28	なし	平面形から土壇墓の可能性もあり。	
9号土壇	調査区西端、丘陵尾根上の標高30m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	逆台形	168×52-16	156×44	なし	10号土壇を切る。	
10号土壇	調査区西端、丘陵尾根上の標高30m付近	隅丸長方形	隅丸長方形	逆台形	132×56-16	116×40	なし	9号土壇に切られる。	

(7) 古墳

丘陵尾根上とその尾根から下る南斜面で25基を確認した。このうち主体部を確認できた古墳は4基、周溝内外で副次的な埋葬施設を確認できた古墳は15基である。そして、確認した主体部は箱式石棺墓2基、木棺墓2基、土壇墓3基の計7基で、副次的な埋葬施設は箱式石棺墓2基、石蓋土壇墓6基、木棺墓2基、土壇墓25基の計35基である。古墳の詳細を第5表、主体部・埋葬施設の詳細を第6表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号墳

調査区の東部、丘陵尾根上の標高29～29.5m付近に位置する円墳であり、3号・5号堅穴建物を切る。調査前に古墳の高まりが認められたが、調査の結果、旧表土（黒色土）より上層が削平されており、墳丘盛土や主体部は遺存しない。古墳の規模は直径18.2m、二重の周溝（以下、内側の周溝を「内周溝」、外側の周溝を「外周溝」という。）を含めて直径28.8m、内周溝底面から墳丘頂部までの高さは2.4mを測る。内周溝の内縁に沿って墳丘下周溝と考えられる溝が全周し、規模は幅1.8～2.5m、検出面からの深さ0.9mを測る。

二重の周溝のうち、内周溝は全周する。外周溝は北側を除いて確認したが、本来は全周したと考えられる。内周溝の断面形は逆台形で、幅1.2～2.6m、検出面からの深さは最大1.7mを測る。外周溝の断面形も逆台形で、幅1.7～4.1m、検出面からの深さは最大1.2mを測る。周溝内で10基、周溝外で4基の埋葬施設を確認した。

外周溝南西側の底面で須恵器片が集中する箇所を確認し、須恵器環蓋（53）、坏身（54）、甕などがまとまって出土した。また、外周溝南側の底面で須恵器環蓋（52）、甕（56）、南西側の底面付近で土師器埴（50）が出土し、内周溝南東側の埋土下層から須恵器坏身（55）、南西側の埋土上層から赤色塗彩の土師器埴（51）が出土した。ほかに、外周溝北西側の表土から土玉（D3）、墳丘下周溝北西側の埋土から黒曜石剥片（S5）、墳丘上北東側から管玉未成品（J23）、安山岩製石鏃（S11）などが出土した。

1号埋葬施設 外周溝西側の底面の内寄りに位置し、外周溝の壁を掘り込むように造られた土壇墓である。主軸はN-10°-Wである。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ0.87m、幅0.30m、検出面からの深さは最大0.19mを測る。頭位は北側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

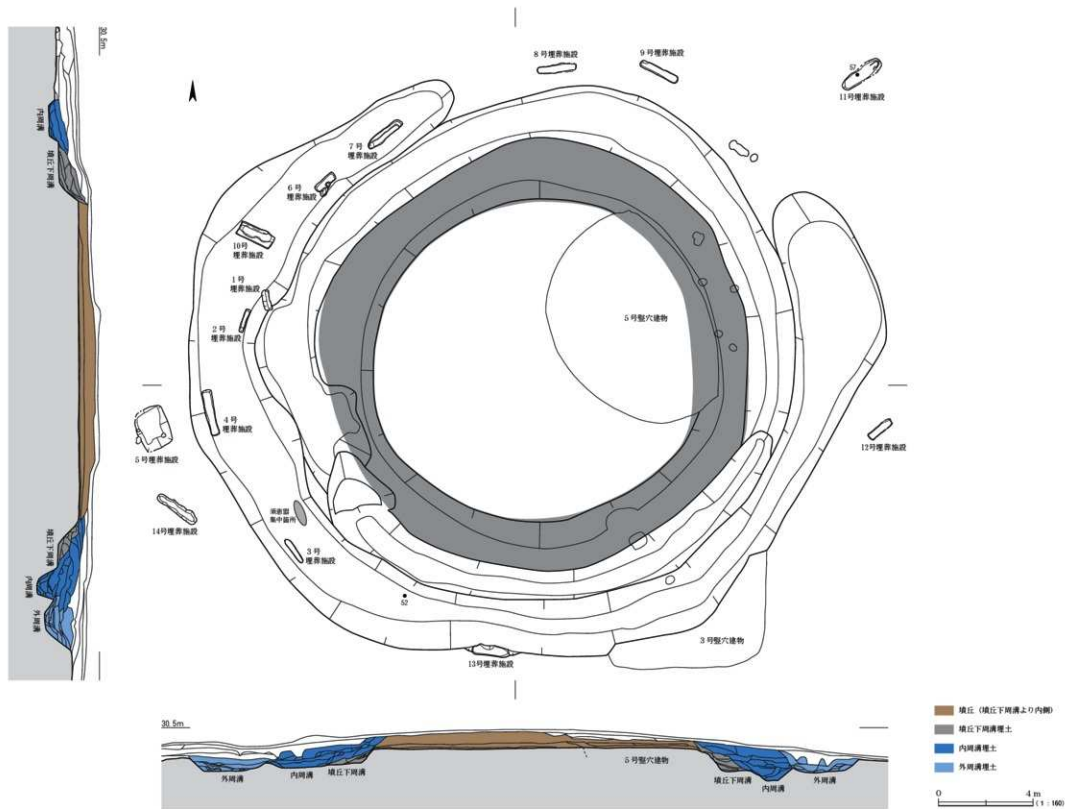
2号埋葬施設 外周溝西側の底面の内寄りに位置する土壇墓である。主軸はN-21°-Eで、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ0.91m、幅は北東側で0.21m、南西側で0.20mと北東側がわずかに広く、検出面からの深さは最大0.32mを測る。頭位は北東側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

3号埋葬施設 外周溝西側の底面の外寄りに位置する土壇墓である。主軸はN-34°-Wで、周溝に平行する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ1.20m、幅は北西側で0.24m、南東側で0.21mと北西側が広く、検出面からの深さは最大0.36mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

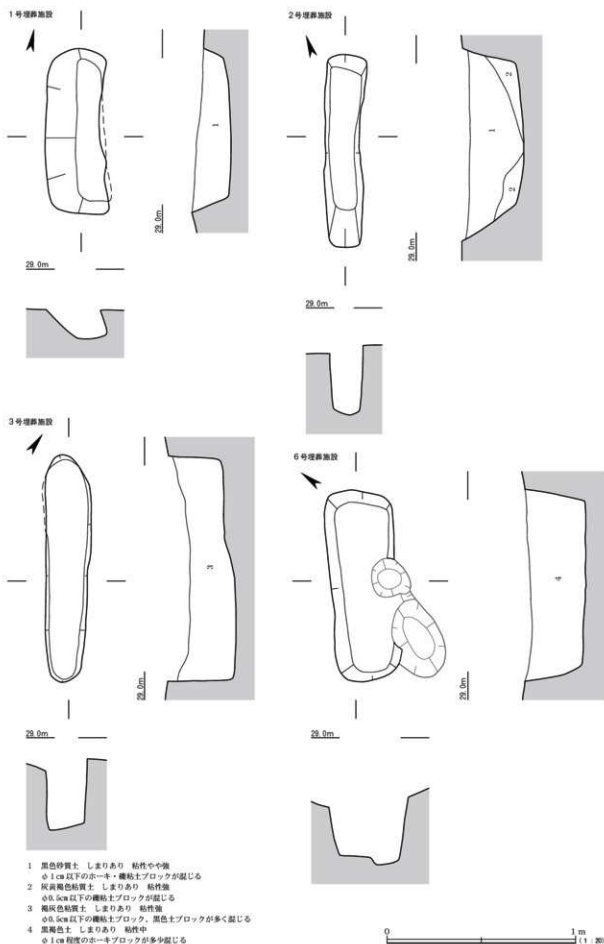
4号埋葬施設 外周溝西側の底面の外寄りに位置する土壇墓である。主軸はN-13.5°-Wで、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.94m、幅は北側で0.42m、南側で0.37mと北側が広く、検出面からの深さは最大0.42mを測る。頭位は北側と推定される。副葬品としては墓壇埋土下層から鉄滓（F4）が出土した。また、埋土から土器片が出土した。

5号埋葬施設 周溝外の西側に位置する土壇墓である。主軸はN-22.5°-Wで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.76m、幅は北西側で1.36m、南東側で1.34mと北西側がわずかに広く、検出面からの深さは最大0.36mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

6号埋葬施設 外周溝北西側の底面の内寄りに位置する土壇墓で、ピットと切り合う。主軸はN-52°-Eで、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.00m、幅は北東側で0.36m、南西側で0.35mと北東側がわずかに広く、検出面からの深さは最大0.31mを測る。頭位は北東側と推定される。墓壇埋土から土器片

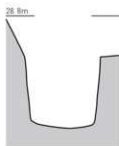
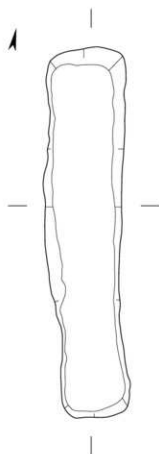


第 25 图 1 号墳遺構図

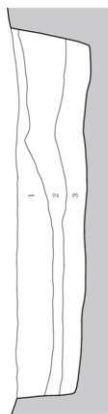


第26図 1号墳1号～3号・6号埋葬施設遺構図

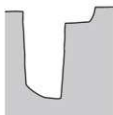
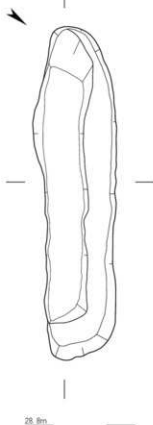
4号埋葬施設



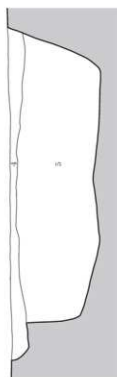
28.8m



7号埋葬施設



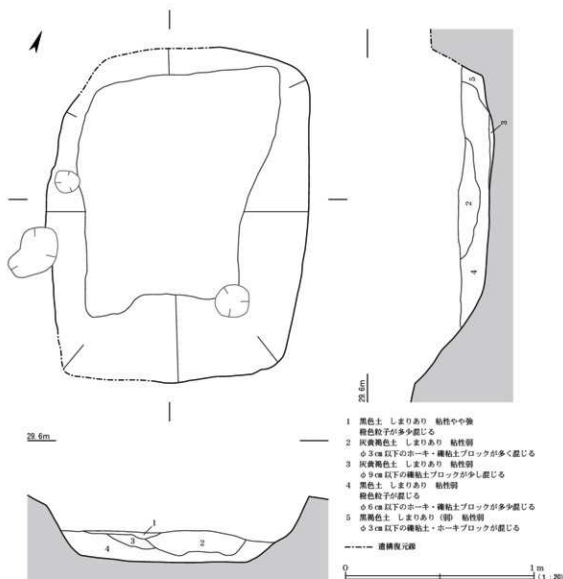
28.8m



- 1 にぶい黄褐色粘質土。しりあり 粘性強
礫粘土主体の土にホーネブロックや黒色土が混じる
- 2 黄褐色土。しりあり 粘性中
- 3 礫粘土・ホーネブロックが混じる
にぶい黄褐色粘質土。しりあり 粘性強
- 4 黒褐色土。しりあり 粘性中
1層にA型ブロックが混じる
- 5 黒褐色土。しりあり 粘性中
ホーネブロックが多少混じる
- 6 黒褐色土。しりあり 粘性中
4層よりホーネブロックの混じりが少ない

0 1 m (1:20)

第27図 1号墳4号・7号埋葬施設遺構図



第28図 1号墳5号埋葬施設遺構図

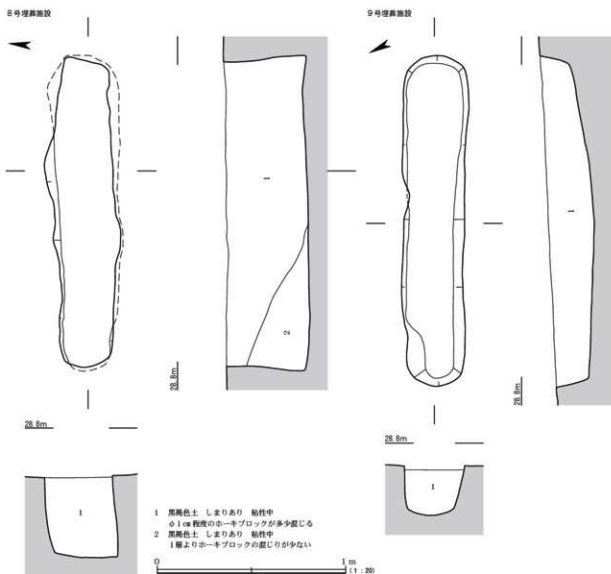
が出土した。

7号埋葬施設 外周溝北西側の底面に位置する土壇墓で、ピットと切り合う。主軸は $N-54^{\circ}-E$ で、周溝に平行する。墓壇は北東・北西側が二段掘りで、平面形は歪な長方形を呈する。規模は上段が長さ1.76m、幅0.38～0.44m、検出面からの深さは最大0.08mを測り、下段が長さ1.51m、幅は南西側で0.27m、北東側で0.23mと南西側が広く、深さは最大0.41mを測る。頭位は南西側と推定される。墓壇埋土から土師器片が出土した。

8号埋葬施設 外周溝北側の底面に位置する土壇墓である。主軸は $N-86^{\circ}-E$ で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.61m、検出面での幅は東側で0.26m、西側で0.28mとわずかに西側が広いが、壁面がオーバーハングするため底面での幅は東側で0.38m、西側で0.24mと東側が広い。検出面からの深さは最大0.44mを測る。頭位は東側と推定される。墓壇埋土から土師器片が出土した。

9号埋葬施設 外周溝北東側の底面に位置する土壇墓である。主軸は $N-115^{\circ}-E$ で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.75m、幅は南東側で0.35m、北西側で0.31mと南東側が広く、検出面からの深さは最大0.24mを測る。頭位は南東側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

10号埋葬施設 外周溝北西側の底面に位置する土壇墓である。主軸は $N-125^{\circ}-W$ で、周溝に直交する。墓



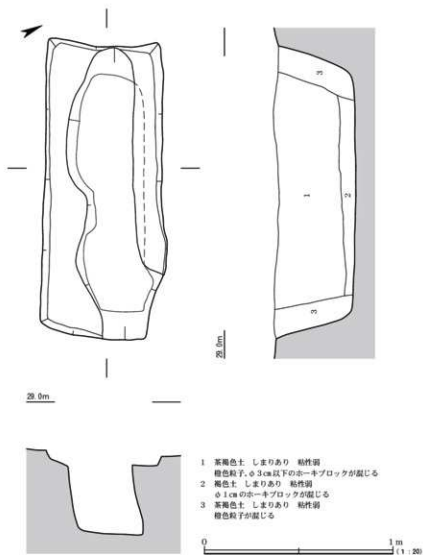
第29図 1号墳8号・9号埋葬施設遺構図

墳は北東・南西側（長辺側）が二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ1.54 m、幅0.62～0.66 m、検出面からの深さは最大0.05 mを測り、下段が長さ1.50 m、幅は北西側で0.44 m、南東側で0.32 mと北西側が広く、深さは最大0.42 mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

11号埋葬施設 周溝外の北東側に位置する土壇墓である。主軸は $N-34^{\circ}-E$ で、周溝に直交する。平面形は長楕円形を呈し、規模は長さ1.91 m、幅は北東側で0.62 m、南西側で0.46 mと北東側が広く、検出面からの深さは最大0.3 mを測る。頭位は北東側と推定される。副葬品としては墓壇埋土下層から須恵器坏身（57）、埋土から鉄鍬（F5）が出土した。また、埋土から須恵器片、土器片が出土した。

12号埋葬施設 周溝外の東側に位置する土壇墓である。主軸は $N-129^{\circ}-W$ で、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.16 m、幅は南西側で0.34 m、北東側で0.29 mと南西側が広く、検出面からの深さは最大0.27 mを測る。頭位は南西側と推定される。墓壇埋土から須恵器片が出土した。

13号埋葬施設 外周溝南側の掘方外縁に接する土壇墓である。主軸は $N-86^{\circ}-W$ で、周溝に平行する。平面形は歪な長楕円形を呈し、規模は長さ1.60 m、幅は西側で0.46 m、東側で0.41 mと西側が広く、検出面か



第30図 1号墳10号埋葬施設遺構図

らの深さは最大0.15 mを測る。頭位は西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

14号埋葬施設 周溝外の南西側に位置する土壇墓である。主軸はN-124.5°-Eで、周溝にほぼ平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.92 m、幅は南東側で0.49 m、北西側で0.35 mと南東側が広く、検出面からの深さは最大0.14 mを測る。頭位は南東側と推定される。副葬品としては墓壇検出面で鉄刀子（F6）が出土した。また、墓壇埋土から弥生土器片が出土した。（小田）

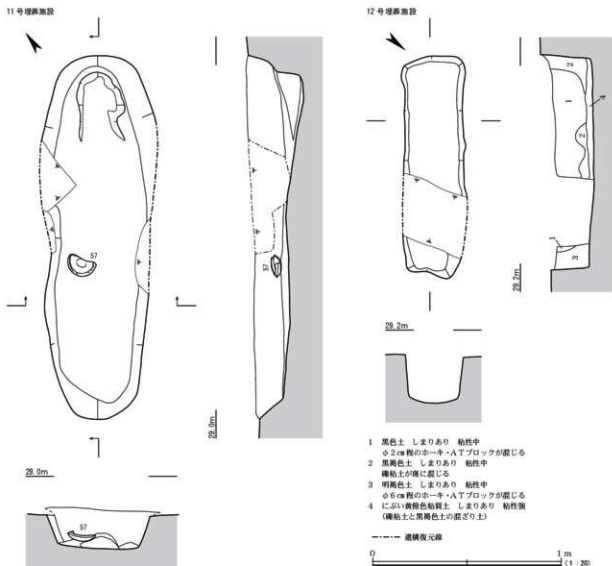
2号墳

1号墳から南東へ約4 m離れた、丘陵南肩部の標高27～28.5 m付近に位置する円墳で、5号墳と2号土壇を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径10.6 m、周溝を含めて直径15.5 mを測る。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約1/2を確認した。断面形はU字形で、幅2.8～3.2 m、検出面からの深さは最大1.2 mを測る。周溝西側の底面で土師器甕（58）、東側の埋土下層から土師器甕、須恵器坏蓋（59）、坏身（60）が出土した。

なお、主体部や副次的な埋葬施設は確認できなかった。

（小田）



第31図 1号墳11号・12号埋葬施設遺構図

3号墳

2号墳から西へ約9m離れた、丘陵南肩部の標高28.5～29.5m付近に位置する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径11.1m、周溝を含めて直径15.6mを測る。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約1/2を確認した。断面形はU字形で、幅2.1～3.3m、検出面からの深さは最大1.2mを測り、西側が一段深く掘り込まれている。この深く掘り込まれた周溝底面から土師器直口壺(61)、甕(62)、脚付埴(63～71)が供献状態で出土した。

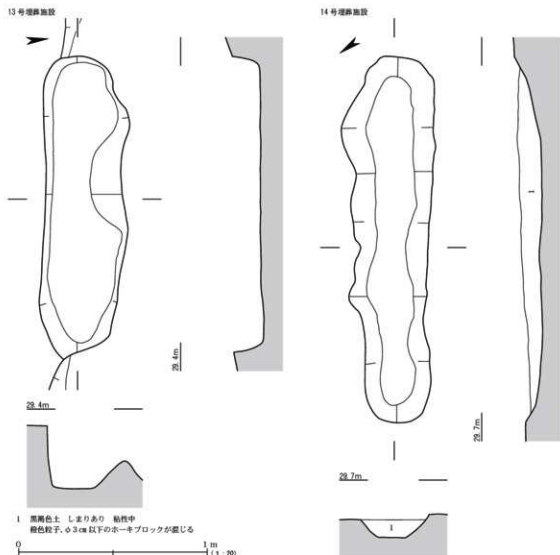
なお、主体部や副次的な埋葬施設は確認できなかった。

(小田)

4号墳

3号墳から西へ約4m離れた、丘陵南肩部の標高28.5～29.5m付近に位置する円墳である。墳丘は削平されているが、復元される墳丘規模は直径11.2m、周溝を含めて直径15.3mである。周溝の内側に墳丘下周溝と考えられる溝が半円状に巡り、断面形は逆台形で、幅0.9～1.3m、検出面からの深さは最大0.5mを測る。墳丘下周溝東側の埋土から土師器甕(73)、西側の埋土から須恵器坏蓋(75)が出土した。

周溝は、尾根側にあたる北西側で約1/3を確認した。断面形は逆台形で、幅1.1～2.2m、検出面からの深さ



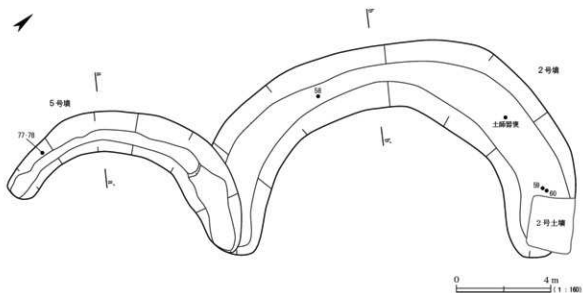
第32図 1号墳13号・14号埋葬施設遺構図

は最大0.8 mを測る。周溝内・外の北東側に埋葬施設を1基ずつ確認した。

また、周溝北側の底面に掘られた短径0.33 m、深さ0.32 mのビットに、土師器甕(72)が正位で据えられ、甕の開口部を塞ぐように高坏(74)が正位で重ねられていた。これらの土師器は供献状態を示すと考えられる。ほかに、周溝西側の底面で鉄鍬(F7)と不明鉄製品(F8・F9)、西側の埋土から須恵器坏蓋(75)、坏身(76)、西側の検出面で軽金具(F10)が出土した。

1号埋葬施設 周溝外の北東側に位置する石蓋土壇墓である。主軸はN-107.5°-Eで、周溝に平行する。蓋石は2枚の板石からなり、長さ0.96 m、幅0.85 mを測る。墓壇は二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ1.63 m、幅1.04 m、検出面からの深さ0.10 m、下段が長さ0.79 m、幅は南東側で0.23 m、北西側で0.22 mと南東側がわずかに広く、深さ0.21 mを測る。底面の南東小口側には1枚の平石からなる枕が置かれており、頭位は南東側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 周溝北東側の底面に位置する石蓋土壇墓である。主軸はN-135°-Eで、周溝に平行する。蓋石は5枚の板石を並べたもので、規模は長さ1.28 m、幅0.73 mを測る。墓壇は二段掘りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ1.80 m、幅0.86～0.97 m、検出面からの深さ0.10 m、下段が長さ1.18 m、

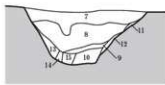


a. 29.2m

e'

b. 29.2m

b'



0 2m (1:60)

1 黒褐色土
しまりあり (弱) 粘性中
黄色粒子が散じる

2 褐色土
しまりあり 粘性中
黄色・黄褐色粒子が多く散じる

3 明褐色土
しまりあり 粘性中
黄褐色粒子が散じる

4 明褐色土
しまりあり 粘性中
黄褐色粒子が3層より多く散じる

5 黒褐色土
しまりあり 粘性中
黄褐色粒子が多く散じる

6 黄褐色土
しまりあり 粘性中
暗褐色粒子・凝結土ブロックが散じる

7 黒褐色砂質土
しまりあり (やや強) 粘性やや強
白色・黄色・褐色粒子が散じる
φ0.5cm 程度のホーキブロックがごく少量散じる

8 黒色砂質土
しまりあり (強) 粘性やや強
白色・黄色・褐色粒子
φ0.5cm 以下のホーキ・D, K, P, ブロックが散じる

9 赤褐色と10層の散じり土
しまりあり (やや強) 粘性やや強

10 に近い褐色砂質土
しまりあり (強) 粘性やや強
φ0.5cm 以下の凝結土・D, K, P, ブロックがやや多く散じる

11 7層と凝結土の散じり土
しまりあり (やや強) 粘性強

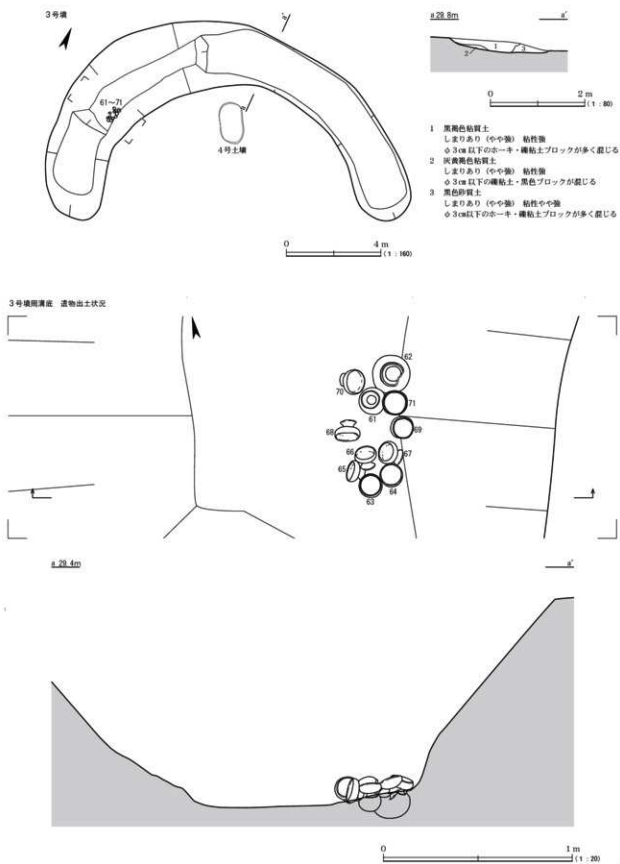
12 に近い褐色砂質土
しまりあり (やや強) 粘性やや強
白色・褐色粒子, φ0.5cm 以下のD, K, P, ブロックが散じる

13 8層に暗褐色粒子が散じる
しまりやや強 粘性やや弱

14 8層にφ0.5cm以下のD, K, P, ブロックが多く散じる
しまりあり (やや強) 粘性やや強

15 灰黄褐色砂質土
しまりあり (やや強) 粘性やや強
白色・黄褐色粒子が多く散じる

第33図 2号・5号墳遺構図



第 34 図 3号墳遺構図及び遺物出土状況図

幅は南東側で0.33 m、北西側で0.29 mと南東側が広く、深さ0.22 mを測る。頭位は南東側と推定される。底面の南東小口側に長径0.22 m、深さ0.05 mの浅いピットが掘られている。墓壇埋土から土器片が出土した。

(小田)

5号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27.5～28 m付近に立地する円墳であり、北側を2号墳の周溝に切られる。墳丘は削平されているが、規模は直径約9 m周溝を含めて10.2 mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約1/3を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅2.0 m、検出面からの深さは最大0.9 mを測る。周溝底で土師器坏蓋形土器(77)と脚部を欠く土師器有蓋高坏形土器(78)が正位で据えられた状態で出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(片岡)

6号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26～27 m付近に立地する円墳であり、西側の7号墳、南側の9号墳を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約10 m周溝を含めて直径13.1 mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約1/2を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅4.2 m、検出面からの深さは最大1.4 mを測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部を1基確認した。周溝内埋葬施設は確認していない。

1号主体部 墳丘頂部北西寄りに位置する木棺墓である。主軸はN-61°-Eで、墓壇の平面形は隅丸長方形を呈する。墓壇は二段掘りで、規模は上段が長さ2.6 m、幅1.5 m、深さ0.2 m、下段は長さ2.12 m、幅は西側で0.65 m、東側で0.6 m、深さ0.34 mを測る。下段の断面観察により、東西で小口板の痕跡が確認できた。両小口板から分かる木棺の長さは内法で約1.7 mを測る。棺底の比高差は西側が東側より8 cm高く、墓壇の幅からも西側が頭位と推定される。墓壇内から遺構に伴う遺物は出土しなかった。

(片岡)

7号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高25.0～28 m付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径8.4 m周溝を含めて直径11.8 mを測る。周溝は全周すると思われるが、東側を6号墳と9号墳、南側を10号墳に切れ、南西側で8号墳と切り合う。周溝の断面はU字形で、肩部幅2.0 m、検出面からの深さは最大0.3 mを測る。また、周溝北東側では、階段状の遺構を確認した。外側の壁面に沿って地山を削り出し、4段のステップが設けられている。規模は、長さ約2.2 m、幅0.6 m、高さ0.35 mを測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部は確認していない。周溝内南側で埋葬施設を1基確認した。

1号埋葬施設 周溝内南西側に位置する土壇墓である。主軸はN-15°-Eで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.1 m、幅は北側で0.45 m、南側で0.4 mと北側が広く、深さは最大0.24 mを測る。頭位は北側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。

(片岡)

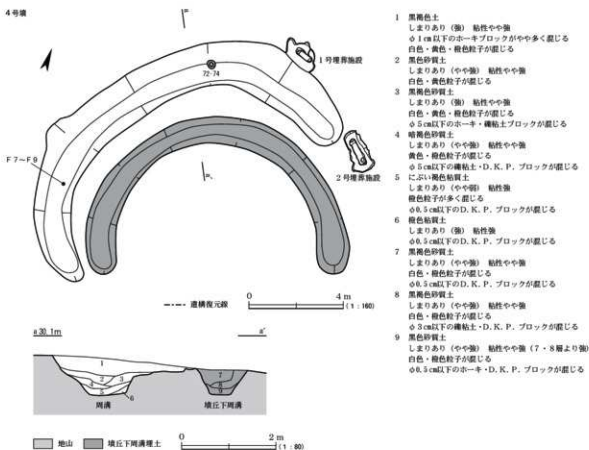
8号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26～27.5 m付近に位置する円墳であり、7号墳と切り合う。墳丘は削平されているが、墳丘規模は直径11 m、周溝を含めると直径17.6 mを測る。周溝は尾根側にあたる北西側で約1/2を検出した。周溝の断面形はU字形で、幅は1.9～3.6 m、検出面からの深さは2.0 mを測る。遺物は周溝底面で大型の土師器甕(79)と須恵器甕(80)がそれぞれ正位で横並びに据えられた状態で出土した。

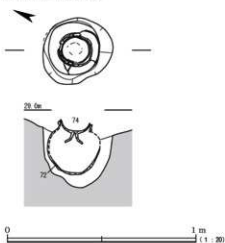
墳丘上ではほぼ主軸のそろった2基の主体部と、周溝内で1基の埋葬施設を確認した。

1号主体部 墳丘上の東側に位置する土壇墓である。主軸はN-19°-W。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.94 m、幅は北西側で1.36 m、南東側で1.22 mと北西側が広く、深さは最大0.72 mを測る。頭位は北西側と推定される。遺物は出土しなかった。

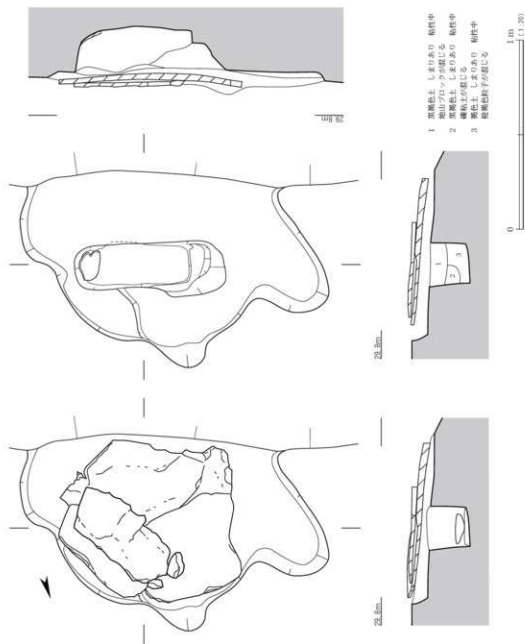
4号墳



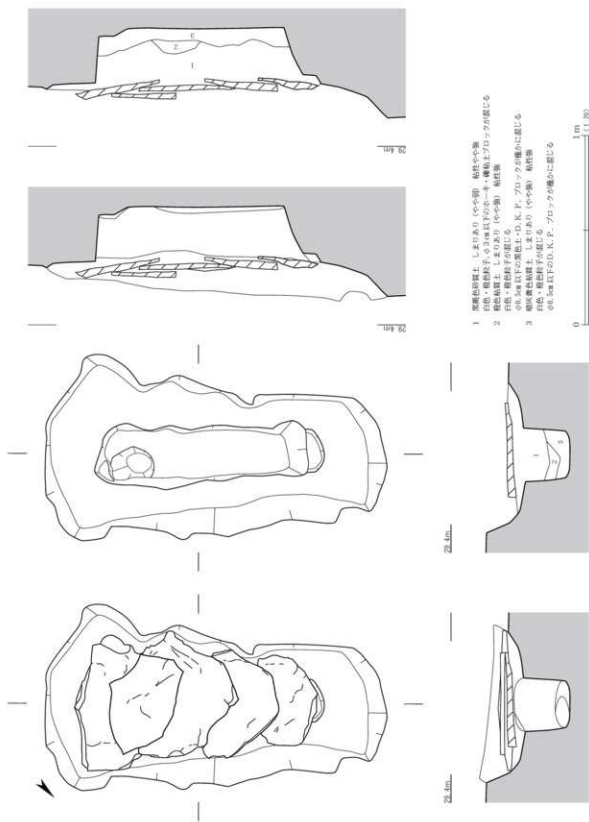
4号墳周溝面 遺物出土状況



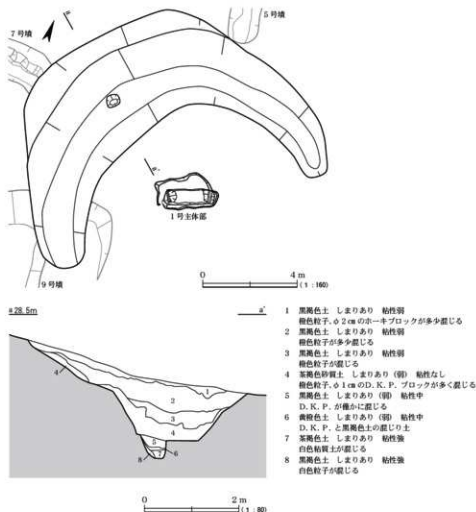
第35図 4号墳遺構図及び遺物出土状況



第36図 4号墳1号埋葬施設遺構図



第37図 4号墳2号埋葬施設遺構図



第38図 6号墳遺構図

2号主体部 1号主体部の東隣に位置する土壇墓である。主軸はN-23°-W。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ2.34m、幅は北西側で1.36m、南東側で1.24mと北西側が広く、深さは最大0.5mを測る。頭位は北西側と推定される。遺物は出土しなかった。

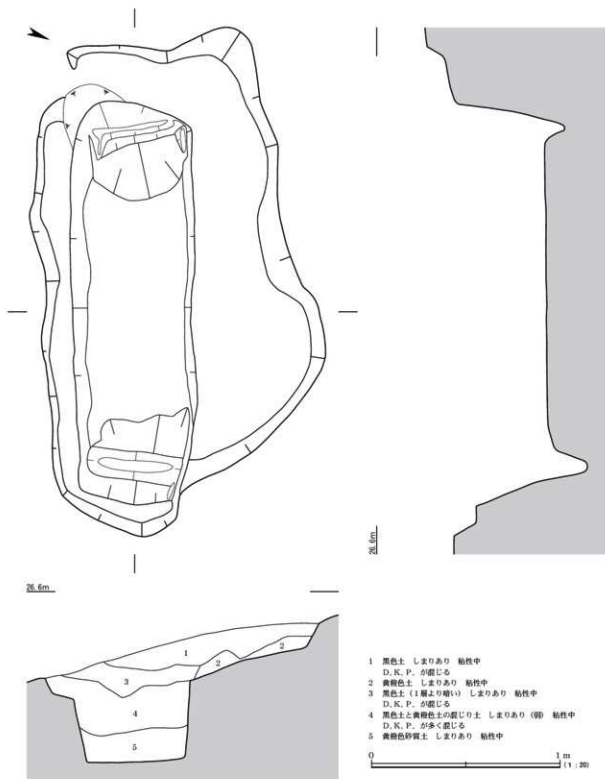
1号埋葬施設 周溝内の東側に位置する石蓋土壇墓である。主軸はN-29°-Wで、周溝に平行する。蓋石は4枚の板石を並べたもので、規模は長軸1.2m、短軸0.6mを測る。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ0.9m、幅は北西側で0.29m、南東側で0.30m、検出面からの深さは最大0.3mを測る。底面は南東へ傾斜していることから、頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。(西浦)

9号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23～26m付近に位置する。6号墳を切り、7号墳に切られる。墳丘は削平され、形状は不明である。周溝は西側で約1/6を検出した。周溝の断面形はU字形で、幅は1.7～3.3m、検出面からの深さは1.1mを測る。遺物は埋土中から土師器片が出土した。(西浦)

10号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24～25m付近に立地する円墳であり、7号墳を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約9m、周溝を含めると直径9.6mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約1/4を検出した。周溝の断面はなだらかなU字形で、肩部幅3.0m、検出面からの深さは最大1.76mを測る。周溝底で土師器甕(81)が正位で据えられた状態で出土した。



第39図 6号墳1号主体部遺構図

主体部は確認していない。周溝内南西側で埋葬施設を1基確認した。

1号埋葬施設 周溝内南西側に位置する土壌墓である。主軸はN-5°-Wで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.09 m、幅は北側で0.3 m、南側で0.3 m、深さ0.1 mを測る。頭位は北側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。(片岡)

11号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24～25.5 m付近に位置する方墳で、南側が調査区外である。墳丘は削平されており、確認できた規模は南北3.4 m、東西13 m、周溝を含めると南北10 m、東西19.4 mを測る。周溝の断面形は逆台形で、幅0.9 m×5.2 m、検出面からの深さは最大5.2 mを測る。北側の周溝が東側西側の周溝より一段深く掘り込まれている。遺物は北側の周溝底で土師器甕(82)が出土した。

1号埋葬施設 周溝外の北側に位置する土壌墓である。主軸はN-69°-Eで、北側の周溝に平行する。墓壇は二段堀りで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は上段が長さ3 m、幅は西側で0.96 m、東側で0.94 m、検出面からの深さは0.38 mを測る。下段が長さ2.26 m、幅は西側で0.28 m、東側で0.26 mと西側が広く、深さは0.18 mを測る。頭位は西側と推定される。副葬品としては上段面の東側、下段の東小口側の直上で上から鉄鑿(F14)・鉄線鋤先(F11)・鉄鎌(F12)・鉄錐(F13)が重なって出土。また、西端で上段から下段にかけて須恵器坏蓋5点(86～90)・坏身5点(94～98)が出土。その他、中央部で上段から下段にかけて須恵器坏蓋3点(83～85)・坏身3点(91～93)が出土した。(西浦)

12号墳

調査区の東部、丘陵南斜面の標高25.5～26.0 m付近に立地する。円墳と思われるが、東側の大部分が調査区外である。墳丘規模は不明。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で一部を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩幅2.3 m、検出面からの深さは最大0.8 mを測る。周溝内から遺物は出土しなかった。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(片岡)

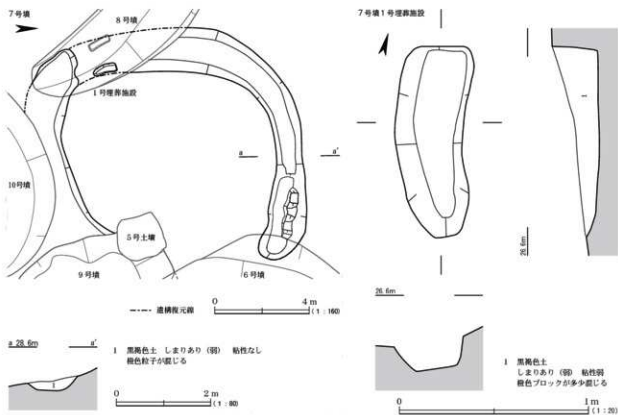
13号墳

調査区の東部、丘陵根根上の標高30 m付近に位置する円墳である。墳丘が削平されているが、規模は直径9.6 m、周溝を含めた規模は直径14 mを測る。周溝は根根側にあたる北側で約1/2を検出した。周溝の断面はU字形で、幅は0.4～2.2 m、検出面からの深さは1.7 mを測る。遺物は北西側の周溝底より須恵器坏身4点(105～108)、須恵器坏蓋(103)、土師器埴(100)、土師器埴形土器(102)が供献状態で出土した。102は須恵器坏蓋(103)の上に重ねられていた。その他、北側の周溝底で土師器甕(99)が出土。入れ子状になっており甕の内部から須恵器坏蓋(104)が出土した。

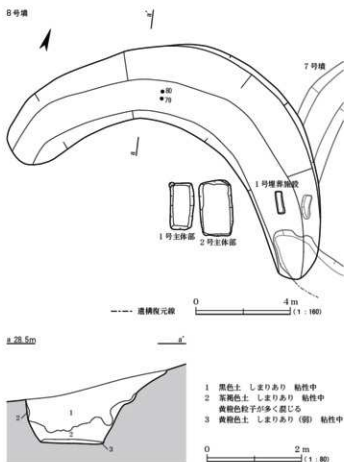
1号埋葬施設 東側の周溝の延長線上に位置する土壌墓である。主軸はN-33°-E。平面形は隅丸長方形。規模は長さ0.7 m、幅は南東側で0.21 m、北西側で0.22 mと北西側が広く、検出面からの深さは最大0.2 mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 墳丘の南東側に位置する木棺墓である。主軸はN-10°-E。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.6 m、幅は北西側で0.88 m、南東側で0.8 mと北西側が広く、検出面からの深さ0.4 mを測る。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認した。両小口板から木棺の長さは、内法で1.2 mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

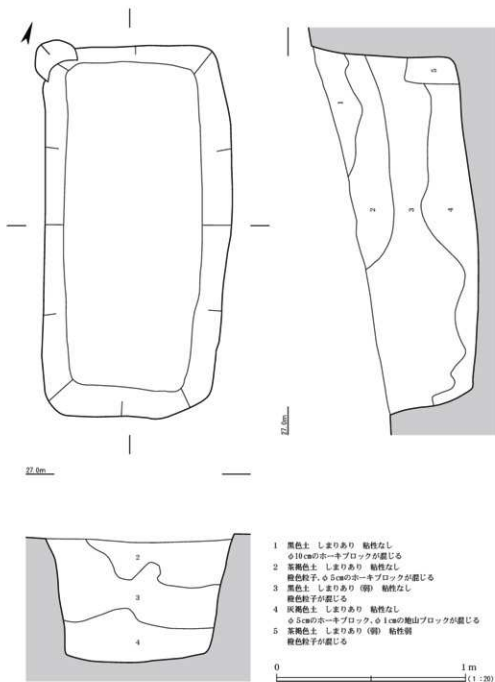
3号埋葬施設 墳丘の南東側に位置する木棺墓である。主軸はN-111°-Eで、等高線に平行する。平面形は隅丸長方形。規模は長さ1.26 m、幅は北東側で0.62 m、南西側で0.6 mと北東側が広く、検出面からの深さは最大0.34 mを測る。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認した。両小口板から木棺の長さは内法で1.0 mを測る。頭位は北東側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。(西浦)



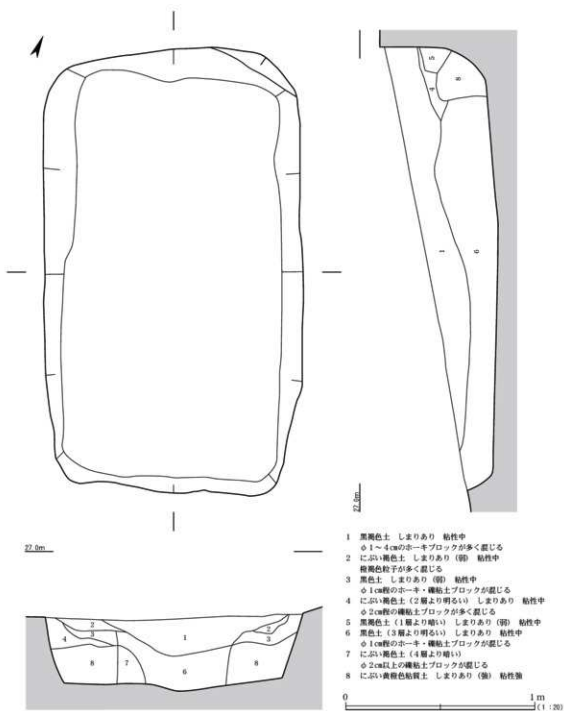
第40図 7号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



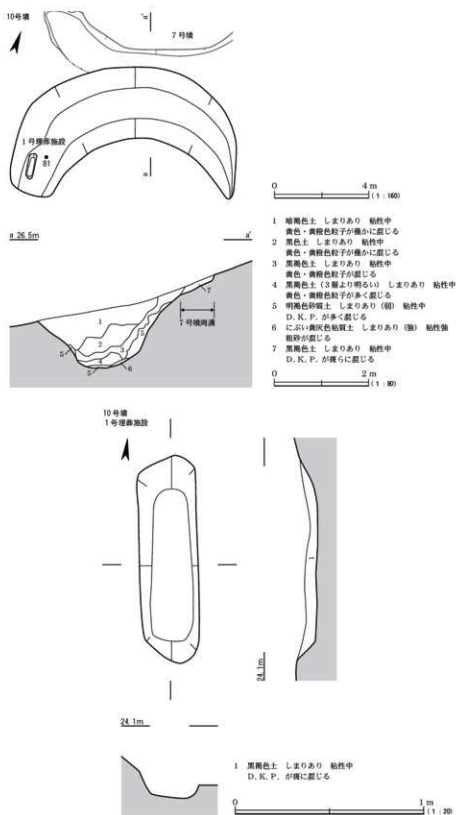
第41図 8号墳遺構図



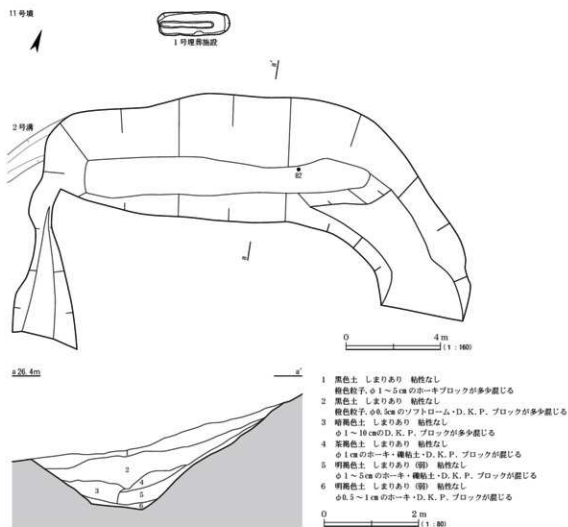
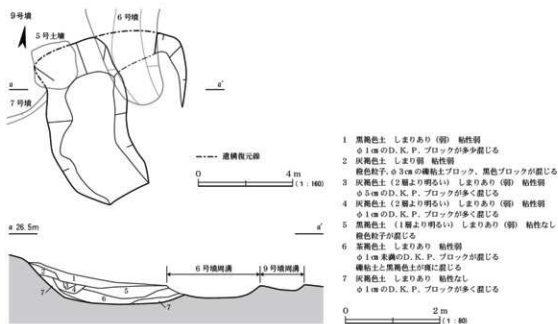
第42図 8号墳1号主体部遺構図



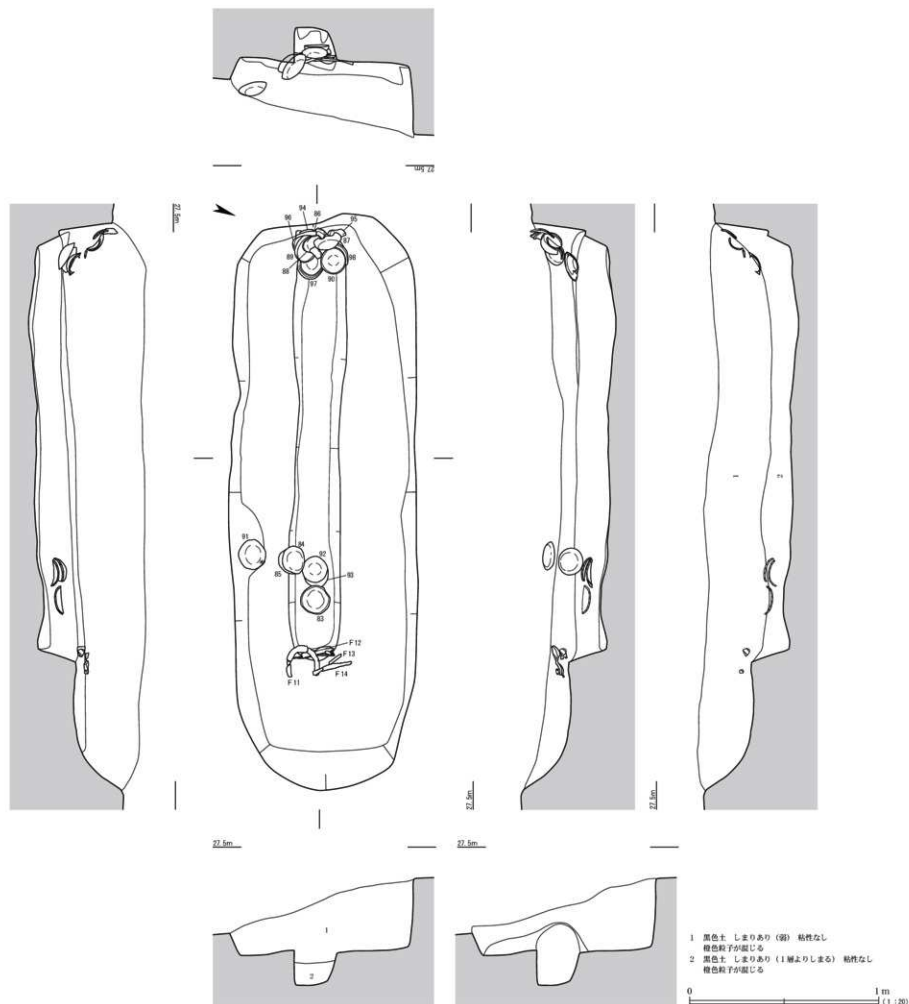
第43図 8号墳2号主体部遺構図



第45図 10号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



第46図 9号墳遺構図及び11号墳遺構図



第 47 図 11 号墳 1 号埋葬施設遺構図

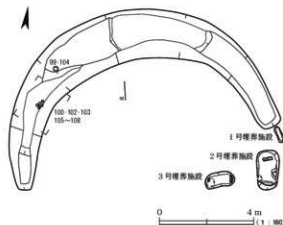


±26.6m

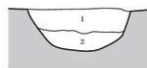


- 1 黒色土
しまりあり 粘性中
- 2 黒褐色土
しまりあり 粘性中
- 3 黒色土
しまりあり 粘性中
明黄褐色土が残りに混じる
- 4 明黄褐色土
しまりあり 粘性中
黒褐色土が残りに混じる

13号墳

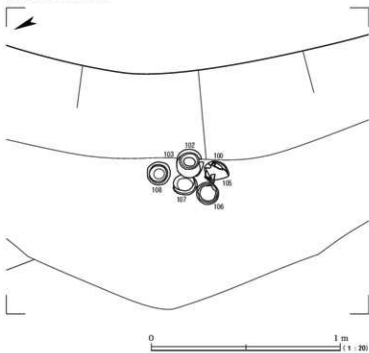


±30.4m

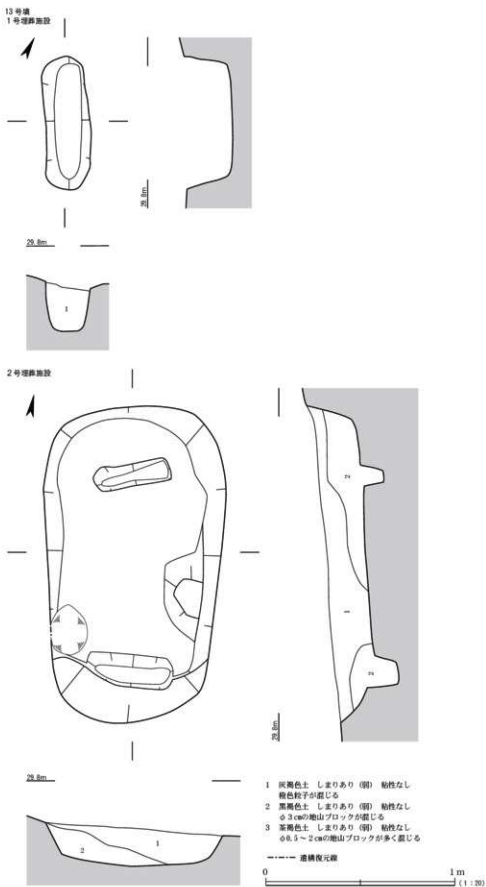


- 1 黒褐色土
しまりあり 粘性弱
- 2 灰褐色土
しまりあり 粘性弱
褐色粒子が混じる

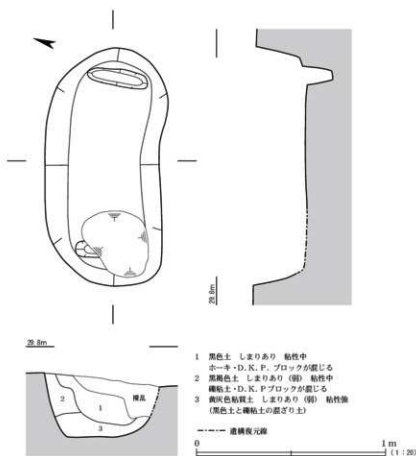
13号墳周溝底 遺物出土状況



第48図 12号墳遺構図、13号墳遺構図及び遺物出土状況図



第49図 13号墳1号・2号埋葬施設遺構図



第50図 13号墳3号埋葬施設遺構図

14号墳

調査区の東部、丘陵尾根上の標高28m付近に立地する。周溝の一部を確認したのみで、東側の大部分が調査区外である。墳丘規模は不明。周溝の断面は浅いU字形を呈し、確認した肩部幅1.8m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。周溝埋土から須恵器高環(109)などが出土した。

主体部は確認していない。周溝内西側で埋葬施設を2基確認した。

1号埋葬施設 周溝内西側に位置する土壌墓で、北東側は調査区外である。主軸はN-20°-Eで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、確認できた規模は長さ0.75m、幅は北東側が0.2m、南西側が0.17mと北東側が広く、深さ0.34mを測る。頭位は北東と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。

2号埋葬施設 周溝内西側に位置する土壌墓である。主軸はN-14°-Wで、周溝に平行する。平面形は楕円形を呈し、規模は長さ1.36m、幅は北西側が0.55m、南東側が0.4mと北西側が広く、深さ0.1mを測る。頭位は北西側と推定される。埋土から遺物は出土しなかった。(片岡)

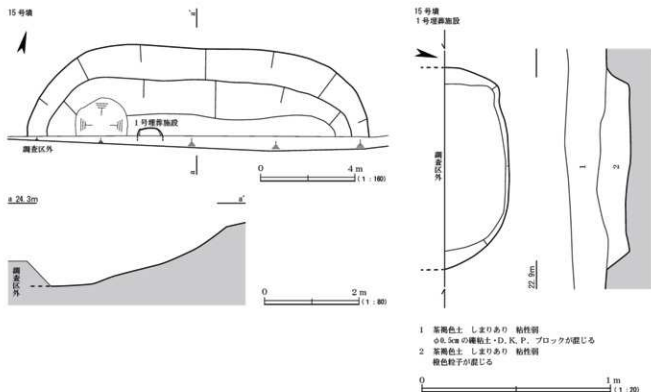
15号墳

調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23m付近に位置する。周溝の一部を確認し、墳丘などは調査区外に位置する。周溝の断面形はU字形で、確認できた規模は幅3.8m、深さ最大3.2mを測る。周溝埋土から土師器片が出土した。

1号埋葬施設 周溝の西側に位置し、南側半分は調査区外に広がる。主軸はN-36°-E。平面形は隅丸長方形を呈する。確認できた規模は長さ1.1m、幅0.4m、検出面からの深さは最大0.2mを測る。墓壇埋土から土師器甕(110)が出土した。(西浦)

16号墳

調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高29～30.5m付近に位置する円墳であり、7号土壌と切り合う。墳丘は



第52図 15号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図

削平されているが、規模は直径20.7m、周溝を含めて直径24.2mを測る。また、周溝東側の内縁に沿って墳丘下周溝と考えられる溝が巡り、規模は幅1.8～2.5m、検出面からの深さ0.3mを測る。

周溝は、攪乱に切られる西側を除き、途切れながら全周する。南東側では長さ1.14m、幅0.52mの範囲で外側に拡張されている。周溝の断面形はU字形で、幅1.0～3.8m、検出面からの深さは最大0.6mを測る。周溝内の南東側と拡張部で埋葬施設を1基ずつ確認した。また、周溝東側の底面で、土師器埴(111)と須恵器坏身(113)が正位で、須恵器坏蓋(112)と天地をひっくり返した須恵器坏身(114)が重ねられた状態で出土した。これらの土器はいずれも完形品で、供献状態を示すと考えられる。ほかに、南側の周溝埋土下層から須恵器有蓋高坏(116)、中層から須恵器甕(117)、南西側の周溝埋土下層から須恵器坏身(115)が出土した。

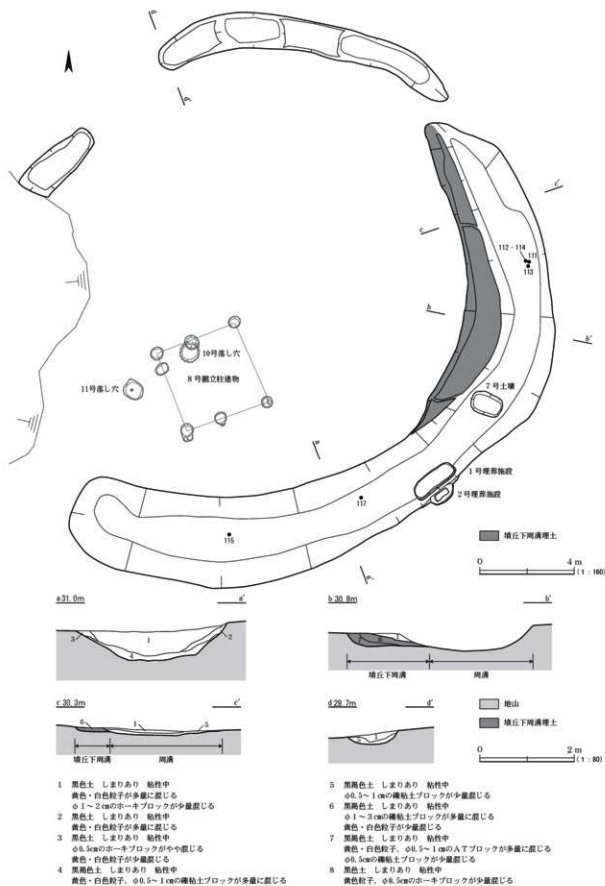
1号埋葬施設 周溝南東側の底面の外寄りに位置する土壇墓である。主軸はN-51°-Eで、周溝に平行する。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ1.98m、幅0.70m、検出面からの深さ0.11mを測る。頭位は北東側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝拡張部、1号埋葬施設の南東側に隣接する石蓋土壇墓である。主軸はN-129°-Wで、周溝に平行する。蓋石は2枚の石からなり、長さ0.92m、幅0.58mを測る。墓壇は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ1.14m、幅0.52m、検出面からの深さ0.09m、下段が長さ0.65m、幅は南西側で0.28m、北東側で0.26mと南西側がわずかに広く、深さ0.13mを測る。頭位は南西側と推定される。副葬品としては、墓壇埋土から淡青色のガラス小玉(J21)が出土した。また、墓壇埋土から土器片が出土した。

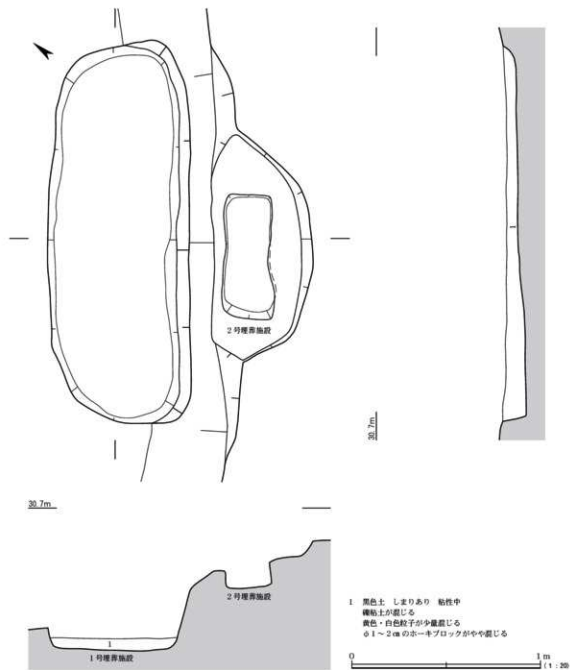
(小田)

17号墳

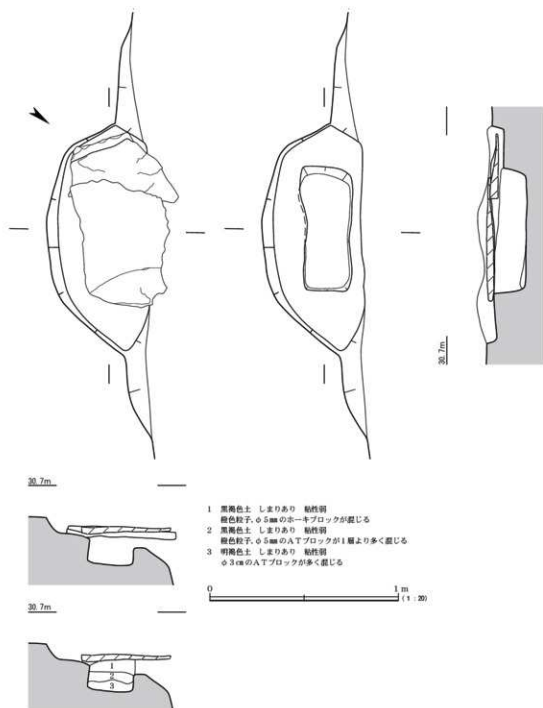
16号墳から南西へ約5m離れた、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置する円墳である。墳丘は削平されるだけでなく、墳丘上を横断して走っていた幅約2.3mの里道により大きく攪乱されて、1/4以下が遺存する。復元される墳丘の規模は直径10.0m、周溝を含めて直径13.8mである。



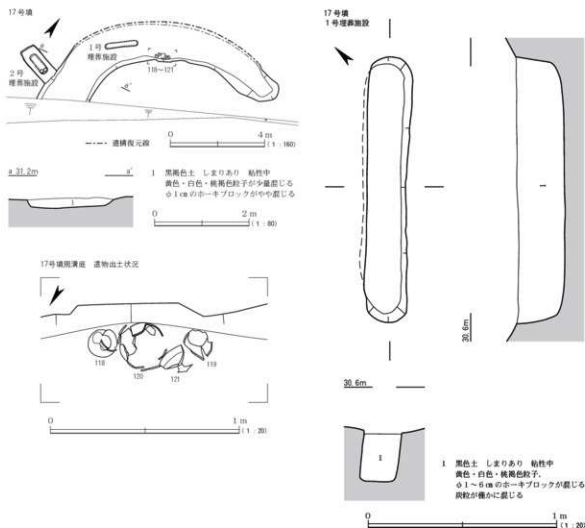
第53図 16号墳遺構図



第54図 16号墳1号埋葬施設遺構図



第55図 16号墳2号埋葬施設遺構図



第56図 17号墳遺構図、遺物出土状況図及び1号埋葬施設遺構図

周溝もわずかに遺存し、断面形は逆台形で、幅 1.0 ~ 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。周溝内の北西側と周溝外の西側で埋葬施設を 1 基ずつ確認した。

また、周溝北西側の底面では、土師器直口壺 (118・119)、甕 (120)、高環 (121)、埴 (122) が供献状態で出土した。

1号埋葬施設 周溝北西側の底面に位置する土壌墓である。主軸は $N-75^{\circ}-E$ で、周溝に平行する。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.40 m、幅は北東側で 0.23 m、南西側で 0.22 m と北東側がわずかに広く、検出面からの深さ 0.24 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝外の西側に位置する石蓋土壌墓である。主軸は $N-77.5^{\circ}-W$ で、周溝にほぼ直交する。蓋石は 5 枚の安山岩板石と 1 枚の安山岩塊石を重ねたもので、長さ 1.50 m、幅 0.71 m を測る。墓壇は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ 1.64 m、幅 0.73 m、検出面からの深さ 0.07 m、下段が長さ 0.95 m、幅は北西側で 0.36 m、南東側で 0.32 m と北西側が広く、深さ 0.26 m を測る。底面の北西小口側には 2 枚の安山岩板石を V 字状に組んだ枕が置かれていて、頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

(小田)

18号墳

調査区の中央部、丘陵尾根上の標高 30 m 付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径 15.4 m、周溝を含めて直径 17.6 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面

は逆台形で、肩部幅 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.2 m を測る。墳丘寄りの西側周溝底 2 箇所、掘えられた土師器甕の底部のみが出土しており、供献土器と考えられる。また、埋土中層からは土師器片などが出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

19号墳

調査区の中央部、丘陵南肩部の標高 29.5 ～ 30.5 m 付近に立地する円墳であり、西側で 20 号墳周溝、北東側で 9 号堅穴建物を切る。墳丘は削平されているが、規模は直径約 14 m、周溝を含めて直径 15.9 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/3 を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩部幅 1.9 m、検出面からの深さは最大 0.4 m を測る。周溝北側の底面で土師器小型丸底壺 (124)、北西側の底面で土師器直口壺 (123)、甕 (125) が出土し、西側の底面で土師器甕 (126・127) が正位で掘えられた状態で出土した。また、周溝埋土上層から平底の瓦質土器片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

20号墳

調査区の中央部、丘陵南肩部の標高 29.5 ～ 30 m 付近に立地する円墳である。東側を 19 号墳に切られており、西側は削平されている。墳丘は削平されているが、規模は直径約 13 m、周溝を含めて直径 14.6 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅 1.6 m、検出面からの深さは最大 0.4 m を測る。周溝内西側の底面で土師器甕 (128) が正位で掘えられた状態で出土した。また、周溝埋土中層から下層で土師器小片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

21号墳

調査区の南西部、丘陵南肩部の標高 29 ～ 29.5 m 付近に立地する円墳であり、東側で 11 号堅穴建物を切り、北側で 8 号溝に切られる。墳丘は削平されているが、規模は直径約 15 m、周溝を含めて直径 18.5 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約 1/3 を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅 3.4 m、検出面からの深さは最大 0.9 m を測る。周溝西側の底面で土師器甕 (130) が正位で掘えられた状態で出土し、北側の底面で土師器高坏 (131 ～ 135) が破片となって散らばった状態で出土した。周溝埋土下層から土師器直口壺 (129)、埋土中層から土師器小片、須恵器壺、埋土上層から須恵器小片、丹塗り土師器小片が出土した。

主体部は確認していない。周溝内北東側で埋葬施設を 1 基確認した。

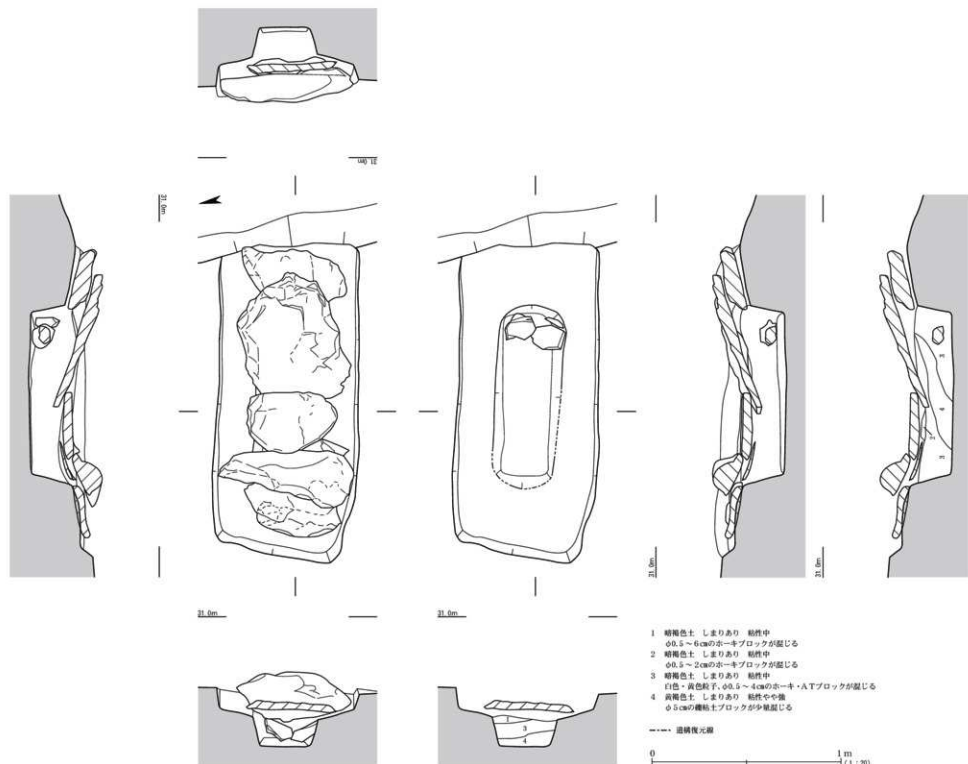
1号埋葬施設 周溝内北東側に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた土壇墓である。主軸はN-20°-Wで、周溝に平行する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長さ 1.3 m、幅は東側で 0.4 m、西側で 0.44 m と西側がわずかに広く、深さ 0.3 m を測る。頭位は西側と推定される。墓壇内から土師器小片が出土した。(橋本)

22号墳

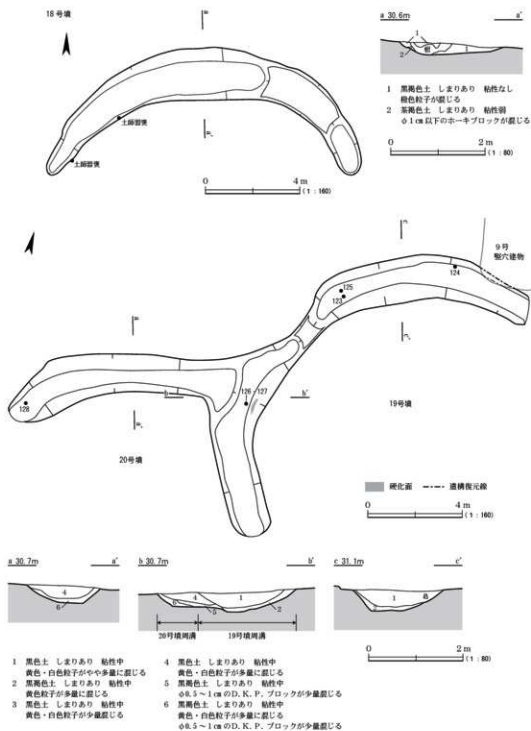
調査区の南部、丘陵南斜面の標高 28 ～ 29 m 付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径約 14 m、周溝を含めて直径 16.5 m を測る。周溝は斜面の高い側にあたる北西側で約 1/2 を検出した。周溝の断面は逆台形で、肩部幅 2.2 m、検出面からの深さは最大 1.1 m を測る。周溝西側の底面で土師器直口壺 (136)、須恵器坏身 (138)、周溝埋土中層から土師器甕 (137) が出土した。

主体部は確認していない。周溝内北西側で埋葬施設を 2 基確認した。

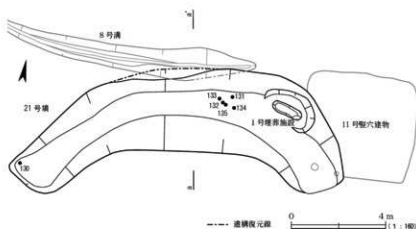
1号埋葬施設 周溝内北西側に位置する土壇墓である。主軸はN-60°-Wで、周溝に平行する。平面形は長方形を呈し、規模は長さ 2.2 m、幅は北東側で 0.5 m、南西側で 0.4 m と北東側が広く、深さ 0.3 m を測る。頭位は北東側と推定される。墓壇埋土から遺物は出土しなかった。



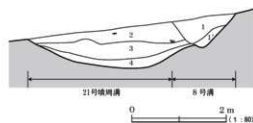
第57図 17号墳2号埋葬施設遺構図



第58図 18号～20号墳遺構図

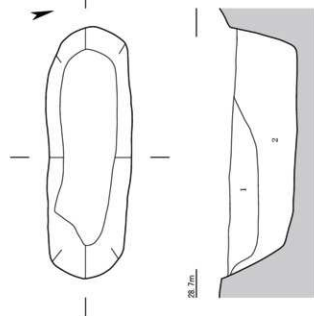


±30.4m

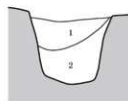


- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白色・黄色粒子、炭粒、 $\phi 0.5\text{cm}$ のホーキブロックが少量混じる
- 1' 黒褐色土 しまりあり 粘性中
1層に黄褐色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ のD、K、P、ブロックが混じる
- 2 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白色・黄色・褐色粒子、同粒が混じる
- 3 黒色土 しまりあり 粘性中
白色・褐色粒子が少量混じる
- 4 黒褐色土 しまりあり（やや弱） 粘性中
黄褐色粒子、 $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ のD、K、P、ブロックが多く混じる
 $\phi 4\text{cm}$ のホーキブロックが横かに混じる

21号墳
1号埋葬施設

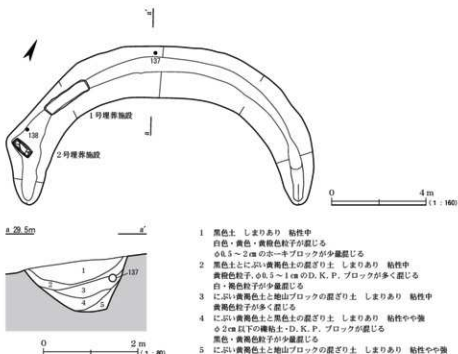


28.7m



- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が少量混じる
- 2 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が少量に混じる
 $\phi 0.5 \sim 1\text{cm}$ のD、K、Pブロックがやや混じる

第59図 21号墳遺構図及び1号埋葬施設遺構図



第60図 22号墳遺構図

2号埋葬施設 周溝内北西側に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた箱式石棺墓である。主軸は $N-10^{\circ}$ — W で、周溝に直交する。墓壇は隅丸長方形を呈し、規模は長さ0.9m、幅は0.5m、深さは0.3mである。蓋石は、大小の安山岩板石が5枚重なっていた。石棺は板石を用いて、小口石が1枚ずつ、側石が2枚ずつで構成される。石棺規模は、内法で長さ0.8m、幅は東小口側で0.22m、西小口側で0.2mと東小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは0.19mを測る。石棺は、両側石が両小口石を挟み込むように組み合わせられ、棺床には大小の板石が3枚敷かれている。棺床の東小口側には2枚の板石をV字状に組んで枕が置かれており、頭位は東側と推定される。副葬品は出土しなかった。

(橋本)

23号墳

調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5m付近に立地する円墳である。墳丘は削平されており、推定される規模は直径約14.5m、周溝を含めて直径17.1mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約1/4を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅2.8m、検出面からの深さは最大0.7mを測る。周溝北側の底面で土師器直口壺(139)、甕(140)がそれぞれ正位で横並びに据えられた状態で出土した。また、周溝埋土中層から下層で土師器小片が出土した。

主体部や周溝内埋葬施設は確認していない。

(橋本)

24号墳

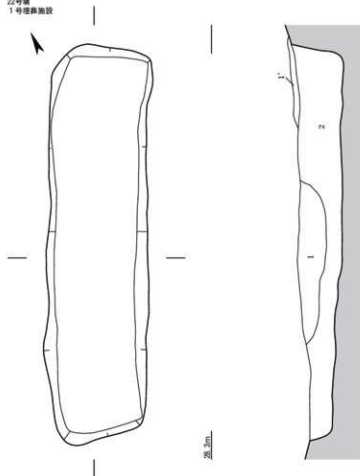
調査区の南部、丘陵南斜面の標高25.5～26.5m付近に立地する円墳である。墳丘は削平されているが、規模は直径約15m、周溝を含めて直径16.4mを測る。周溝は斜面の高い側にあたる北側で約1/3を検出した。周溝の断面はU字形で、肩部幅1.5m、検出面からの深さは最大0.7mを測る。周溝北東側の底面で土師器直口壺(141)が横倒しになった状態で出土した。

主体部を1基確認した。周溝内埋葬施設は確認していない。

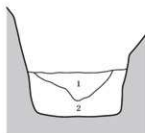
1号主体部 墳丘頂部北寄りに位置する土壇墓で、南東側を2号溝に切られる。主軸は $N-90^{\circ}$ — E で、墓壇の平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長さ1.4m、幅は西側で0.88m、復元した東側で0.86m検出面からの深さ0.2mを測る。墓壇の幅から、頭位は西側と推定される。墓壇内から土師器細片が出土した。

(橋本)

22号墳
1号埋葬施設



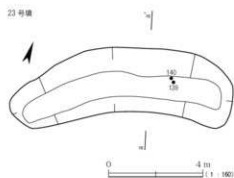
2.3m



- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が多量に散じる
φ0.5～1cmの礫粘土・D, K, P, ブロックが少量散じる
- 1' 黒色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色・褐色粒子が多量に散じる
φ0.5～1cmのD, K, P, ブロックが少量散じる
- 2 黒褐色土 しまりあり 粘性中
黄色・白色粒子が多量に散じる
φ1～2cmのD, K, P, ブロックが少量散じる

0 1m (1:20)

23号墳



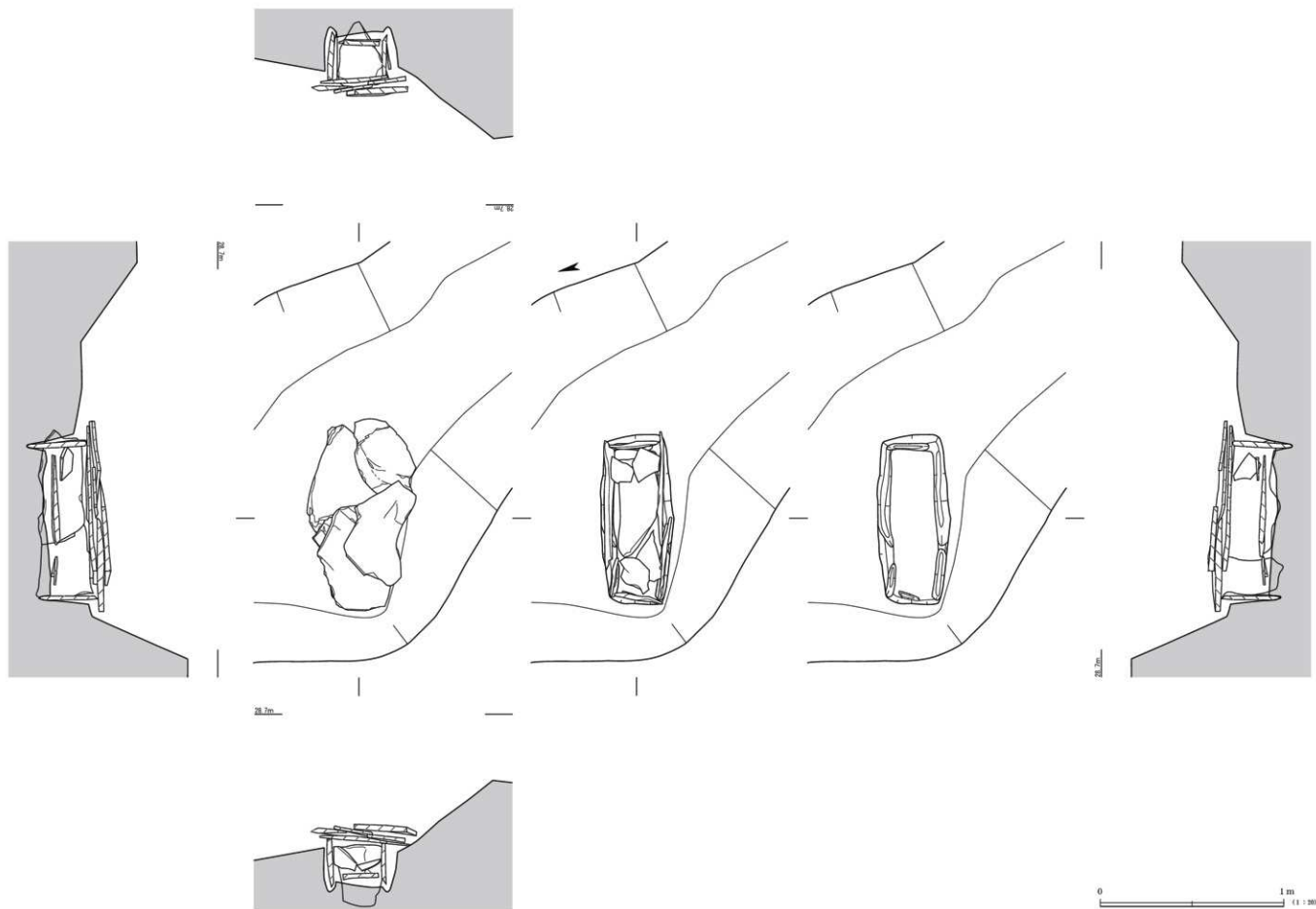
2.29.3m



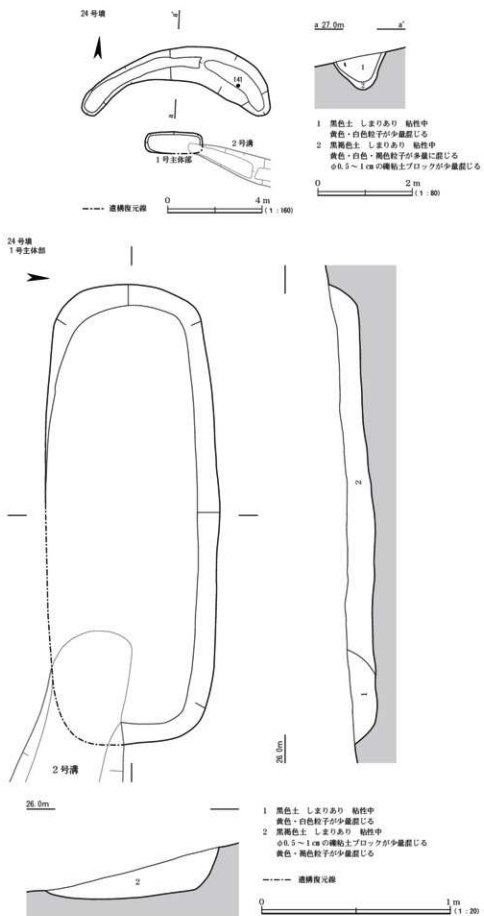
- 1 黒色土 しまりあり 粘性中
白色・褐色粒子が少量散じる
- 2 黒褐色土と埋山ブロックの散り土
しまりあり 粘性中
- 3 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白色・褐色・黄褐色粒子が散じる
φ0.5cmのD, K, P, ブロックが少量散じる

0 2m (1:80)

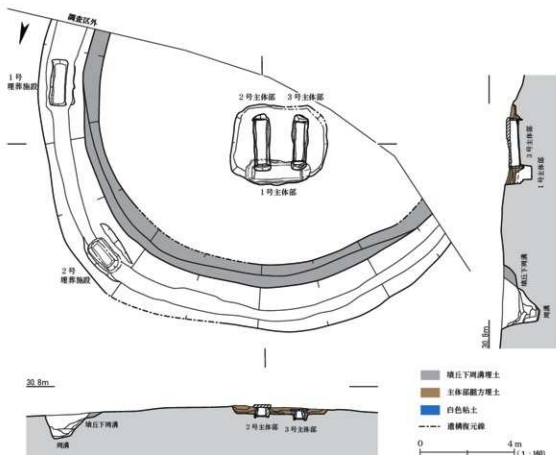
第61図 22号墳1号埋葬施設遺構図及び23号墳遺構図



第 62 図 22 号墳 2 号埋葬施設遺構図



第 63 図 24 号墳遺構図及び 1 号埋葬施設遺構図



第64図 25号墳遺構図

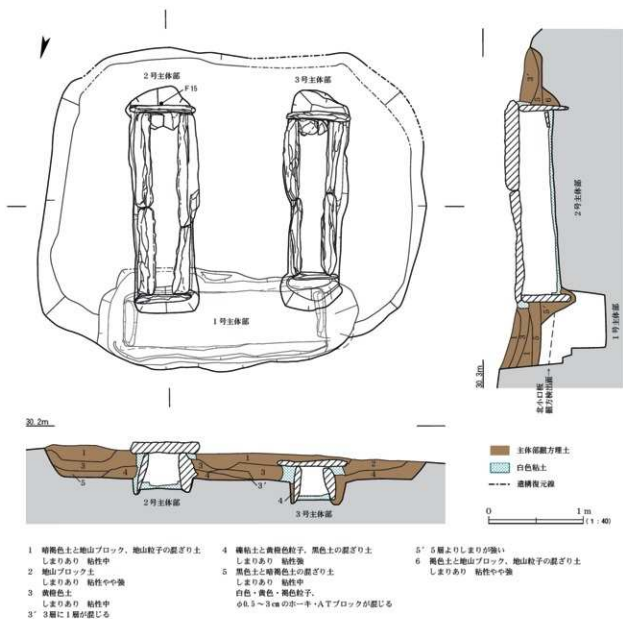
25号墳

調査区南西端、丘陵尾根上の標高29～30m付近に位置する円墳で、南側約1/3が調査区外である。墳丘は削平されているが、規模は直径16.2m、周溝を含めて直径19.8mを測る。墳丘頂部の中央では、コ字状に配置された主体部を3基確認した。このうち2号・3号主体部（箱式石棺墓）では、同一の墓壇内にほぼ同形同大の石棺2基が東西に並列して直葬され、墓壇の下層に2号・3号主体部と主軸を直交する1号主体部（木棺墓）が直葬されていた。また、周溝内縁に沿って墳丘下周溝と考えられる溝が巡り、規模は最大幅0.9m、深さ0.65mを測る。

周溝は、調査区内では全周する。断面形は逆台形で、幅1.3～2.4m、検出面からの深さは最大1.6mを測る。周溝内の東側と北東側で埋葬施設を1基ずつ確認した。また、周溝東側の埋土下層から土師器甕（I42）が外側の壁際に横倒しになった状態で出土し、北東側の埋土下層から磨製石斧（S16）、北西側の埋土中層から須恵器坏蓋、坏身、北西側の埋土から玉髓製石刀（S4）が出土した。

1号主体部 墳丘頂部の中央やや北側に位置する木棺墓で、2号・3号主体部に切られる。主軸はN-73.5°-Wで、等高線にほぼ平行する。墓壇は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ2.65m、幅1.06m、検出面からの深さ0.24m、下段が長さ2.14m、幅は東側で0.56m、西側で0.54mと東側がわずかに広く、深さ0.4mを測る。頭位は東側と推定される。床面の両小口側で小口板の痕跡を確認し、断面観察より木棺痕跡（断面図の6層）を確認した。木棺の規模は、内法で長さ2.00m、幅0.38m、深さ0.32mを測る。墓壇埋土から淡青色のガラス管玉を転用したガラス製品（J22）が出土した。また、墓壇埋土から弥生土器片、土師器片が出土した。

2号主体部 墳丘頂部の中央やや南東側に位置する箱式石棺墓で、1号主体部を切る。主軸はN-164°-Eで、等高線にほぼ直交する。墓壇は二段掘りで、平面形は上段が隅丸方形、下段が長方形を呈する。規模は上段が長さ3.38m、幅4.05m、検出面からの深さ0.35m、下段が長さ2.38m、幅は南側で0.70m、北側で0.65

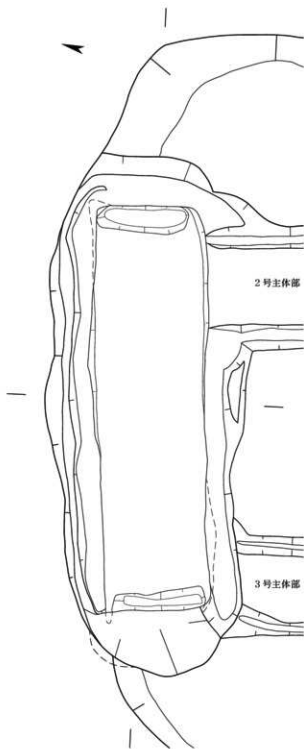


第65図 25号墳主体部掘方遺構図

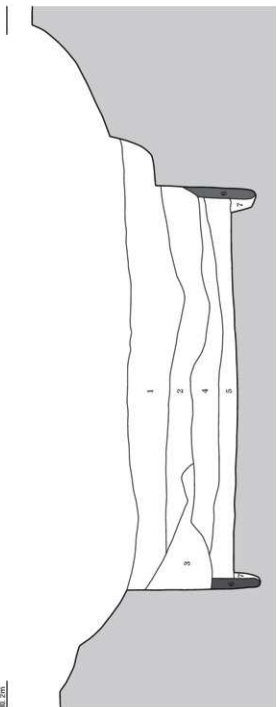
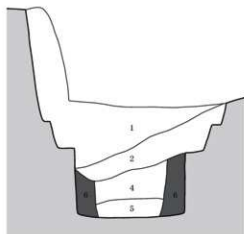
mと南側が広く、深さ0.12mを測る。さらに床面の両小口側と両側石側には石棺材の掘付穴が掘られている。主体部南側の掘方上段の埋土から鉄刀子（F15）が出土した。

石棺は大型の安山岩板石を用いて構築され、蓋石2枚¹¹⁾、側石各2枚、小口石各1枚の計8枚からなる。棺蓋の規模は長さ1.50m、幅0.71mを測り、最大規模の石棺材である南側の蓋石は、長さ0.95m、幅0.89m、厚さ0.15mを測る。棺身の規模は、内法で長さ1.92m、幅は南小口側で0.35m、北小口側で0.27mと南小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは0.34mを測る。棺身は、両小口石が両側石を挟み込むように組み合わせられる。そして、棺蓋と棺身、小口石と側石の接する部分には白色粘土を用いて丁寧に目張りが施されていた²¹⁾。さらに、棺蓋及び棺身の内面全体に赤色顔料が塗布されていた。

棺床には厚さ3～4cmの白色粘土が敷かれ、両側石と北小口石に沿って幅2～6cm、高さ3～5cmの段がつく。南小口側には2枚の安山岩板石をV字状に組んだ枕が置かれており、頭位は南側と推定される。石枕の両面に赤色顔料が塗布され、表面の合わせ目付近（枕が遺体の後頭部と接する部分）には白色物質が付着していた。さらに、石枕の北側、後述する人骨の遺存範囲でも棺床に赤色顔料が認められた。自然科学分析の結果、棺蓋と棺身、石



30.2m

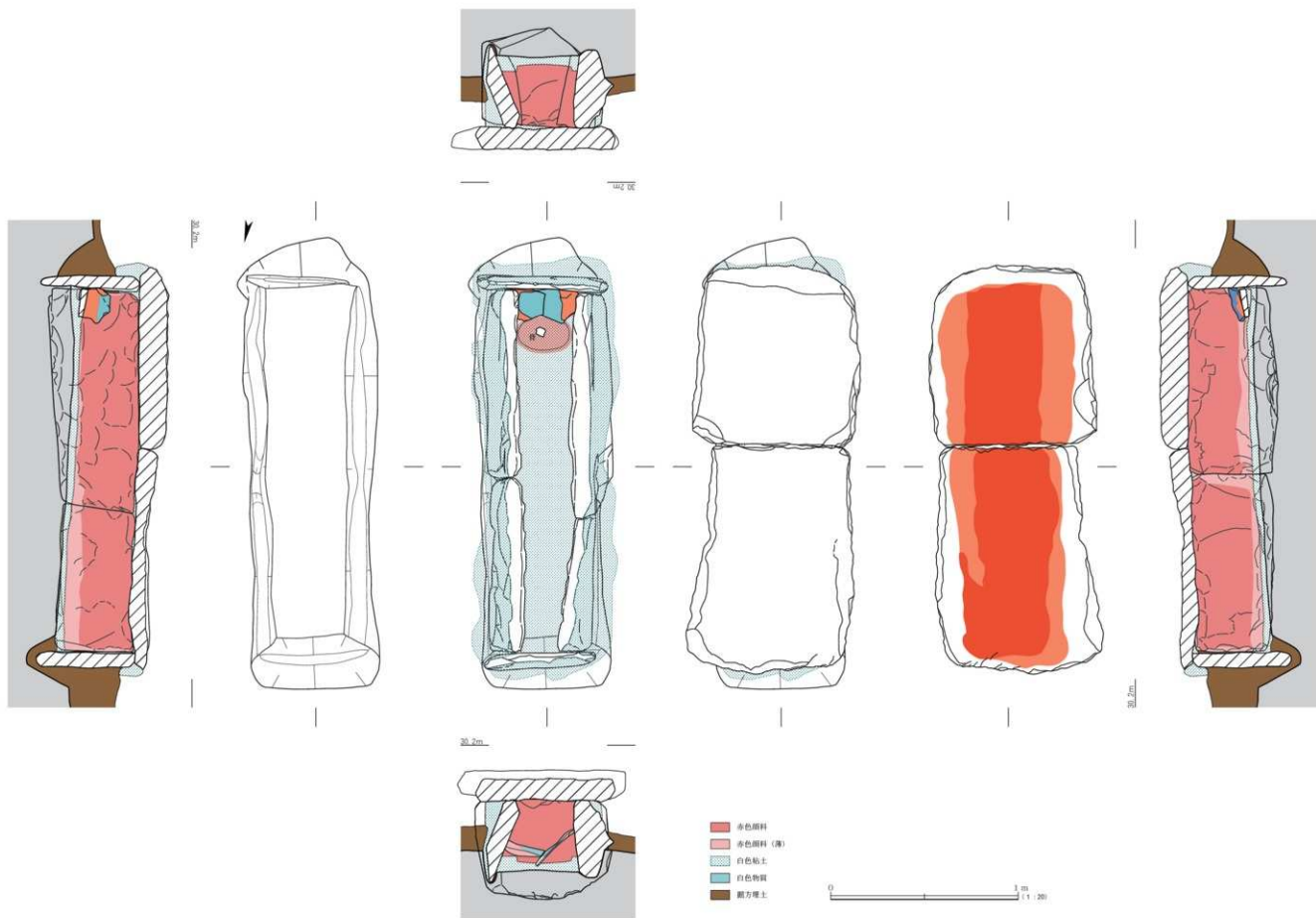


- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
褐色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ 以上のホーキ・織物土・D、K、P、ブロックが散じる
- 2 黒褐色土（1層より細かい） しまりあり 粘性中
褐色粒子、 $\phi 1\text{cm}$ 以上のホーキ・織物土・D、K、P、ブロックが散じる
- 3 暗褐色土 しまりあり 粘性中
褐色粒子が多く散じる
 $\phi 1\sim 3\text{cm}$ のホーキ・織物土・D、K、P、ブロックが散じる
- 4 黒褐色土 しまりあり（弱） 粘性中
 $\phi 2\sim 5\text{cm}$ のホーキブロックが散じる
- 5 灰褐色土 しまりあり（弱） 粘性中
- 6 暗褐色土 しまりあり 粘性中 一様散布
- 7 灰褐色土 しまりあり 粘性中
ホーキブロックが散じる

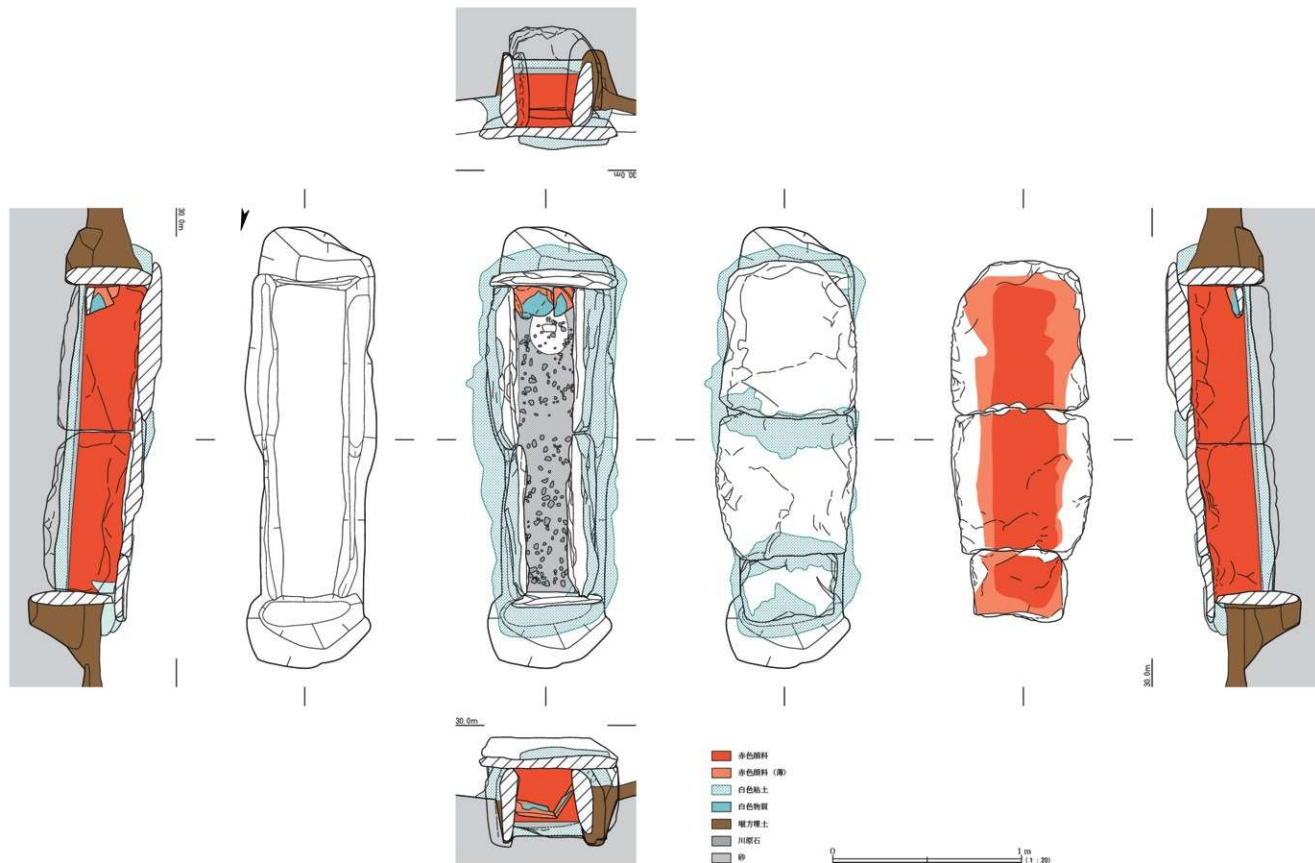
■ 粘着層

0 1m
(1:20)

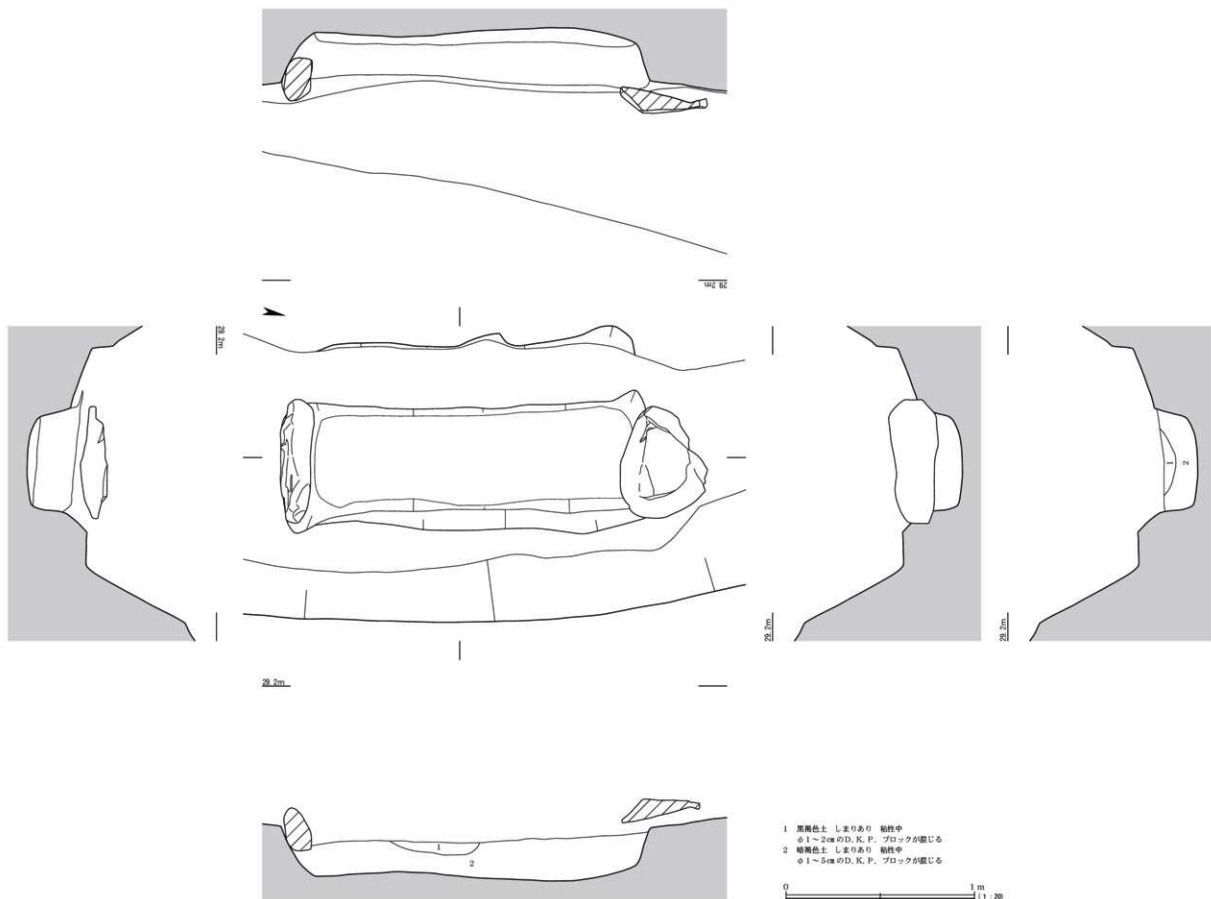
第66図 25号墳1号主体部遺構図



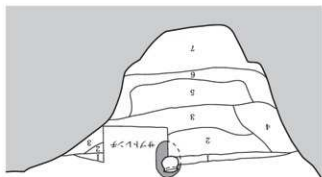
第67图 25号墳2号主体部遺構図



第68图 25号填3号主体部构造图



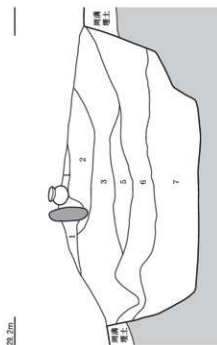
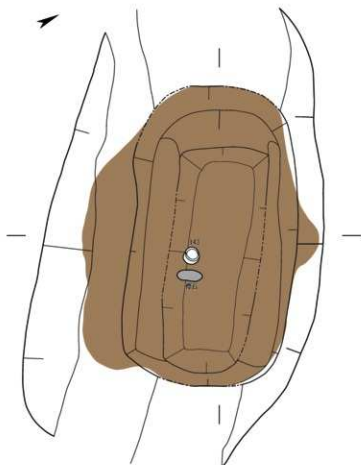
第69図 25号墳1号埋葬施設遺構図



- 1 明褐色土 しまりあり 粘性弱
D, K, P, ブロックが30%を占め、礫粘土ブロックが多少散じる
- 2 明褐色砂質土 しまりあり 粘性弱
ホーキ・礫粘土・D, K, P, ブロックが散じる
- 3 茶褐色砂質土 しまりあり 粘性弱
礫粘土・D, K, P, ブロックが散じる
- 4 茶褐色砂質土 しまりあり 粘性弱
φ 5 cm ~ 20 cm の礫粘土・D, K, P, ブロックが散じる
- 5 茶褐色砂質土 しまりあり 粘性弱
φ 1 cm の礫粘土・D, K, P, ブロックが散じる
- 6 茶褐色砂質土
φ 2 ~ 10 cm の礫粘土・D, K, P, ブロックが散じる
- 7 茶褐色砂質土 しまりあり 粘性弱

■ 礫丘盛土 ■ 石 --- 遺構復元線

0 1 m (1 : 20)



第 70 図 25 号墳 2 号埋葬施設遺構図

枕に塗布された赤色顔料はベンガラと判定され、石枕に付着した白色物質は漆喰の可能性が指摘された（本書IV章3節参照）。また、石枕の北側に人骨がわずかに遺存したが、パウダー状と化していて、遺存状態は不良であった。人骨鑑定の結果、被葬者の性別や年齢は不明であった（本書IV章2節参照）。棺内から副葬品は出土しなかった。

3号主体部 墳丘の中央やや南西側に位置する箱式石棺墓で、1号主体部を切る。主軸はN-169°-Eで、等高線にほぼ直交する。墓壇は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ3.38m、幅4.05m、検出面からの深さ0.35m、下段が長さ2.22m、幅は南側で0.64m、北側で0.54mと南側が広く、深さ0.19mを測る。さらに床面の両小口側と両側石側には石棺材の据付穴が掘られている。墓壇内から遺物は出土しなかった。

石棺は大型の安山岩板石を用いて構築され、蓋石3枚、側石各2枚、小口石各1枚の計9枚からなる。棺蓋の規模は長さ1.90m、幅0.74mを測り、最大規模の石棺材である南端の蓋石は、長さ0.83m、幅0.72m、厚さ0.13mを測る。棺身の規模は、内法で長さ1.62m、幅は南小口側で0.35m、北小口側で0.20mと南小口側が広く、側石上面から棺床までの深さは0.31mを測る。棺身は、両小口石が両側石を挟み込むように組み合わせられる。そして、棺蓋と棺身、蓋石と蓋石、小口石と側石の接する部分には白色粘土を用いて丁寧に目張りが施されていた。さらに、棺蓋及び棺身の内面全体に赤色顔料が塗布されていた。

棺床には厚さ4～6cmの白色粘土が敷かれ、その上面に砂と直径5cm以下の川原石が薄く敷かれていた。南小口側には2枚の安山岩板石をV字状に組んだ枕が置かれており、頭位は南側と推定される。石枕の両面に赤色顔料が塗布され、表面の合わせ目付近（枕が遺体の後頭部と接する部分）には白色物質が付着していた。自然科学分析の結果、棺蓋と棺身、石枕に塗布された赤色顔料はベンガラと判定され、石枕に付着した白色物質は漆喰の可能性が指摘された（本書IV章3節参照）。また、石枕の北側に人骨と歯牙がわずかに遺存したが、パウダー状と化していて、遺存状態は不良であった。人骨鑑定の結果、被葬者が成人であると推定された（本書IV章2節参照）。棺内から副葬品は出土しなかった。

1号埋葬施設 周溝東側の底面に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた石蓋土墳墓である。主軸はN-166.5°-Eで、2号・3号主体部の主軸とほぼ一致し、周溝に平行する。蓋石は最大厚さ0.17mの安山岩板石であり、両小口側で各1枚を確認したが、南西小口側の板石は墓壇内に落ち込んだ状態であった。墓壇の平面形は長方形を呈し、規模は長さ1.96m、幅は南西側で0.71m、北東側で0.69mと南西側がわずかに広く、検出面からの深さは0.31mを測る。頭位は南西側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。

2号埋葬施設 周溝北東側の底面に位置し、周溝の壁を掘りこんで造られた土墳墓である。墓壇の長軸に沿って設定したベルト断面の観察から、墓壇は周溝埋土を切っており、周溝が0.1～0.18m埋まった段階で埋葬施設が構築されている。また、周溝内墳丘が遺存し、平面形は不整形で、規模は長軸1.58m、短軸1.25m、墓壇検出面から墳丘頂部までの高さは0.25mを測る。墳丘頂部の中央に土師器小型丸底甕（143）と、標石と考えられる川原石が据えられていた。

埋葬施設の主軸はN-58.5°-Wで、周溝に平行する。墓壇は二段掘りで、平面形は長方形を呈する。規模は上段が長さ1.58m、幅0.86m、検出面からの深さ0.30m、下段が長さ1.19m、幅は北西側で0.47m、南東側で0.45mと北西側がわずかに広く、深さ0.32mを測る。頭位は北西側と推定される。墓壇埋土から土器片が出土した。（小田）

注

- 1) 重機による表土除去の際に、25号墳2号主体部の蓋石2枚と3号主体部の蓋石1枚が剥ぎ取り外され、それらが混在した状態であったため、蓋石の規模や内面の赤色顔料の塗布範囲をもとに、蓋石の組み合わせと配置を復元した。
- 2) 25号墳2号主体部の棺内に流入土がほとんど認められなかったことと、3号主体部では蓋石と蓋石の隙間にも白色粘土を用いて目張りが施されていたことから、2号主体部でも同様の目張りが施されていた可能性が高い。

第5表 古墳一覧

法量：() 推定値 [] 現存痕

遺構名	位置・立地	墳丘			墳丘下周溝			周溝			主体部 (基)	埋葬施設(基)		出土遺物		備考	
		形状	規模 (m)	有無	幅 (m)	深さ (m)	断面形	幅 (m)	深さ (m)	周溝内		周溝外	供献土層	その他			
1号墳	調査区の東部、丘陵尾根上の標高29～29.5m付近	円墳	18.2	○	1.8 ～2.5	0.9	外周溝： 遊歩台 内周溝： 遊歩台	1.7 ～4.1	0.7 ～2.9	1.2	0	10	4	外周溝底面：須恵器環状土器(52)、埴輪(54)、甕 外周溝底面付近：土師器片(50) 外周溝表土：土主(D3) 内周溝表土層：須恵器環状土器(55) 内周溝表土層：赤色塗彩の土師器片(51) 墳丘下周溝表土：黒曜石割片(85) 墳丘上：菅玉土成土(J22)、空山野焼石塊(811)	外周溝底面：須恵器環状土器(52)、埴輪(54)、甕(54)、甕 外周溝底面付近：土師器片(50) 外周溝表土：土主(D3) 内周溝表土層：須恵器環状土器(55) 内周溝表土層：赤色塗彩の土師器片(51) 墳丘下周溝表土：黒曜石割片(85) 墳丘上：菅玉土成土(J22)、空山野焼石塊(811)	3号・5号 型穴遺物を 切る。	
2号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高27～28.5m付近	円墳	10.6	×	—	—	U字形	2.8 ～3.2	0.8 ～1.9	1.2	0	0	0	土師器片(58)	周溝底面：須恵器環状土器(58)、埴輪(59)	5号墳と2号土層を切る。	
3号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高28.75～29.5m付近	円墳	11.1	×	—	—	U字形	2.1 ～3.3	0.8 ～1.9	1.2	0	0	0	なし	なし		
4号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高28.5～29.5m付近	円墳	(11.2)	○	0.9 ～1.3	0.5	遊歩台	1.1 ～2.2	0.8 ～1.0	0.8	0	1	1	土師器片(72)、高杯(74) 鉄鍬(F7)、銅製製品(F8・F9)	周溝底面：須恵器環状土器(76) 周溝表土及び墳丘下周溝表土：赤色塗彩の土師器片(75) 墳丘下周溝表土：土師器片(73) 周溝底面：板金性土(74)		
5号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高27.5～28.5m付近	円墳	9.0	×	—	—	U字形	2.0	0.7	0.9	0	0	0	土師器片(77)、高杯土器(78)	土師器片(77)、高杯土器(78)	2号墳に切り合う。	
6号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26～27m付近	円墳	10.0	×	—	—	U字形	4.2	1.0	1.4	1	0	0	なし	なし	7号墳と9号墳を切る。	
7号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高25.5～28m付近	円墳	8.4	×	—	—	U字形	2.0	1.0	[0.3]	0	1	0	なし	なし	6号墳・9号墳・10号墳に切り合う。	
8号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高26～27.5m付近	円墳	11.0	×	—	—	U字形	1.9 ～3.6	1.1 ～1.6	2.0	2	1	0	土師器片(78)、須恵器片(80)	周溝底面：土師器片	7号墳と切り合う。	
9号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23～26m付近	不明	—	×	—	—	U字形	1.7 ～3.3	2.0 ～2.4	1.1	0	0	0	なし	周溝底面：土師器片	6号墳と切り合う。7号墳に切り合う。	
10号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24～25.5m付近	円墳	9.0	×	—	—	U字形	3.0	1.2	1.76	0	1	0	土師器片(81)	土師器片(81)	7号墳を切る。	
11号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高24～25.5m付近	方墳	南北(24.1) ×東西(13.0)	×	—	—	遊歩台	0.9 ～5.2	0.3 ～2.4	5.2	0	0	1	土師器片(82)	土師器片(82)	南側が調査区外。	
12号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高25.5～26m付近	円墳	—	×	—	—	遊歩台	2.3	1.3	0.8	0	0	0	なし	なし	東側の1/2以上が調査区外。	
13号墳	調査区の東部、丘陵尾根上の標高30m付近	円墳	9.6	×	—	—	U字形	0.4 ～2.2	0.3 ～1.6	1.7	0	0	3	土師器片(90)、埴輪(100)、高杯土器(102) 須恵器片(103・104)、埴輪(105～106)	周溝底面：土師器片(101)、土師器片		
14号墳	調査区の東部、丘陵南斜面の標高28m付近	不明	—	×	—	—	U字形	[1.8]	[1.2]	0.2	0	2	0	なし	周溝底面：須恵器片(109)	東側の1/2以上が調査区外。	
15号墳	調査区の南東部、丘陵南斜面の標高23m付近	不明	—	×	—	—	U字形	[3.8]	[1.1]	3.2	0	1	0	なし	周溝底面：土師器片	南側の1/2以上が調査区外。	
16号墳	調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高29～30.5m付近	円墳	20.7	○	1.8 ～2.5	0.3	U字形	1.0 ～3.8	0.8 ～1.9	0.6	0	2	0	土師器片(111) 須恵器片(112)、埴輪(113・114・117)	周溝底面：土師器片(111) 須恵器片(112)、埴輪(113・114・117)	7号土層と切り合う。	
17号墳	調査区の中央付近、丘陵尾根上の標高30.5m付近	円墳	(10.0)	×	—	—	遊歩台	1.0 ～1.9	0.6 ～1.7	0.2	0	1	1	土師器片(118・119)、甕(120)、高杯土器(121)、埴輪(122)	土師器片(118・119)、甕(120)、高杯土器(121)、埴輪(122)		
18号墳	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高29m付近	円墳	15.4	×	—	—	遊歩台	1.9	0.6	0.2	0	0	0	土師器片	埋土層：土師器片		
19号墳	調査区の中央部、丘陵南斜面の標高29.5～30.5m付近	円墳	14.0	×	—	—	遊歩台	1.9	0.6	0.4	0	0	0	土師器片	周溝底面：土師器片(124) 周溝表土層：瓦質土師器片	20号墳・9号墳と切り合う。	
20号墳	調査区の中央部、丘陵南斜面の標高29.5～30m付近	円墳	13.0	×	—	—	U字形	1.6	0.5	0.4	0	0	0	土師器片(128)	周溝底面：土師器片(128) 土師器片	19号墳に切り合う。	
21号墳	調査区の南西部、丘陵南斜面の標高29～29.5m付近	円墳	15.0	×	—	—	U字形	3.4	0.6 ～1.1	0.9	0	1	0	土師器片(130)、高杯(131～135)	周溝底面：土師器片(130)、高杯土師器片(131～135) 埋土層：須恵器片、丹塗土師器片	11号型穴遺物を切り、8号墳に切り合う。	
22号墳	調査区の南西部、丘陵南斜面の標高28～29m付近	円墳	14.0	×	—	—	遊歩台	2.2	0.4 ～0.7	1.1	0	2	0	土師器片(136)、甕(137)	周溝底面：土師器片(136)、甕(137)		
23号墳	調査区の南西部、丘陵南斜面の標高28～29.5m付近	円墳	(14.0)	×	—	—	U字形	2.8	0.7 ～1.3	0.7	0	0	0	土師器片(138)	埋土層：土師器片(138)		
24号墳	調査区の南西部、丘陵南斜面の標高25.5～26.5m付近	円墳	15.0	×	—	—	U字形	1.5	0.4 ～0.5	0.7	1	0	0	土師器片(141)	土師器片(141)		
25号墳	調査区南西部、丘陵尾根上の標高29～30m付近	円墳	16.2	○	0.9	0.65	遊歩台	1.3 ～2.4	0.4 ～1.3	1.6	3	2	0	なし	周溝底面：土師器片(142)、甕(143) 周溝表土層：須恵器片、丹塗土師器片(144) 周溝底面：土師器片(145)	周溝底面：土師器片(142)、甕(143) 周溝表土層：須恵器片、丹塗土師器片(144) 周溝底面：土師器片(145)	南側の1/3が調査区外。

第6表 古墳主体部・埋葬施設一覧

測量：() 推定値 [] 埋存推定

通称名	位置・立地	形式	主軸	傾斜	測量			概 (石棺・木棺の埋没) 内注				人骨	出土遺物		備考
					平面形状	長さ (m)	幅 (m)	傾斜	長さ (m)	幅 (m)	傾斜		長さ (m)	副葬品	
1号墳 1号埋葬施設	外周域内の西側	土壇墓	N-10°-W	北 隅長方形	0.87	0.30	0.19	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
2号墳 2号埋葬施設	外周域内の西側	土壇墓	N-21°-E	北東 長方形	0.91	0.30	0.32	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片
3号墳 3号埋葬施設	外周域内の西側	土壇墓	N-34°-W	北西 長方形	1.30	0.31	0.36	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片
4号墳 4号埋葬施設	外周域内の西側	土壇墓	N-13.5°-W	北 長方形	1.94	0.32	0.42	—	—	—	なし	副葬 (P4)	なし	なし	甕土：土器 片
5号墳 5号埋葬施設	周域外の西側	土壇墓	N-22.5°-W	北西 隅長方形	1.75	1.34	0.36	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
6号墳 6号埋葬施設	外周域内の北西側	土壇墓	N-52°-E	北東 長方形	1.00	0.30	0.31	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片
7号墳 7号埋葬施設	外周域内の北西側	土壇墓	N-54°-E	西 型な 長方形	上段：0.38 下段：1.75 1.31	0.41 0.23 0.34	0.08	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
8号墳 8号埋葬施設	外周域内の北側	土壇墓	N-86°-E	東 隅長方形	1.61	0.28	0.44	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
9号墳 9号埋葬施設	外周域内の北東側	土壇墓	N-113°-E	西 隅長方形	1.75 1.22 1.34	0.31 0.22 0.66	0.24	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
10号墳 10号埋葬施設	外周域内の北西側	土壇墓	N-125°-W	北西 隅長方形	上段：1.54 下段：1.50	0.32 0.42 0.44	0.05	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
11号墳 11号埋葬施設	周域外の北東側	土壇墓	N-34°-E	北東 長方形	1.91	0.46 0.29 0.34	0.30	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
12号墳 12号埋葬施設	周域外の東側	土壇墓	N-129°-W	西 隅長方形	1.16	0.27	0.27	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
13号墳 13号埋葬施設	外周域内の南側	土壇墓	N-86°-W	西 型な 長方形	1.40	0.41 0.35 0.49	0.15	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
14号墳 14号埋葬施設	周域内の南西側	土壇墓	N-124.5°-E	南東 隅長方形	1.92	0.33 0.33 0.49	0.14	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
4号墳 4号埋葬施設	周域外の北西側	石室土壇墓	N-107.5°-E	西 隅長方形	上段：1.63 下段：0.79	1.04 0.22 0.79	0.10	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
4号墳 4号埋葬施設	周域外の北東側	石室土壇墓	N-135°-E	南東 隅長方形	上段：2.40 下段：2.12	0.72 0.39 1.18	0.21	—	—	—	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。
6号墳 6号埋葬施設	墳丘部北西寄り	木棺墓	N-61°-E	西 隅長方形	1.50 2.40 2.12	0.30 0.49 0.41	0.20	1.70	0.52	0.50	なし	なし	なし	なし	甕土：土器 片 副葬の土器類と石棺 類は二段階あり。 土器類にはセリト1 個。
7号墳 7号埋葬施設	周域内の南西側	土壇墓	N-15°-E	北 隅長方形	1.10	0.4 0.4 0.4	0.24	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
8号墳 8号埋葬施設	墳丘部南の東側	土壇墓	N-13°-W	北西 隅長方形	1.94	1.22 1.36 1.36	0.72	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
9号墳 9号埋葬施設	墳丘部南の東側	土壇墓	N-23°-W	北西 隅長方形	2.34	1.1 1.1 1.1	0.5	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
10号墳 10号埋葬施設	周域内の東側	石室土壇墓	N-29°-W	北西 隅長方形	0.9	0.29 0.30 0.30	0.3	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし
11号墳 11号埋葬施設	周域内の南西側	土壇墓	N-5°-W	北 隅長方形	1.09	0.30	0.10	—	—	—	なし	なし	なし	なし	なし

(8) 木棺墓

丘陵南肩部と北肩部で5基を確認した。その詳細は第7表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号木棺墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28.5 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-15°-Eで、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壇は長さ1.04 m、幅は北側で0.47 m、南側で0.51 m、検出面からの深さ0.23 mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ0.60 mを測る。墓壇の幅から頭位は南側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

2号木棺墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28～28.5 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-10°-Eで、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壇は長さ1.19 m、幅は北側で0.75 m、南側で0.78 m、検出面からの深さ0.19 mを測る。底面の東側で木棺痕跡(両小口板の痕跡)を確認し、木棺痕跡の南・西側に接して逆L字形の平坦面を確認した。木棺は内法で長さ0.74 m、幅0.18 mを測る。墓壇の幅から頭位は南側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

3号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-15°-Eで、平面形は長方形を呈する。墓壇は長さ1.97 m、幅は北側で0.69 m、南側で0.67 m、検出面からの深さ0.38 mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.69 mを測る。墓壇の幅から頭位は北側と推定される。墓壇埋土上層から土師器細片が出土した。

4号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29～29.5 m付近に位置する。主軸はN-10°-Eで、墓壇の平面形は長方形を呈する。墓壇は長さ2.24 m、幅は北側で0.61 m、南側で0.50 m、検出面からの深さ0.41 mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.93 mを測る。墓壇の幅から頭位は北側と推定される。墓壇埋土から土師器細片が出土した。

5号木棺墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近に位置し、北側を11号溝に切られる。墓壇の主軸はN-14°-Eで、平面形は長方形を呈する。墓壇は長さ2.24 m、幅は北側で0.75 m、南側で0.65 m、検出面からの深さ0.22 mを測る。底面の南北端で小口板の痕跡を確認し、木棺は内法で長さ1.82 mを測る。墓壇の幅から頭位は北側と推定される。墓壇埋土上層から土師器細片、墓壇埋土からナイフ形石器(S1)が出土した。

(橋本)

(9) 土壇墓

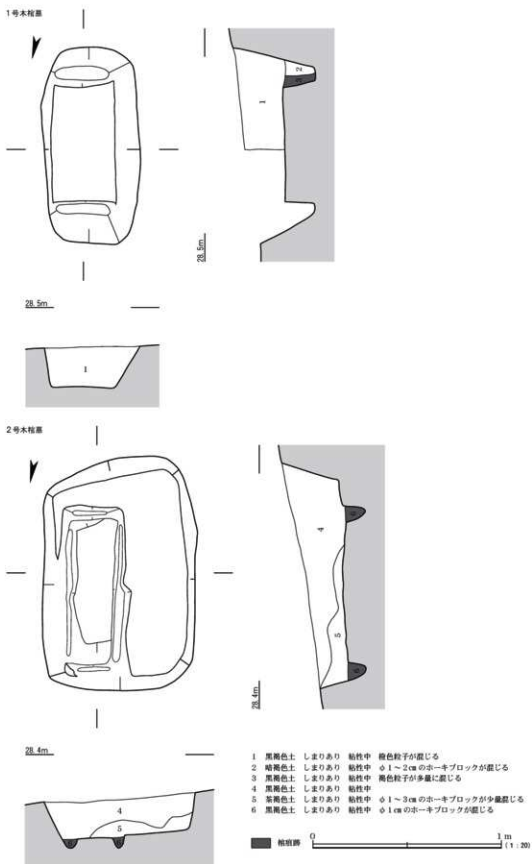
丘陵南肩部と北肩部で3基を確認した。その詳細は第8表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号土壇墓 調査区の北西部、丘陵北肩部の標高28～28.5 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-10°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.07 m、幅は南側で0.51 m、北側で0.39 m、底面では長さ0.89 m、幅は北側で0.35 m、南側で0.39 m、検出面からの深さは0.24 mを測る。墓壇の幅から頭位は南側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

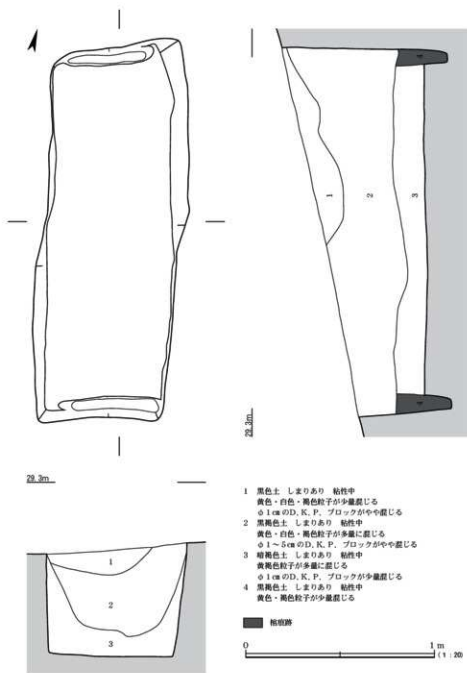
2号土壇墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-30°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.30 m、幅は北西側で0.46 m、南東側で0.74 m、底面では長さ1.17 m、幅は北西側で0.44 m、南東側で0.55 m、検出面からの深さは0.33 mを測る。底面は地形の傾斜と同様に南東へ傾斜していることから、頭位は北西側と推定される。墓壇埋土から土師器細片が出土した。

3号土壇墓 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近に位置する。墓壇の主軸はN-15°-Wで、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は検出面では長さ1.43 m、幅は北西側で0.61 m、南東側で0.60 m、底面では長さ1.41 m、幅は北西側で0.53 m、南東側で0.50 mと北西側が広く、検出面から床面までの深さは0.33 mを測る。墓壇の幅から頭位は北西側と推定される。墓壇内から遺物は出土しなかった。

(橋本)



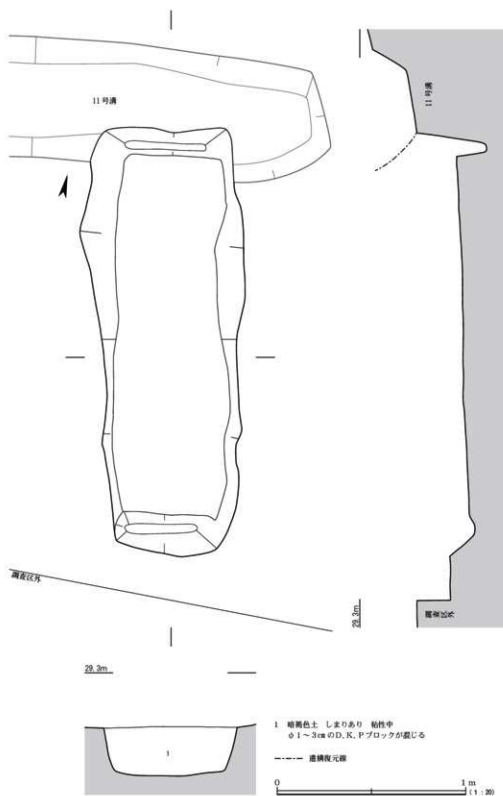
第71図 1号・2号木棺墓遺構図



第 72 図 3 号木棺墓遺構図

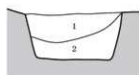
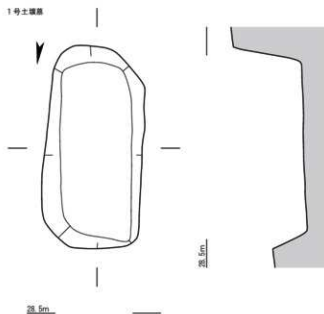
第 7 表 木棺墓一覧

遺構名	位置・立地	主軸	方位	墓壇				木棺			出土遺物	備考
				平面形	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	形式	長さ (m)	幅 (m)		
1号木棺墓	調査区の北西部、 丘陵北肩部の標高 28.5 m 付近	N-15°-E	南	隅丸長方形	1.04	0.47 ～ 0.51	0.23	組合せ式	0.60	—	なし	
2号木棺墓	調査区の北西部、 丘陵北肩部の標高 28 ～ 28.5 m 付近	N-10°-E	南	隅丸長方形	1.19	0.75 ～ 0.78	0.19	組合せ式	0.74	0.18	なし	
3号木棺墓	調査区の南西部、 丘陵南肩部の標高 29 m 付近	N-15°-E	北	長方形	1.97	0.67 ～ 0.69	0.38	組合せ式	1.69	—	埴土上層：土 師器線片	
4号木棺墓	調査区の南西部、 丘陵南肩部の標高 29 ～ 29.5 m 付近	N-10°-E	北	長方形	2.24	0.50 ～ 0.61	0.41	組合せ式	1.93	—	埴土：土師器 線片	
5号木棺墓	調査区の南西部、 丘陵南肩部の標高 29 m 付近	N-14°-E	北	長方形	2.24	0.65 ～ 0.75	0.22	組合せ式	1.82	—	埴土上層：土 師器線片 埴土：ナイフ 形石棺(奥1)	11号溝に切 られる。

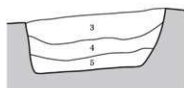
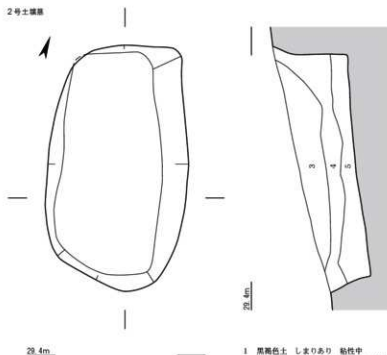


第74図 5号木棺墓遺構図

1号土壌墓



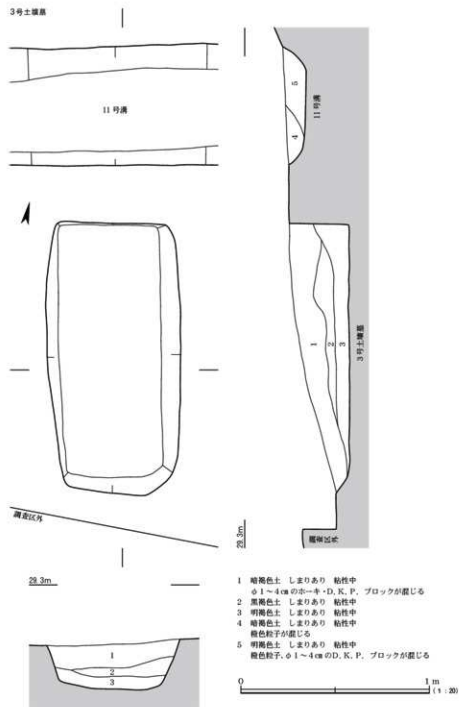
2号土壌墓



- 1 黒褐色土 しまりあり 粘性中
φ1~2cmのホーキブロックが散じる
- 2 明褐色土 しまりあり 粘性中
φ3~5cmのホーキブロックが散じる
- 3 黒色土 しまりあり 粘性中
黄・白・褐色粒子が少量散じる
- 4 黒褐色土 しまりあり 粘性中
白・褐色粒子がやや散じる
- 5 暗褐色土 しまりあり 粘性中
黄・褐色粒子が少量散じる

0 1m
(1:20)

第75図 1号・2号土壌墓遺構図



第76図 3号土壌墓遺構図

第8表 土壌墓一覧

遺構名	位置・立地	主軸	方位	墓域				出土遺物	備考
				平面形	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)		
1号土壌墓	調査区の北西部。 丘陵北西部の標高 28~29.5m付近	N-10°-W	南	隅丸長方形	1.07	0.39 ~ 0.51	0.24	なし	
2号土壌墓	調査区の南西部。 丘陵南西部の標高 29m付近	N-30°-W	北西	隅丸長方形	1.30	0.46 ~ 0.74	0.33	遺土:土師 器破片	
3号土壌墓	調査区の南西部。 丘陵南西部の標高 29m付近	N-15°-W	北西	隅丸長方形	1.43	0.60 ~ 0.61	0.33	なし	

(10) 溝

丘陵尾根から南斜面で11条を確認した。その詳細は第9表に一括し、以下、各遺構について述べる。

1号溝 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30 m付近に位置する。やや円弧を描きながら西から東へ伸びる。規模は、長さ5.23 m、幅0.6 m～0.82 m、深さ0.23 mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

2号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高25～25.5 m付近に位置し、24号墳1号主体部を切り、11号墳と切り合う。円弧状に1箇所の緩い屈曲を描きながら西から北東へ伸びる。規模は、長さ7.26 m、幅0.72～1.02 m、深さ0.42 mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片、須恵器小片、磁器小片が出土した。

3号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5 m付近に位置する。やや円弧を描きながら北東から南西へ伸びる。規模は、長さ5.06 m、幅0.59 m、深さは0.18 mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は、埋土下層から土師器壺片、鉄鏝(F16)が出土した。

4号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高27.5～28 m付近に位置する。やや円弧を描きながら北西から東へ伸びる。規模は、長さ4.79 m、幅0.32～0.60 m、深さ0.17 mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

5号溝 4号溝の南東隣、丘陵南斜面の標高26.5～27.5 m付近に位置する。やや円弧を描きながら北西から東へ伸びる。規模は、長さ5.56 m、幅0.32～1.22 m、深さ0.29 mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片、須恵器小片が出土した。

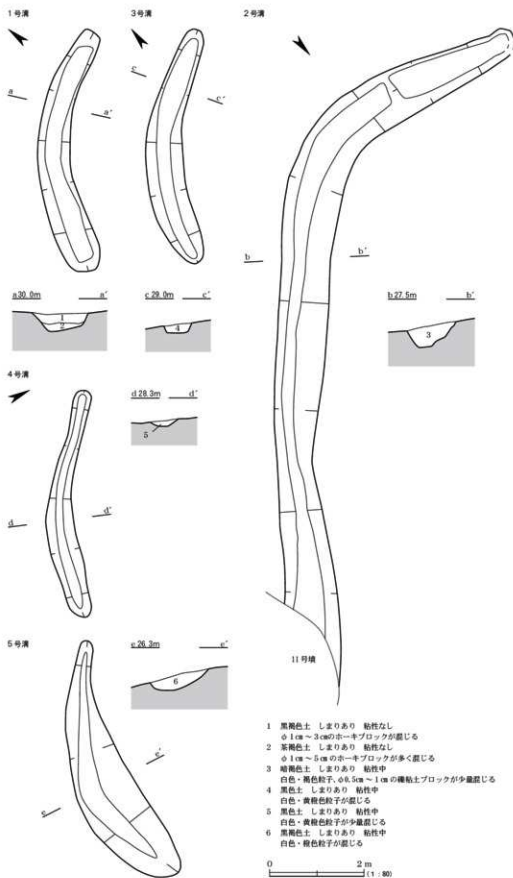
6号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高29 m付近に位置する。直線的に東から西へ伸びる。規模は、長さ4.84 m、幅0.32～0.56 m、深さ0.30 mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。埋土中層から下層で土師器壺、甕、器台の破片がまとまって出土した。

7号溝 調査区の南部、丘陵南斜面の標高28 m付近に位置する。やや円弧を描きながら東から西へ伸びる。規模は、長さ4.63 m、幅0.40～0.56 m、深さ0.14 mを測る。掘方の断面形は逆台形を呈する。遺物は埋土中層から土師器小片が少量出土した。

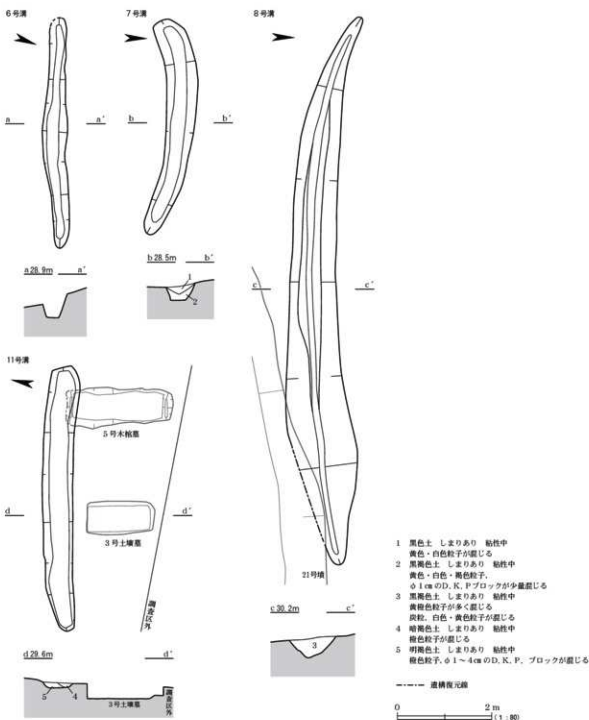
8号溝 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29.5 m付近に位置し、南側で21号墳周溝を切る。やや円弧を描きながら西から東へ伸びる。規模は、長さ5.55 m、幅0.82～1.36 m、深さ0.66 mを測る。掘方の断面形はU

第9表 溝一覧

遺構名	位置・立地	長さ (m)	検出面幅 (m)	底幅 (m)	深さ (m)	断面形	出土遺物	備考
1号溝	調査区の中央部、丘陵尾根上の標高29.5～30 m付近	5.23	0.6 ～0.82	0.50	0.23	逆台形	土師器小片	
2号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高25～25.5 m付近	7.26	0.72 ～1.02	0.21	0.42	U字形	土師器小片、須恵器小片、磁器小片	11号墳と切り合う。 24号墳1号主体部を切る。
3号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28～28.5 m付近	5.06	0.59	0.40	0.18	逆台形	土師器壺片、鉄鏝(F16)	
4号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高27.5～28 m付近	4.79	0.32 ～0.60	0.38	0.17	U字形	土師器小片	5号溝と一連の可能性あり。
5号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高26.5～27.5 m付近	5.56	0.32 ～1.22	0.44	0.29	U字形	土師器小片、須恵器小片	4号溝と一連の可能性あり。
6号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高29 m付近	4.84	0.32 ～0.56	0.13	0.30	逆台形	土師器壺片、甕片、器台片	
7号溝	調査区の南部、丘陵南斜面の標高28 m付近	4.63	0.4 ～0.56	0.32	0.14	逆台形	土師器小片	
8号溝	調査区の南部、丘陵南肩部の標高29.5 m付近	5.55	0.82 ～1.36	0.20	0.66	U字形	土師器小片	21号墳周溝を切る。
9号溝	調査区の南西部、丘陵尾根上の標高30.5 m付近	4.68	0.24 ～0.44	0.24	0.08 ～0.12	U字形	なし	10号溝と一連の可能性あり。
10号溝	調査区の南西部、丘陵尾根上の標高30.5 m付近	7.40	0.36 ～0.52	0.24	0.12	U字形	なし	9号溝と一連の可能性あり。
11号溝	調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29 m付近	5.64	0.44 ～0.68	0.44	0.08	U字形	土師器小片	5号木棺墓を切る。



第77図 1号～5号溝遺構図

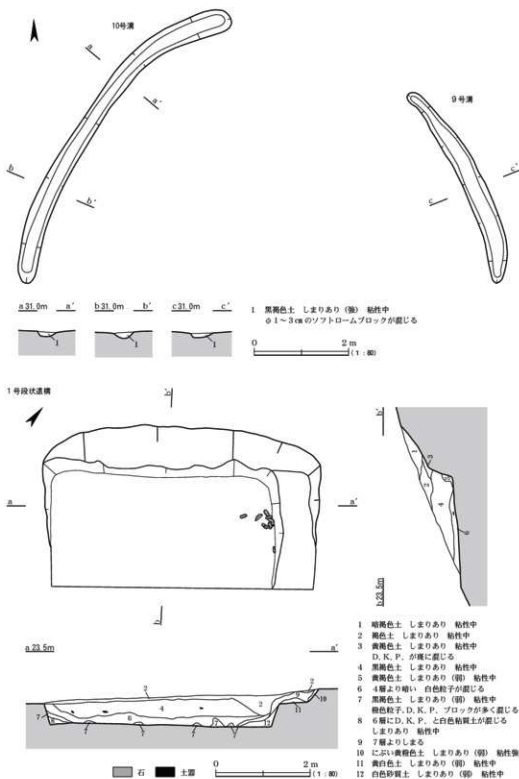


第78図 6号～8号・11号溝遺構図

字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

9号溝 調査区の南西部、丘陵尾根上の標高30.5 m付近に位置する。やや円弧を描きながら南から北西へ伸びる。規模は、長さ4.68 m、幅0.24～0.44 m、深さ0.08～0.12 mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。溝の西端を円弧状に延長すると10号溝の東端にあたることから一連の可能性はある。

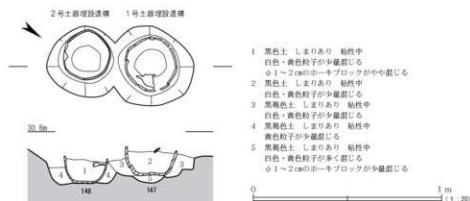
10号溝 9号溝から西に約3 m離れた丘陵尾根上の標高30.5 m付近に位置する。やや円弧を描きながら南から北西へ伸びる。規模は、長さ7.40 m、幅0.36～0.52 m、深さ0.12 mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は出土しなかった。溝の東端を円弧状に延長すると9号溝の西端にあたることから一連の可能性はある。



第79図 9号～10号溝遺構図及び1号段状遺構遺構図

11号溝 調査区の南西部、丘陵南肩部の標高29m付近に位置し、5号木棺墓を切る。直線的に東から西へ伸びる。規模は、長さ5.64m、幅0.44～0.68m、深さ0.08mを測る。掘方の断面形はU字形を呈する。遺物は、埋土中層から土師器小片が少量出土した。

(橋本)



第80図 1号・2号土器埋設遺構構造図

(11) 段状遺構

1号段状遺構 調査区北東部の丘陵南斜面の標高22.5~23.5m付近に位置する。床面の平面形は方形を呈し、規模は北東-南西4.7m、北西-南東2.3m以上を測る。南東側は削平されている。北東側が幅約75cmのテラス状に張り出し、床面より50cm高い。検出面から床面までの深さは最大72cmを測る。床面にピットや周壁溝、貼床、焼土面は見られない。床面北東壁付近で円礫を14個確認した。円礫は楕円形を呈し、長軸約30cmを測るものが多い。

遺物は、床面付近で土師器甕(144)、高坏(145)、埋土から土師器壺、甕、高坏、鼓形器台などがまとまって出土した。

(片岡)

(12) 土器埋設遺構

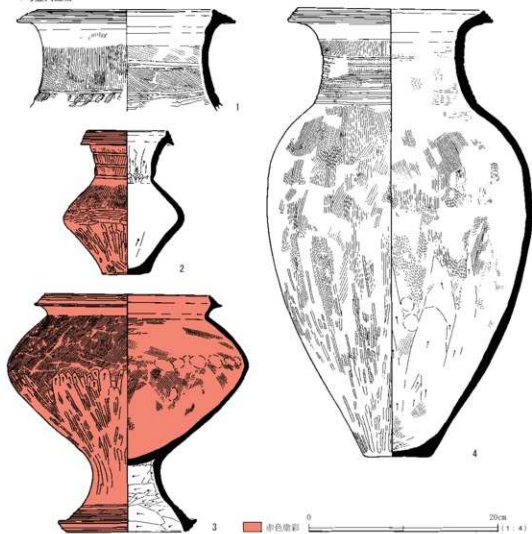
1号土器埋設遺構 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置し、南で2号土器埋設遺構を切る。掘方の平面形は円形で、規模は直径0.42m、深さ0.3mを測る。底面に土師質の短頸壺(146・147)を正位で据えている。壺の内部から遺物は出土しなかったが、掘方周辺から土師質の蓋片が出土した。

2号土器埋設遺構 調査区の中央部、丘陵尾根上の標高30.5m付近に位置し、北で1号土器埋設遺構に切られる。掘方の平面形は円形で、規模は直径0.37m、深さ0.24mを測る。底面に土師質の短頸壺(148)を正位で据えている。壺の内部から遺物は出土しなかったが、掘方周辺から土師質の蓋片が出土した。

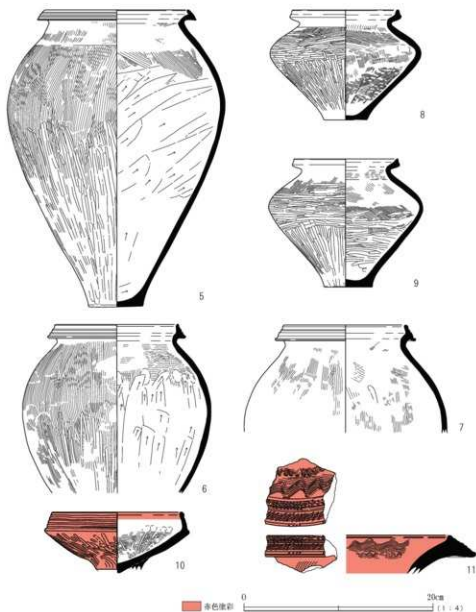
なお、1号・2号土器埋設遺構の周辺は旧大谷村の後産場として利用されていたことから、本遺構は胎衣壺の可能性もある。

(橋本)

1号竖穴建物



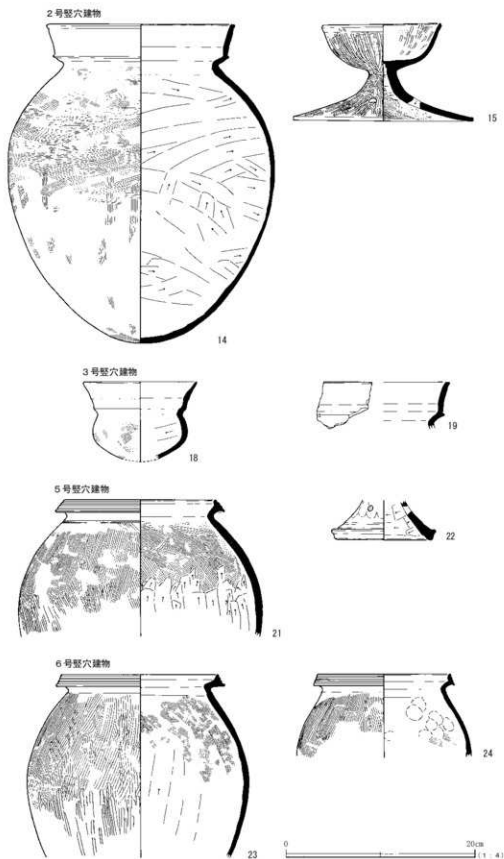
第81图 1号竖穴建物出土土器(1)



第 82 図 1 号堅穴建物出土土器 (2)

2 号堅穴建物 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・地成・色調・遺存度
床面	14	土師器 甕	器高 33.7 口径 19.1 胴部最大径 28.2	外反する筒倉口縁で、口縁部は外傾して面を持つ。ごく浅い1条の刻線を施す。口縁下縁は外傾につまみ出され、鋭い稜を持つ。内外面直線。底付き。	外面口縁～胴部上位ヨコナガ。胴部下位ヨコハタ。タテハタ。体部上位交互するヨコハタ。中位タテハタ後。ヨコハタ。下位タテハタ。内面口縁～胴部ヨコナガ。体部上位ヨコナガ。中位ヨコナガ後。一部タテナガ。下位ヨコナガ。直線不明。	粘土やや硬。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。地成やや不良。内外面ともに黄褐色。口縁部より、体部より。
床面	15	土師器 高杯	器高 10.3 口径 12.2 底径 18.8	筒い筒状の杯部で、内面直線に立ち上がり、口縁部はやや外反し、外傾した面を持つ。胴部は短い筒部から大きく広がり、3方向の内折造かし穴を施す。胴部の内面に溝い痕。布文式。	外面口縁部ヨコナガ。杯部ヨコハタ後。タテミガキ。胴部タテハタ後。タテミガキ。内面杯部ヨコハタ後。タテミガキ。胴部ヨコナガ。杯部収斂斜行放射状のハタ。胴部ヨコナガ。	粘土やや硬。1～2mmの石英・長石。1mm程度の角閃石を少し含む。1～3mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成良好。内面には黄褐色、灰褐色。外面には黄褐色。杯部より、胴部より。
床面	16	土師器 高杯	器高 11.3 口径 16.8 底径 11.4	やや平坦な底面から緩やかに立ち上がる杯部で、口縁部は外反し、外傾した面を持つ。胴部は短い筒部から広がり、筒部は外傾した面を持つ。内外面に溝い痕。	外面口縁部ヨコナガ。杯部上位ヨコミギ。下位ヨコミギ。タテハタ。胴部～胴部タテハタ後。ヨコミギ。内面杯部ヨコナガ後。ヨコミギ。胴部ヨコナガ。胴部ヨコハタ。胴部ヨコナガ。	粘土やや硬。1～3mmの石英・長石。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面ともに黄褐色。杯部より、胴部より。
P5埋土	17	土師器 低脚杯	器高 4.8 口径 15.2 底径 (5.2)	地成の杯部で内湾して立ち上がる。胴部は小さい。	外面杯部ヨコナガ後にミガキと思われるが不明。胴部ヨコナガ。内面杯部ヨコナガ後。タテミガキ。胴部ヨコナガ。	粘土やや硬。1～3mmの石英・長石を含む。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。1～2mmの茶色砂粒を僅かに含む。焼成不良。内外面とも黄褐色。杯部より、胴部より。



第83图 2号~6号竖穴建物出土土器

3号竖穴建物 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・遺存物
博士	18	土師器 小型丸底通	器高 8.1 口径 11.0 胴部最大径 (10.0)	外反する竜舟口縁で、胴面は薄く、口縁下縁は直線しない。	外面口縁部へ黒土コナナシ、体部ヨコハナシ。2cm 程度の黒土をコナコナ思われる。体部上平ヨコズリ、体部下平無蓋不削紋。	粘土やや灰。1~2mm の石膏・炭石を少し含む。焼成やや不均。外面と1.5倍の口縁部1/4、体部3/1。
埋土	19	土師器 丸底 (5.8)	器高 5.9 口径 5.8	外反する竜舟口縁で口縁下縁は下垂す外側に突き出る。	内外面とも口縁部へ黒土コナナシ。	粘土やや灰。1~2mm の石膏・炭石、1mm 程度の赤土砂。1mm 程度の炭屑を少し含む。焼成良好。内外面とも内周縁部1/4厚に。

4号窑穴建物 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・産地考
横山田	20	弥生土器 甕	器高 [5.5] 口径 [7.2]	口縁部はねはれ口縁で内腹し。底部 上下に広重し。3条の凹線文をすす。 内外面無施。	外面陶部ヨコナダ。肩部タテハ。内面 口縁→陶部ヨコナダ。器底部にハケテ、 肩筋ハケテ。	粘土ややぬ。1～2mmの石・長石を含 有。1mm程度の角閃石・黒石の産地層 を少し含む。1～2mmの白色粗粒の灰 土を含む。焼成温度は中温程度。外面 に灰・黄褐色。口縁1/3色。

5 号窑穴建物 土器

[illegible]

6. 县衙穴建物 土製

[illegible]

7 号窑穴建物 土器

出土位置	No.	図種	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・腐存度
P8 埋土	25	土師器 高杯	器高 [12.3] 杯部最大径 22.2	外観する杯部は曲出しで口縁部につくが口縁部が欠大段。胴部方位に方向の円形溝が欠大を外側から、その平面上に1本の直線文を施す。内外面ともに横面部に黒焼。	外面杯口ゴモギキ、脚接合部ゴビヤコナシ。内面杯口縁上員による縦の刻と波状ナシ。内面杯口縁、タテハの縦、ゴモコナシ。脚部大將ナシ。口部上位ゴビヤ、中位ゴビヤコナシ。	粘土土黄、1~2mmの石屑・灰石、1mm以下の角形石屑を少し含み、1cm以下の金雲母を散らし、1mm級の茶色粒を焼成に含み、焼成良好。内面に灰土褐色・茶色、外面面赤。杯口縁部黒焼1/3、脚部中位以下黒焦大段。

9 号呷穴律物 十器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・遺存物
床面	26	土師器 造	器高 [16.5] 口径 [10.5]	広く外反する複合口縁で、口縁端部はやや肥大、外側に面をすく、口縁下部は直下に垂下し、外側にやや出た直線的な「受け」付く。埴土に上部縦文を施す。胴部には縦線突文。外縁口縁、体部部部以下に黒線。	外面口縁部→胴部ヨコナガ、胴部下部→口縁ヨコナガ、胴部下部ヨコナガ、胴部ハタケ、内面口縁→胴部ヨコナガ、胴部以下ヨコナガ。	粘土やや硬、1～2mmの石片・長石、1mm以上の角形石を含む。褐色・灰色の砂、埴土に上部縦文を少し含む。埴土、横線突文、外縁口縁、口縁部以下に黒線、1mm以上の、器高1/5。
床面	27	土師器 造	器高 21.6 口径 13.7 胴部口径 21.6	外反する複合口縁で、口縁端部はやや肥大、外側に面をすく、口縁下部は少し外側に突出する。体部は直下に垂下し、外側にやや出た直線的な「受け」付く。埴土に上部縦文を施す。外縁口縁部以下に黒線、中位以下に黒斜文。胴部表面磨製あり。	外面口縁部→胴部ヨコナガ、胴部下部ヨコナガ、胴部下部ヨコナガ、胴部ハタケ、体部中央に縦線突文を施すタテハタケ、ノミ字に「子」を刻すナメタ。内口縁部→胴部ヨコナガ、胴部下部→口縁ヨコナガ、胴部下部ヨコナガ、下部タテナメタ。	粘土やや硬、1～4mmの石片を多く含む。1～2mmの石片、1mm以上の角形石を含む。1mm以上の黒雲母を少し含む。7mm程度の石片を含む。1mm以上の褐色の砂を少量に含む。埴土、横線突文、内面縦線突文、口縁部以下に黒線、磨製突文、磨製3/4。
床面	28	土師器 高杯	器高 [7.2] 最大径 [22.2]	平坦な底部から直登して広く立ち上る平唇口。口縁・胴部突文。直登部に粘土質の土による明瞭な段あり。	外面唇部→ラタキ後（反時計回り）、ノミナガ、直登部ハタケ、内面ハタケ後。	粘土やや硬、1～2mmの石片・長石、1mm以上の角形石、1mm以上の黒雲母を含む。1～2mm程度の灰色の砂や石を含む。埴土、横線突文、外縁口縁、外唇口縁部以下に黒線。

10 县腔穴建物 土型

出土地位	No.	土器種	法量 (cm)	形 態	手 法	使用状況・使用法	
						胎土・釉色・文様・磨面状況	胎土・釉色・文様・磨面状況
灰函	29	土師器 甕	底径 7.8 口径 16.0	外口縁を有する口縁で、外縁部は外縁部で束状の、内面は内縁部で束状の、両面外縁部以下に細線、全周に僅かな有。	外口縁部→底面ヨコナズ、内面口縁部ヨコナズ、内面口縁部以下ヨコナズ、内面中央ヨコナズ、ヨコナズ、内面口縁部以下ヨコナズ。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。
灰函	30	土師器 高片	底径 6.0 高さ 14.2	外縁部は口縁部より大きく出が、断面傾斜状。	外縁部傾斜→内面、内面片断底面ナズ、内面傾斜→サメズ、下段ハナズ。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。
灰函	31	土師器 煎餅形甕	底径 13.0 口径 21.0 高さ 18.4	大きく口縁の下方に有する口縁部は外縁部より口縁部より大きく出が、断面傾斜状。	外口縁部→底面ヨコナズ、内面口縁部ヨコナズ、内面口縁部以下ヨコナズ、内面中央ヨコナズ、ヨコナズ、内面口縁部以下ヨコナズ。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。	胎土や文様、1～2mmの石長、長さ1mm程度の石長、1mm程度の石長、角形石や文様、磨面良好、内面外縁部も磨色、口縁部→両面1/4、断面1/8以下。

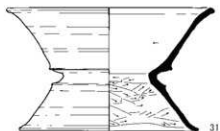
7号竖穴建物



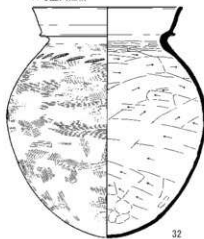
9号竖穴建物



10号竖穴建物



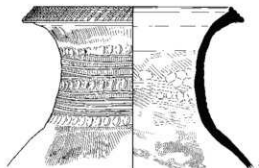
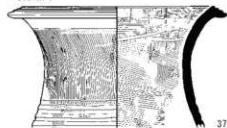
11号竖穴建物



1号掘立柱建物



1号貯蔵穴



0 20cm (1:4)

第84图 7号・9号～11号竖穴建物、1号掘立柱建物、1号貯蔵穴出土土器

11 号竖穴建物 土器

[illegible]

1号掘立柱建物 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存度
P4 埋土	36	土師器 甕	口径 (21.1) 全高 (22.0) 肩幅最大径 (32.0)	外反する筒状の鉢で、口縁部は僅かに外傾して面平縁付。ごく浅い凹線文を施す。口縁部と外傾面とで平太出しの大きな突起が突出し、肩部に浅く幾重にもよる9本の平行凹線文を施す。外面肩部部域に凹凸付。	外面口縁部へ兩部ヨコナテ、下部ヨコナテ、肩部ヨコナテ施す。タテナテ。最大頸部口径以下、内面口縁部以下はタテナテ、口縁部以下はタテナテとタテナテ、肩ヨコナテ、最大頸部以下はタテナテヨコナテ、ナメマハケ施す。一部ナメタテヨコナテ。	粘土や焼成、1 ~ 1.5m の石炭・石炭灰、1 ~ 1.2m の赤褐色粘土、1m 程度の腐植土、10m 以下の赤褐色腐植土を含む。1 ~ 3cm の灰白色の粘土に少くも混成せられ、内面に灰白色、外面に黄褐色・黄褐色の点状、線状、條状、塊状の付着。

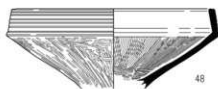
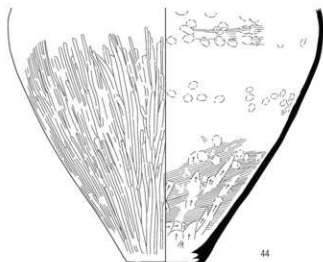
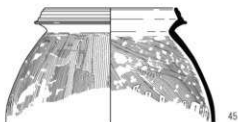
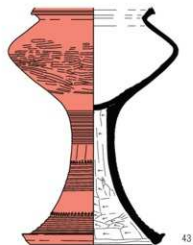
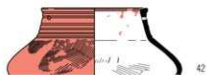
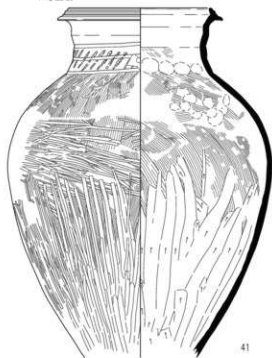
1号貯藏穴 土器

出土位置	No.	器種	法量 (g)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・遺存物
埋土	37	佛生土器 意	跡高 (12.9) 口徑 (20.1)	口縁部はねはれ口縁で、肩面部が外面に突起し、口縁端部にのみ、肩部下にて4本の指線文を施す。外面肩部下位無指線。	外側口縁部コナガ、肩部タテハク、内面口縁部・肩部コナガ、一部1/4状口縁縁。	粘土や砂焼、1～2mmの石片・炭石を含む。1cm以下の金葉片を施す。外面を褐色に染め、内外面共にぶい・黄褐色。口縁部はぼやけ存。肩部3/4。
埋土	38	佛生土器 意	跡高 [17.3] 口徑 22.7	口縁部はねはれ口縁で、肩部上下に突起し、口縁端部3本の指線文、肩状口縁上段より5本目まで、肩部は3～4本、5本の2/3の指線文との上より上段より1/3以下に5本の指線文の支線部を施す。	外側口縁部コナガ、肩部ノ肩状タテハク、内面口縁部コナガ、肩部コナガ、ユビヤサキ、肩部コナガ。	粘土や砂焼、1～2mmの石片・炭石を含む。1cm程度の角閃片を施す。1cm以下の金葉片を施す。外面を褐色に染め、内外面共にぶい・黄褐色。外面にぶい・黄褐色・褐色。口縁部、肩部3/4。内面1/8。
埋土	39	佛生土器 付意 (御意)	跡高 (8.7) 底径 10.5	ハの字状に外反する脚部部で、肩部に赤色指線文を施す。外面肩部・外面脚部部、脚部内面に赤色塗彩が施される。	外側脚部部不規則な縦ナガ、脚部不明な縦ナガ、最大径部、粘土色にけりけりコナガ、縦線部コナガ、内面天井ナガ、脚部上段に縦線コナガ、外面脚部コナガ。	粘土や砂焼、1～2mmの石片・炭石を含む。1mm程度の角閃片・角閃片を含む。1cm以下の金葉片を施す。焼成良好。外面を褐色に染め、赤色塗彩は良好。脚部のみ充分。
埋土	40	佛生土器 付意 (御意)	跡高 (8.3) 底径 12.4	ハの字状に外反する脚部部で、外面脚部に黒焼。	外側脚部部不規則な縦ナガ、横線上位コナガ、脚部不明な縦ナガ、コナガ、縦線部コナガ、内面天井ナガ、脚部上段に縦線コナガ、外面脚部コナガ。	粘土や砂焼、1～2mmの石片・炭石を含む。1cm以下の金葉片を施す。外面を褐色に染め、脚部は黄褐色。外面脚部のみ充分。

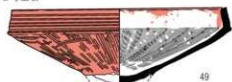
1 号土壤 土器

[illegible]

1号土罐

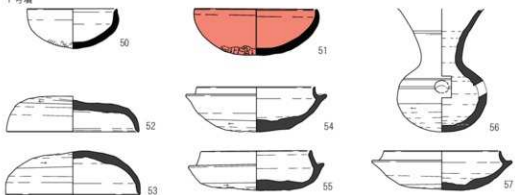


2号土罐

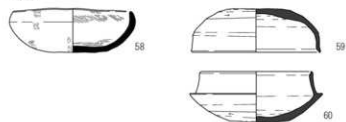


第85图 1号·2号土罐出土土器

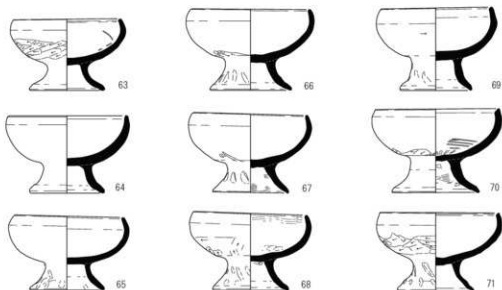
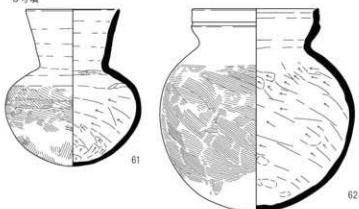
1号墳



2号墳



3号墳



第86図 1号～3号墳出土土器

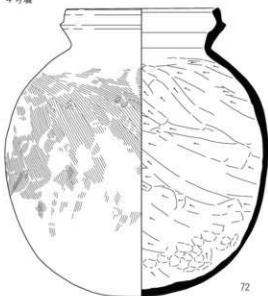
3号墳 土器

出土位置	No.	図様	法量 (cm)	形 態	平 法	胎土・焼成・色調・保存状況
陶直土	61	土師器 直口壺	口径 16.6 口径 9.6 底径 14.2	口縁部はただならぬ外反しなごう長く 伸び、口縁と頸部を結合した太いの縦 繋ぎ線が外面に現れる。体部は中や平反 した形状。外面、外面良い焼成あり。	外面口縁部～下部直口コナダ。体部前 部ナメツケ。コナダ、体部最大径 部～体部下ナメツケハゲ一部ナツケ し、底部まで中や平反した形状を 持つ。口縁部～コナダ、体部直口 コナダ。下部直口コナダナメツケ ナツケ。体部一部ナメツケハゲ ナツケ。底部ナツケナツケ。	粘土やや硬。1～2cmの石灰、1～5mm の炭を含む。1cmの角閃石、1cm以 下の金雲母を少し含む。焼成良好。外 面黒、頸部黒、体部黒褐色。外縁部 黒、底面黒。口内面、外面に少し褐色 色。焼成良好。
陶直土	62	土師器 甕	口径 21.3 口径 13.6 底径 20.5	垂直に立ち上げる筒状容器。口・口縁部 は内縮しで蓋を持つ。口縁下部は少し 外側に突出し、肩の部分に1本の角 筋を施す。体部は直縮。外面黒褐色 に外に焼成。体部、内面黒部ナツ ケナツケ。肩の部分に細い溝あり。	外面口縁部～下部直口コナダ。体部 直口コナダ。口以下コナダ。交差する コナダ。底面不明。内面口縁部～部 分コナダ。下部直口コナダナメツケ。体 部一部ナメツケハゲナツケ。底部、 ナメツケナツケナツケ。	粘土やや硬。1～6mmの石灰・長石、 1mm以下の金雲母を含む。1cm程の 角閃石、1mm以下の赤銅石を少し含む。 焼成良好。内面黒、外面に少し褐色 色。口縁部ナツケ。体部良好。
陶直土	63	土師器 貯付罐	口径 7.5 口径 6.1 底径 12.1 底径 7.5	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、口縁部は内湾してやや平反 した面を持つ。へらの字状に外反する 跡が少し。口縁部の内湾に内湾した 部分に細い溝に認められ、頸部 内面に認められる。	外面口縁部～頸部上平口コナダ。平口 コナダ。頸部コナダ。内面口縁部～ 頸部、頸部コナダ後、一部ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石が多 く含む。1～2mmの赤銅石を少し含む。 1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。 焼成良好。内面黒、外面に少し褐色 色。明褐色色。頸部部分に明褐色色。底面、 口縁部ナツケ。
陶直土	64	土師器 貯付罐	口径 8.1 口径 12.3 底径 13.0 底径 7.5	口縁部は底部から縁や中に内湾して比 較的垂直に立ち上がり、へらの字状に 外反する跡が少し。頸部、頸部の字に 認められる。	外面全域コナダ。頸部下平口コナダの 仕上げが露出で見られ、指節が残る。内 面口縁部コナダ。頸部コナダ後、一部ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石を 含む。1mm程の角閃石、1mm以下の金雲母 を少し含む。1cm程の赤銅石を僅かに 含む。焼成良好。内面黒、外面に少し 褐色色。口縁部ナツケ。
陶直土	65	土師器 貯付罐	口径 8.0 口径 11.2 底径 12.5 底径 7.5	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾。外面黒褐色に中 や平反した面を施す。頸部、頸部と も平反。	外面頸部口縁部コナダ。頸部一部～下 平口コナダ。一部ナツケ。内面頸部、頸部 とコナダ後、一部ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石、 1～2mmの赤銅石。1mm以下の金雲母 を少し含む。1mm程の角閃石を少し 含む。焼成良好。内面黒、外面に 少し褐色色。口縁部ナツケ。
陶直土	66	土師器 貯付罐	口径 8.6 口径 12.3 底径 13.4 底径 8.3	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～下部コナダ。底部平 口コナダ。頸部下平口コナダの仕上げ が露出で見られ、指節が残る。頸部コ ナダ。内面口縁部～頸部、頸部と コナダ。上部～下部コナダナツケ。ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石、1 mm程の角閃石。1mm以下の金雲母を 少し含む。1cm以下の赤銅石を少し 含む。焼成良好。内面と外面とも黒 色。口縁部ナツケ。
陶直土	67	土師器 貯付罐	口径 8.4 口径 11.7 底径 12.4 底径 7.8	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～下部コナダ。頸部下 平口コナダの仕上げが露出で見られ、 ナツケが残る。頸部コナダ。内面口縁 部～頸部、頸部とコナダ。上部～ 下部コナダ。上部～下部コナダナツケ。 ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石、1 mm程の角閃石。1mm以下の金雲母を 少し含む。1cm以下の赤銅石を少し 含む。焼成良好。内面、外面ともに 一色に均質。底面、口縁部ナツケ。
陶直土	68	土師器 貯付罐	口径 8.8 口径 12.2 底径 12.8 底径 7.7	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～下部コナダ。頸部下 平口コナダの仕上げが露出で見られ、 ナツケが残る。頸部コナダ。内面口縁 部～頸部、頸部とコナダ。上部～ 下部コナダ。上部～下部コナダナツケ。 ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰と多量含む。 1～2mmの石灰、1～3mmの赤銅石。 1mm以下の金雲母を含む。1mm以下の角 閃石、1mm以下の赤銅石を少し含む。 焼成良好。内面黒、外面黒褐色。底 面、口縁部ナツケ。
陶直土	69	土師器 貯付罐	口径 8.5 口径 11.5 底径 12.7 底径 7.2	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～下部コナダ。頸部下 平口コナダの仕上げが露出で見られ、 ナツケが残る。頸部コナダ。内面口縁 部～頸部、頸部とコナダ。上部～ 下部コナダ。上部～下部コナダナツケ。 ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石を多 く含む。3mm程度の赤銅石を一つ含む。 1～5mmの角閃石、1mm以下の金雲母を 少し含む。1cm以下の赤銅石を少し含む。 焼成良好。内面黒、外面黒褐色。底 面、口縁部ナツケ。
陶直土	70	土師器 貯付罐	口径 8.9 口径 12.9 底径 13.7 底径 8.9	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～下部コナダ。頸部下 平口コナダの仕上げが露出で見られ、 ナツケが残る。頸部コナダ。内面口縁 部～頸部、頸部とコナダ。上部～ 下部コナダ。上部～下部コナダナツケ。 ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石・長石 多量含む。1～5mmの赤銅石。1cm程の 角閃石、1mm以下の金雲母を少し含む。 焼成良好。内面黒、外面に少し褐色 色。口縁部ナツケ。
陶直土	71	土師器 貯付罐	口径 8.3 口径 12.4 底径 13.2 底径 7.9	口縁部は底部から縁や中に内湾して立 ち上がり、へらの字状に外反する跡が 少し。頸部の内湾に内湾した面を施す。 頸部外面に細い溝に認められる。	外面頸部口縁部～上部コナダ。平口 コナダ。頸部コナダ。内面口縁部～ 頸部～下部コナダナツケ。頸部ナツケ コナダ。上部～下部コナダナツケ。ナツケ。	粘土やや硬。1～3mmの石灰・長石を含む。 1～4mmの赤銅石。1mm以下の角閃石・ 金雲母を少し含む。焼成良好。内面と 外面とも黒色。底面、口縁部ナツケ。

4号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・濃度等
周溝底	72	土師甕 甕	器高 30.3 口径 15.9 胴部最大径 27.7	内腹する複合口縁で、口縁隆起は肥大、 内傾して全体が平口。口縁下方は2つの 突出し、体部は球形。胴部は上部に2つの 小突起。外面は口縁部と一定距離に隆 起。腹径中、内面隆起以下に黒線、直 行線、74と入数字。	外腹口縁部へ隆起下口縁コナダ、体部上 口縁部へ、中位へ口縁コナダ、ナメタ タ。底部平頭状。内腹口縁部隆起下 口縁コナダ、隆起直下コナダ中位、 コナタナキタ、腹径タリ隆起、直下 コナダ。	粘土や中灰。1～2mmの石炭・灰土を含 む。1～5mmの赤褐色、15mm以上の赤 褐色、1mm以下の赤褐色と赤土を含む。 底に黄、内面外周ともに赤い。焼成 地質。
周溝底	73	土師甕 甕	器高 4.8 口径 [4.3]	外腹する複合口縁で口縁隆起は口縁に つながり出せる。外面と内面ともに 平頭状。	外腹口縁部へ隆起コナダ、内腹口縁部 へ隆起上口縁コナダ、胴部中位コナダ タ。底部コナダナキ。	粘土や中灰。1～2mmの石炭・灰土を含 む。1mmの赤褐色、15mm以上の赤 褐色、赤土を含む。焼成良好。外面 に赤い黄褐色。口縁部1/3以下。
周溝底	74	土師甕 浅杯	器高 11.2 口径 14.8 底径 11.2 底径 11.2 底径 8.9	今や平直な底部が口縁やに立上がり 平頭で、胴部隆起隆起で大きく外 出。胴部と胴部の間に2つの突起と で繋がる。下部に1条の黒線あり。 外腹内面赤黄い表の表面隆起。72と入 数字。	外腹口縁部へ隆起上口縁コナダ、下平 口縁コナダ、ハナメ。胴部上平直 工で繋がる。外腹、底部コナダ隆起、 ハナメ。隆起隆起コナダ。内腹口縁部 隆起下口縁コナダ、隆起直下コナ ダナキ、ハナメ。腹径コナダ隆起、 コナダ。	粘土や中灰。1～5mmの石炭・灰土・ 1～5mmの赤褐色を含む。1mmの赤褐色 と赤土を含む。内面平頭状。外腹内面 赤い。内面平頭状。胴部隆起に赤い 褐色。外面赤褐色。口縁部1/3以下は 赤い。
周溝底	75	灰土甕 坪蓋	器高 [5.6] 口径 11.9 底径 12.2	丸みを帯びた天部から口縁部まで中 位で下がる。外側面と内面と口縁部と に分ける隆起はくさくさ。突出しなく。口縁 部へ隆起以下にX字の跡の4記号を2 つ含む。	丸みを帯びた口縁部へ天部コナダ、天部 隆起コナダ隆起、傾くコナダ。天部 直上直下コナダ隆起、一部タリ。内腹 口縁部コナダ。胴部口縁コナダ隆起、一部 タリ。天部直上コナダ。	粘土土。1～2mmの石炭・灰土を含む。 1mmの赤褐色、15mm以上の赤褐色 と赤土を含む。口縁部隆起に赤い 褐色。口縁部・体部3/4。
周溝底	76	灰土甕 平蓋	器高 4.8 口径 [10.0]	丸みを帯びた天部から内腹で、口 縁部は口縁へ傾斜して下がる。外側 面と口縁部の境界下に黒線あり。中 位。	外腹口縁部コナダコナダ、天部平頭状へタ リコナダ隆起、傾くコナダ。内腹口縁 部コナダ、天部平頭状。	粘土土。1～2mmの石炭・灰土を含む。 焼成良好。口縁部隆起に赤い褐色。 口縁部1/4、体部3/4。

4号墳



72



73



75



74

5号墳

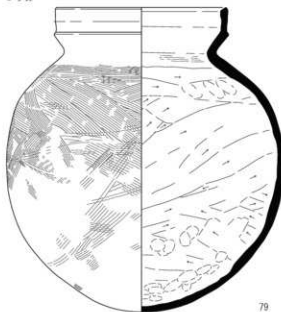


77

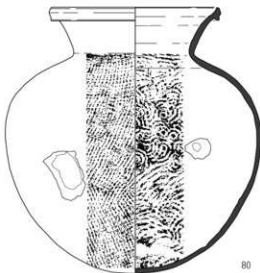


78

8号墳

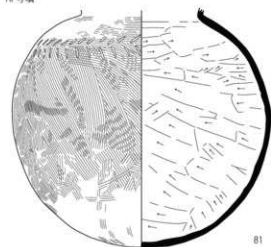


79



80

10号墳



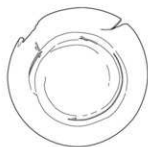
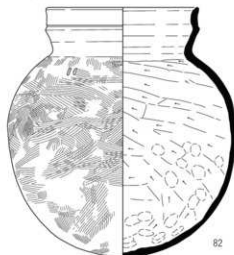
81

赤色塗彩



第87図 4号・5号・8号・10号墳出土土器

11号墳



84



85



86



87



88



89



90



91



92



93



94



95



96



97



98

13号墳



99



102



103



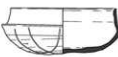
104



105



106



107



108

赤色塗彩



第88図 11号・13号墳出土土器

11号墳 土器(続き)

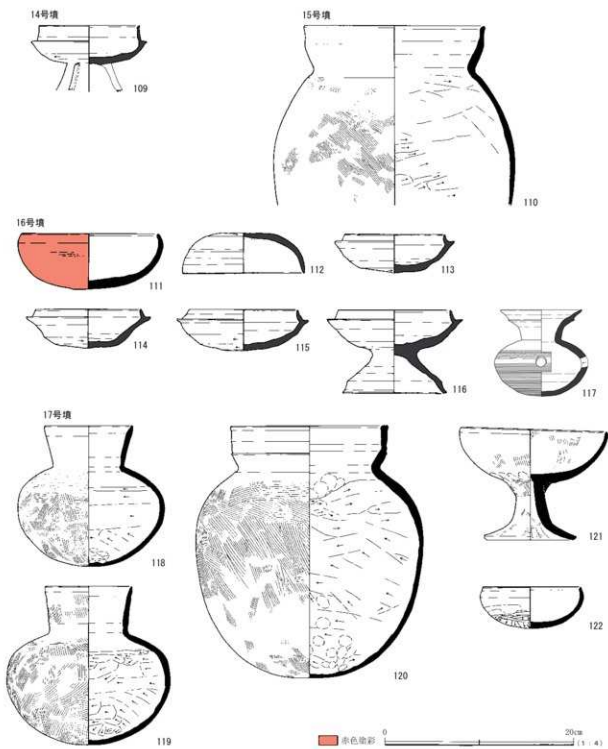
出仕位置	No.	部材	法量 (cm)	用 意	手 法	粘土・焼成・色調・濃度等
1号埋蔵施設 埋土	93	恒直器 円弁	断面 3.9 寸径 11.7 受筒径 14.3	体腔、受筒は外上りに伸ばじ、立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れ、やや平直な面を持つ。見込部分中央より。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→底留部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～2mmの石灰・長石を含む。 5mmの黒褐色点に1つ含む。1mm以下の金網を篩を通すことができる。焼成良好。内面灰白色、外面灰黄色。ほぼ平直。
1号埋蔵施設 埋土	94	恒直器 円弁	断面 4.2 寸径 11.3 受筒径 13.6	体腔、受筒は外上りに伸ばじ。立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れ、やや平直な面を持つ。見込部分中央より以下へ緩急を自然無断行。叩け可。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→底留部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～2mmの石灰・長石を含む。1mmの黒褐色点に若干含む。焼成良好。内外ともに灰白色。厚約1/2。
1号埋蔵施設 埋土	95	恒直器 円弁	断面 3.8 寸径 (10.9) 受筒径 (13.3)	体腔、受筒は外上りに伸ばじ。立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れ、やや平直な面を持つ。見込部分中央より。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→一部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～2mmの石灰・長石・1～2mmの黒褐色点に若干含む。焼成良好。内面灰白色、外面灰黄色。厚約3/8。
1号埋蔵施設 埋土	96	恒直器 円弁	断面 4.8 寸径 12.0 受筒径 14.1	体腔、受筒は外上りに伸ばじ。立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れは失われず、やや平直な面を持つ。外面白濁。叩け可。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→底留部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～2mmの石灰・長石を含む。1mm程度の黒褐色点に1つ含む。焼成良好。内面灰白色、外面灰黄色。ほぼ平直。
1号埋蔵施設 埋土	97	恒直器 円弁	断面 3.5 寸径 11.0 受筒径 14.3	体腔、受筒は外上りに伸ばじ。立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れ、やや平直な面を持つ。見込部分中央より。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→一部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～2mmの石灰・長石を含む。5mmの黒褐色点に1つ含む。1mm以下の金網を篩を通すことができる。焼成良好。内面と外面共に灰白色。
1号埋蔵施設 埋土	98	恒直器 円弁	断面 3.7 寸径 11.9 受筒径 14.1	体腔、受筒は外上りに伸ばじ。立ち上がりは小さく、縮漏しは短文。受筒無漏れは失われず、やや平直な面を持つ。見込部分中央より。	外面立ち上がり→係留部コナゴ、底面同形→ラウナー（長時間可）、内面立ち上がり→一部コナゴ、見込部分中央より中央まで。	粘土質、1～6mmの石灰・長石・1mm程度の黒褐色点に若干含む。1mm以下の金網を篩を通すことができる。内面と外面共に灰白色。

13 号墙 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・保存状態
周溝底	99	土師野 土郎	器高 30.7 口径 17.5 最大径 24.9	僅かに外反する複合口縁で、口縁外側に直線的に外張りして傾斜。口縁下腹曲線の間に1条の頸筋を文様とする。ヨコがね存在するが中層部で平が不明。内面はヤマトシズメ、外面はヤマトコウケツ文様。中部位ヨコガキ文様。下部ヨコガキ文様。体上部は直線ヨコガキ文様にシズメ、中部位ナメタリ、下部ナメタリニ変化する。	外面口縁部へ肩部上位ヨコガキ、腹部上位ハナヒラ、ヨコガキ、腹部上位ヨコガキや外部ハナヒラ、中部以下ナメタリ、下部ヨコガキが存在するが中層部で平が不明。内面はヤマトシズメ、外面はヤマトコウケツ文様。中部位ヨコガキ文様。下部ヨコガキ文様。体上部は直線ヨコガキ文様にシズメ、中部位ナメタリ、下部ナメタリニ変化する。	粘土や砂粒、1～1mmの石英・長石を含む。1～2mmの角閃石、1mm程度の金屑を含む。1mm以下の鉄屑も含まれる。焼成良好。内面青灰色、外面黄褐色。口縁部3/4、腹部7/8、顔面近辺完全。
周溝底	100	土師野 地郎	器高 5.6 最大径 10.0	底部から内湾して立ち上がる口縁を持つ。口縁部、外部ヨコガキ文様、内部無紋。	外面口縁部、ハナヒラ、内面の口縁部ヨコガキ。外部ヨコガキ文様。最大径部ユビオサエ。	粘土や砂粒、1～2mmの石英・長石を含む。焼成良好。内面褐色と浅黄褐色。口縁1/4、腹部3/4。
周溝埋土	101	土師野 地郎	器高 5.3 口径 11.5 最大径 12.9	底部から緩やかに内湾して立ち上がる口縁で、外面底部近くで浅く縦割文。	外面口縁部、一部ハナヒラ、内面ヨコガキ。見込部中央ナメタリ。	粘土や砂粒、1～1mmの石英・長石が多く含む。焼成良好。内面褐色。外面黄褐色。口縁1/4、腹部7/8。
周溝底	102	土師野 地郎	器高 10.0 口径 8.6 最大径 11.4	側壁から口縁部までほぼ平の形状に開き、口縁部に外張りし、やや急な傾斜で、外面に直線的に外張りした口縁部と外反りまたは緩やかな傾斜で、体部中央よりやや上から緩やかに外面に折り返し込んだ唇部あり。	外面口縁部→側部ヨコガキ、体上部位ヨコガキ。体部中央ナメタリのみ。下部ヨコガキ。底部ヨコガキ文様。工型による腰折れあり。内面に直線的に外張り。内面ヨコガキ文様にシズメ、体上部ハナヒラ、体部中央ユビオサエ。	粘土や砂粒、1～2mmの石英・長石を含む。1mm程度の角閃石、1mm以下の金屑を含み、焼成良好。内面黄褐色。外面黄褐色。口縁部、腹部完全。
周溝底	103	灰土器 坏系	器高 4.5 口径 11.5 最大径 11.8	緩やかに丸みを帯びた天部から口縁部は直線的に外張りし、口縁部は緩やかな傾斜で鋭く、口縁部端には傾斜して細い、短剣を持つ。	外面口縁部→体部ヨコガキ。天井部近辺ハナヒラのみ。内面に口縁部→天井部ヨコガキ、天井部中央ヨコガキ後、一部ハナヒラ工具類。	粘土や砂、1～2mmの石英を含む。1～2mmの角閃石を含む。5mm程度の鉄屑も1つ含む。焼成良好。外面褐色と灰白色。口縁完全。
周溝底	104	灰土器 坏系	器高 4.5 口径 14.2 最大径 14.4	やや丸みを帯びた天部から口縁部はやや急な傾斜で外張りし、外反部より口縁部は直線的に外張りし、ほとんど直線的に外張りしない。下部の下湾部。口縁部端には傾斜した内面。内面直線的に外張りせず、唇部に入らず。	外面口縁部→体部ヨコガキ。天井部近辺ハナヒラのみ。反対ハナヒラのみ。口縁部ハナヒラのみ。傾斜ハナヒラ。腹面、腹面直線ヨコガキ(反時計回り)3枚、腹面直線ヨコガキ(反時計回り)1枚、天井部中央ハナヒラのみ。	粘土や砂粒、1～2mmの石英・長石が多く含む。1～4mmの角閃石の粒、1～2mmの黄色の鉄屑も含まれる。焼成良好。内面黄褐色。外面褐色。天井部近辺、口縁完全。
周溝底	105	灰土器 坏系	器高 5.1 口径 10.0 受経部 12.0	体部、受経部は上方に伸び、立ち上がりは大きく、肩部は傾斜的。口縁部は急な傾斜で、受経部には突起的な突起がある。外面受経部に横線、僅かに自然輪文。	外面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ(反時計回り)。内面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ。	粘土や砂、1mm程度の石英を僅かに含む。1～2mmの角閃石を含む。1～2mmの黄色の角閃石の突起も含まれる。焼成良好。内面灰白色。外面褐色。立ち上がり3/4、体部完全。
周溝底	106	灰土器 坏系	器高 4.4 口径 10.1 受経部 12.2	体部、受経部は上方に伸び、立ち上がりは大きく、肩部は傾斜的。口縁部は急な傾斜で、受経部には突起的な突起がある。外面受経部に横線、僅かに自然輪文。	外面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ(反時計回り)。内面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ。	粘土や砂、1～2mmの石英、1mm以下の金屑を含む。1～2mmの角閃石の突起も含まれる。焼成良好。内面灰白色。外面褐色。立ち上がり3/4、体部完全。
周溝底	107	灰土器 坏系	器高 4.9 口径 10.9 受経部 12.8	体部、受経部は上方に伸び、立ち上がりは大きく、肩部は傾斜的。口縁部は急な傾斜で、受経部には突起的な突起がある。外面受経部に横線、僅かに自然輪文。	外面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ(反時計回り)。内面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ。	粘土や砂、1～4mmの石英、1～2mmの黄色の角閃石、1mm以下の鉄屑を含む。1～3mmの角閃石の突起も含む。1mm程度の角閃石の突起も含まれる。焼成良好。内面灰白色。外面褐色。口縁部、内面褐色と灰白色。完全。
周溝底	108	灰土器 坏系	器高 5.4 口径 10.2 受経部 12.6	体部、受経部は上方に伸び、立ち上がりは大きく、肩部は傾斜的。口縁部は急な傾斜で、受経部には突起的な突起がある。外面受経部に横線、僅かに自然輪文。	外面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ(反時計回り)。内面立ち上がり→体部ヨコガキ。逆時計回りのフグクツ。	粘土や砂、1～4mmの石英を含む。1～1mmの角閃石、1mm以下の鉄屑を僅かに含む。1mm以下の角閃石の突起も含む。1mm程度の角閃石の突起も含む。焼成良好。内面灰白色。外面褐色。口縁部、内面褐色と灰白色。完全。

14号罐 土器

出土地位	No.	器種	法量 (cm)	形 量	手 法	粘土・焼成・色調・痕産物
岡渡遺跡	109	原形器 有蓋高坪	口径 7(6) 底径 10(8) 最大径 12(2)	体部、受胎は外方に膨び、立ち上り は上りフラテ。腹部は内方に膨び、 腹部よりやや大なり、平坦な底を持つ。入 口の口元に広がる脚部が付き、3方向に 広がる穴を施す。脚部1つのみに中 空状。	内面立ち上りへ坪部上平口ヨコナデ、 底面ヨコナデ、内面坪部上平口ヨコナデ、 底面ヨコナデ、坪部内面ヨコナデヨコナデ、 底面ヨコナデ、底面中平ヨコナデヨコナデ、 底面立ち上りヤテ(反時計回り)脚部 ヨコナデ。	粘土、焼成・色調・痕産物 土色、1~2mmの石片、長石を少々含 み、焼成は中火、内面は灰黒、外 面上より1尾、坪部1尾、脚部1尾。



第89図 14号～17号墳出土土器

15号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	法量: () 推定値 [] 現存値
1号塚南西 部 墳土	110	土師器 甕	跡高 19.0 口径 18.8 胴部最大径 25.4	口縁端は外方にやや肥大し、内側に たれ面を持つ。口縁下の腹には下から かたがた突出しない。外面黒色に 光澤、内面は黒色に光澤し、調整不 明瞭な面あり。	外面口縁～胴部コナナ。胴部下位コ ナナ。胴部上～中部ナメケリ。内面 口縁～胴部コナナ。胴部下位コナ ナ。上～コナナ、ナメケリ、中位コ ナナナ。	胎土・焼成・色調・濃度 胎土や中灰。1～2mmの石灰、1～3mm の長石、1～7mmの黄褐色の鉄を含む。 1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。 焼成良好。内面黄褐色。外面黄褐色・ 灰に黄褐色。口縁部1/4、胴部1/4。

16号墳 土器

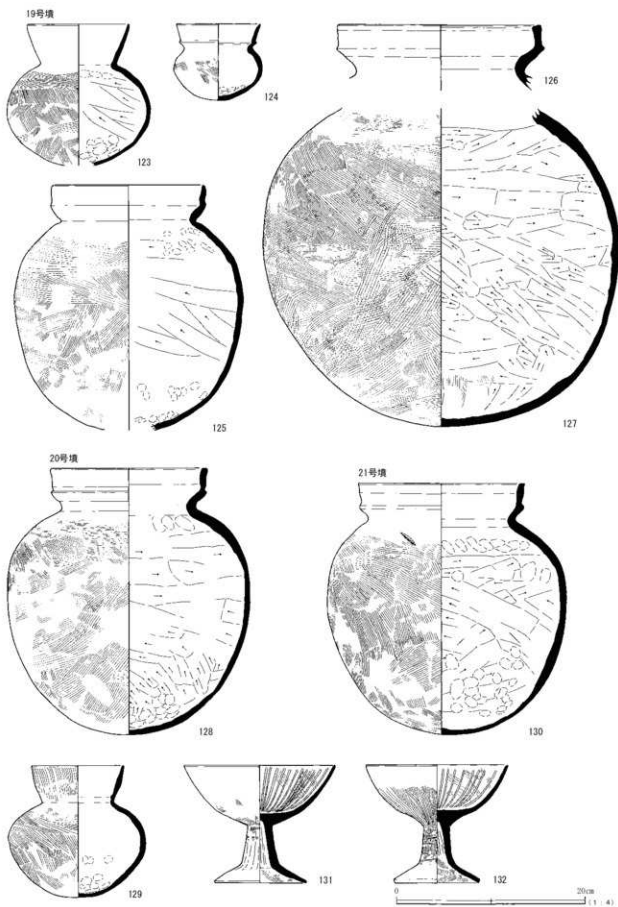
出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	法量: () 推定値 [] 現存値
周溝底	111	土師器 埴	跡高 5.9 口径 12.8 最大径 15.3	底面から縁やかに内湾して立ち上がる 口縁で、端部は丸く収まる。外面赤 褐色に光澤。内外面とも虫喰いの状 の跡あり。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部下位 コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土・焼成・色調・濃度 胎土・赤褐色。1mm以下の褐色砂粒 を多く含む。1～2mmの石灰・長石を含 む。1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。 1～3mmの黒色砂粒を含む。内面赤褐色・ 灰、内外面とも褐色。完形。
周溝底	112	灰土器 片手	跡高 4.3 口径 12.8 最大径 13.0	平坦な外周部から、口縁部は開き気味 に下がり、外面と内面とも口縁部の境 界不明瞭。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土・赤褐色。2mm以下の長石を含 む。内外面とも褐色。完形。
周溝底	113	灰土器 片手	跡高 4.1 口径 10.5 受径 12.6	体部、受部は外方に伸び、立ち上がり は小さく、受部・立ち上がり部は丸 く収まり、縁やかなら底を持つ。	外面立ち上がり～胴部コナナ。胴部上 ～ヘラケリ (時計回り)。内面立ち上 がり～底面コナナ。見込み部中央に 上げナ。	胎土・赤褐色。1mm以下の金雲母を 僅かに含む。内面黄褐色。外面黄褐色・ 灰。完形。
周溝底	114	灰土器 片手	跡高 4.1 口径 11.0 受径 13.2	体部、受部は外方に伸び、立ち上がり は小さく、受部・立ち上がり部は丸 く収まり、縁やかなら底を持つ。	外面立ち上がり～胴部コナナ。胴部上 ～ヘラケリ (時計回り)。内面立ち上 がり～底面コナナ。見込み部中央に 上げナ。	胎土・赤褐色。1mm以下の長石を含 む。内面黄褐色。外面黄褐色・灰・ 黄褐色。完形。
周溝埋土 下層	115	灰土器 片手	跡高 4.4 口径 11.3 受径 13.9	体部、受部は外方に伸び、立ち上がり は小さく、内面は丸く収まる。受部 端部は丸く収まる。受部端部は丸く収 まる。受部端部は丸く収まる。	外面立ち上がり～胴部コナナ。胴部上 ～ヘラケリ (反時計回り)。内面立ち 上がり～底面コナナ。見込み部中央に 上げナ。	胎土・赤褐色。5mm以下の長石、1 ～3mmの黒色砂粒を含む。内面黄褐色・ 灰。完形。
周溝埋土 下層	116	灰土器 有蓋高	跡高 8.8 口径 11.7 受径 14.2 底径 10.4	体部、受部は外方に伸び、立ち上がり は小さく、端部は丸く収まる。受部 端部は丸く収まる。受部端部は丸く収 まる。受部端部は丸く収まる。	外面立ち上がり～胴部コナナ。胴部上 ～ヘラケリ (反時計回り)。内面立ち 上がり～底面コナナ。見込み部中央に 上げナ。	胎土・赤褐色。2mm以下の長石を含 む。1mm以下の角閃石・金雲母を僅かに含む。 内面黄褐色。外面黄褐色・灰。完形。
周溝埋土 中層	117	灰土器 片手	跡高 9.1 口径 9.5 胴部最大径 9.9	底面から口縁部は平らな平面上に開き、 口縁下は外側に下向きに丸く収まる。 口縁部は丸く収まる。口縁部は丸く収 まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～最大胴部コナナ。最大 胴部上～底面コナナ。内面口縁部～ 胴部コナナ。	胎土・赤褐色。1mm以下の長石、1 ～3mmの黒色砂粒を含む。内面黄褐色・ 灰。完形。

17号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	法量: () 推定値 [] 現存値
周溝底	118	土師器 直口蓋	跡高 14.8 口径 9.1 胴部最大径 15.6	口縁部は外方に外反し、口縁部は丸く 収まり、口縁部は丸く収まる。口縁部 は丸く収まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰を含む。1 ～4mmの長石・赤褐色砂粒。1mm以下の 金雲母を少量含む。焼成良好。内外面 とも褐色。口縁1/8、胴部1/8はほぼ完 形。
周溝底	119	土師器 直口蓋	跡高 16.8 口径 9.0 胴部最大径 17.2	口縁部は外方に外反し、口縁部は丸く 収まり、口縁部は丸く収まる。口縁部 は丸く収まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰を含む。1 ～4mmの長石・赤褐色砂粒。1mm以下の 金雲母を少量含む。焼成良好。内外面 とも褐色。口縁1/8、胴部1/8はほぼ完 形。
周溝底	120	土師器 直口蓋	跡高 26.6 口径 11.4 胴部最大径 24.0	口縁部は外方に外反し、口縁部は丸く 収まり、口縁部は丸く収まる。口縁部 は丸く収まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰を含む。1 ～4mmの長石・赤褐色砂粒。1mm以下の 金雲母を少量含む。焼成良好。内外面 とも褐色。口縁1/8、胴部1/8はほぼ完 形。
周溝底	121	土師器 高片	跡高 11.9 口径 15.2 胴部最大径 15.4 底径 9.0	平坦な底面から縁やかに立ち上がる外 周部で、胴部は丸く収まる。胴部は丸 く収まる。胴部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰・長石を含 む。1mm以下の角閃石・金雲母を少量 含む。焼成良好。内外面とも褐色。口 縁1/8、胴部1/8はほぼ完形。胴部上～ 中部ナメケリ。
周溝底	122	土師器 直口蓋	跡高 4.5 口径 10.9 最大径 10.9	底面から縁やかに内湾して立ち上がる 口縁で、端部は丸く収まる。口縁部は 丸く収まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰・長石・1 ～3mmの黒色砂粒。1mm以下の角閃石・ 金雲母を少量含む。焼成良好。内外面 とも褐色。口縁1/8、胴部1/8はほぼ完 形。

19号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	法量: () 推定値 [] 現存値
周溝底	123	土師器 直口蓋	跡高 15.0 口径 10.3 胴部最大径 15.2	口縁部は外方に外反し、口縁部は丸く 収まり、口縁部は丸く収まる。口縁部 は丸く収まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰・長石を少 量含む。焼成良好。内外面とも褐色。 口縁1/8、胴部1/8はほぼ完形。
周溝底	124	土師器 小型丸底蓋	跡高 8.1 口径 8.7 胴部最大径 9.4	外反する腹面から口縁部は丸く収まる。 口縁部は丸く収まる。口縁部は丸く収 まる。口縁部は丸く収まる。	外面口縁部～胴部コナナ。胴部上～ ヘラケリ (反時計回り)。内面口縁部 ～胴部コナナ。胴部上～中部ナメケリ。	胎土や中灰。1～3mmの石灰・長石を少 量含む。焼成良好。内外面とも褐色。 口縁1/8、胴部1/8はほぼ完形。



第90図 19号～21号墳出土土器

19号墳 土器 (続き)

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存物
周溝近	125	土師器 甕	跡高 26.0 口径 15.8 胴部最大径 24.2	ほぼ直立する複合口縁で、口縁端部はやや外傾して面を持ち、浅い部腹文を施す。口縁下縁は少し外側に突出し、体部は壁やかな厚を持つ板状。外面全面に黒焼、胴部に下に横紋。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ・最大胴部ヨコナデ後、ナメメハ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。最大胴部～体部下半ヨコ、ナメメハ。底部はナメオサエ。	胎土やや硬。1～6mmの石灰・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒を少し含む。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄褐色。外面褐色。口縁部・胴部1/2、体部ほぼ正色。
周溝近	126	土師器 直口壺	跡高 7.1 口径 (26.9)	底かに内傾する複合口縁で口縁端部はやや外傾し、僅かに内傾し、僅かな面を持つ。口縁下縁は外側にのみみ出される。127と同一体の可能性がある。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部下縁残存せず顕著不明。	胎土やや硬。1～3mmの石灰・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面に少し黄褐色。外面に少し黄褐色。口縁部・胴部3/4。
周溝近	127	土師器 甕 体部	跡高 (33.6) 胴部最大径 (37.4)	体部はほぼ直交する外面と上縁に強い黒焼。下半は黒焼、復行着。126と同一体の可能性あり。	外面胴部下半ヨコナデ。体部上半～底部様々な方向のハケム。途中で折り返すハケムが顕著。内面体部上半ヨコナデ。下半～中位ヨコ。ナメメハのタテハ。底部タテハ。一部底に強いタテハ。	胎土やや硬。1～6mmの石灰・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面に少し黄褐色。外面に少し黄褐色・褐色。体部3/4。

20号墳 土器

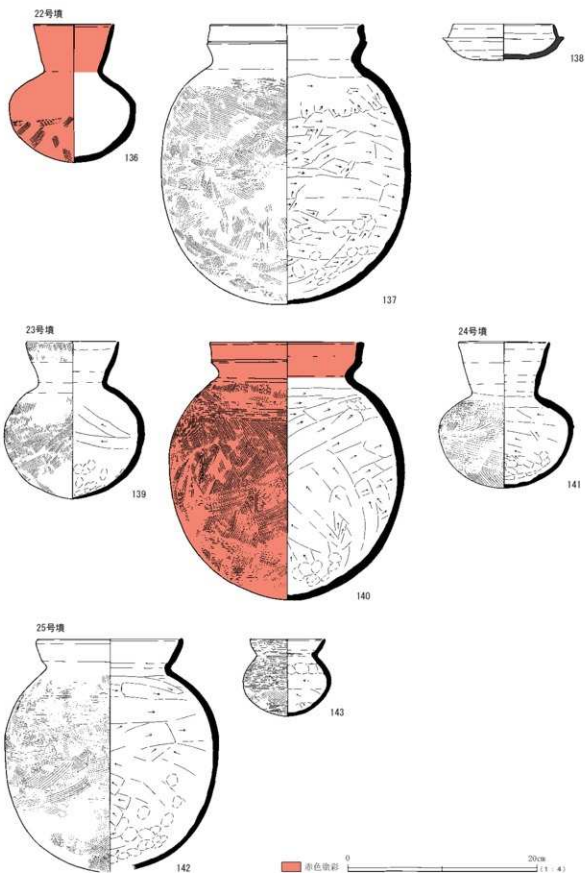
出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存物
周溝近	128	土師器 甕	跡高 28.2 口径 (16.3) 胴部最大径 25.6	底かに外反する複合口縁で、口縁端部はほぼ水平で平直面を持つ。口縁下縁は外側に突出する。体部はやや厚いつまみ。底部、外面胴部以外に黒焼。復行着。内面全周黒焼。薄く復行着。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部下半ヨコナデ。胴部ヨコナデ後タテハ。最大胴部～底部。不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部下半ヨコナデ。胴部～底部は体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。体部下半ヨコナデ。下部タテハタテハ。一部底に強いタテハ。	胎土やや硬。1～6mmの石灰・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄褐色。外面に少し黄褐色・褐色。体部3/4。

21号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存物
周溝底付近	129	土師器 直口壺	跡高 13.9 口径 9.6 胴部最大径 14.6	口縁部はなだらかに外傾しながら伸び、口縁と胴部を接合した際の粘土質が縁が外面に残る。胴部は太く、体部はやや厚がつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。最大胴部～ナメメハ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～体部下半ヨコナデ。底部ユビオサエ。	胎土やや硬。1～3mmの石灰・長石を少し含む。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも褐色。口縁部・体部7/8。
周溝近	130	土師器 甕	跡高 26.5 口径 17.3 胴部最大径 25.3	底かに外反する複合口縁で、口縁端部はほぼ水平で平直面を持つ。口縁下縁は外側に突出する。体部はやや厚いつまみ。底部、外面胴部以外に黒焼。復行着。内面全周黒焼。薄く復行着。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部～底部。不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土やや硬。1～6mmの石灰・長石を含む。1～2mmの茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内面黄褐色。外面に少し黄褐色。口縁部・胴部3/4。
周溝近	131	土師器 高杯	跡高 12.4 口径 15.8 底径 9.7	口縁部の坪部で、平坦な底部から縁やぐに内傾して立ち上がり、縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～上部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1mm以下の石灰・長石を少し含む。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも褐色。ほぼ正色。
周溝近	132	土師器 高杯	跡高 12.5 口径 14.9 底径 8.7	口縁部の坪部で、平坦な底部から縁やぐに内傾して立ち上がり、縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。以下タテハ。胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1～3mmの石灰・長石を少し含む。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも褐色。正色。
周溝近	133	土師器 高杯	跡高 12.7 口径 15.1 底径 9.5	平坦な底部から縁やぐに内傾して立ち上がる坪部で、口縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。接合部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1～3mmの石灰・長石・1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも褐色。正色。
周溝近	134	土師器 高杯	跡高 18.9 口径 16.3 底径 10.0	かなり急な角度で坪部で、やや平坦な底部から縁やぐに内傾して立ち上がり、縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。最大胴部～ナメメハ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1～2mmの石灰・長石・茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも褐色。ほぼ正色。
周溝近	135	土師器 高杯	跡高 12.9 口径 16.9 底径 10.2	口縁部の坪部で、平坦な底部から縁やぐに内傾して立ち上がり、縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。最大胴部～ナメメハ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1mm程度の石灰・長石・角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも褐色。正色。

22号墳 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存物
周溝近	136	土師器 直口壺	跡高 14.7 口径 8.4 胴部最大径 13.4	口縁部はなだらかに外傾しながら長く伸び、口縁と胴部を接合した際の粘土質が縁が外面に残る。胴部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～最大胴部ヨコナデ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。1～2mmの石灰・長石・茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を含む。焼成良好。内外面とも褐色。ほぼ正色。
周溝遠土	137	土師器 甕	跡高 29.5 口径 16.0 胴部最大径 26.4	底かに内傾する複合口縁で、口縁端部は内傾して面を持つ。口縁下縁は少し外側に突出し、体部の上部に1条の部腹文を施す。体部はやや厚いつまみ。底部、外面胴部～下部に黒焼。復行着。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部下半ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土やや硬。1～6mmの石灰・長石・1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも褐色。口縁部・胴部2/3、体部以下正色。
周溝近	138	東夷器 坪部	跡高 3.8 口径 10.4 底径 12.8	体部、底部は外方に立ち上がり、口縁部はやや大きく、縁端部は外側に突出する。体部は太く、体部はやや厚いつまみ。底部は少し外側に突出する。	外面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。最大胴部～ナメメハ。体部下半～底部不定方向の交差するハケム。内面口縁部～胴部ヨコナデ。胴部ヨコナデ後、ユビオサエ。体部下半ヨコナデ。下部はナメオサエ。中位ヨコナデ。下部タテハ。ユビオサエ。	胎土硬。3mm以下の石灰・長石を含む。3～6mmの茶色砂粒。1mm程度の角閃石。1mm以下の金雲母を少し含む。焼成良好。内外面とも褐色。正色。



第91図 22号～25号墳出土土器

23 号墙 土器

出土位置	No.	図様	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・腐食度
周溝底	139	土師胡 豆口蓋	径 16.6 高さ 9.6 最大断面径 14.9	口縁部はほぼたての裏側に、外縁は口縁部と口縁部を結ぶたての裏側の彫り筋で、縦部がやや太く、体部は縦部よりやややわやわな模様の、外縁全面に彫り込む。	外面に緑褐色コナヤ。縦部はヨコヤ。肩部分には、最大縦部と一部断面方向の交差するたての裏。内面は縦部と一部断面方向の交差するたての裏と平ヨコヤ。縦部はヨコヤ。	粘土やや硬。1～4mm の石屑・長石、1mm 以下の角石屑、1mm 以下の重石屑を含有。焼成良好。内外ともに緑褐色。ほぼ定規。
周溝底	140	土師胡 甕	径 25.3 高さ 15.3 最大断面径 24.9	僅かに外唇する腹合口縁で、口縁縁部は少し内側に、面割った上 1 条の彫り筋を有する。体部は縦部と縦部とを結ぶたての裏の彫り筋で、断面に 1 箇所のたての裏を有する。内面口縁縁部と腹面に黄色い模様の、外面体部肩部以下に黄い重模様の。	外面口縁縁部・縦部コナヤ。腹面下位コナヤ。縦部肩以下はヨコヤ。交差するナメタ。体部口縁縁部と縦部はヨコヤ。ナメタ。V 字の彫り筋を有する。断面は一部断面方向の交差するたての裏。内面口縁縁部・縦部コナヤ。縦部はヨコヤ。縦部と断面方向の交差するたての裏。体部上段ナメタのタテ。中タテタテ。下位タテタテタテ。ヨコヤ。	粘土やや硬。1～3mm の石屑・長石、1mm 以下の角石屑、1mm 以下の重石屑を含有。中程度の焼成。体部は黄褐色。口縁部はやや不具、内面内面に少し黄い模様の。

24 号罐 土器

出土位置	No.	図様	法長 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
川津池	141	土師器 直口壺	跡高 15.4 開口部最大径 14.1	口縁部はなだらかに傾斜しながら長く伸び、口部と胴部を分ける太い帯の輪郭が明確に現れる。底部中央には浅く凹んだ痕跡。外面磨き付、体部下半部は素焼きに焼る。	外周口縁部へ縦線ヨコナデ、体部肩隅部クマハシヨコナデ、体部底面ヨコナデの筋目不定方向の交差するクマハシ。内面に縦線・横線ヨコナデ、縞目下クマハシヨコナデ、縞目上クマハシヨコナデ、縞目下クマハシヨコナデ、縞目上クマハシヨコナデの筋目不定方向の交差するクマハシ。底面中央には浅く凹んだ痕跡。	粘土や灰土。1 ~ 2mm の片方石・茶色鉄屑。10%程度は黒炭。10%以上は赤褐色。表面は黄褐色。体部明褐色。内面暗褐色。ほぼ完全。

25 号墙 土器

出土位置	No.	器種	法量 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存物
同陳埋土	142	土師罎 口縁部 高さ 24.6 口径 15.0 胴部最大径 22.6		口縁部は内外の字状に広がり、外形は僅かに内湾、口縁部は内面に垂直に平坦面を有す。口縁部下に突出した短足の土師土は胴部を形成す。内面は僅かに内湾、内面下部に深い凹溝。僅かに残存有す。	外面口縁部へ胴部ヨコナジ、胴部下へ最大胴部直位のヨコナジ、最大胴部直位よりナメタムシ、口内字状にヨコナジヨコナジ、内面口縁部より胴部ヨコナジ、体部下ヨコナジ、体部下ナメタムシ、タタナシ、底、ユビナシ。	胎土赤、1~2mm の石膏・長石、1.5mm 以下の金雲母、0.5mm 以下の赤雲母を少し含む。焼成良好、内面・外面ともに黄褐色。〔底〕灰白色、口縁部に欠損あり。
2号埋施敷地 墳丘上	143	土師罎 小径大底面 高さ 8.2 口径 7.8 胴部最大径 9.3		口縁部は内外の字状に広がり、体部は内湾、外面胴部下に凹溝。体部有す。内面胴部下に凹溝。	外面口縁部へ最大胴部直位のヨコナジ・ギザ、体部下ヨコナジ・ギザ、ナメタムシ、タタナシ、ヨコナジギザ、内面口縁部ヨコナジ、胴部ヨコナジ・ギザ、胴部下ヨコナジ・ギザ、胴部直位より、胴・胴部直位よりへ最大口縁部へ最大口縁部直位のヨコナジ・ギザ。	胎土赤、1~2mm の石膏・長石を少し含む、1mm 以下の金雲母、1mm 以下の赤雲母を含む。焼成良好、内面と外縁色。口縁・体部有す。底良好。

1 号段状渣槽 土器

[illegible]

1. 号十器埋設槽構 十器

出土位置	No.	図解	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・灰土・色調・長さ等
土師貫土師 灰面	146	土師貫土師 口徑 (5.3)	高さ [15.6] 口徑 [5.3]	口縁部は内傾して、口縁部は拡大し、 水文が平らで、底面は平らで縁が太く、 147と同じ一輪様の可能性あり。	外面口縁ケズヨ、コナナグ、貫詞コナ ナグ、内面口縁一貫詞コナナグ	粘土赤、1mm以下の石片・長石を少し含 む。1mm程度の角角の1mm以下の金属屑 を含む。焼成良好、内面と外側色、口 縁部はほぼ一致しているものを含む。
土師貫土師 灰面	147	土師貫土師 口徑 (18.7)	高さ [18.7] 口徑 (18.7)	例外的な形状で、器型は厚く底面は平ら で、146と同じ一輪様の可能性あり。	外面最大頸部一帯下面下コナナグ、底 面下コナナグ、底面アブリコシ、オ シケ、内面最大頸部一帯下面下コナナ グ、部分の口縁ケズヨ・角角の長石・底 面下コナナグ	粘土赤、2mm以下の石片・長石を少し含 む。1mm程度の角角の1mm以下の金属屑 を含む。焼成良好、内面と外側色、口 縁部はほぼ一致しているものを含む。

2号土器埋設遺構 土器

出土位置	No.	群種	法長 (cm)	形 態	手 法	胎土・焼成・色調・遺存度
図面	148	土質質土器 灰被遺	口縁 26.6 口内径 16.3 胴最長径 26.6 底径 13.9	口縁部は内傾して、口縁端にやや歯を 持つ。胴・頸部は直線的で、 口縁からやや曲を伴った頸部の体部で、 肩部に2本の直線文をあらわす。体 部下部には平足を施す。灰被あり。 底面は平坦。	外面黄白コナダ、内面口縁部→肩部 まで赤褐色～起野辺いコナダ、底面 黄白コナダ。	胎土やや重、2mm以下の石片・長石、 粘土の角質片、1mm以下の赤褐色土 を伴う。硬質良好。内外面とも褐色。口 縁部は、焼成78。

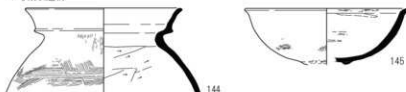
遺機外 十器

出土位置	No.	図様	法量 (cm)	形 態	手 法	粘土・焼成・色調・遺存度
溝渚外 の発見地①	149	環状器 坏者	直径 4.1 高さ 13.1 底径長 13.4	平皿状天幕から、口縁部は浅き碗状に明 転する。弁蓋上部には内側縁が折れ込 み、口縁部は内側に折る。輪軸(弁蓋)と 口縁部との間に突起で出た。肩角から先 下へ数分斜行。	外面口縁部に線文を施すコナダ。天笠部は蛇 ヘタツキ(時局用?)。天笠部中央先周 からコナクケス瓦。縦ナゲナ。天笠部 の裏面は土質で出来て、天笠部から先 下方方向の上り。	粘土堅い。1号～3号の石炭・長石を含む。 焼成温度、内面より外面へ。ほぼ完成。 ほぼ完成。
溝渚外 (1号墳跡)	150	環状器 坏者	直径 9.7 高さ 12.4	体容、変型は外方上りに挙げ、立上がり 部分小く内傾し、頸部は緩く反り瓦 能。受部端部に丸く収まる。緩やかに	外面立ち上りが一様なコナダ。底面滑 らか。一部土跡あり。内面は体容リ ナ。	粘土堅い。1～4mmの長石・灰白色砂粒を 含み含む。1.2mmの片状赤土を含むに似 せぬ。内外面とも同様に色。口縁部・ 底面は土質。

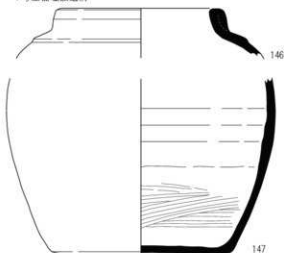
土製品

No.	出土位置	種類	最大径 (cm)	最大長 (cm)	最大厚 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備考
D1	5号船穴建物 埋土	紡錘車	4.1	—	0.6	0.6	9.6	志形
D2	7号船穴建物 埋土	紡錘車	3.9	—	0.6	0.4	8.5	完形
D3	1号墳 周溝 表土	土瓦	3.1	3.5	—	0.5	14.6	遺存度 1/2

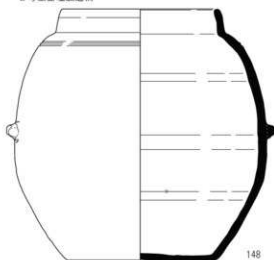
1号段状遺構



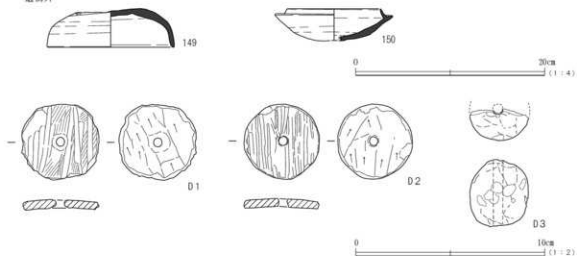
1号土器埋設遺構



2号土器埋設遺構



遺構外



第92図 1号段状遺構、1号・2号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品

鉄器

出所：[] 保存庫

No.	出土位置	種類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備 考
F 1	1号竪穴建物 P 7 掘方埋土直上	鉄矛	54.6	5.4	3.0	
F 2	1号竪穴建物 P 7 柱根跡と掘方埋土の間に	板状鉄斧	27.4	7.1	0.7	
F 3	1号竪穴建物 床面	鋸造鉄斧	11	8.9	3.0	
F 4	1号墳 4号埋葬施設 埋土下層	鉄鐔	8.5	6.7	2.1	楕円形、105 g
F 5	1号墳 11号埋葬施設 埋土	鉄鐔	[4.6]	1.0	0.3	ふちい中。
F 6	1号墳 14号埋葬施設 検出面	鉄刀子	[4.5]	1.5	0.4	木質・漆付着。
F 7	4号墳 周溝底	鉄鐔	9.9	1.3	0.6	F 7～F 9が接着。
F 8	4号墳 周溝底	不明鉄製品	8.5	1.3	0.7	F 7～F 9が接着。
F 9	4号墳 周溝底	不明鉄製品	8.9	0.8	1.0	F 7～F 9が接着。
F 10	4号墳 周溝検出面	馬具（靱金具）	[2.6]	[3.0]	0.6	木質付着。
F 11	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平出面	鉄鍬跡先	15.8	16.7	1.7	U字形。
F 12	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平出面	鉄鍬	12.8	4.2	0.6	曲刀鍬。
F 13	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平出面	鉄鉋	[11.4]	1.7	0.9	木質付着。
F 14	11号墳 1号埋葬施設 上段掘方平出面	鉄鉋	26.8	1.9	1.3	平鉋。
F 15	25号墳 2号・3号土主体部 上段掘方埋土	鉄刀子	[9.0]	1.1	0.4	
F 16	3号溝 埋土	鉄鐔	[14.0]	[0.7]	0.4	長条鐔。
F 17	1号段状遺構 埋土	鉄鍬	[7.2]	3.5	0.4	
F 18	遺構外（2号竪穴建物の北側回り）	馬具（靱金具）	6.6	4.8	0.6	銅器跡（漆）より出土。
F 19	遺構外（2号竪穴建物の北側回り）	馬具（靱金具）	6.3	4.4	0.5	

1号竪穴建物の床面で出土した舶載品の鉄器 F 1～F 3 について述べる。

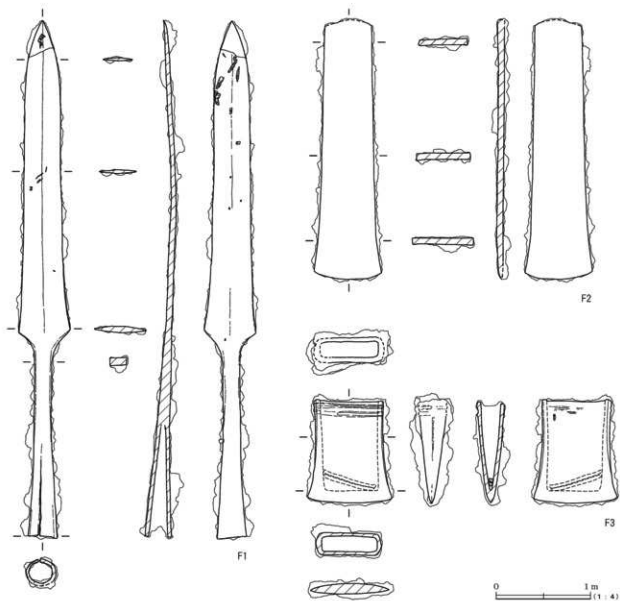
鉄矛（F 1） 全長 54.6cm、間幅 5.4cm、袋幅 3.1cm、袋部の厚さ 3.0cmを測る。刃部先端から間部にかけて次第に広がる。刃部中心にわずかに鎧が見られる。断面形は刃部が菱形、基部が長方形、袋部は円形に近いが、鍛打した後の鉄板を折り曲げ整形して作られたため鈍い稜がでべき多角形を呈す。完形であるが刃部先端から 3.0cm の位置で破損している。また、1号竪穴建物の焼失の際の比熱によるものか、刃部中央でやや折れ曲がる。刃部先端から中央にかけて両面とも炭化材の細片が付着している。

板状鉄斧（F 2） 全長 27.4cm、刃幅 7.1cm、最大厚 0.7cmを測る。基部から刃部へと緩やかに広がり平面梯形を呈す。刃部がわずかに湾曲して広がる。各面が丁寧に鍛打成形され稜線も鋭い。両側面の鍛打によって横断面がやや凹レンズ状を呈し、両側縁部に最大厚をもつ、朝鮮半島の板状鉄斧に見られる特徴を有している。刃部の研磨は錆のため観察ができないが、両刃で、刃部及び基部端辺は弧状を呈す。

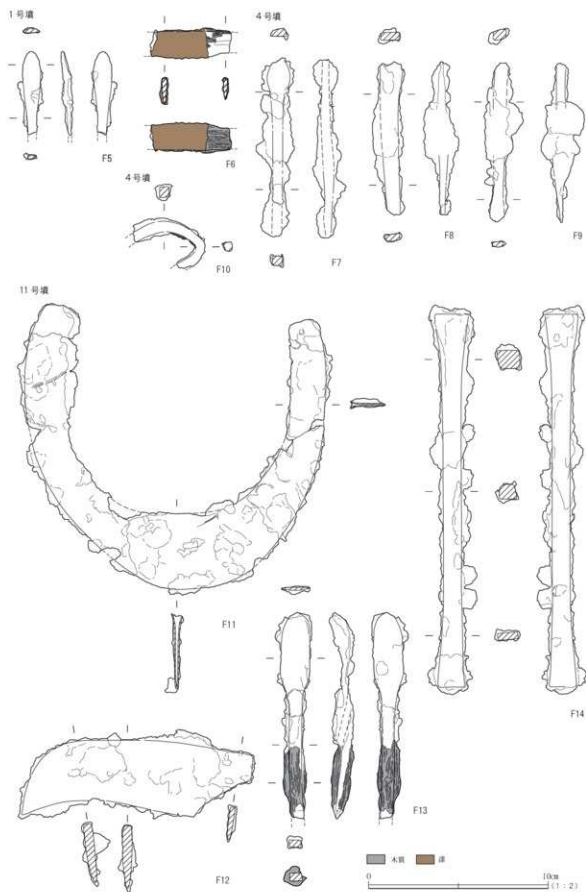
鋸造鉄斧（F 3） 全長 11.0cm、袋幅 7.3cm、刃幅 8.9cm、最大厚 3.0cmを測る。袋部から刃部にかけて湾曲して刃部が鋸状に広がる。袋部直下に 2 条の突帯を有する。袋部側面に双合范の合わせ目が稜線状に残り、横断面は長六角形を呈す。X 線 CT 調査により、袋部内で長さ約 5.5cm の 2 本の棒状鉄製品が確認された。袋部横断面と平面形の特徴から、村上恭通氏が 3 分類した 2 条突帯斧のⅢ式に分類される¹⁾。（片岡）

註

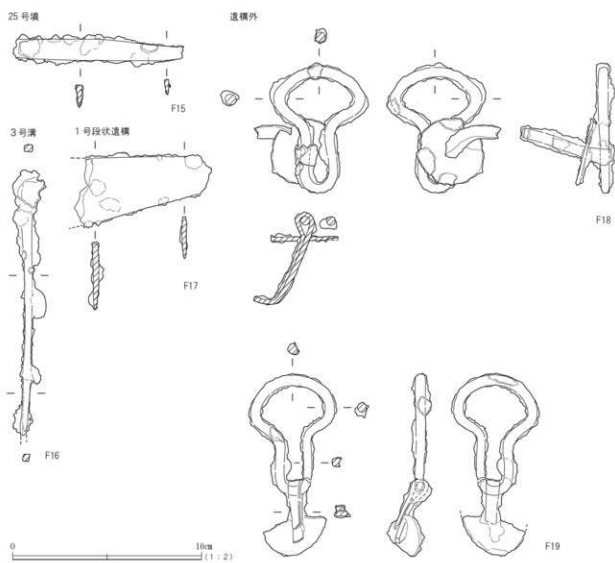
- 1) 村上恭通「東アジアの二種の鋸造鉄斧をめぐって」『たたら研究』29、たたら研究会、1988 年



第 93 图 1 号竖穴建物出土鉄器



第94図 1号・4号・11号墳出土鉄器



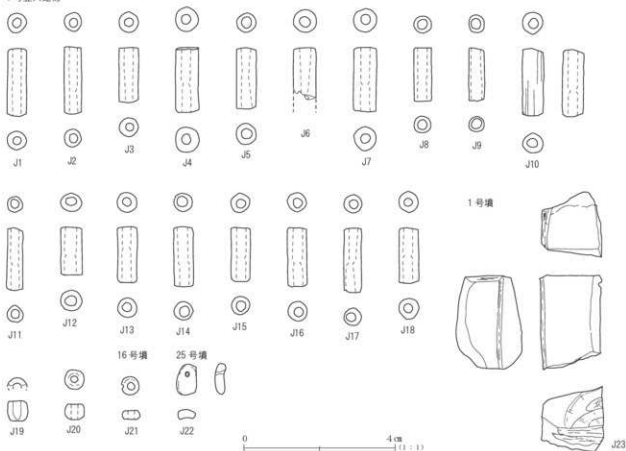
第95図 25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器

玉類・玉作関係遺物

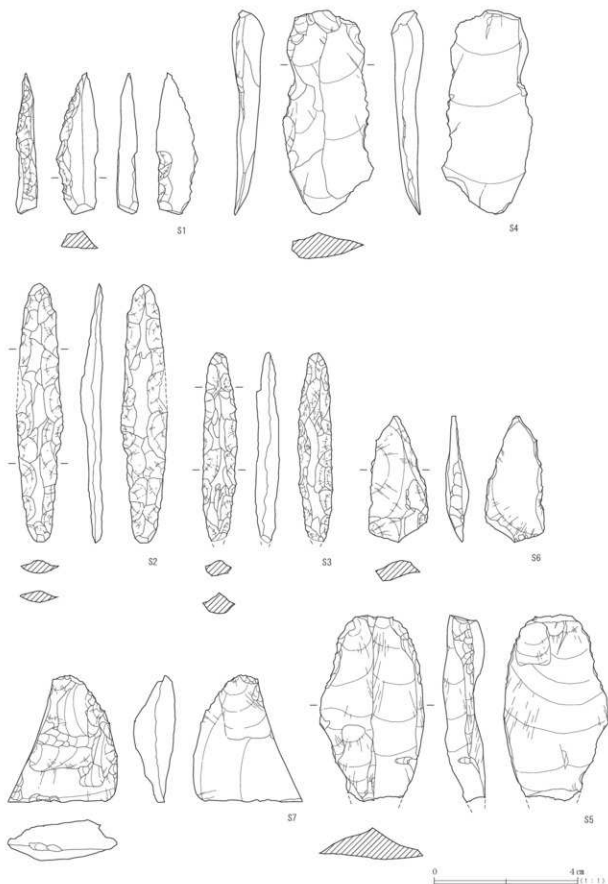
法量: [] 現存量

No.	出土位置	種類	石材	色調	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備 考
J 1	1号竪穴建物 埋土	碧玉	緑色凝灰岩	灰白色	1.8	0.5	0.2	0.6	
J 2	1号竪穴建物 埋土	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.75	0.45	0.2	0.5	
J 3	1号竪穴建物 埋土	碧玉	碧玉	オリーブ黒色	1.45	0.5	0.3	0.6	微針による穿孔。
J 4	1号竪穴建物 炭化材C 23下	碧玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.7	0.6	0.3	0.95	
J 5	1号竪穴建物 炭化材C 136下	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.6	0.5	0.25	0.5	ふるい中。
J 6	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	[1.35]	0.6	0.25	0.5	
J 7	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.7	0.6	0.25	0.95	
J 8	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.4	0.45	0.25	0.3	
J 9	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	灰オリーブ色	1.4	0.4	0.3	0.35	
J 10	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.75	0.55	0.25	0.55	
J 11	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.65	0.4	0.2	0.35	微熱。
J 12	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.25	0.55	0.3	0.45	
J 13	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.45	0.5	0.25	0.45	
J 14	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.55	0.5	0.25	0.4	
J 15	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	浅黄色	1.4	0.5	0.25	0.45	
J 16	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	灰白色	1.55	0.5	0.25	0.5	
J 17	1号竪穴建物 床面	碧玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.7	0.45	0.25	0.45	
J 18	1号竪穴建物 養生土層 (4) 下	碧玉	緑色凝灰岩	灰黄色	1.45	0.5	0.25	0.5	ふるい中。
J 19	1号竪穴建物 床面	ガラス管玉	—	浅青色	0.5	0.5	0.2	0.05	ふるい中。
J 20	1号竪穴建物 床面	ガラス小玉	—	紺色	0.4	0.5	0.2	0.15	ふるい中。
J 21	16号墳2号埋葬施設 埋土	ガラス小玉	—	浅青色	0.25	0.5	0.2	0.05	ふるい中。
J 22	25号墳1号主体部 埋土	ガラス製品	—	浅青色	0.8	0.5	0.1	0.2	ガラス管玉の転用。鉛直方向に分割された碧玉に穿孔を集したもので、風化。
J 23	1号墳 墳丘上	碧玉未成品	碧玉	緑緑灰色	2.45	1.6	1.7	10.65	形制素材。右側による磨切痕がみられる。
J 24	5号竪穴建物 P 32 埋土	剥片	水晶	透明	0.4 ~ 1.3	0.1 ~ 0.9	—	0.01 ~ 0.45	計9点、3.65 g
J 25	5号竪穴建物 P 32 埋土	剥片	緑色凝灰岩	緑灰色	0.4 ~ 0.8	0.3 ~ 0.5	—	0.01 ~ 0.65	計6点、0.1 g

1号竪穴建物



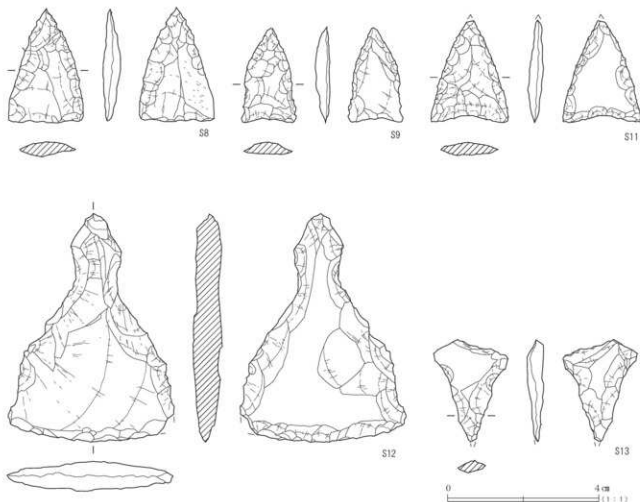
第96図 1号竪穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号竪穴建物、1号墳出土玉作関係遺物



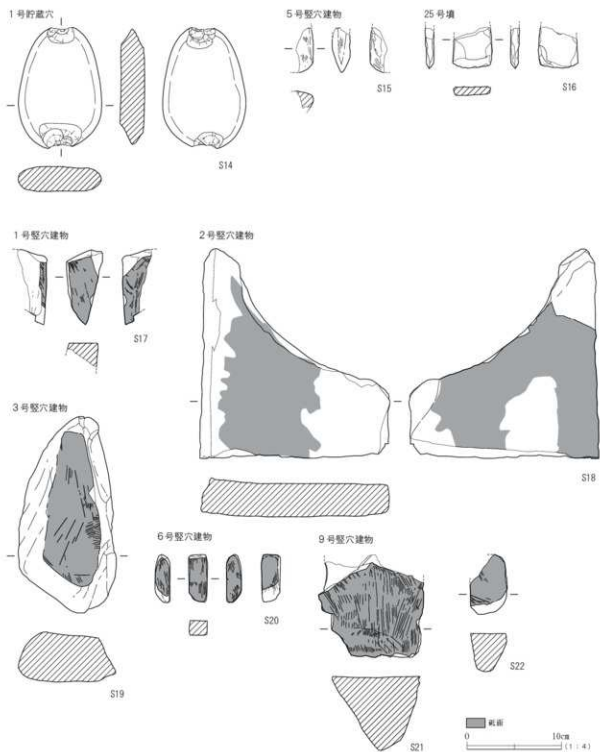
第 97 図 ナイフ形石器、尖頭器、石刃、剥片

石器

No.	出土位置	種 類	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
S1	3号木棺墓 埋土	ナイフ形石器	安山岩	3.9	1.2	0.6	2.54	
S2	遺構外 (4号型穴建物と6号型穴建物の中間) 埋土 褐色土上層	尖頭器	サメカイト	7.2	1.3	0.6	4.33	本ノ本型。
S3	遺構外 (6号棟の東側) 埋土 褐色土上層	尖頭器	安山岩	5.3	1.6	0.7	3.67	本ノ本型。
S4	25号棟 周溝 北西側埋土	石刀	玉髓	6.7	2.5	0.9	8.3	
S5	1号棟 横丘下周溝 北西側埋土	刮片	黒曜石	5.2	2.9	1.1	14.74	2次加工あり。
S6	遺構外 (2号型穴建物の北側辺り) 埋土 褐色土上層	刮片	黒曜石	3.5	1.6	0.6	3.14	2次加工あり。瀬戸内風。
S7	遺構外 (4号棟横丘上) 埋土 褐色土上層	刮片	黒曜石	3.5	3.6	1.15	8.23	バレルレースカー多方向あり。
S8	1号型穴建物 床面	石鏃	サメカイト	3.1	2.0	0.45	2.04	
S9	1号型穴建物 埋土	石鏃	安山岩	2.5	1.4	0.35	1.09	
S10	1号型穴建物 埋土	石鏃	安山岩	2.0	1.2	0.4	0.8	
S11	1号棟 横丘上 北東側	石鏃	安山岩	2.7	2.0	0.4	1.72	
S12	4号棟 横丘下周溝 埋土	石鏃	安山岩	6.0	4.4	0.8	17.52	
S13	1号型穴建物 埋土	石鏃	安山岩	2.7	2.0	0.45	1.35	

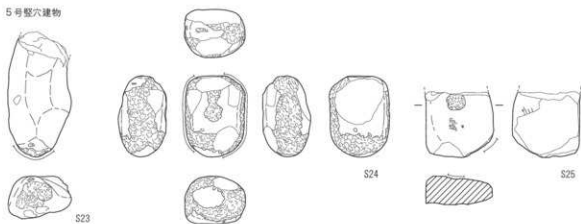


第98図 石鏃、石匙、石錐

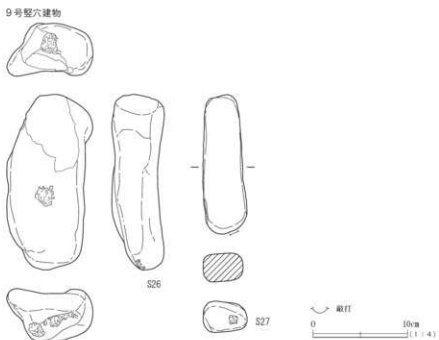


第99図 1号貯藏穴出土石鐮、5号竖穴建物等出土磨製石斧、1号竖穴建物出土砥石

5号竖穴建物



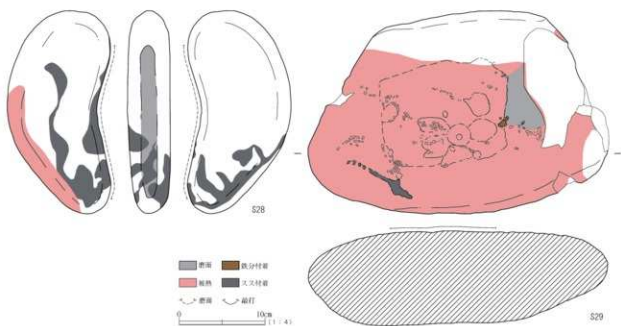
9号竖穴建物



第100図 5号・9号竖穴建物出土敲石

石器 (続き)

No.	出土位置	種 類	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備 考
S 14	1号野竪穴 埋土	石鏃	12.7	8.7	2.6	420	
S 15	5号竪穴建物 埋土	磨製石斧	4.7	1.8	1.9	15	
S 16	25号竪 周溝 埋土	磨製石斧	4.35	4.05	0.9	30	扁平片刀石斧。
S 17	1号竪穴建物 床面	砥石	7.85	3.8	2.5	60	
S 18	2号竪穴建物 床面	砥石	22.0	16.9	3.7	2050	
S 19	3号竪穴建物 床面	砥石	20.6	10.25	5.2	1620	
S 20	6号竪穴建物 床面付泥	砥石	5.05	2.0	1.55	30	
S 21	9号竪穴建物 床面	砥石	10.8	11.05	7.8	940	
S 22	9号竪穴建物 床面	砥石	6.3	3.25	3.95	100	
S 23	5号竪穴建物 埋土	砥石	13.1	6.7	4.5	385	
S 24	5号竪穴建物 床面	砥石	8.5	6.3	5.0	456	磨製石斧を転用。
S 25	5号竪穴建物 P 19 底面	砥石	6.9	7.05	3.0	275	磨製石斧を転用。
S 26	9号竪穴建物 床面	砥石	18.4	9.0	5.5	1046	
S 27	9号竪穴建物 床面	砥石	14.6	4.6	3.3	350	
S 28	1号竪穴建物 床面	台石	23.4	10.5	4.9	1700	
S 29	1号竪穴建物 床面	台石	23.5	34.8	10.8	10450	磨床石の可能性あり。



第 101 図 1号竪穴建物出土台石

IV 鑑定

1 中尾遺跡第3次調査に伴う自然科学分析

渡辺 正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

中尾遺跡は鳥取県中央部、倉吉市大谷字中尾に位置する旧石器時代～古代にかけての複合遺跡である。3次にわたる発掘調査により、縄文時代の落し穴、弥生時代の竪穴建物、掘立柱建物、貯蔵穴、古墳時代の竪穴建物、古墳などが確認されている。

本報は、文化財調査コンサルタント株式会社が中尾遺跡第3次発掘調査に伴い検出された1号竪穴建物の時期、建築部材の用材、1号竪穴建物より出土した種実の種類、25号墳2号・3号主体部に用いられた赤色顔料の種類を明らかにする目的で、倉吉市より委託を受け実施・報告した¹⁴C年代測定（AMS年代測定）、樹種同定、種実同定、顔料分析（EDS分析）についての報告書を再編したものである。

分析試料について

倉吉市教育委員会によって採取、保管されていた試料から、第11表に示す延べ18試料の提供を受けた（放射性炭素年代測定；¹⁴C年代測定試料は、樹種同定試料を兼ねる。）。

第102図（遺構配置図）に分析試料が採取された1号竪穴建物、25号墳の位置を、第103図（1号竪穴建物平面図）に、分析（測定）試料の採取位置を示した。また、第102・103図とも、倉吉市教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成した。

分析方法及び分析結果

（1）樹種同定

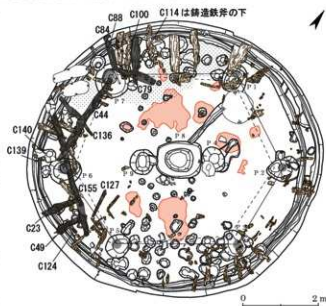
1）樹種同定方法

渡辺（2020）に従って観察資料の調整を行い、走査型電子顕微鏡下で観察・同定を行った。

また、同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。



第102図 遺構配置図



第103図 1号竪穴建物平面図（試料採取地点）

2) 樹種同定結果

樹種同定結果を第1表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料（下線）の電子顕微鏡写真を第104・105図（樹種写真図版1・2）に示す。

①コナラ属・コナラ亜属・コナラ節 *Quercus (sect. Prinus) sp.*

試料No.: C23

記載: 大きい円形ないし楕円形の道管が単独で1列に配列する環孔材である。孔圏外では非常に小さい道管が、単独で放射状に配列する。小道管は薄壁で、やや角ばっている。道管にはチロースがよく発達し、道管せん孔は単せん孔である。また、孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在している。放射組織は同性ですべて平伏細胞からなり、多数の極めて低い単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織からなる、典型的な複合型である。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。以上の組織上の特徴から、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定した。

種と分布: 本邦産は3種。モンゴリナラ（北海道～本州（丹波以北））、ミズナラ: モンゴリナラの亜種（北海道～九州、適潤～弱湿性の土壌を好み、緩斜面の中・下部で成長が良い）、コナラ（北海道～九州、山地のやや乾いた場所）、ナラガシワ（本州（北陸及び近畿以西）～九州、山地の谷筋、丘陵地の水辺）

②クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.

試料No.: C49

記載: 年輪幅は広い。環孔材で大きい円形ないし楕円形の道管が単独で多列（2～5列）に配列する。孔圏外の小道管は放射状ないし火炎状に配列する。道管せん孔は単せん孔。また、道管内腔にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は1ないし2細胞幅の単接線状柔組織を形成している。放射組織は平伏細胞からなる単列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

種と分布: 本邦産は1属1種。北海道（西部）、本州、四国、九州

第11表 樹種同定結果

試料No.	遺構名	取上No.	備考	同時出土遺物の時期	樹種同定結果
C23	1号堅穴建物	5	垂木・板	弥生時代中期後葉	コナラ亜属
C44	1号堅穴建物	29	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C49	1号堅穴建物	4	垂木・丸太	弥生時代中期後葉	クリ
C79	1号堅穴建物	44	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C84	1号堅穴建物	11	垂木・板	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C88	1号堅穴建物	45	木舞・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C100	1号堅穴建物	14	垂木・板	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C114	1号堅穴建物		鋳造鉄斧下	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C124	1号堅穴建物	54	母屋・角	弥生時代中期後葉	ケヤキ
C127	1号堅穴建物	56	母屋・角	弥生時代中期後葉	サクラ属
C136	1号堅穴建物	9	垂木・板	弥生時代中期後葉	サンショウ属
C139	1号堅穴建物	64	柱首・丸太	弥生時代中期後葉	シイノキ属
C140	1号堅穴建物	65	柱首・丸太	弥生時代中期後葉	シイノキ属
C155	1号堅穴建物	70	梁・丸太	弥生時代中期後葉	ケヤキ

③ シイノキ属 *Castanopsis* sp.

(スダジイ類似 cf. *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai)

試料No: C139, C140

記載: 年輪幅は広い。環孔性の放射孔材である。孔圏の道管は疎で、大きい楕円形の道管が単独で放射方向に点在し、接線方向の配列は明らかに断絶している。孔圏外の道管は急激に小さくなり、火炎状ないし放射状に配列する。道管せん孔は単せん孔で道管内腔にはチロースが認められる。孔圏道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は多く、散在状ないし単接線状に分布する。放射組織は平伏細胞からなる単列同性である。道管放射組織壁孔は典型的な櫛状を示す。以上の組織上の特徴からシイノキ属と同定した。また広放射組織が認められないことから、スダジイの可能性が指摘できる。

種と分布: 本邦産は1属1種。スダジイはツブラジイの亜種。本州(関東以西)、四国、九州

④ ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino

試料No: C44, C79, C84, C88, C100, C114, C124, C155

記載: 環孔材で、孔圏部では大きく15μm程度の道管が単独でおおむね1列に配列する。孔圏外には小道管が多数房状に集合し、接線状～斜線状に配列する。道管せん孔は単せん孔で、小道管にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性で、5～6細胞幅の紡錘型放射組織が目立つ。また、上下の縁辺に結晶細胞が存在するものもある。以上の組織上の特徴からケヤキと同定した。

種と分布: 本邦産は1属1種。ケヤキ(本州～九州(渓谷沿、水分条件の良い平野))

⑤ サクラ属 *Prunus* sp.

試料No: C127

記載: 小さい道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合して年輪内に散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔、道管の側壁は交互状である。放射組織は同性で、1～4細胞幅、高さ1mm程度までで非常に低い。軸方向柔組織は目立たない。以上の組織上の特徴から、サクラ属と同定した。

種と分布: 本邦産は1種。本州(西南部)～九州、沖縄

⑥ サンショウ属 *Zanthoxylum* sp.

試料No: C136

記載: 小さい道管が、単独ないし2～3個放射方向に複合して年輪内に散在状に非常に多く分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔、道管の側壁は交互状で、個々が繋がる傾向にある。放射組織は同性で、1～4細胞幅、高さ1mm程度までで非常に低い。軸方向柔組織は目立たない。以上の組織上の特徴から、サンショウ属と同定した。

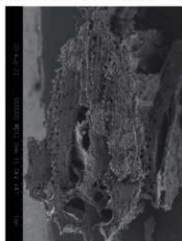
種と分布: 本邦産は主に5種。サンショウ(北海道～九州(丘陵、山地))、イスザンショウ(本州～九州(原野、河原、林縁))、カラスザンショウ(本州～九州、沖縄(河原、山地、崩壊・伐採地))

(2) 種実同定

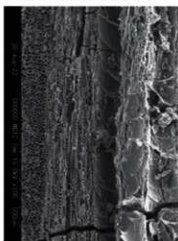
1) 種実処理方法

個別に取り出し乾燥状態の試料を提供いただいた。表面に土が付着し、表面の観察ができなかったことから、

コナラ属・コナラ亜属・コナラ節 *Quercus* (sect. *Prinus*) sp. : C23



横断面

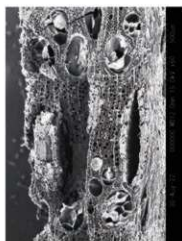


接線断面



放射断面

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. : C49



横断面



接線断面



放射断面

シイノキ属 *Castanopsis* sp. : C139



横断面

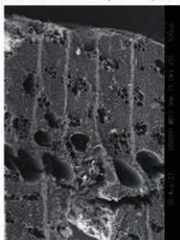


接線断面

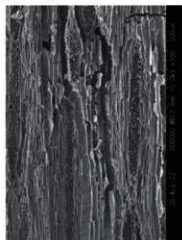


放射断面

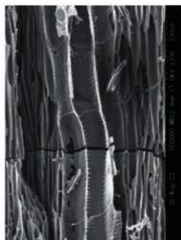
ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino : C44



横断面



接線断面



放射断面

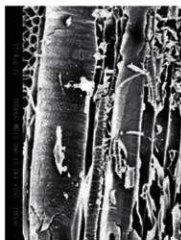
サクラ属 *Prunus* sp. : C127



横断面

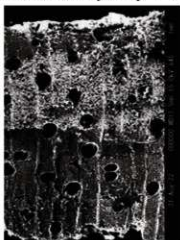


接線断面



放射断面

サンショウ属 *Zanthoxylum* sp. : C136



横断面



接線断面



放射断面

第12表 種実同定結果

試料No.	遺構名	取上No.	備考	同時出土遺物の時期	種実同定結果
C92	1号堅穴建物	炭化種子	取上No.10(垂木)下	弥生時代中期後葉	モモ(核:食痕あり)
C167	1号堅穴建物	炭化種子	北区掘り下げ中	弥生時代中期後葉	モモ(核:小片5個)
					モモ(核:破片)

水漬けにして超音波洗浄を行った。洗浄後、肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本及び図鑑類との対比により同定を行い、試料ごとに、分類群別・部位別に計数し、50%アルコールによる液浸標本とした。また、同定・計数結果を表形式にまとめた。

モモ
核:破片
C167モモ
核:食痕あり
側面
C92モモ
核:食痕あり
背面
C92

2) 種実同定結果

種実同定結果を第12表に示す。以下に、記載を行うとともに、代表的な試料の写真を第106図(種実写真真図版)に示す。

モモ
核:小片
C92

質量は1mm方

①モモ(核:食痕あり) *Amygdalus persica* L.

記載:やや扁平な広楕円形。頂部はとがり、基部中央に陥入した臍がある。1本の明瞭な縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦溝、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。また、側面に深い溝がある。食痕が認められた。

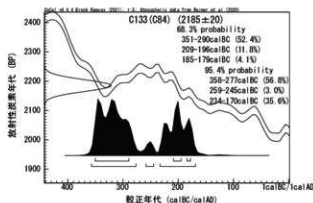
②モモ(核:破片) *Amygdalus persica* L.

記載:縫合線に沿って一方の側面1/2が剥離する。側面に深い溝が認められた。

③モモ(核:小片) *Amygdalus persica* L.

記載:4片は縫合線に沿って割れた上、更に小片となる。1片は頂部を含む上半1/4片。いずれも側面に深い溝が認められた。

第106図 種実写真真図版



第107図 暦年較正結果

第13表 AMS年代測定結果

試料					前処理	測定番号
試料No.	出土地点 (遺構ほか)	状況	重量(g)	推定時期		
C133 (C84)	1号堅穴建物	炭化材:ケヤキ (垂木・板)	0.9142	—	超音波洗浄 有機溶剤処理:アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2%, 水酸化ナトリウム:1.0%, 塩酸:1.2%)	PLD-96633
試料No.	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{13}C 補正無年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	暦年較正年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
C133 (C84)	-26.43 ± 0.19	2209 ± 20	2185 ± 20	2185 ± 20	351-290 cal BC (52.4%) 209-196 cal BC (11.8%) 185-179 cal BC (4.1%)	358-277 cal BC (56.8%) 259-245 cal BC (3.0%) 234-170 cal BC (35.6%)

(3) AMS 年代測定

1) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。¹⁴C濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4 (Bronk Ramsey, 2009) を利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

2) AMS 年代測定結果

第13表には、試料の詳細、前処理方法、 $\delta^{13}\text{C}$ 値と4種類の測定年代を示している。第107図には INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた暦年代較正結果を示した。また、確率分布と σ 、 2σ の構成範囲を示している。

(4) 顔料分析

1) 顔料分析 (μEDS : 微小部蛍光X線分析) 法

赤色顔料の基となる元素を特定するために微小部蛍光X線分析を行った。分析仕様は、下記の通りである。

分析装置：微小部蛍光X線分析装置 (M4 Tornado (ブルカー・ジャパン社))

分析条件：X線源：Rh 対陰極 管電圧：50kV 管電流：200 μA

測定時間：120s Al 12.5 フィルター使用 照射X線径 ϕ 25 μm 減圧雰囲気

定量方法：FP (ファンダメンタルパラメーター) 法

2) 顔料分析 (μEDS : 微小部蛍光X線分析) 結果

分析結果を第14表及び、第108・109図に示す。両試料ともFe(鉄)が高濃度で検出され、Pb(鉛)は検出されなかった。一方、R2956(2号主体部)ではHg(水銀)が僅かに検出されたが、微量であることからバックグラウンドを拾った可能性が高いと考えた。したがって、両試料とも用いられた赤色顔料はベンガラであったと考えられる。

用材について

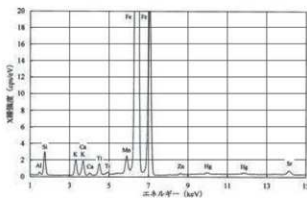
伊藤・山田(2012)によれば、建築部材の樹種同定は全国で、53678 試料を対象に行われ、柱がその1/5を占めている。続いて「礎盤・根がらみ」、「垂木」と続くが、いずれも5%未満である。一方、建築部材全体を樹種で分けるとクリの使用頻度が多く(17%)、クスギ節(11%)、コナラ節(11%)、トネリコ属(7%)、スギ(5%)、ヒノキ(2.1%)と続く。

倉吉市内では弥生時代(～古墳時代)の226 試料を対象に樹種同定が行われており、33分類群(「広葉樹」、「針葉樹」との分類を除く)が報告されている(内部資料：～2012の鳥取県下報告書からの集成。中尾遺跡第2次

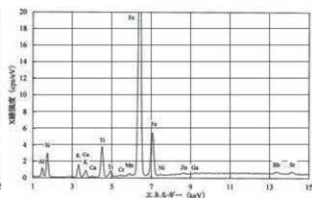
第14表 顔料分析結果

試料No.	R2956	R1861
遺構名	25号墳 2号主体部	25号墳 3号主体部
取上No.	赤色顔料	赤色顔料
備考	石棺内面に塗布	石棺内面に塗布
出土遺物の時期	古墳時代	古墳時代
Al	8.80	27.25
Si	36.00	55.64
K	2.90	3.58
Ca	1.83	1.20
Ti	0.71	2.66
Cr	—	0.03
Mn	0.66	0.06
Fe	48.60	9.43
Ni	—	0.01
Cu	0.01	—
Zn	0.04	0.03
Ga	—	0.02
Rb	—	0.04
Sr	0.22	0.06
Hg	0.17	—

単位%



第108図 微小部蛍光X線による定性分析
(スペクトル): R2956



第109図 微小部蛍光X線による定性分析
(スペクトル): R1861

発掘調査は含まず。)。同定数の多い分類群は、シノキ属 80 試料 (36%)、クリ 24 試料 (10%)、アカガシ亜属 16 試料 (7%)、アサダ 16 試料 (7%)、クワ属 12 試料 (5%)、コナラ節 11 試料 (5%) と続き、シノキ属の検出が圧倒的に多かった (ただし、59 試料は下張坪遺跡の 8 号住居で検出されている (バリノ・サーヴェイ (株), 1997))。また、ウツギ属、エノキ属、カヤ、クスノキ科、クマシズメ属、サカキ、シャヤンボ、トチノキ、トネリコ属、ニガキ、ハイノキ属、マタビ属、ミズキ属の 13 分類群は、1 試料の検出のみであった。

中尾遺跡での弥生時代中期～後期の建築部材に絞り込むと、第 1・2 次調査で 64 試料の樹種同定が行われ、16 分類群が報告されている。樹種別にはクリ、クワ属が 17% と多く、コナラ節 14%、シノキ属 9%、ヒノキ属 8% と続いていた。さらに、今回対象とした 1 号竪穴建物東部の建築部材に絞ると、10 試料の樹種同定によって 6 分類群が報告されている。ここではコナラ節 3 試料、クワ属 3 試料、スギ、アカガシ亜属、サクラ属、クスノキ科各 1 試料が報告されている。一方今回の分析では 14 試料から 6 分類群が同定され、ケヤキ 7 試料、シノキ属 2 試料、コナラ亜属、クリ、サクラ属、サンショウ属各 1 試料が検出された。

以上の結果から、倉吉市域において検出数の多いシノキ属やクリなどには、建築部材に適しているとして選択的に用いられた可能性が指摘できる。一方で遺跡 (あるいは住居) ごとに樹種の偏りが認められていることも事実である。したがって、近辺に生育していた樹木に対して、用途によって太さや長さの選択を加えた可能性はあるものの、樹種としての選択を行っていなかったように考えられる。

従来の建築部材試料には部材名 (用途) の記載がないことから、詳細な比較検討ができない状態にある。今後、部材名や焼失前の推定される大きさなどが明らかになれば、異なる見解が得られる可能性もある。

年代測定値について

得られた年代値は 2185 ± 20 yrBP (358 ~ 170 cal BC: 2σ) : 弥生時代中期前半～中期中葉であった。一方、第 2 次調査では 1 号竪穴建物 P 3 から検出された炭化材 (サクラ材) から、 2125 ± 20 yrBP (204 ~ 59 cal BC: 2σ) : 弥生時代中期中葉～中期後葉の年代値が得られていた (土器形式の年代観について、藤尾 (2005) の九州北部の年代観に従った)。これらの年代値は 2σ の範囲で 34 年間 (弥生時代中期前半) の重なりを持ち、誤差範囲で一致する。一方、測定試料は炭化木であり、得られた年代値と伐採年の間に 100 年以上の差も生じうる。

遺構 (1 号竪穴建物) からは弥生時代中期後葉 (150 ~ 1 cal BC 頃) の土器が出土しており、これらのことを踏まえると、測定年代値と矛盾のない結果と言える。

まとめ

中尾遺跡第3次発掘調査に伴い各種分析を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

- 1) 1号竪穴建物内から検出された建物部材と考えられる試料を対象とした樹種同定の結果、従来のケヤキが最も多く、コナラ節、シノキ属、クリ、サクラ属、サンショウ属の樹木が使われていた。ケヤキの用例が全国的にも、県内、市内の用例に比べ極めて多いことから、選別した用材ではなく、調査地近辺に分布していた樹木を利用した可能性が高い。今後分析数を増やし、更に詳細な用途を検討する必要がある。
- 2) 種実同定の結果、モモの核（破片）が同定できた。
- 3) 1号竪穴建物内出土建築部材の年代測定値として、358～170 cal BC (2 σ)：弥生時代中期前半～中期中葉の年代値が得られた。1号竪穴建物内からは弥生時代中期後葉の遺物が出土しており、やや古い年代値であった。一方、炭化材の年代値は伐採年との差が100年以上に及ぶこともあり、矛盾ない結果と言える。
- 4) 25号墳2号・3号主体部に用いられた赤色顔料について、鉄が高率で検出されたことから、ベンガラと推定できた。

引用文献

- 伊東隆夫・山田昌久 (2012) 木の考古学－出土木製品用材データベース－, 449p, 海育社, 滋賀。
- 小林克也 (2017) 中尾遺跡第2次発掘調査出土炭化材の樹種同定。中尾遺跡第2次発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 150, 99-101, 倉吉教育委員会。
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・坂倉高美・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司 (1985) 木材の構造, 276p, 文永堂, 東京。
- バリノ・サーヴェイ (株) (1997) 炭化植物の同定と炭化材のC14年代。中尾遺跡発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 69, 130-138, 倉吉市教育委員会。
- バリノ・サーヴェイ (株) (1997) 下妻坪遺跡C地区から出土した炭化材の樹種。下妻坪遺跡発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 88, 113-118, 写真1-5, 倉吉市教育委員会。
- バレオ・ラボAMS年代測定グループ (2017) 放射性年代測定。中尾遺跡第2次発掘調査報告書－倉吉市文化財調査報告書－, 150, 95-98, 倉吉教育委員会。
- 藤尾慎一郎 (2005) 時代区分と弥生文化の範囲。文部科学省・科学研究費補助金学術創成研究 弥生農耕の起源と東アジア NEWS LETTER, 3, 4-7。
- Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- Reimer, P., Austin, W., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R., Friedrich, M., Grootes, P., Guilderson, T., Hajdas, I., Heaton, T., Hogg, A., Hughen, K., Kromer, B., Manning, S., Wüschel, R., Palmer, J., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R., Richards, B., Scott, E., Southon, J., Turney, C., Wacker, L., Adolphi, F., Böniggen, U., Capono, M., Fahrni, S., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., & Talamo, S. (2020). The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62.
- 渡辺正巳 (2020) 自然科学分析。城山公園整備事業に伴う県史跡 浜田城跡発掘調査報告書, 90-94., 浜田市教育委員会, 島根。

2 中尾遺跡第3次調査出土の古墳人骨

岡崎 健治（鳥取大学 医学部 解剖学講座）

はじめに

中尾遺跡から東北東に25kmほど向かった先に弥生時代の人骨および木製品等の遺物が大量に出土している青谷上寺地遺跡がある。青谷上寺地遺跡の弥生時代後期人骨を用いたゲノム解析が国立科学博物館によって進められており、彼らの遺伝的背景は、現代日本人にみられる多様性の範疇に収まるものの、個体同士の違いは大きく充分な混血が進んでいなかった可能性が示唆されている（篠田ほか 2020；神澤ほか 2021）。したがって、日本史の画期である弥生時代から古墳時代にかけて山陰地方にていかに集団形成が為されたのかを明らかにすることは、日本人の成り立ちを考える上で重要となり、その基盤づくりのためにも当地域から出土する人骨を報告することが求められる。中尾遺跡は倉吉市教育委員会によって断続的に調査されており、2014～2016年度の第2次調査につき、今回、2019～2021年度に実施された第3次調査においても古墳時代人骨が出土した。これらの古墳時代人骨を精査する機会に恵まれたので、以下に報告する。

人骨所見

25号墳2号主体部（箱式石棺）

石枕周辺の棺底より頭蓋冠の破片が多数出土している。これらの中で最も大きいものとして、石枕の北側から出土した約3×5cmの骨片（B1・第110図）がある。表面の腐食が外板と内板ともに著しく詳細な部位同定は難しかったものの、頭蓋冠にみられる板間層の構造が確認できた。

25号墳3号主体部（箱式石棺）

2号主体部と同様に、石枕周辺の棺底より頭蓋冠の破片が多数出土している。最大で約4×6cmの骨片（B1・第111図）が石枕の北側から出土しているものの、やはり腐食が著しく詳細な部位同定は難しかった。また、棺底から歯冠が数点出土しており、大臼歯（B2・第112図、B3・第113図）と大歯（B4・第114図）が確認された。これらの歯冠は、エナメル質の破損が著しく、詳細な歯種同定と咬耗度の判定は難しかったものの、象牙質の露出は点状から面状まで歯種によって異なった。したがって、被葬者の年齢は、少なくとも成人であり、老年には達していなかったものと考えられる。

おわりに

第3次調査出土人骨は、前回の第2次調査のものよりもさらに保存状態は不良であった（岡崎 2017）。したがって、得られた形態学的情報は非常に限られており何らかの形で考察を行うことは難しかったものの、第2次調査と同様に棺内における部位の重複は見受けられなかった。古墳時代の埋葬において一般的にみられる追葬や複数埋葬の痕跡が本遺跡にてこれまで認められていない要因として、1）人骨の保存不良、2）追葬時の行為による、3）本遺跡では単体一次埋葬が主流であった可能性などが挙げられる。今後もこの点に留意して当地域から出土した古墳人骨の鑑定を行いたい。

謝辞

倉吉市教育委員会文化財課には、本出土人骨を調査する機会を与えていただきました。とりわけ、小田芳弘主任学芸員には、出土人骨と発掘情報の照合の際にお世話になりました。また、本講座の海藤俊行教授には、古人骨整理に必要な作業環境を整備していただきました。記して御礼申し上げます。

引用文献

岡崎健治 (2017) 中尾遺跡第2次調査出土の古墳時代人骨。倉吉市教育委員会編、中尾遺跡第2次発掘調査報告書、倉吉、pp. 88-94.

神澤秀明・角田恒雄・安達登・篠田謙一 (2021) 鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨の核DNA分析。国立歴史民俗博物館研究報告、228: 295-307.

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 (2020) 鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生後期人骨のDNA分析。国立歴史民俗博物館研究報告、219: 163-177.



第110図 25号墳2号主体部から出土した頭蓋冠の破片 (B1)



第111図 25号墳3号主体部から出土した頭蓋冠の破片 (B1)



第112図 25号墳3号主体部から出土した
大白歯の歯冠 (B2)



第113図 25号墳3号主体部から出土した
上顎左大白歯の歯冠 (B3)



第114図 25号墳3号主体部から出土した
大歯の歯冠 (B4)

3 中尾遺跡第3次調査 25号墳2号・3号主体部石枕を対象としたPCN分析

渡辺 正巳（島根大学エスチュアリー研究センター・文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

中尾遺跡は鳥取県中部の倉吉市大谷字中尾地内に位置し、一級河川天神川水系国府川の左岸丘陵上に立地する。2019～2022年に行われた第3次調査では、丘陵尾根上～南斜面において25基の古墳が確認され、うち16基の古墳で埋葬施設が調査されている。

埋葬施設には、遺体由来の諸元素が残存している可能性が高い。土壌を構成する主要元素と人間（動物）を構成する主要元素を比較した場合、遺体の影響を示しやすい元素としてP（リン）が挙げられる。また、人間（動物）と植物を分けるためにTOC（有機炭素濃度）/TN（全窒素濃度）値が有効と考えられる（渡辺、2012）。

本報は、埋葬されていた遺体の痕跡を求めるため、中尾遺跡第3次調査25号墳2号・3号主体部の石枕表面のTP（全リン濃度）、TOC、TNの濃度分析（PCN分析）についてまとめたものである。

試料について

25号墳は調査区南西端に位置する直径16.2mの円墳である。墳丘上で3基の主体部が検出され、1号主体部（木棺墓）と直交するように2号・3号主体部（いずれも箱式石棺墓）が東西に並び、それぞれの石棺内部、南小口側には2個の安山岩板石からなる石枕が置かれていた。さらに、石棺内にはそれぞれ5cm×5cm程度の骨片が残り、骨片の周囲が白くなっていたほか、石枕の表面も白色を呈していた。また、それぞれの石棺の石蓋は、白色粘土で目張りがされていた。

なお、分析対象の石枕（東西に配置された2個の板石）のうち、東側の板石を石枕①、西側の板石を石枕②と呼称する。

分析方法

以下の手法で、TP及びTOC、TNを測定した。

1) TP分析方法

以下の手順で堆積物中のTPを測定した。

- ①試料を60℃で1日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉砕する。
- ②フッ化水素酸分解法（土壌環境分析法編集委員会編、1997）による試料調整。
- ③モリブデン酸による定量（日本薬学会編、2010）に従い、紫外可視分光光度計（島津社製 UV-1600PC）による濃度測定。

2) TOC・TN分析方法

以下の手順で堆積物中のTOC、TNを測定した。

- ①試料を60℃で1日乾燥後、メノウ乳鉢で200メッシュ程度に粉砕する。
- ②約15mgをひょう量し、銀コンテナに入れる。貝殻起源等の無機炭素を取り除くために、IM-HCl添加後100℃で加熱乾燥する。その後、全体を錫コンテナで包む。

第15表 分析結果一覧

遺構		試料No.	TP (mg/Kg)	TN (%)	TC (%)	TOC (%)	TS (%)	TIC (%)	CaCO ₃ (%)	TOC/TN	TOC/TS
25号墳	2号主体部(東)	石枕①	455.0	0.025	5.299	0.565	0.086	4.734	39.453	22.882	6.573
		石枕②	792.2	0.013	3.076	0.385	0.044	2.691	22.424	29.090	8.704
	3号主体部(西)	石枕①	670.5	0.012	3.184	0.386	0.073	2.798	23.318	31.265	5.289
		石枕②	706.5	0.026	4.434	0.490	0.057	3.944	32.868	18.544	8.660

TIC、CaCO₃は計算値、TS、TOC/TSは参考値

③元素分析機 EA-1108 により測定する。標準試料には BBOT を用いる。

④乾燥試料に対する重量百分率で TOC と TN を測定し、TOC/TN 値を算出する。

今回、1M-HCl 添加時に激しい発泡が認められ、分析試料に多量の炭酸塩が含まれていることが予想された。骨の主成分であるリン酸カルシウム:Ca₃(PO₄)₂ も HCl に反応するが、C が含まれないことから TC への影響はない。一方、骨には不純物として若干の CaCO₃ が含まれるが、CO₃ としては P の 15% 程度である。今回検出された TP が 0.1% (1000mg/Kg) に満たないことから、骨由来の C:CO₃ は TC の実測値に対し無視できる程度に低い。このことから、別途 HCl を添加しない試料の TC (全炭素濃度) を測定し、TIC (無機炭素濃度)、CaCO₃ 濃度を算出した。

分析結果

分析結果を第115図、第15表に示す。第115図では、各地点の平面図に重ね合わせて、TP 分布、TOC/TN 分布をバブルグラフで示した。第15表には、TP、TN、TC、TOC の実測値に加え、TIC、CaCO₃、TOC/TN の算出値を示した。また、元素分析機 EA-1108 では、同時に TS (全イオウ濃度) が測定できることから、参考値として TS、TOC/TS も示している。以下に、主な分析値、算出値について概要を記す。

1) TP

455.0mg/Kg (2号主体部石枕①) ～ 792.2mg/Kg (2号主体部石枕②) の値を示した。

2) TOC/TN

18.544 ～ 31.265 の値を示した。

3) TIC (CaCO₃ 濃度)

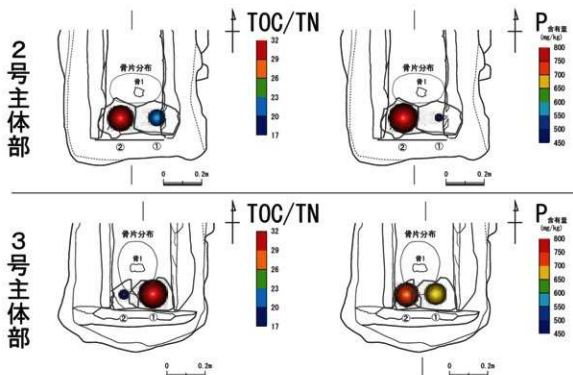
全試料で TC のほぼ 90% が TIC で、CaCO₃ 換算値で 22 ～ 39% となる。

TP・TOC/TN について

生物を構成する元素の割合は、生物それぞれに一定の傾向を持っている(渡辺, 2012)。石枕石表面には、遺体由来の有機物が付着していると考えられ、TP は高濃度、TOC/TN は 10 未満の値が得られることが期待された。

1) TP

石枕から得られる TP 値の指標として、渡辺・瀬戸 (2023) による出雲市山地古墳出土石枕 (今回同様に 2 個の石の組み合わせ): 2970.6mg/Kg、3321.1mg/Kg、出雲市常楽寺柿木田 1 号墳第 1 主体部の礫状石枕: 457.2mg/Kg の値がある。山地古墳出土石枕は、今回同様に石蓋付きの石棺内部に有り、石枕は埋土に覆われていなかった。一方、常楽寺柿木田 1 号墳第 1 主体部出土礫状石枕は埋土に覆われており、埋土からは 180mg/Kg 程度の値が得られていた。



第115図 TP、TOC/TNの分布
上段：2号主体部 下段：3号主体部

したがって、今回の分析結果は、前述の山地古墳出土石枕に比べ低いものの、常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土礫状石枕と同程度かやや高い値を示したことになる。ただし、常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土礫状石枕とは出土状況が大きく異なり、TPの相対的な高低の判断を行うための石棺上位や周囲の埋土を採取・分析ができなかった。このため得られたTPの絶対値は高いと考えられるが比較対象がなく、遺体痕跡を示唆するものか否かの判断はできなかった。

2) TOC/TN

人間指標の10を大きく超える値を示した。同様の傾向は前述の山地古墳や常楽寺柿木田1号墳第1主体部出土石枕でも認められ、出雲市神門横穴墓群第10支群J-5号横穴墓での一方の壁面に密集した根とTOC/TN分布の関係(渡辺, 2020)から、未確認ながら石枕に密着した根に起因すると推定されている(渡辺・瀬戸, 2023)。このように今回の測定値からは、人間(動物)を示唆するようなTOC/TNが得られなかった。

CaCO₃の含有と漆喰の利用

前述のように、分析試料のHCl処理時に発泡が認められた。TCとTOCに著しい差が認められたことから、CaCO₃とHClの反応によってCO₂が発生したものと推定できた。分析試料は石枕に付着した(骨由来と考えられる)白色物質と考えられていたが、今回の結果を踏まえると、石棺と石蓋の目止めに使われていた白色粘土が流れ落ちた可能性が高い。CaCO₃を主成分とする白色の物質(粘土)の代表的なものに漆喰があることから、この白色粘土は漆喰であったと考えられる。

漆喰付着による TP、TOC/TN 濃度への影響

漆喰の原料となる海藻や藁に含まれるリンの割合は、人体に含まれるリンの割合の 1/2 以下である（渡辺、2012）。人体頭部の重量と付着していた漆喰の量から考えて、検出されたリンの内、漆喰の原料である海藻（フノリ）や藁、麻すさ由来のリンは極微量であったと考えられる。むしろ漆喰が付着していたことによって、石枕に本来付着していた遺体由来のリンが希釈され、TP が低くなった可能性が指摘できる。

また、漆喰の原料である海藻（フノリ）や藁、麻すさなど植物の TOC は人体の 2 倍程度の値を示し、TOC/TN も人体の 2 倍程度の値を示す（渡辺、2012）。漆喰に含まれるこれらの割合は不明であるが、微量でも TOC/TN を高める要因となる。神門横穴墓群第 10 支群 J-5 号横穴墓の例のように、今回も根の影響によると考えるのが一般的であろうが、漆喰が付着していたことも TOC/TN が高かった原因の一つに挙げられる。

謝辞

本研究に当たり、倉吉市教育委員会より分析試料を御提供いただいた。島根大学エスチュアリー研究センター瀬戸浩二博士には CNS 分析を御担当いただいた。TP 分析は島根県産業技術センターに委託した。また、本研究には日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤 C(21K00989) を利用している。以上の諸氏・機関に対し、感謝いたします。

引用文献

- 土壤環境分析法編集委員会編（1997）. 28 全量分析分解法・B フッ化水素酸分解法. 土壤環境分析法, 171-174.
- 日本薬学会編（2010）12）総リン. (1) モリブデン酸による定量. 衛生試験法・註解. 2010, 947-948.
- 渡辺正巳（2012）中村 1 号分の前室石棺内埋土のリン濃度分布. 中村 1 号墳 本文編（第 1 分冊）, 出雲市の文化財報告, 15, 177-182, 出雲市教育委員会, 島根.
- 渡辺正巳（2021）検出石棺・石床の遺骸痕跡. 神門横穴墓群 第 10 支群 - 十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 出雲市の文化財報告, 45, 71-78, 出雲市教育委員会, 島根.
- 渡辺正巳・瀬戸浩二（2023）常楽寺柿木田 1 号墳の第 1・2 主体部における PCN 分析. 常楽寺柿木田 1 号墳 主体部の内容確認調査. 出雲市の文化財報告, 54, 63-70, 出雲市教育委員会, 島根.

V 特論

1 中尾遺跡 1 号竪穴建物の鉄器とその出土状況

村上 恭通（愛媛大学アジア古代産業考古学研究中心）

はじめに

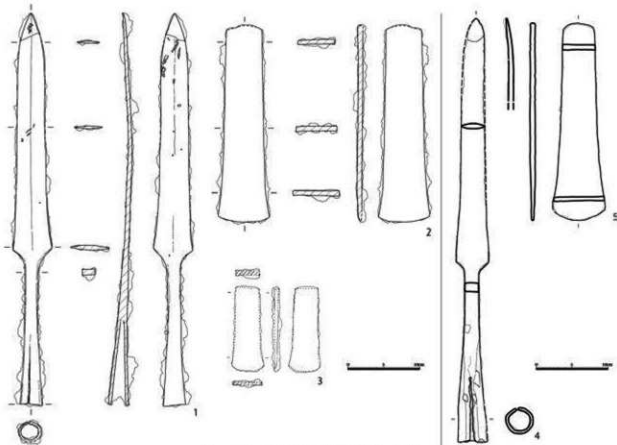
倉吉市中尾遺跡の第3次調査において、1号竪穴建物西半部の床面より3点の鉄器が出土した。本遺構は2014～2016年の第2次調査で東半部が発掘されており、その際も日本列島産と想定される小型の鍛造鑿状鉄器が検出されており〔勢村ほか編 2017〕、鉄器出土総点数は4点となる。

3次調査の出土鉄器は、弥生時代の鉄器として初めてとなる特徴・情報をいくつも備えている。完形で出土した3点の鉄器は鍛造の矛、板状斧と鋤造斧であり、いずれも舶載品である。3点もの完形舶載鉄器の住居址1軒からの出土は過去例がない。また焼け落ちた建築材の下から現れたこれら3点の出土位置は約0.3㎡の範囲に収まり、その集中度も特異である。さらに原報告の詳述にあるように、矛は切先を、板状斧は基部を床に刺して、立てた状態にあったと復元されている。鉄器を住居の床に刺す、立てるという行為もまた寡聞にして知らない。

ここではまず出土鉄器の由来について論じ、また矛や板状斧の出土状況について可能な限りのアプローチを行ってみたい。

1. 出土鉄器について―鋤造鉄斧を中心に―

1号竪穴建物から出土した鉄器のうち、矛、板状斧（第116図－1、2）については韓国東南地域における原



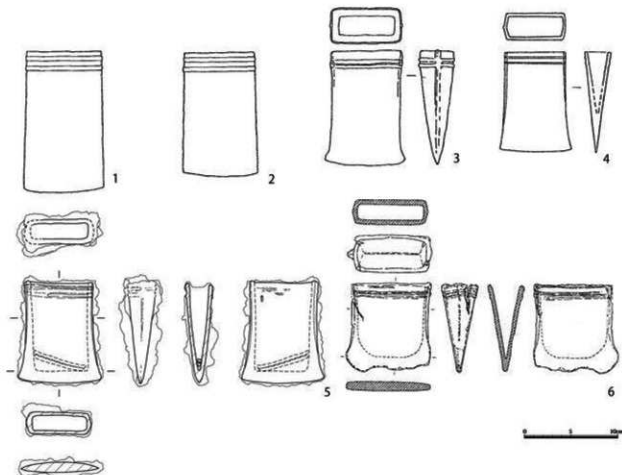
第116図 中尾遺跡と茶戸里遺跡の鉄器

1、2 中尾遺跡第2・3次調査1号竪穴建物 3 中尾遺跡第2次調査2号竪穴建物 4 茶戸里遺跡5号墓 5 茶戸里遺跡

三国時代前期の類例が想起され、舶載品と評価できる。ちなみに第2次調査の2号竪穴建物で出土した全長12.9cm、幅4.5cmの板状鉄斧も厚み、横断面の特徴から舶載品である(第116図-3)。この小型の板状斧は慶尚南道泗川市鶴島遺跡出土品にみられるように、大型品による伐採の次工程を担う一般的な工具であった。

一方、鑄造鉄斧は袋端部直下に二条の突帯を有しており、この特徴をもつ斧は中国漢代の各地でみられる。朝鮮半島や日本で発見される二条突帯斧は遼寧省に設置された鉄官で生産された可能性が高く、一部西北朝鮮あたりまで生産地の範囲として想定してもよさそう。二条突帯斧は戦国時代の東北地域に版図をもった燕国において、戦国時代前期には出現しており、それ以降、長さを減じ、刃幅を広狭変えながら漢代まで、一部はそれ以降にも存続する。その変遷に関する詳論によれば、全長15cm前後の縦長長方形を呈するタイプをⅠ式とし、その形状を維持したまま短くなるタイプをⅡ式、そしてさらに短くなって平面形が梯形(台形)のⅢ式になる〔村上1988〕。各型式の年代には、Ⅰ式が戦国時代から前漢代初頭、Ⅱ式が前漢代、そしてⅢ式が前漢末～後漢初という年代が想定された。しかし各型式の中間的な型式やそれらの年代についてはまだ議論の余地が大きい。

例えば遼寧省旅順市魯家村の埋納遺構(窖藏)から出土した二条突帯斧は、全長14.5cm、袋部幅8cm、刃部幅8.5cmの大型品(5点)と全長13.2cm、袋部幅7.5cm、刃部幅8cmの小型品(3点)とに分けられる(第117図-1、2)〔劉1981〕¹⁾。わずかに刃部幅が広いことから、原報告は平面形を梯形としているもののⅡ式として評価された〔村上1988〕。この鉄斧は精白鏡、日光鏡など鏡10面や漢代半兩錢49枚、五銖錢7枚を合併しており、前漢代中・後期の年代が与えられている。また北京市大葆台漢墓1号墓では全長10.6cm、袋部幅6.4cm、刃部幅7.4cmの二条突帯斧が出土している(第117図-4)〔中国社会科学院考古研究所編1989〕。報告書に掲載された図面に比べると、実物は袋部から刃部に向けてより直線的に広がっている²⁾。魯家村例に比較すると短



第117図 中国・日本の二条突帯鑄造鉄斧各種

1、2 魯家村 3 老河深 4 大葆台漢墓 5 中尾遺跡第2・3次調査1号竪穴建物 6 青谷上寺地遺跡

くはなっているものの、袋部と刃部幅の差は1cmであり、刃部が極端に広がっているという印象は与えない。この鉄斧は一面の突帯直下中央部に「漁」の陽刻をのこし、漁陽郡鉄官産の証となる初例と解説されている。また原報告には「斧面光潔呈暗紅色」とその表面の特徴が述べられているが、実際には滑沢面というよりは粗面であり、焼鈍（焼炭）を受けていることがわかる。部分的に瘦せた「漁」の文字や突帯は、焼鈍が度を過ぎ、表面の剥落が深くまで及んだためと判断される。星雲文鏡、四乳四鹿鏡、昭明鏡を伴った1号墓の被葬者は、元帝期に広陽国を治め、紀元前45年に没した劉建と考証されている。二条突帯斧の中でもっとも時代の限定が可能な資料である。一方、周辺の夫余族の埋葬遺跡とされる吉林省榆樹県老河深遺跡より出土した24点の二条突帯斧には、全長12.5cmとやや大葆台漢墓出土品よりも長目ながら、刃部付近のみ急激に広がる例がある（第117図-3）。老河深遺跡では方格規矩鏡の副葬がみられ、後漢代に併行する時期が想定されながら、この二条突帯斧は長さも魯家村例と大葆台漢墓例の中間にあり、その時期を前漢代と想定しても問題ない。ただし、老河深遺跡出土の二条突帯斧は形態、大きさが多様であり、大葆台漢墓例とはほぼ同じか、やや小型品も含まれている³¹。したがって老河深遺跡出土の二条突帯斧は生産時期が前漢代に遡るものが含まれるものの、副葬は後漢代以後であり、そこに伝世を考える余地がある。

ここでも中尾遺跡1号竪穴建物出土品に目を向けると、その大きさは全長11.0cm、袋部幅7.3cm、刃部幅8.9cmを測り、斧身の中程から幅を徐々に広げ、刃が鉞状に広がる。大葆台漢墓例より0.4cm長い、袋部幅と刃部幅の差がより大きくなっており、刃部の広がりが強調されている。大葆台漢墓例をⅢ式の初現例とするならば、中尾遺跡1号竪穴建物出土品はⅢ式の典型例とすることに問題はなく、中国における生産の時期が前漢末～後漢初に比定することも許容されよう。なおⅢ式の二条突帯斧にはさらに短くなり、全長と幅の差が小さくなる傾向がみられる。その好例が鳥取市青谷上寺地遺跡の泉道4区②層出土品である（第117図-6）〔湯村編2002〕。全長9.4cm、袋部幅8.3cm、刃部幅9.0cmであり、その平面形は正方形の枠にほぼ収まる。中国での生産時期は中尾遺跡例よりも新しくなると考えられ、Ⅲ式の下限を後漢初よりもさらに新しくする必要がある。

2. 鉄器の出土状況

1軒の竪穴住居地で舶載、完形の矛、板状斧、鉞造斧3点が出土したこと自体未曾有である。相互に近接し、さらに矛が切先を、板状斧が基部を床に突き刺して立てられた姿は住居地における鉄器出土状況の常を逸脱している。硬い面に鉄器を突き刺すという行為は、米子市の弥生墳丘墓である尾高浅山1号墓で認められ、鉄刀の一部が墳丘に突き刺さった状態で発見されている。「表土から刺されていたため後世の木野山神社に關係するもの」〔小原編2015、35頁〕と説明されている（第118図）。しかし、弥生時代後期の山陰地方であれば鉄刀は存在するので、当時の資料として評価する余地は残っている。ただ、それを認めた場合でも中尾遺跡例は住居での行為



第118図 尾高浅山遺跡1号墓の墳頂面に突き刺さった鉄刀

の痕跡であるため、両者の意味合いは異なる。

板状鉄斧も直立に近い状態で立てられた例を広く求めるならば、韓国慶尚北道慶山市にある陽地里遺跡Ⅱ-5区の1号木槨墓出土例が挙げられる〔金・朴ほか編2020〕。その時期は原三国時代であり、茶戸里遺跡1号墓よりやや新しいという。ただし斧は、突き刺すのではなく墓坑の壁に立てかけられており、刃部は下を向いている。墓と住居の違いもあり、これも中尾遺跡の板状鉄斧との比較対象としては違い存在であろう。刃を上に向けた板状鉄斧の異様には、廃絶され、火を受けた住居への立ち入りを拒む意図を読みとることが可能であるが、一方で鉄斧は切先を突き刺しており、その意図が相殺されているようにも思われる。床に突き刺すという行為の契機、そして器物に付与された意義に対する不可知性は、これらが儀礼の痕跡であるという程度の判断しか許さない。ただし、当時、鉄器が比較的豊富であった山陰地方であったとはいえ、きわめて価値の高い舶載品を3点も代償として消費する儀礼となれば、その渴仰の大きさは相当なものであったに違いない。

3. 山陰地方の弥生鉄器文化と中尾遺跡

中尾遺跡1号竪穴建物出土の鉄器は未曾有の発見であるがゆえに、その解釈には限界がある。しかし、鳥取市の青谷上寺地遺跡、米子市の妻木晩田遺跡の中間地を埋める存在となり、山陰地方における豊富な鉄器普及度を物語る遺跡として名を連ねたことは確かである。また、遺跡の約500m南を流れる国府川が約4kmで天神川に合流するという地理的環境は、鉄器の内陸部への供給を考えるうえでも重要である。著名な長瀬高浜遺跡を河口にもつ天神川はその源流を岡山との県境付近に有し、水源から南に山を越えると岡山県の奥津地域にいたる。山間部でありながらここには夏栗遺跡や久田原遺跡といった鉄器生産や舶載鉄器の消費をみせる遺跡がある。この地域における鉄素材や鉄器の入手が天神川を経由したものであることは十分に想定されるであろう。日本海沿岸地域から中国山地への鉄器の波及を考えるうえでも、中尾遺跡は重要な位置を占めている。

尾高浅山遺跡1号墓の写真掲載については下高瑞哉氏、高尾浩司氏に御配慮いただいた。また松井潔氏、鄭宗鎮氏の御教示、御協力を賜った。末筆ながら記名して感謝の意を表します。

註

- 1) 第117図-1、2は原報告の数値に基づいた概念図である。魯家村ではこのほか袋部より月部幅が狭まる二条突帯斧も出土している。
- 2) 第117図-4および関連記述については、2005年、大塚台前漢墓博物館での調査所見を反映している。
- 3) 老河深遺跡出土二条突帯斧の中には中尾遺跡出土品に近い大きさ、形状の例も含まれているが、実に多様である。2005年、吉林省文物考古研究所で観察した。

参考文献

- 勢村茉莉子ほか編2017『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書150、倉吉市教育委員会
- 国立中央博物館編2012『昌原茶戸里遺跡1～7次発掘調査総合報告書』国立中央博物館古蹟調査報告41、国立中央博物館
- 小原貴樹編2015『米子平野の考古資料 尾高浅山遺跡-弥生時代環境遺跡と墳丘墓-』米子市埋蔵文化財センター資料整理報告1、一般財団法人米子市文化財団
- 金東淑・朴基赫ほか編2020『慶山陽地里遺跡』聖林文化財研究院學術調査報告147、聖林文化財研究員・韓国土地住宅公社
- 中国社会科学院考古研究所編1989『北京大塚台漢墓』文物出版社
- 劉俊男1981『旅順魯家村発見一処漢代窖藏』『文物資料叢刊』4、文物出版社
- 吉林省文物考古研究所編1987『榆樹老河深』文物出版社
- 村上恭通1988『東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって』『たたら研究』29、たたら研究会
- 湯村 功編2002『青谷上寺地遺跡4』鳥取県教育文化財団調査報告書74、財団法人鳥取県教育文化財団

2 中尾遺跡 1 号竪穴建物出土鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧に残る有機質痕跡とその意義

塚本 敏夫（公益財団法人元興寺文化財研究所）

1. はじめに

中尾遺跡は鳥取県倉吉市大谷に所在し、国府川の北側の低丘陵地に位置し、旧石器時代から古代まで継続した遺跡である。第3次調査で見つかった弥生時代中期後葉の1号竪穴建物（直径約7.5mの柱穴6基の円形建物）の焼失した梁や屋根材の下から舶載品と思われる鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧の3点がほぼ完形の形で揃って出土した。また、特異な出土状況と焼失時に貴重な舶載鉄器を家屋から持ち出さなかったことから、焼失住居は失火ではなく住居を意図的に焼却する際の何らかの儀礼として鉄器3点が利用された可能性が指摘されている（片岡2022）。

ここでは鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧の出土状況や鉄器に残る有機質痕跡からその利用実態の解明とその意義について考えてみたい。

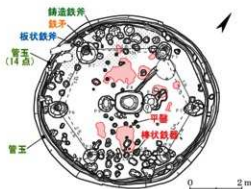
2. 鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧の出土状況とその評価

2-1 鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧の出土状況

鉄鉢・板状鉄斧・鋤造鉄斧が出土したのは1号竪穴建物の6本の柱の、中心から見て北西の柱付近で、鉄鉢と板状鉄斧は柱の室内側に位置する。鉄鉢は横倒しになって出土しており、もとは柱近くに刃部を突き立てた状態であったと推定されている。板状鉄斧は刃部を上にして柱の根元付近に突き刺された状態で出土した。それに対して、鋤造鉄斧は北側に50cmほど離れた個所に床面から1cm浮いた状態で、炭化材片の上から出土していた。このことから何らかの方法で梁材に固定されていた可能性が考えられる。いずれも焼け崩れた梁材や屋根材の下から出土しており、3点とも柄は確認できなかった。また、西に1m離れたところから管玉18点中14点がまとまって出土している。出土状況からは糸で繋がっていたとは考えにくく、ばらした状態で撤いたか、袋にばらけた状態で入っていたものを置いた可能性が考えられる。また、貴重なガラス玉も2点出土している。南東側からは棒状鉄器と平盤が出土している。

2-2 出土状況からの評価

鉄鉢や板状鉄斧が柱の根元付近に突き立てられて出土した。突き立てて住居内に保管していたとは考えにくく、また、当時の最も貴重な最新の舶載品の鉄器類を火事の際に持ち出さなかったとは考えにくい。何らかの祭祀的な作法に基づいて最新の武器を含む利器を儀仗として柱近くの床面に突き立てたり、棟材に括りつけて家屋を燃



第119図 1号竪穴建物遺物出土状況図



第120図 1号竪穴建物鉄器出土状況

やしたと考えるのが妥当である。

弥生中期後半の貴重な舶載品と思われる鉄器類が完形で家屋の焼失行為に利用されたことの意義は大きく、このことは玉類の出土状況からも祭祀利用との考えは肯定されよう。

3. 出土鉄器の有機質痕跡

3-1 鉄鉾の有機質痕跡 (第121図)

鉄鉾は出土後の調査で片面は土や錆をクリーニングしてしまっているが、反対側の面は未クリーニングの状態で保管されていた。クリーニングされてない面の表面を詳細に観察すると、表面に規則性のある粒々が確認できる。この粒々は先行研究から布の織目の名残と推定できる。したがって、何らかの布が鉄鉾の本体に巻かれていたことが推定される。また、写真やX線写真に幅4～5mmの紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、鉾身の根本付近に幅3～4mmの紐状の有機質がループ状になっている箇所が見て取れる。確定はできないがこの位置で紐を結んでいた可能性もあろう。また、この位置には少し太めの有機質(布か革かの同定は出来ない)の痕跡が確認でき、確定はできないが鞘口状の有機質であった可能性がある。

3-2 板状鉄斧の有機質痕跡 (第122図)

板状鉄斧には布痕跡は確認できないが、写真やX線写真から明瞭ではないが紐状の有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐状の有機質の錆化した痕跡と推定できる。特に、基底部に密に有機質情報が確認できる。

3-3 鋳造鉄斧の有機質痕跡と内部納入品 (第123・124図)

鋳造鉄斧にも布痕跡は確認できないが、写真やX線写真から明瞭ではないが有機質で螺旋状に巻いている状況が見て取れ、錆瘤はこの紐の錆化した痕跡と推定できる。特に、側面で顕著に有機質情報が確認できる。特筆すべきは、X線及びX線CT調査で、袋部の中に全長52mmと56mmの方形断面の棒状鉄製品が確認された。

4. 出土鉄器の有機質痕跡の意義

出土鉄器の有機質痕跡に関しては日本海沿岸や瀬戸内地域では刀剣類の外装は弥生時代中期の抜身に布巻から弥生時代後期に入って木製鞘・柄が徐々に普及していくことが知られている(林2020、ライオン2020)。一方、近年、時代は下るが古墳時代中期以降の焼失住居や廃絶住居、祭祀遺跡や古代寺院や都城や官衙において、意図的に武器・武具や農具を解体または装具を外して布や紐、藁縄などで巻いて住居や災害への鎮め目的の祭祀に利用している実態が明らかになってきた(塚本2022)。



第121図 鉄鉾の有機質痕跡

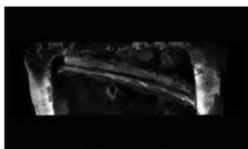


第122図 板状鉄斧の有機質痕跡



第123図 鋳造鉄斧の有機質痕跡

本例でも兵仗や利器としての装具（木製柄）を外して鉄器単体で、しかも有機質を巻いて本来の機能を封じ込め、儀仗や祭器として焼失住居の鎮め目的の祭祀に利用されたことが伺える。



5. 焼失住居や廃絶住居での鉄器武器や利器の祭祀利用の展開とその評価

弥生時代の焼失住居や廃絶住居での鉄製武器の祭祀利用に目を転じると、鉄鉢に関しては墳墓以外では完形品としては上田市上田原遺跡のⅠ区第40号土壌出土品が知られているが住居跡ではなく、青谷上寺地遺跡の県道7区H層出土品（袋部破片）も包含層で、やはり住居ではない。管見では中尾遺跡1号竪穴建物出土の鉄鉢が初例である。

そこで、対象を鉄剣とし、地域も九州以東に広げると、弥生時代中期・後期にこのような作法が散見される。まず、信越地域では中期後葉の佐久市五里田遺跡の第1号住居跡出土の鉄剣片が布状繊維で螺旋状に巻き付けられた状態で床から2～3cm浮いて出土している（塚本他1999）。住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。後期では岡山市百閑川原尾島遺跡の焼失住居である竪穴住居6から墓状の有機質で巻かれた¹⁾鉄製短剣が炭化材の上から出土しており、明らかに焼失住居の片付けに伴う祭祀行為に利用されたことが伺われる。また、播磨町大中遺跡の15次1号住居のベッドの段下から浮いた状態で出土した鉄製短剣も草紐状の有機質で巻かれた痕跡があり（藤原編2022）、住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。

次に鉄斧の状況を見てみよう。板状鉄斧では、中期後半の長野市春山B遺跡の焼失住居SB01から板状鉄斧²⁾が太形始刃石斧とともに埋土中から出土しており、焼失住居の廃絶に伴う祭祀に利用されたことが伺える。鋳造鉄斧では、中期後半の朝霞市向山遺跡のC-3区第6号住居から分析結果からも舶載品とされる、ほぼ完形の二条突帯鋳造鉄斧が北西側の柱穴付近の床面に欠損面を下にして、柱状片刃石斧と隣接して出土しており、有機質痕跡は無いが廃絶に伴う祭祀に利用した可能性が伺える。

これらの焼失住居や廃絶住居での鉄剣や鉄斧の作法は先行する中尾遺跡での作法と類似しており、今のところ中尾遺跡が列島の初例であり、3点全てが完形の舶載品の可能性が高く、当時最も価値の高い威信財の舶載鉄器が住居の廃絶行為に伴う祭祀に鎮物として利用されたと解釈するのが妥当であろう。その作法が時代とともに他地域へ少しづつその内容を変えながら伝播していつていることが看取できる。

6. おわりに

中尾遺跡1号竪穴建物での舶載鉄器を用いた焼失住居に伴うこの作法の実態とその意義が調査を通じて麗々ながら見えてきた。この発見の意義は大きく、今後の弥生時代以降の鉄器文化の受容と展開を考える際、重要なカギとなる事例である。しかし、まだまだ未解決の問題も山積している。最後に問題点を挙げて現段階での推論を提示して結びとしたい。

1. 鉄鉢を柱穴付近の地面に突き刺す行為であるが、鉄鉢での類例は無いが、銅剣では今治市経田遺跡のASK1 SP2872での柱穴横に突き立てた銅剣片が上げられよう。その行為の真意は不明であるが地鎮の意味が込められていたのではと推論している。また、時代は下がるがU字型鋤鋦先を廃絶住居跡の床に突き立てている事例は散見でき、今後事例を集めて再考すべき作法である。

2. 板状鉄斧は鉄鉢とは逆に、刃を上側に向け根元を地面に突き刺して立てる作法であるが、板状鉄斧での類例は探し切れていない。時代は下がるが9世紀中葉の市原市南大広遺跡では基壇中央から戴手刀が、南西・南東の両隅から刀子が、切先を天に向けて出土した。同様に市原市萩の原遺跡の2号基壇中央でも大刀が切先を天に向

けて出土しており、地鎮のためではと推定されている（財団法人市原市文化財センター 1992）。今後事例を集めて再考すべき作法である。

3. 出土状況から鋳造鉄斧は梁材に固定されていた可能性が推定された。管見では、類例は確認されておらず、その作法の意図も不明である。今後は民俗事例も含めて類例が集まった後に再考すべきである。

4. 鋳造鉄斧の内部納入品の用途は不明である。ただ、一つの仮説として、袋部の規格と2本の棒状鉄製品の寸法から板状鉄斧を入れ子状態にした時の留金具ではなかったかと推定している³¹。

5. この作法の系譜は今のところ舶載鉄器の使用から大陸に求められそうであるが、現時点では特定できておらず、その解明が今後の大きな課題である。

謝辞 小稿をなすにあたって、以下の機関および個人に遺物実見・実測の便宜を図っていただいた。記して感謝いたします。

伊都国歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、岡山県古代吉備文化財センター、兵庫県立考古博物館、岡本泰典、岡部裕俊、細田佳男、藤原伶史、初村武寛、ライアン・ジョセフ

注

1) 蕨状の有機質を巻く事例は長岡京正殿跡出土小札（塚本・山田・初村 2010）他でも確認されている。

2) 方形で袋状鉄斧の再加工作の可能性が指摘されている。有機質痕跡は未確認である。

3) 青谷上寺地遺跡の軌道7区H層から入れ子状態で出土した鋳造鉄斧と板状鉄斧のセットは鉄器の地中保管や埋納の状況との解釈が推定されている（野島 2011）。しかし、板状鉄斧は鋳造鉄斧と接しておらず、間に何らかの介在物が存在したと考えられている。青谷上寺地遺跡出土品では板状鉄斧の刀先を鋳造鉄斧の袋部に差し込む形態で出土しているが、中尾遺跡出土品は板状鉄斧の底部を袋部に差し込む形態で両端に刀部を持つ武器として機能させていた可能性を想定している。このような組み合わせで器物として存在していた可能性もあり、解釈の一つとして青谷上寺地遺跡出土品の先行品で、祭祀行為を行うに際して、外して別々に利用したのではないかと推定している。その際に留金具として鉄棒2本を袋部の中に入れた可能性も考えられよう。

説稿後、奇野裕彦氏より富沢遺跡99次Ⅱ区13層下部（14層の弥生前期水田跡上層）から樹皮巻石鏃³²が出土していることをご教示いただいた。実見すると樹皮状有機質は全体に巻かれていたようで、器形から鏃形の石剣か石鏃と考えられる。水田の廃絶に伴う儀礼に金属製の代替品として使用された可能性が高く、その作法の出自が注目される。

引用・参考文献

財団法人市原市文化財センター 1992 『4. 南大広遺跡（B地区）』『第7回 市原市文化財センター 遺跡発表会要旨』財団法人市原市文化財センター pp. 14-15

江原 順編 2022 『台の城山遺跡と向山遺跡－弥生の斧を手に入れたムラ－』朝霞市博物館

片岡啓介 2022 「中尾遺跡」『発掘された日本列島 2022 調査研究最前線』文化庁 pp. 37-39

塚本敏夫 2022 「儀仗としての武器・武具」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会 pp. 35-57

塚本敏夫・菅井裕子・平尾良光・鈴木浩子・大沢正己 1999 「付録3 鳴滝遺跡群五里田遺跡出土金属資料の自然科学的分析」『鳴滝遺跡群五里田遺跡－長野県佐久市根々井五里田遺跡発掘調査報告書～佐久市埋蔵文化財調査報告書 第74集 佐久市教育委員会 pp. 138-161

塚本敏夫・山田卓司・初村武寛 2012 「長岡京出土小札の再検討」『都城』23（財）向日市埋蔵文化財センター pp. 71-86

照林敏郎 1997 「朝霞市向山遺跡の調査－弥生～古墳時代前期－」『東日本における鉄器文化の受容と展開』第4回鉄器文化研究会 鉄器文化研究会・朝霞市教育委員会 pp. 2-22

野島 永 2011 「第3節 弥生時代鋳造鉄斧の形態変化と破片利用」『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告6 金属器』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 39 鳥取県埋蔵文化財センター pp. 92-106

林 大智 2020 「日本海沿岸地域における鉄製武器の普及と防衛集落」『古代武器研究 vol. 16』古代武器研究会 pp. 25-51

藤原伶史編 2022 『弥生集落転生』兵庫県立考古博物館

ライアン・ジョセフ 2022 「中四国・畿内における鉄製刀剣の普及」『古代武器研究 vol. 17』古代武器研究会 pp. 53-70

尚、紙幅の関係上遺跡文庫は割愛させていただいた。

VI まとめ

今回の調査では、旧石器時代の石器、縄文時代の落し穴、丘陵上に展開する弥生時代中期後葉～古墳時代前期の集落跡と丘陵尾根から南斜面に築造された古墳時代中期～後期の古墳群などを確認した。ここでは、発掘調査で明らかになったことのうち特に注目すべき点について整理して、まとめたい。

1 第3次調査の成果について

(1) 旧石器時代の遺物

遺構は確認していないが、ナイフ形石器 **S 1** (安山岩製)、尖頭器 **S 2** (サヌカイト製)・**S 3** (安山岩製)、石刀 **S 4** (玉髄製) などの石器が出土した。このうち、尖頭器と石刀は当遺跡では初めて確認されたものであり、1次調査に続き、新たな資料を得ることができた。(小田)

(2) 縄文時代の遺構

丘陵尾根から北斜面で14基の落し穴を確認した。落し穴の分布と形状を概観すると、調査区の東部には3～6つの杭穴(床面ビット)をもつ楕円形プランの落し穴が分布し、中央部・西部には0～1つの杭穴をもつ円形プランのものが分布する傾向がある。また、3号と4号(楕円形プラン)、5号と6号(楕円形プラン)、10号と11号(円形プラン)のように、同一の平面プランの落し穴2基が3～4mの間隔で近接して隣り合うことや、2号・3号・5号(楕円形プラン)、2号・4号・6号(楕円形プラン)、12号～14号(円形プラン)のように、同一の平面プランの落し穴3基が北斜面の勾配に沿うように並ぶことも確認できる。

面積1,000㎡当たりの落し穴の数を比較すると、1次調査地が5.7基(84基/14,700㎡)、2次調査地が8.1基(75基/9,300㎡)に対して、今回の調査地は1.0基と少なく、落し穴の分布は疎らといえる。(小田)

(3) 弥生時代の遺構・遺物

遺構の時期 弥生時代の遺構は1号・4号～6号・8号竪穴建物、1号・2号土壇、1号貯蔵穴である。遺構内出土土器の形態から、いずれも中期後葉に比定され、さらに次の2時期に細分できる。

I期(弥生時代中期後葉古段階) 4号～6号・8号竪穴建物、1号・2号土壇

甕(20・21・23・24・44・46・47)は頸部から屈曲して立ち上がる口縁部を持ち、端部に3条の凹線文を施す。内面ヘラケズリは胴部最大径まで及ぶ。無頸壺(42)は胴部の途中で屈曲して内傾しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部に6条の凹線文を施す。高埴(48・49)は坏口縁部が屈曲して立ち上がり、端部に5～6条の凹線文を施す。I期は高尾編年¹⁾のIV-2期古段階に比定できる。

II期(弥生時代中期後葉新段階) 1号竪穴建物、1号貯蔵穴

広口壺(1・4・37・38)はなだらかに立ち上がる頸部から緩やかに反外する口縁部を持ち、口縁下端部は斜め下方向へ拡幅する。拡幅した口縁端部に3～4条の凹線文を施す。甕(5・6)は内面ヘラケズリが胴部最大径を越え肩部まで達する。内面頸部下はハケメ後にヨコナゲで調整する。小型の長頸壺(2)、脚付壺(3)は吉備系²⁾と目される。II期は高尾編年のIV-2期新段階に比定できる。

遺構の配置 遺構は全て調査地東部に分布し、1号・4号～6号竪穴建物・1号土壇は丘陵尾根上、8号竪穴建物・2号土壇は丘陵南肩部、1号貯蔵穴は丘陵北肩部に位置する。2次調査で確認した中期後葉の集落の最西端に位置し、これより南西の丘陵基部側では同時期の遺構は見られない。

5棟の竪穴建物のうち1号・5号・6号の3棟は中尾遺跡の弥生時代中期後葉の円形竪穴建物の中では大型に属する。いずれも建替えが行われており、建替え前は6本柱の建物であるという共通点がある。また、中央ビッ

トとその両脇に2基のビットが伴う点、それら3基のビットを通る軸が丘陵の尾根筋に沿うように配されている点も共通する。中央ビットとその両脇2基のビットを持つ竪穴建物は、朝鮮半島の松菊里遺跡を初めとする中期無文土器時代の竪穴建物に見られる典型例で、「松菊里型」と呼ばれ、日本では北部九州を中心に見られる³⁾。

1号竪穴建物について 1号竪穴建物は床面長径6.9m、床面積37㎡を測る。主柱穴はやや東西に長い六角形に配される。床面には柱穴や中央ビットのほかに90基近くの浅いビットが見られ、その分布は柱穴間の長い2辺付近を中心に、建物中央付近のビットほど小さく、壁際のものほど大きくなる傾向がある。また、ビット群付近の床面には焼土面が見られ、鉄床石と思われるS29も出土していることから、建物内で鍛冶を行っていた可能性がある。

1号竪穴建物は焼失建物であり、垂木、小舞、梁、茅材などの炭化材の下からは舶載品の鉄矛(F1)、板状鉄斧(F2)、鋤造鉄斧(F3)が完形で出土した。F1は全長54.6cmを測り、弥生時代の出土例では国内最長である。韓国の茶戸里遺跡出土鉄矛と類似する⁴⁾。F2も全長27.4cmを測る大型品で、河原口坊中遺跡(海老名市)出土の28.5cmに次いで国内最大級である。韓国の茶戸里遺跡、靑島遺跡に類似がある⁵⁾。F3は全長11cmで、県内の類例として青谷上寺地遺跡(鳥取市)が挙げられる⁶⁾が、それよりも古い型式である。3点の出土位置は主柱穴P7付近に集中している。F1は横倒しの状態で出土したが、床面の観察から、先端をP7の根元付近に突き立てた状態であったと考えられる。F2も同様にP7の根元に突き立てられていたが、刃部を上に向け、基部を突き立てるという特異性がある。2点とも建物床面に突き立てるという点で儀礼的な意味合いを持つと考えられる。F1から約0.5m離れて出土したF3は梁と垂木に挟まれる位置で出土したことから、焼失の過程で垂木が倒れた後にF3が垂木の上に載り、その上から梁が覆い被さったという順序が想定される。したがって、F3は建物が焼け崩れる最中に投げ込まれたか、あるいは柱や梁などにくくりつけられており建物の焼失途中に落下した可能性が考えられるが、想像の域を出ない。

小型工具から鉄器の生産が開始したばかりの中期後葉の鳥取県内⁷⁾において、高い鋤造技術を要するF1～F3のような舶載鉄器は極めて価値が高く、中尾遺跡の集落において権威の象徴として保有されたと考えられる。北部九州を中心に副葬品として鉄製刀剣類が使用される例は多く見られるが、焼失建物内で鉄矛を含む完形の舶載鉄器が複数種類出土する例は国内では他に見られない。焼失の原因が自然災害や失火であれば、希少な鉄器を建物内に残したままにするとは考えられず、焼失は意図的な焼却によるものと思われる。また単なる廃棄のための焼却であっても建物内に鉄器を残すとは考えにくいから、1号竪穴建物の廃棄は儀礼祭祀の意味を持つと考えられる。したがって、1号竪穴建物の焼却については威信財としての鉄器を使用した廃屋儀礼が示唆される。さらに、出土遺物の型式から1号竪穴建物の時期は中尾遺跡全体を通して見ると中期後葉の集落の中で最も新しい時期に属し、続く後期前葉には約300m離れた丘陵先端部に集落が移ることから、1号竪穴建物の廃屋儀礼をもって中期後葉の集落の終焉とした可能性が想定される。

1号竪穴建物は出土遺物に吉備系の土器が複数含まれる。2次調査では吉備地方に類例が見られる大型長方形竪穴建物を確認しており⁸⁾両地域の関係がうかがえる。また、中尾遺跡の南側を流れる国府川を7km北上すれば日本海に到達する。日本海沿岸には妻木晩田遺跡(米子市・大山町)や青谷上寺地遺跡など多数の鉄器を持つ交易の拠点が存在する。日本海と吉備地方を結ぶ地点の中尾遺跡が、地域間を結ぶ重要な役割を果たしており、貴重な鉄器を入手するに至ったと推測する。

(片岡)

(4) 古墳時代の遺構・遺物

遺構の時期 古墳時代の遺構は、遺構内出土土器から前期と中期～後期に大別することができる。

古墳時代前期 2号・3号・7号・10号・11号竪穴建物、1号掘立柱建物、1号段状遺構

前期前葉では土井編年⁹⁾の宮ノ下4・6号住居址段階、牧本編年¹⁰⁾の天神川Ⅰ期に比定される甕(32)や鼓形器台(31)、土井編年の宮ノ下3B・7号住居址段階、牧本編年の天神川Ⅱ期に比定できる甕(14・36)が代表される。前期中葉は牧本編年の天神川Ⅲ期に比定できる布留系高坏(15)、前期後葉は土井編年の上神猫山方形周溝墓段階、牧本編年の天神川Ⅳ期に比定できる甕(26)が見られる。

古墳時代中期～後期 1～25号墳

土師器では牧本編年の天神川Ⅶ～Ⅹ期に比定できる甕(62・79・82・130)、直口壺(31・118・119・141)、高坏(131・132)、脚付埴(63～71)などが代表される。須恵器では陶邑編年¹¹⁾のTK208～TK209型式に比定できる坏蓋(53・59・87・103)、坏身(54・55・60・91・105)などが代表される。5号墳周溝底出土の77・78は、脚部を欠いているがTK23～TK47の須恵器有蓋高坏を、13号墳周溝底出土の102は須恵器甕を模倣したものである。(片岡)

遺構の配置 前期の竪穴建物7棟と段状遺構1基は、調査区東部から中央部付近の丘陵尾根から南斜面に分布し、掘立柱建物8棟と櫓1基は、調査区東部から中央部付近の丘陵尾根から北肩部に分布する。また、中期～後期の古墳25基は、調査区全域の丘陵尾根から南斜面に分布する。

竪穴建物 特筆すべき遺構としては、前期中葉の2号竪穴建物で壁際特殊ビットを確認した。方形プランで両側に仕切り溝をもつタイプであり、埋土から土師器甕・高坏・低脚坏が出土した。形状の類似する壁際特殊ビットは、夏谷遺跡13号住居(5世紀後半)¹²⁾や上種第5遺跡竪穴住居跡1号(北栄町・5世紀前半)¹³⁾などで確認されている。東伯耆では、壁際特殊ビットは前期中頃に出現し、中期後半までに多く見られ、後期前半にかけて衰退すると指摘されている¹⁴⁾。ゆえに、2号竪穴建物の壁際特殊ビットは初期段階に位置づけられる。

古墳 中期～後期の古墳25基を確認し、円墳21基、方墳1基、不明3基と、ほぼ円墳で構成される。また、周溝を含めた墳丘規模が概ね20m以上の3基(1号・16号・25号墳)と20m未満のものに大別でき、前者は丘陵尾根筋に40m以上の間隔をとって配置されるのに対し、後者は丘陵尾根から南斜面の東西140m、南北50m程度の範囲に、23基が密集して配置されている。古墳の立地や規模から、前者は古墳群のなかで主となる系列で、後者は従属的な系列であると推定される。

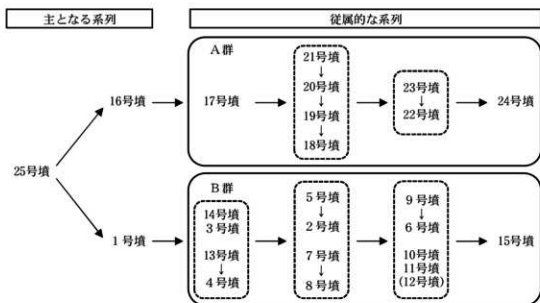
古墳群の形成 古墳の立地や規模、遺構の切り合い、供献土器などを基に古墳群の築造順序について検討する¹⁵⁾。近隣のイザ原古墳群¹⁶⁾や沢べり遺跡(第2次)¹⁷⁾では、丘陵尾根筋→斜面の順に古墳が築造されていることから、まず尾根筋に立地する主となる系列が築造され、その後尾根から南斜面に立地する従属的な系列が築造されたと考えられる。

主となる系列は、丘陵基部側の25号墳に伴う供献土器に須恵器が含まれず、先端側の16号・1号墳に伴う供献土器に須恵器が含まれることから、25号墳→16号墳・1号墳の順に築造されたといえる。一方、従属的な系列は立地と供献土器によりA・Bの2群に分けることができる。

A群は、16号墳の南側に広がる17号～24号墳であり、供献土器に直口壺を採用する傾向がある。これらは標高の高い側から①17号墳、②18号～21号墳、③22号・23号墳、④24号墳の4つのまとまりに分けられ、直口壺の時期から①→④、西→東の順に築造されたと考えられる。

B群は、1号墳の南側に広がる2号～15号墳であり、供献土器に直口壺をほぼ採用しない。これらは標高の高い側から①3号・4号・13号・14号墳、②2号・5号～8号墳、③9～11、(12)号墳、④15号墳の4つのまとまりに分けられ、基本的には①→④の順に築造されたと考えられる。

以上のことを整理すると、次のように古墳群が形成されたと推定される。



なお、墓道は、A・B群の境界で等高線と直交して延びるものと、A・B群①～④の周溝外縁に沿って等高線と平行して延びるものに復元できる。後者の墓道はA群とB群で違いが見られ、A群の墓道は直線的に延びるのに対し、B群の墓道は曲線的（円弧状）に延びる。

主体部 4基の古墳で7基の主体部を確認した。25号墳の主体部3基は、切り合い関係から2時期に分けられ、1号主体部（木棺墓）が造られた後に、2号・3号主体部（箱式石棺墓）が同時に造られている。

主体部の軸に注目すると、6号・24号墳と25号墳1号主体部のように、1基を埋葬する場合は概ね東西方向（等高線に平行）である。しかし、8号墳と25号墳2号・3号主体部のように、2基を埋葬する場合は概ね南北方向（等高線に直交）であり、さらに2基がほぼ主軸を揃えて東西に並べて配置される。これらのことは当遺跡で主体部を造る際の共通の規範であった可能性がある。

周溝内・外埋葬施設 15基の古墳において、周溝内で27基、周溝外で8基、計35基の副次的な埋葬施設を確認した（本書88～89頁第6表参照）。古墳1基につき周溝内・外にそれぞれ1～2基程度の副次的な埋葬施設が配置されるが、1号墳のみ周溝内に10基、周溝外に4基の計14基と突出して数が多い。東伯耆において周溝内・外埋葬施設の多い古墳は、管見では、長瀬高浜1号墳（湯梨浜町・5世紀後半の円墳）で周溝内8基、周溝外6基の計14基¹⁰、下山平4号墳（6世紀中頃の前方後円墳）で周溝内10基、周溝外2基の計12基¹⁹、大山2号墳（6世紀前半の円墳）で周溝内7基²⁰などが挙げられる。よって、1号墳は東伯耆で最も多くの周溝内・外埋葬施設を有する古墳の1つといえる。なお、周溝内埋葬施設の配置に顕著な規則性は認められないが、1号墳では周溝の西側～北側に埋葬施設が配置される傾向がある。

25号墳周溝内の2号埋葬施設では、周溝内墳丘が遺存し、墳丘頂部に土師器小型九底壺（143）と標石（川原石）が据えられていた。倉吉市内で周溝内墳丘を確認できた例は、中尾遺跡2次調査1号墳1号埋葬施設や大山2号墳3号埋葬施設、3号墳5号埋葬施設²¹、沢ベリ21号墳2号・3号埋葬施設、25号墳1号埋葬施設、27号墳2号埋葬施設²²などが挙げられる。一方、主体部上に土器と共に1～2点の礎を置く例は弥生時代には山陰地方で確認されている²³が、古墳の墳丘頂部に土師器や標石を配置する例を倉吉市内では確認できなかった。

供献土器 18基の古墳の周溝底で、古墳に供献されたと考えられる土師器・須恵器が出土した（本書87頁第5表参照）。供献土器は土師器が中心で、器種は甕（18基中13基）が最も多く、直口壺（6基）、埴（4基）、高杯（3基）、脚付埴、坏蓋形・有蓋高杯形土器、甕形土器（各1基）と続く。須恵器は5基（1号・8号・13号・

16号・22号墳)で確認され、器種は坏身(5基中4基)、坏蓋(3基)、甕、甕(各1基)である。

副葬品 7基の主体部のうち1基、35基の副次的な埋葬施設のうち5基で副葬品を確認した(本書88～89頁第6表参照)。種類は鉄器(6基中3基)、ガラス玉類(2基)、須恵器・鉄滓(各1基)である。特筆すべきは11号墳1号埋葬施設であり、墓壇内の2箇所(被葬者の頭部側と足元側)に須恵器坏蓋・坏身が13点ずつ計26点供献され、4種類の鉄製農具(鋤、鋤先、鎌、鉋、鑿)が被葬者の足元側にまとまって副葬されていた。多種の鉄製農具を多数副葬する古墳としては、倉吉市内では国分寺古墳(前期後半の前方後方墳あるいは前方後円墳)²⁰が知られるが、墳丘をもたない埋葬施設では類例を確認できなかった。(小田)

2 中尾遺跡の変遷について

中尾遺跡第1～3次調査では、丘陵尾根から斜面の38,000㎡に及ぶ広範囲で発掘調査を行い、旧石器時代の石器と縄文時代～古墳時代の遺構を確認した(本書164頁第125図)。以下、発掘調査で明らかになった当遺跡の変遷について時代ごとに述べる。

旧石器時代 遺構は未確認であるが、出土遺物から丘陵上でナイフ形石器や尖頭器、刮器などを用いて狩猟の行われた様子が想像される。

縄文時代 遺構は1～3次調査地のほぼ全域に分布し、特に1・2次調査地に集中する。丘陵尾根から斜面に173基の落し穴が掘られ、狩猟場として盛んに利用された様子がうかがえる。

弥生時代 前期後半になると、1次調査地南西部の丘陵尾根上に平地建物と竪穴建物が1棟ずつ建てられ、人々の居住が始まる。平地建物は大型で、屋内に4基の貯蔵穴を伴うものであり、数戸の住居あるいは共同利用の貯蔵施設と想定される。

中期後葉には、集落が丘陵基部側(南西側)へ移動し、1次調査地西端部～3次調査地東端部の丘陵上に、竪穴建物・掘立柱建物・貯蔵穴などで構成される集落が営まれた。集落の規模は東西150m、南北70m程度である。竪穴建物は約20棟を数え、大型の円形竪穴建物(2次・3次調査1号、3次調査5号・6号)や、吉備地方に特有の大型の長方形竪穴建物(2次調査2号・13号)も見受けられる。また、掘立柱建物は7棟を数え、桁行6間・梁行2間と桁行4間・梁行1間の大型掘立柱建物(2次調査1号・10号)も認められる。さらに、完形の舶載鉄器が複数確認され、2次・3次調査1号竪穴建物で鉄矛・板状鉄斧・鋳造鉄斧各1点が、2次調査2号竪穴建物で板状鉄斧1点が出土した。この時期が当遺跡の最盛期であるといえる。

後期前葉には、集落が丘陵先端部(北東側)へ移動し、1次調査地北東部の丘陵尾根上に、竪穴建物・貯蔵穴などで構成される集落が営まれた。4棟の竪穴建物が建てられ、それぞれ1～2基の貯蔵穴・方形土壇が伴う。

古墳時代 前期には、集落が再び丘陵基部側(南西側)へ移動し、3次調査地の東部から中央部の丘陵上に集落が営まれた。集落の規模は東西110m、南北80m程度である。6棟の竪穴建物と1基の段状遺構が丘陵尾根から南斜面に、7棟の掘立柱建物が丘陵尾根から北肩部に配置された。

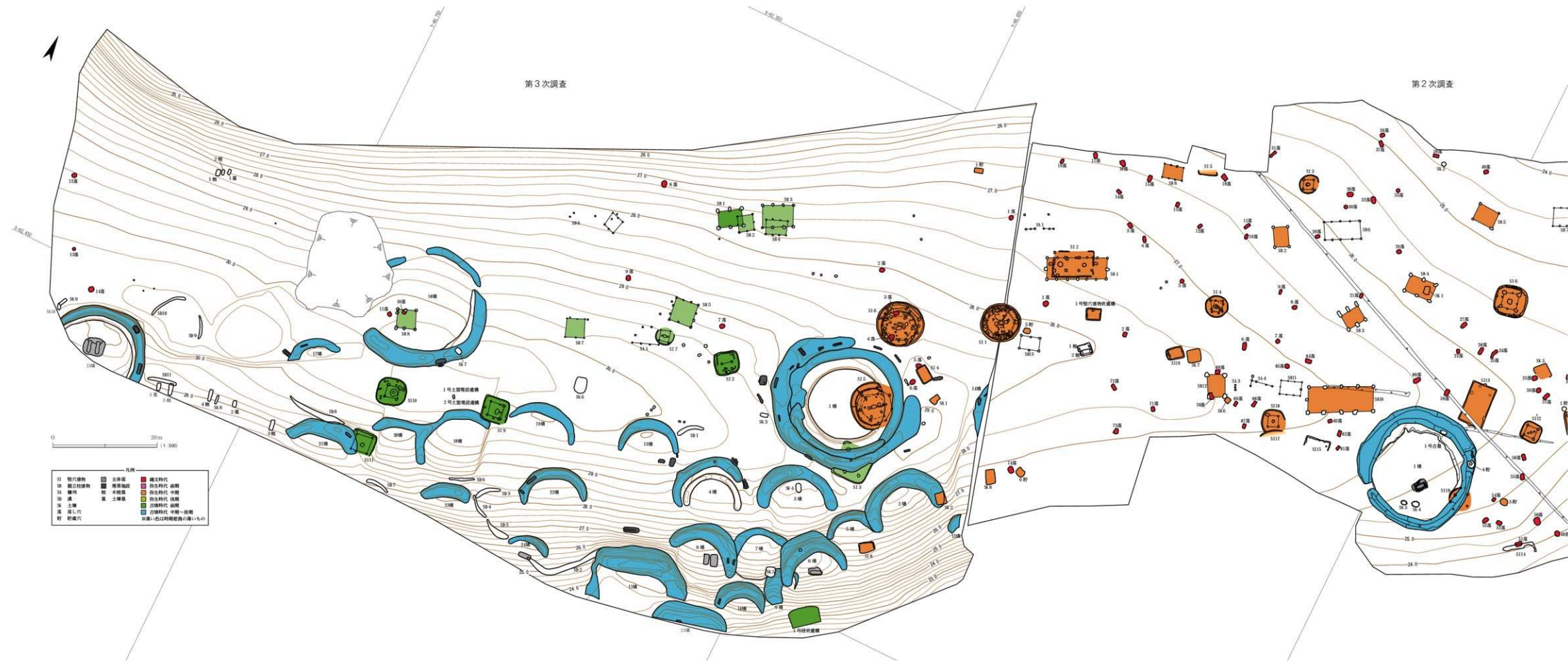
なお、集落の立地に着目すると、弥生時代前期後半～古墳時代前期の各時期の集落が重なり合わない。このことは集落に暮らす人々がそれほど多くなかったことを示唆する。

中期以降、丘陵上が集落から墓地へ変化する。1～3次調査地の丘陵尾根筋には、規模の大きな円墳5基が間隔を空けて築造される。このうち丘陵先端部に独立して立地する1次調査1号墳は、その立地や規模から盟主墳の可能性もある。そして、3次調査1号墳・16号墳より南側を中心に、比較的規模の小さな円墳・方墳23基が密集するように築造され、後期に至るまで墓地として利用された。(小田)

中尾遺跡第3次調査では、主に弥生時代中期後葉～古墳時代前期の集落及び古墳時代中期～後期の古墳群の様相が明らかとなった。特に、3次にわたる調査により弥生時代中期後葉の集落の全域を調査できたことは貴重な成果といえる。その一方で、舶載鉄器の供給経路や入手の背景、特異な儀礼形態の意義など未解明な点も残されている。今後、調査研究が進展して、これらの問題が解明されることを期待したい。(小田・片岡)

註

- 1) 高尾浩司「山陰地方東部における弥生時代中期の土器編年—大江山麓地域を中心に—」愛媛大学法文学部考古学研究室編『地域・文化の考古学 下條信行先生退任記念論文集』2008年
- 2) 松井蘭「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初期の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集、古代吉備研究会、1997年
- 3) 中間研志「松葉型住居—我国稲作農耕受容期における堅穴住居の研究—」『東アジアの考古と歴史 中』同朋舎出版、1987年
- 4) 村上恭通氏による御教示。
- 5) 註4と同じ。
- 6) 水村直人ほか『金銀器』青谷上寺地遺跡出土品調査報告書6、鳥取県埋蔵文化財センター、2011年
- 7) 高尾浩司「鳥取県における弥生時代鉄器の様相」『考古学ジャーナル』No.467 日本海沿岸地域の弥生鉄器、ニューサイエンス社、2000年
- 8) 勢村茉莉子ほか『中尾遺跡第2次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第150集、倉吉市教育委員会、2017年
- 9) 土井珠美「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初期のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局、1986年
- 10) 牧本哲雄「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅱ、図第6遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書61、財団法人鳥取県教育文化財団、1999年
- 11) 『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ、1966年
- 12) 森下哲哉ほか『森下遺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第84集、倉吉市教育委員会、1996年
- 13) 馬淵義則ほか『上種第5遺跡発掘調査報告書』大栄町文化財調査報告書第14集、大栄町教育委員会、1985年
- 14) 岩崎康子「第3章第2節 古墳時代の集落の様相」『石籠第3遺跡—森末地区・掘り地区— 石籠8・9号墳 寺戸第1遺跡 寺戸第2遺跡 石籠第1遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書54、(財)鳥取県教育文化財団、1998年
- 15) 古墳群の築造順序の検討にあたっては、根鈴智津子氏に多くの御教示をいただいた。
- 16) 根鈴輝雄『四王寺古墳群 イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第25集、倉吉市教育委員会、1983年
- 17) 竹宮亜也子・岡本智則『不入岡遺跡群発掘調査報告書 不入岡遺跡・沢べり遺跡2次調査』倉吉市文化財調査報告書第85集、倉吉市教育委員会、1996年
- 18) 西村彰彦ほか『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ(本文編)』鳥取県教育文化財団調査報告書12、財団法人鳥取県教育文化財団、1983年
- 19) 影山和雅『下山平・天神原遺跡発掘調査報告書』関金町文化財調査報告書第13集、関金町教育委員会、1988年
- 20) 黄田眞幸ほか『立鉢遺跡群Ⅳ 大山遺跡発掘調査報告書(C・D地区)』倉吉市文化財調査報告書第54集、倉吉市教育委員会、1989年
- 21) 註20と同じ。
- 22) 岡平拓也『沢べり遺跡第4次発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第134集、倉吉市教育委員会、2009年
- 23) 大谷晃二「第3節 弥生墳丘墓における主体部上の祭祀の一形態」近藤義郎編『矢野山弥生墳丘墓』矢野山弥生墳丘墓発掘調査団、1995年
- 24) 梅原末治『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取県史蹟勝地調査報告書第二冊、鳥取県、1924年
岩本崇編『伯耆国分寺古墳の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会、2019年







調査前全景 (南東から)



調査後全景 (北西から) ※右奥に打吹山と倉吉市街地。左奥に向山を望む



調査後全景（南東から） 赤調査地奥が西王寺山



調査後全景（南西から）



1号落し穴 完掘（北東から）



2号落し穴 完掘（東から）



3号落し穴 完掘（北東から）



4号落し穴 完掘（北から）



5号落し穴 完掘（東から）



6号落し穴 石検出（北東から）



6号落し穴 完掘（北東から）



7号落し穴 完掘（北から）



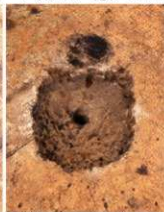
8号落し穴 完掘（北から）



9号落し穴 完掘（北から）



10号落し穴 完掘（北から）



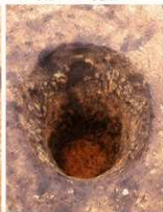
11号落し穴 完掘（南東から）



12号落し穴 完掘（北東から）



13号落し穴 完掘（北東から）



14号落し穴 完掘（北東から）



1号竪穴建物
炭化材出土状況（南西から）



1号竪穴建物
床面遺物出土状況（南西から）



1号竪穴建物 完掘（北西から）



1号竪穴建物 炭化材出土状況(北東から)



1号竪穴建物 床面遺物出土状況(南から)



鉄矛・板状鉄斧・鋳造鉄斧出土状況(東から)



鉄矛・板状鉄斧・鋳造鉄斧出土状況(北から)



鉄矛・板状鉄斧出土状況(東から)



鋳造鉄斧出土状況(北西から)



P7柱痕跡 断面(南西から)



管玉(J6~J17)出土状況(東から)



2号竪穴建物 P 5
土器出土状況（北西から）

2号竪穴建物 完掘（北西から）



3号竪穴建物 完掘（南西から）



4号竪穴建物 完掘（北西から）



8号竪穴建物 完掘（東から）

5号竪穴建物 完掘（北東から）



6号竪穴建物 完掘（北から）



7号竪穴建物 P 5
土器出土状況（東から）

7号竪穴建物 完掘（北から）





9号竪穴建物 完掘（東から）



10号竪穴建物床面
土器出土状況（北から）



10号竪穴建物 完掘（東から）



11号竪穴建物 完掘（北から）



1号掘立柱建物 完掘（西から）



2号掘立柱建物 完掘（南東から）



3号掘立柱建物 完掘（北東から）



4号掘立柱建物 完掘（北東から）



5号掘立柱建物 完掘（東から）



1号柵列 完掘（東から）



6号掘立柱建物 完掘（南東から）



7号掘立柱建物 完掘（東から）



8号掘立柱建物 完掘（東から）



1号貯蔵穴 完掘（東から）



1号土壇 完掘（北東から）



2号土壇 完掘（北西から）



3号土壇 完掘（南から）



4号土壇 完掘（南から）



5号土壇 完掘（西から）



6号土壇 完掘（北から）



7号土壇 完掘（北西から）



8号土壇 完掘（南から）



9号土壇 完掘（東から）



古墳群 調査後全景（南東から）



1号墳 調査前（西から）



1号墳 完掘（東から）

1号墳周溝・墳丘下周溝
東ベルト断面（南西から）

※向かって左側が墳丘側



1号墳周溝・墳丘下周溝
西ベルト断面（西から）

※向かって左側が墳丘側



1号墳周溝・墳丘下周溝
南ベルト断面（南東から）

※向かって右側が墳丘側



図版 14



1号墳 1号埋葬施設 完掘（北から） 2号埋葬施設 完掘（北から） 3号埋葬施設 完掘（南から） 4号埋葬施設 完掘（北から）



4号埋葬施設 鉄滓（F4）出土状況（北東から） 5号埋葬施設 完掘（北から） 6号埋葬施設 完掘（南西から）



7号埋葬施設 完掘（西から） 8号埋葬施設 完掘（西から） 9号埋葬施設 完掘（北西から） 10号埋葬施設 完掘（北西から）



11号埋葬施設 完掘（南西から） 12号埋葬施設 完掘（北東から） 13号埋葬施設 完掘（東から） 14号埋葬施設 完掘（北西から）



2号墳 完掘（北から）



3号墳 完掘（北西から）



3号墳周溝底
供献土器出土状況（東から）



4号墳周溝底
供献土器出土状況
(西から)

4号墳 完掘 (北東から)



4号墳1号埋葬施設
検出 (北西から)



4号墳1号埋葬施設
完掘 (北西から)



4号墳2号埋葬施設
検出 (北西から)



4号墳2号埋葬施設
完掘 (北西から)



5号墳周溝底
供献土器出土状況
(南から)

5号墳 完掘 (東から)

6号墳 完掘（北東から）



7号墳 完掘（北東から）



6号墳1号主体部 完掘（北東から）



7号墳1号埋葬施設 完掘（南から）



8号墳 完掘（北西から）



8号墳周溝底
供献土器出土状況（北東から）



8号墳1号主体部
完掘（南から）



8号墳2号主体部
完掘（南から）



8号墳1号埋葬施設
検出（北から）



8号墳1号埋葬施設
完掘（北から）

9号墳 完掘（北西から）



10号墳 完掘（北から）



10号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から） ※左端は1号埋葬施設 10号墳1号埋葬施設 完掘（南から）



11号墳周溝底
供献土器出土状況（北東から）

11号墳 完掘（北東から）



11号墳1号埋葬施設

左：完掘（北東から）

中：土器出土状況（北東から）

右：鉄器出土状況（北東から）



12号墳 完掘（南から）



13号墳 完掘（東から）

13号墳周溝底
供献土器出土状況
左：（北西から）
右：（西から）



13号墳1号埋葬施設
完掘（北から）



13号墳2号埋葬施設
完掘（南から）



13号墳3号埋葬施設
完掘（南西から）



14号墳 完掘（西から）



15号墳1号埋葬施設 完掘
(北東から)

15号墳 完掘 (北から)



16号墳周溝底
供献土器出土状況 (北東から)

16号墳 完掘 (北東から)



16号墳1号埋葬施設 完掘 (南西から)



2号埋葬施設 検出 (北東から)



2号埋葬施設 完掘 (北東から)



17号墳周溝底
供献土器出土状況（北東から）



17号墳 完掘（北西から）



17号墳 1号埋葬施設 完掘（南西から）



2号埋葬施設 検出（北西から）



2号埋葬施設 完掘（北西から）



18号墳 完掘（北東から）



19号墳 完掘（北東から）



19号墳周溝底
供献土器出土状況
上：（北西から）
下：（南東から）



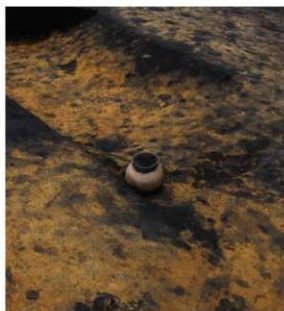
20号墳 完掘（北東から）



21号墳 完掘（北から）



21号墳 1号埋葬施設 完掘
（東から）



21号墳周溝底 供献土器出土状況（西から）



21号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から）



22号墳 完掘（北東から）



22号墳1号埋葬施設 完掘（北東から）



2号埋葬施設 検出（西から）



2号埋葬施設 石棺（西から）



23号墳 完掘（北東から）



23号墳周溝底 供献土器出土状況（北東から）



24号墳周溝底 供献土器出土状況（東から）



24号墳 完掘（北東から）



24号墳1号主体部 完掘（東から）



25号墳 周溝・主体部
完掘（北東から）



25号墳 完掘（北東から）



25号墳 周溝・墳丘下周溝
北ベルト断面（北東から）



25号墳2号・3号主体部（箱式石棺）と主体部掘方（北東から）



25号墳1号主体部 検出（東から）



25号墳主体部掘方 東西ベルト断面（北から）



25号墳主体部掘方 南北ベルト断面（東から）



25号墳1号主体部 完掘（東から）



25号墳主体部掘方 完掘（北から）中腹方北側に下層の1号主体部がみえる



25号墳2号主体部 蓋石外面 (復元)



25号墳2号主体部 蓋石内面 (復元)



25号墳2号主体部 石棺 (北から)



25号墳3号主体部 蓋石検出 (北から)



25号墳3号主体部 蓋石内面 (復元)



25号墳3号主体部 石棺 (北から)



25号墳2号主体部 石枕 (北から)



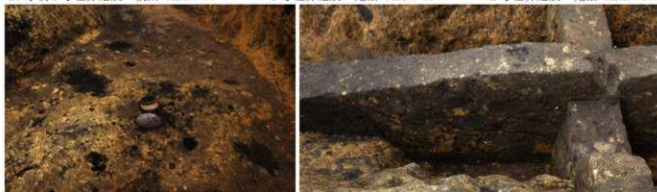
25号墳3号主体部 石枕 (北から)



25号墳1号埋葬施設 検出（北東から）

1号埋葬施設 完掘（北東から）

2号埋葬施設 完掘（南東から）



25号墳2号埋葬施設 供献土器・標石出土状況（南東から）

2号埋葬施設 西ベルト断面（南から）



1号木棺墓 完掘（西から）

2号木棺墓 完掘（西から）

3号木棺墓 完掘（北西から）

4号木棺墓 完掘（北西から）



5号土棺墓 完掘（南西から）

1号土棺墓 完掘（北東から）

2号土棺墓 完掘（東から）

3号土棺墓 完掘（北西から）



1号溝 完掘 (南東から)



2号溝 完掘 (北東から)



3号溝 完掘 (北東から)



4号・5号溝 完掘 (北西から)



6号溝 完掘 (北東から)



7号溝 完掘 (西から)



8号溝 完掘 (西から)



11号溝 完掘 (東から)



8号・9号溝 完掘 (北東から)



1号段状遺構 完掘 (北東から)



1号・2号土器埋設遺構 (北東から)



1号・2号土器埋設遺構 完掘 (北東から)



1号·2号竖穴建物出土土器



3号~7号·9号~11号竖穴建物、1号掘立柱建物出土土器



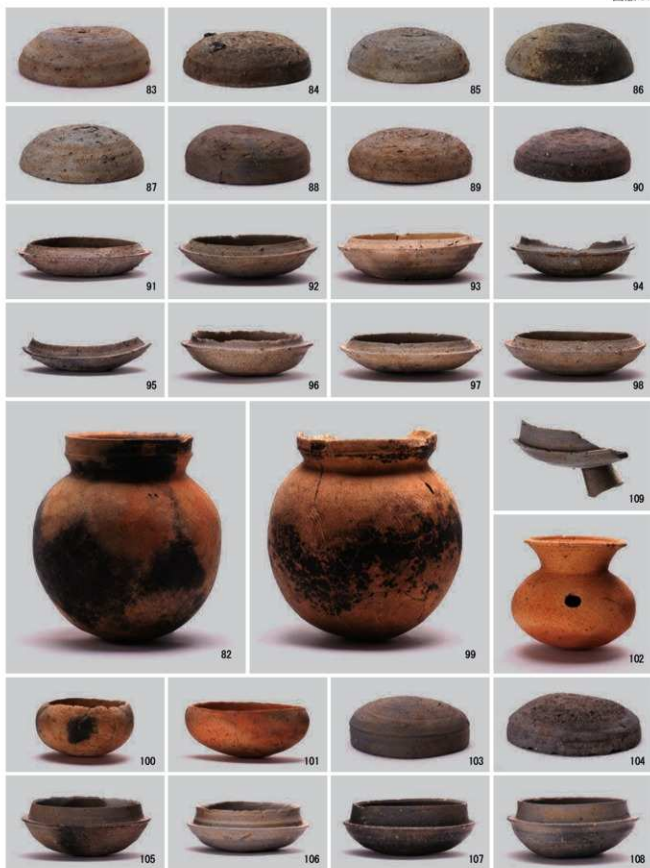
1号貯藏穴、1号・2号土壇出土土器



1号~3号墳出土土器



4号・5号・8号・10号墳出土土器



11 号・13 号・14 号填出土土器

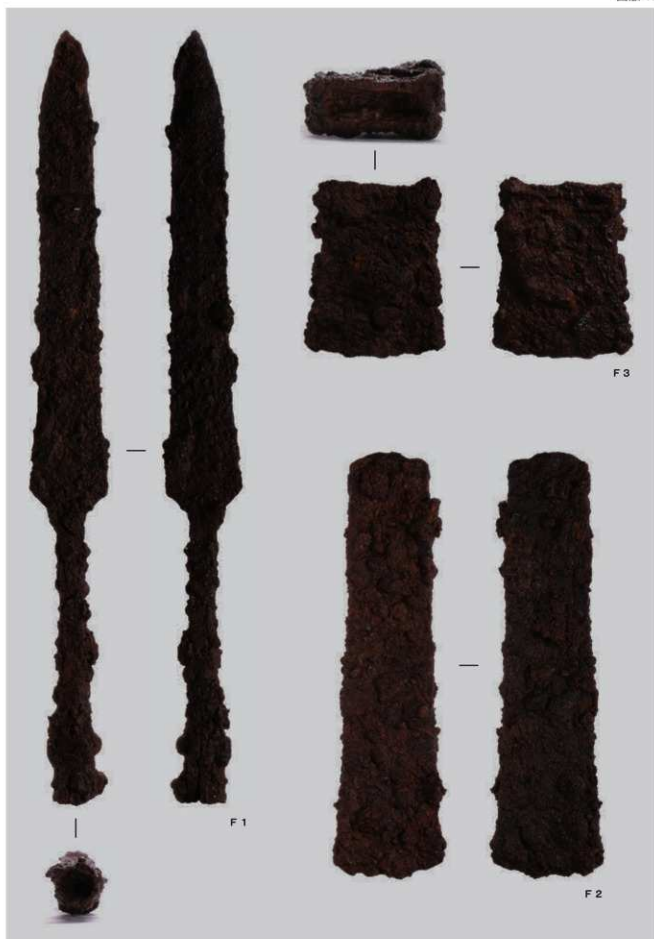




20 号～24 号填出土土器



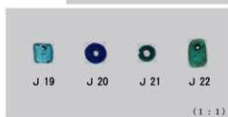
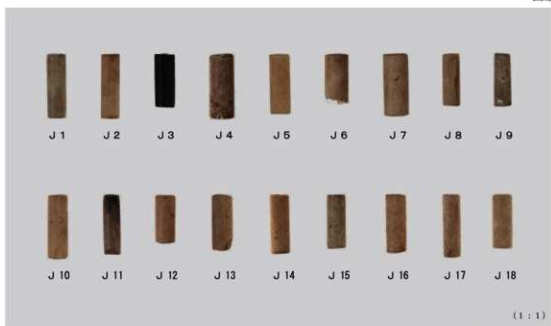
25 号墳、1 号段状遺構、1 号・2 号土器埋設遺構、遺構外出土土器、土製品



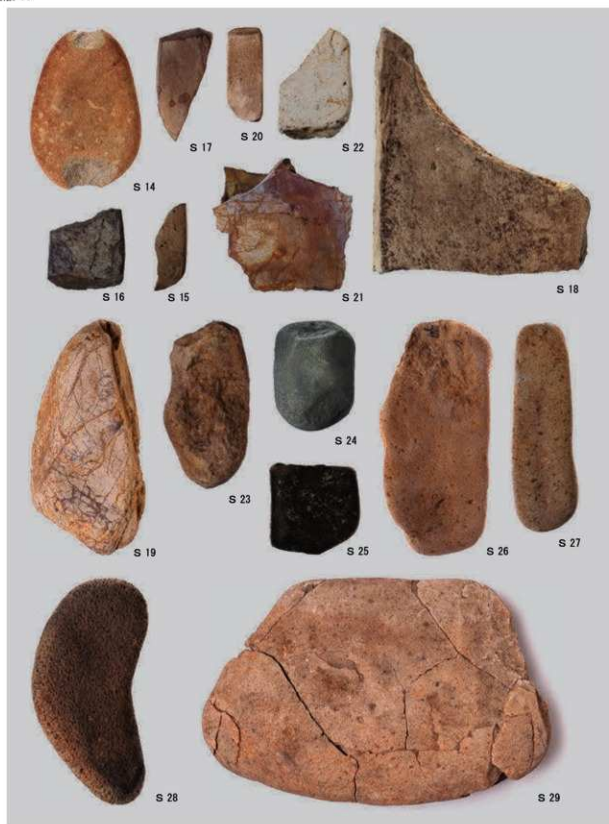
1号竖穴建物出土鉄器



1号・4号・11号・25号墳、3号溝、1号段状遺構、遺構外出土鉄器



1号竪穴建物、16号・25号墳出土玉類、5号竪穴建物、1号墳出土玉作関係遺物
ナイフ形石器、尖頭器、石刀、剥片、石鏃、石匙、石錐



1 号貯藏穴出土石錘、5 号竪穴建物等出土磨製石斧、1 号竪穴建物等出土砥石、敲石、台石

報告書抄録

書 名	中尾遺跡第3次発掘調査報告書						
副 書 名	大谷工芸館地内整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
巻 次	一						
シリーズ名	金古市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第160集						
編 著 者 名	小田 芳弘（編）・片岡 啓介・西藤 千賀・橋本 有正・岡崎 健治・塚本 敏夫・村上 恭浩・渡辺 正巳						
編 集 機 関	金古市教育委員会						
所 在 地	〒682-0111 鳥取県金古市栗野722番地 TEL.0859-22-4419						
発 行 年 月 日	西暦 2024 年 3 月 31 日						
所 収 遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査理由
中尾遺跡	金古市大谷字中尾	31203・0826-3	35° 26' 29"	133° 47' 39"	20190801～20220331	14,000 m ²	記録保存調査
所 収 遺 跡 名	類別	主な時代・主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
中尾遺跡	集落跡 古墳 その他の遺	旧石器：遺構外	ナイフ形石器、尖頭器、石刀、黒曜石剥片				
		縄文：溝1穴14 遺構外	なし 燧石土器（茂林・磨消縄文）、石鏡、石匙、石鏃、黒曜石剥片				
		弥生：竪穴建物5	弥生土器（直、直口器、長頸器、脚付甕、甕、小甕甕、高杯、器台、土製絞鉢等、鉄器（鉄矛、板状鉄矛、鋤状鉄矛、玉釵（管玉、ガラス管玉、ガラス小玉）、水晶剥片、緑色結核岩剥片、石鏃、磨製石斧、磁石、磁石、台石、炭化材、炭化種子		・中層後葉の集落の西端部で、他4型穴建物（1号型穴建物）を確認した。 ・1号型穴建物から完形の船載鉄器3点（鉄矛、板状鉄矛、鋤状鉄矛）が出土した。その特異な出土状況から、威嚇財としての鉄器を使用した度原儀礼が示唆される。		
		貯蔵穴1 土壇2 遺構外	弥生土器（直、台付甕、甕）、石鏃 弥生土器（直、無頸器、脚付甕、甕、小甕甕、高杯） 管玉主成品、磨製石斧		・1号型穴建物の炭化材の“C”年代測定・樹種同定、炭化種子の種実同定を実施した。		
		古墳：竪穴建物6	土師器（小形丸底甕、甕、高杯、低頸杯、鼓形器台）、磁石、磁石		・前期の集落跡と中層～後期の古墳群を新たに確認した。		
		竪立柱建物7 埋葬1	土師器（甕）、須恵器 なし		・前期中葉の2号型穴建物で埋納型特殊土を確認した。		
		古墳25	土師器（直口器、小形丸底甕、甕、高杯、埴輪環、坪面土器、有蓋高杯形土器、通形土器）、須恵器（坪面、坪面、有蓋高杯、埴、直、甕）、鉄器（鋤、刀子、鍬鋤先、鏃、銚、鉋）、瓦具（板瓦片）、鉄刀、ガラス小玉、ガラス製品、人骨		・最も規模の大きい1号墳では、周溝内10基、周溝外4基の計14基の埋葬施設を確認した。 ・11号墳1号埋葬施設では、墓室内に26点の須恵器坪面・坪面が供養され、4種類の鉄製農具（鍬鋤先、鏃、鉋、鋤）が副葬されていた。 ・25号墳2号埋葬施設では、周溝内墳丘で遺存し、墳丘頂部に小型丸底甕と櫛が副葬されていた。 ・25号墳の2号・3号主塚部（甕式石棺）で出土した人骨の鑑定と、石棺の内部に散布されていた赤色顔料の分析、石枕のP3X分析を実施した。		
		溝3 段状遺構1 遺構外	土師器（直・甕・器台）、須恵器、鉄鏃 土師器（直、甕、高杯、鼓形器台） 須恵器（坪面、坪面）、瓦具（板瓦片）				
		古代：遺構外	丹塗り土師器、赤目瓦（平瓦）				
		近世以降：土埋没遺構2	土師質土器（短頸甕）		・粘土造の可能性がある。		
		時期不詳：土壇4 土壇5 土壇5 土壇5	弥生土器、土師器 土師器 土師器 土師器、須恵器、磁器				
		要 約	中尾遺跡は、四王寺山南側の低丘陵上に位置する。第3次調査中では、旧石器時代の石器と縄文時代の溝1穴、丘陵上に展開する弥生時代中層後葉～古墳時代前期の集落跡、足尾屋跡から南斜面に発達された古墳時代中期～後期の古墳群などを確認した。特に、1号型穴建物から出土した完形の船載鉄器3点は、弥生時代の鉄器の流通や祭祀を考える上で重要な資料である。 第1～3次調査により、丘陵頂部から斜面の38,000 m ² に及ぶ広範囲で発掘調査を行い、旧石器時代の石器と縄文時代～古墳時代の遺構を確認し、時代ごとの遺跡の発達を追うことができた。特に、弥生時代中層後葉の集落跡の全域を調査し、集落の様相が明らかとなったことは、貴重な成果である。				

中尾遺跡第3次発掘調査報告書

令和6年3月31日 印刷
令和6年3月31日 発行

編集
発行 倉吉市教育委員会

印刷
製本 勝美印刷株式会社
